

堤 沼 上 遺 跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査（その2）報告書

2008

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

上武道路は、一般国道17号バイパスの一環として、埼玉県の深谷バイパスから群馬県前橋市田口町の現道に接続する道路として計画されました。平成元年には前橋市今井町の国道50号まで、平成17年には前橋市富田町までの区間が開通・供用されており、国道17号の交通混雑の緩和に寄与するとともに沿線地域の生活道路として活用されています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が包蔵されています。このため、道路建設に先立ち埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が、昭和48年度より群馬県教育委員会および当事業団によって行われてまいりました。さらに、平成11年度からは前橋市今井町の国道50号以北の発掘調査に着手し、記録保存の措置が取られました。

本書は、平成14年12月より平成16年6月にかけて発掘調査を行った堤沼上遺跡の調査報告書です。

堤沼上遺跡は、前橋市堤町・亀泉町に所在する旧石器時代から平安時代の複合遺跡です。遺跡の内容としては、竪穴住居跡40軒をはじめとした多数の遺構が検出され、円面硯や巡方が出土しました。中でも台地の中央部を縦断する大きな溝は、谷地の開発や周辺の遺跡との関係を知る上で注目されます。

発掘調査から報告書の作成に至るまで、国土交通省関東地方整備局（旧建設省関東地方整備局）、同高崎河川国道事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等からは種々、ご指導ご協力を賜りました。このたび、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が地域の歴史を解明する上で、多くの人に広く活用されることを願い序とします。

平成20年1月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 高 橋 勇 夫

例 言

- 1 本書は、平成14年度、15年度、16年度に行われた一般国道17号〔上武道路〕改築工事に伴う堤道上遺跡の発掘調査報告書である。本遺跡は、旧石器時代から平安時代までの複合遺跡である。旧石器時代の成果については別途報告を予定している。
- 2 堤沼上（つづみぬまうえ）遺跡は、群馬県前橋市堤町489-2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・15、490-5・6・7・8・10・20・21・30・32、494-1・3・4・5・6・7・8・9・14・15・16、495-5、496-17・19・20・21・22、500-1・2・4・5・61・74、503、亀泉町74-7・8、75-1・2・4・6・7番地に所在する。遺跡名は、大字の「堤」と遺跡が広がる小字「沼上」によって付けた。調査対象面積は、11,154㎡である。
- 3 事業主体 国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所（調査時、建設省関東地方建設局高崎工事事務所）
- 4 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成14年度 平成14年12月1日～平成15年3月31日、
平成15年度 平成15年5月1日～平成15年8月31日、平成16年1月7日～平成16年3月31日、
平成16年度 平成16年4月1日～平成16年4月30日、平成16年6月14日～平成16年6月21日
- 6 調査組織 管理・指導 小野宇三郎、吉田 豊、住谷永市、神保信史、萩原利通、矢崎俊夫、巾 隆之、石島和夫
事務担当 小山友孝、中沢 悟、岡 晴彦、大島信夫、植原恒夫、國定 均、笠原秀樹、小山健夫、竹内 宏
須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、岡嶋伸昌、森下弘美、片岡穂穂、佐藤聖行、阿久津玄洋、田中 賢
栗原幸代、大澤友治、吉田恵子、釜木綾子、今井もと子、内山佳子、若田 誠
佐藤美佐子、六本木弘子、本間久美子、北原おかり、狩野真子、松下次男、吉田 茂
調査担当 平成14年度 田村公夫、平方篤行、岡部 豊
平成15年度 女屋和志雄、青木さおり
平成16年度 女屋和志雄、新井美樹
- 7 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 8 整理期間 平成18年4月1日～平成19年3月31日
- 9 整理組織 管理・指導 高橋勇夫、木村裕紀、津金澤吉茂、萩原 勉、中東謙志、西田健彦
事務担当 笠原秀樹、石井 清、國定 均、須田朋子、斉藤恵利子、柳岡良宏、佐藤聖行、今泉大作、栗原幸代
今井もと子、内山佳子、若田 誠、本間久美子、北原おかり、狩野真子、武藤秀典
整理担当 友原哲也（4月）、女屋和志雄（5月～3月）
- 10 本書作成の担当者は次のとおりである。
編 集 女屋和志雄
執 筆 第5章 株式会社古環境研究所、第6章第1節 高島英之
上記以外 女屋和志雄
遺構・遺物観察指導、助言 新井 潔、神谷佳明
遺構写真 各発掘担当者、新井 潔 遺物写真 佐藤元彦
遺構・遺物図面、写真整理、図面作成等
本多琴恵、池田和子、金子加代、鈴木恵子、安田智恵
高橋裕美、宮澤房子、大嶋 緑、吉川えり子、小池益美、中越裕子

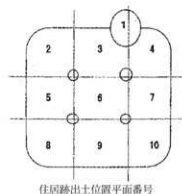
器城実画 伊東博子、田所順子、岸 弘子

保存処理 関 邦一、土橋まり子、小村浩一、森田智子、津久井桂一、多田ひさ子、長岡久幸

- 11 石器・石製品の石材同定は、飯島静男氏（群馬県地質研究会会員）のご教示を得た。
- 12 委託関係 火山灰・プラント・オパール分析 株式会社古環境研究所 遺構図面作成 横田設計株式会社
- 13 発掘調査及び本書の作成にあたり、次の諸氏よりご助言を得た。記して感謝いたします。
前橋市教育委員会 前原 豊、高山 剛、大胡町教育委員会 山下成信
- 14 出土遺物と記録資料は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で管理し、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡 例

- 1 挿入中に使用した方位は、座標北を表している。座標系は、日本平面直角座標系(国家座標)第Ⅱ式で、本遺跡の基点座標値は X = 41,000 m、Y = - 60,000 m である。
- 2 遺構断面実測図、等高線に記した数値は、標高を表し、単位はmを用いた。
- 3 挿入の縮尺は、特に記載のない限り以下の通りである。
遺構 住居跡 1/60 カマド・貯蔵穴 1/30 掘立柱建物跡 1/80 土坑 1/40 溝 1/100、1/200 井戸 1/60 道 1/200 ビット 1/30
全体図 1/500
遺物 1/3 蓋・杯・柄・皿・鉢・高杯・深鉢・長頸甕・甕・瓶・コップ形・甕 1/4 壺・小型壺・台付壺 1/3 磨石・砥石・打製石斧・磨製石斧・多孔石・凹石・石匙・スクレイパー・こもろみ石・台石・砥石・切石・鉢（おもり）・紡錘車・鉄製品・滑石製模造品
1/2 紡錘車 1/1 石碾・高方・鏡
- 4 写真図版の縮尺率は、挿入とは一致しない。
- 5 遺物観察表にある残存状態は、口縁、胴部、底部の各部位を示して全体の割合を数値で表した。ただし、全体が想定できない場合は、○以下とした。なお、() が推定値、[] が現存値である。
- 6 土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」による。内外面で違う場合は外面で表し、埋蔵物の場合は中間色で表現している。
- 7 胎土の細砂は径が1ミリ前後、陶砂は径が1ミリ以下である。
- 8 本書では、テフラの呼称として次の略語を使用する。
浅間A軽石 As-A 1783(天明3)年 浅間B軽石 As-B 1108(天仁元)年
浅間C軽石 As-C 4世紀初頭
- 9 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。
第1図 「群馬県史」通史編1付図を簡略化した当事業団「沈志江西浴Ⅱ遺跡」(2004)第3図に加筆転載した。
第2図 国土地理院発行 地勢図 1:20万「長野」[宇都宮]
第3図 前橋市発行 地形図 1:1万
第4図 国土地理院発行 地形図 1:5万「前橋」



住居跡出土位置平面番号

目次

序

例言・凡例

目次・挿図目次・表目次・図版目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
1 遺跡の位置と地形	3
2 周辺の遺跡	5
第3章 発掘調査の方法と経過	11
1 発掘調査の方法	11
2 調査の経過	12
3 整理作業の方法	14
第4章 検出された遺構と遺物	15
1 概要	15
2 竪穴住居跡	15
3 掘立柱建物跡	131
4 土坑	147
5 溝	161
6 井戸	177
7 道	177
8 ビット群	178
9 掲載遺物と遺構外遺物	196
住居計測表	200
遺物観察表	201
第5章 自然科学分析	227
1 堤沼上遺跡におけるテフラ分析	227
2 堤沼上遺跡における植物珪酸体分析	233
第6章 調査の成果と問題点	237
1 堤沼上遺跡出土の墨書・刻書土器	237
2 堤沼上遺跡の変遷と特徴	243

写真図版

抄録

奥付

付図 堤沼上遺跡全体図

挿図目次

第1図	堤沼上遺跡位置	2	第44図	13号住居跡平・断面及び遺物分布	57
第2図	群馬県中央部の地形区分	2	第45図	13号住居跡カマド平・断面	58
第3図	周辺遺跡(1)	4	第46図	13号住居跡出土遺物	59
第4図	周辺遺跡(2)	9	第47図	13号住居跡掘り方平・断面	60
第5図	調査区と基本土層	10	第48図	14号・24号住居跡平・断面	61
第6図	1号住居跡平・断面、掘り方平面、カマド平・断面	16	第49図	14号住居跡カマド平・断面	62
第7図	2号住居跡平・断面、掘り方平面、カマド平・断面	17	第50図	24号住居跡カマド平・断面	63
第8図	3号住居跡平・断面及び遺物分布	19	第51図	14号・24号住居跡掘り方平・断面、遺物分布及び 24号住居跡出土遺物(1)	64
第9図	3号住居跡カマド平・断面	20	第52図	24号住居跡出土遺物(2)	65
第10図	3号住居跡掘り方平・断面	21	第53図	15号住居跡平・断面及び遺物分布	66
第11図	3号住居跡出土遺物	22	第54図	15号住居跡カマド平・断面	67
第12図	4号住居跡平・断面及び遺物分布	24	第55図	15号住居跡掘り方平・断面	68
第13図	4号住居跡カマド平・断面	25	第56図	15号住居跡出土遺物(1)	69
第14図	4号住居跡掘り方平・断面及び出土遺物	26	第57図	15号住居跡出土遺物(2)	70
第15図	5号住居跡平・断面及び遺物分布	27	第58図	16号住居跡平・断面及び遺物分布	71
第16図	5号住居跡掘り方・カマド、平・断面	28	第59図	16号住居跡カマド平・断面	72
第17図	5号住居跡出土遺物	29	第60図	16号住居跡出土遺物	73
第18図	6号住居跡平・断面	30	第61図	16号住居跡掘り方平・断面	74
第19図	6号住居跡断面	31	第62図	17号住居跡及び掘り方平・断面	75
第20図	6号住居跡カマド平・断面	32	第63図	17号住居跡出土遺物	76
第21図	6号住居跡掘り方平・断面	33	第64図	17号住居跡カマド平・断面	77
第22図	6号住居跡出土遺物	34	第65図	18号住居跡平・断面及び遺物分布	78
第23図	6号住居跡断面	35	第66図	18号住居跡掘り方・カマド平・断面	79
第24図	7号住居跡平・断面及び遺物分布	36	第67図	18号住居跡出土遺物(1)	80
第25図	7号住居跡カマド平・断面	37	第68図	18号住居跡出土遺物(2)	81
第26図	7号住居跡出土遺物	38	第69図	19号住居跡平・断面、掘り方平面及び出土遺物	82
第27図	7号住居跡掘り方平・断面	39	第70図	21号住居跡平・断面	83
第28図	8号住居跡平・断面及び遺物分布	40	第71図	22号住居跡平・断面及び掘り方平面	84
第29図	8号住居跡掘り方及びカマド平・断面	41	第72図	22号住居跡カマド平・断面及び出土遺物	85
第30図	8号住居跡出土遺物(1)	42	第73図	23号住居跡平・断面及び出土遺物	86
第31図	8号住居跡出土遺物(2)	43	第74図	25号住居跡及び掘り方平・断面	87
第32図	8号住居跡出土遺物(3)	44	第75図	25号住居跡カマド平・断面及び出土遺物	88
第33図	9号・20号住居跡平・断面	45	第76図	26号住居跡平・断面	89
第34図	9号住居跡遺物分布及びカマド平・断面	46	第77図	26号住居跡断面	90
第35図	9号住居跡出土遺物及び20号住居跡遺物分布・ 出土遺物	47	第78図	26号住居跡カマド平・断面	91
第36図	9号・20号住居跡掘り方平・断面	48	第79図	26号住居跡遺物分布及び掘り方平面	92
第37図	10号住居跡平・断面及び遺物分布	50	第80図	26号住居跡出土遺物(1)	94
第38図	10号住居跡カマド平・断面	51	第81図	26号住居跡出土遺物(2)	95
第39図	10号住居跡掘り方及びカマド平・断面	52	第82図	27号住居跡及び掘り方平・断面	96
第40図	10号住居跡出土遺物	53	第83図	27号住居跡カマド平・断面	97
第41図	11号住居跡平・断面及び出土遺物	54	第84図	27号住居跡出土遺物	98
第42図	12号住居跡及び掘り方平・断面、出土遺物	55	第85図	28号住居跡平・断面及び出土遺物	99
第43図	12号住居跡カマド平・断面	56	第86図	29号住居跡及びカマド平・断面、出土遺物	100
			第87図	30号・35号住居跡平・断面	101
			第88図	30号・35号住居跡カマド平・断面	102

第89図	30号・35号住居跡掘り方平・断面	103	第135図	1号・2号溝出土遺物	163
第90図	30号住居跡出土遺物	104	第136図	3号溝平・断面	164
第91図	35号住居跡出土遺物	105	第137図	3号溝出土遺物	165
第92図	31号住居跡及び掘り方平・断面	106	第138図	4号・5号溝平・断面(1)	167
第93図	31号住居跡出土遺物	107	第139図	4号・5号溝断面(2)	168
第94図	32号住居跡平・断面	108	第140図	4号・5号溝断面(3)	169
第95図	32号住居跡断面、掘り方平面及び出土遺物	109	第141図	4号溝出土遺物	170
第96図	33号住居跡平・断面	110	第142図	5号溝出土遺物	171
第97図	34号住居跡平・断面	111	第143図	6号・7号溝平面	173
第98図	34号住居跡断面及び掘り方平・断面	112	第144図	6号・7号溝断面	174
第99図	34号住居跡カマド平・断面	113	第145図	8号・9号溝平・断面	176
第100図	34号住居跡出土遺物(1)	114	第146図	2区南ビット分布	179
第101図	34号住居跡出土遺物(2)	115	第147図	2区南ビット及び2区中央～北ビット(1) 平・断面	180
第102図	36号住居跡及び掘り方、カマド、平・断面	116	第148図	2区中央～北ビット分布	181
第103図	36号住居跡出土遺物(1)	117	第149図	2区中央～北ビット平・断面(2)	182
第104図	36号住居跡出土遺物(2)	118	第150図	2区中央～北ビット平・断面(3)及び 3区南ビット分布	183
第105図	36号住居跡出土遺物(3)	119	第151図	3区南ビット平・断面	184
第106図	37号住居跡平・断面、掘り方平面及び出土遺物	120	第152図	3区中央～北ビット分布	185
第107図	38号住居跡平・断面及び遺物分布	121	第153図	3区中央～北ビット平・断面(1)	186
第108図	38号住居跡掘り方及びカマド平・断面	122	第154図	3区中央～北ビット平・断面(2)	187
第109図	38号住居跡出土遺物	123	第155図	3区中央～北ビット平・断面(3)	188
第110図	39号住居跡及び1号井戸平・断面、出土遺物	124	第156図	3区中央～北ビット平・断面(4)	189
第111図	40号住居跡平・断面	127	第157図	4区東ビット分布及び平・断面(1)	190
第112図	40号住居跡断面及び遺物分布	128	第158図	4区東ビット平・断面(2)	191
第113図	40号住居跡掘り方平・断面及び出土遺物(1)	129	第159図	5区ビット分布及び平・断面	192
第114図	40号住居跡出土遺物(2)	130	第160図	1区ビット分布	193
第115図	1号・2号掘立柱建物跡平・断面	137	第161図	1区ビット平・断面(1)及び出土遺物	194
第116図	3号掘立柱建物跡平・断面	138	第162図	1区ビット平・断面(2)	195
第117図	4号・5号掘立柱建物跡平・断面	139	第163図	遺構外出土遺物(1)	197
第118図	6号・7号・8号掘立柱建物跡平面	140	第164図	遺構外出土遺物(2)	198
第119図	9号・11号掘立柱建物跡平・断面	141	第165図	遺構外出土遺物(3)	199
第120図	10号掘立柱建物跡平・断面	142		住居跡計測表	200
第121図	12号・13号掘立柱建物跡平・断面及び出土遺物	143		第6章 堤沼上遺跡出土墨書・刻書土器一覽	238
第122図	14号・15号掘立柱建物跡平・断面	144		古代上野国勢多郡所管の各郷とその比定地	240
第123図	16号・17号掘立柱建物跡平・断面	145		堤沼上遺跡出土墨書・刻書土器出土位置図	241
第124図	18号掘立柱建物跡平・断面	146		堤沼上遺跡出土墨書・刻書集成図	242
第125図	1号・3号土坑平・断面	149			
第126図	4号・5号・11号土坑平・断面	150			
第127図	12号～15号・18号土坑平・断面	151			
第128図	19号～25号土坑平・断面	152			
第129図	26号～30号・32号土坑平・断面	155			
第130図	33号～38号土坑平・断面	156			
第131図	39号～41号・44号～46号土坑平・断面	157			
第132図	47号～49号・51号～56号土坑平・断面	158			
第133図	土坑出土遺物	160			
第134図	1号・2号溝平・断面	162			

写真図版目次

- PL. 1 1. 東上空から堤沼上遺跡を望む。手前が堤沼と豊野田遺跡
2. 寺沢川上流から南を望む。道路の西が亀泉坂上遺跡、東が堤沼上遺跡
- PL. 2 1. 赤城山南麓を寺沢川上空から望む。中央を上武道路が横断する。
2. 寺沢川上空から広瀬川低地帯を望む。
- PL. 3 1. 3区全景 西上空から
2. 4区西全景 北から
3. 4区東全景 北西から
4. 5区全景 南上空から
5. 1号住居跡全景 西から
6. 1号住居跡カマド全景 西から
7. 1号住居跡掘り方全景 西から
8. 2号住居跡掘り方全景 西から
- PL. 4 1. 2号住居跡カマド全景 西から
2. 3号住居跡遺物出土状態 北から
3. 3号住居跡全景 北から
4. 3号住居跡カマド遺物出土状態 南から
5. 4号住居跡全景 西から
6. 4号住居跡セクションB 南から
7. 4号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 北から
8. 4号住居跡カマドセクションF 西から
- PL. 5 1. 4号住居跡カマド掘り方全景 西から
2. 4号住居跡カマド掘り方全景 西から
3. 5号住居跡遺物出土状態 西から
4. 5号住居跡全景 西から
5. 5号住居跡掘り方全景 西から
6. 5号住居跡カマド掘り方全景 西から
7. 5号住居跡カマド掘り方セクションH西から
8. 6号住居跡遺物出土状態 西から
- PL. 6 1. 6号住居跡全景 西上空から
2. 6号住居跡炭化材出土状態 西から
3. 6号住居跡カマド全景 西から
4. 6号住居跡貯蔵穴セクションH 西から
5. 6号住居跡掘り方全景 西から
6. 6号住居跡掘り方全景 北から
7. 6号住居跡カマド掘り方全景 西から
8. 6号住居跡カマド掘り方セクション 西から
- PL. 7 1. 7号住居跡遺物出土状態 西から
2. 7号住居跡全景 西から
3. 7号住居跡セクションA 東から
4. 7号住居跡カマド全景 西から
5. 7号住居跡貯蔵穴セクションD 西から
6. 7号住居跡掘り方全景 北から
7. 7号住居跡カマド掘り方全景 西から
8. 8号住居跡遺物出土状態 西から
- PL. 8 1. 8号住居跡全景 西から
2. 8号住居跡遺物出土状態 西から
3. 8号住居跡遺物出土状態 北東から
4. 8号住居跡掘り方全景 西から
5. 8号住居跡カマド掘り方全景 西から
6. 9号・20号住居跡遺物出土状態 西から
7. 9号住居跡全景 西から
8. 9号・20号住居跡掘り方全景 西から
- PL. 9 1. 9号住居跡カマド掘り方セクションG 西から
2. 9号住居跡カマドセクションF 西から
3. 10号住居跡遺物出土状態 西から
4. 10号住居跡全景 西から
5. 10号住居跡掘り方全景 西から
6. 10号住居跡カマド全景 西から
7. 10号住居跡カマド遺物出土状態 西から
8. 10号住居跡カマド掘り方全景 西から
- PL.10 1. 11号住居跡全景 西から
2. 12号住居跡全景 西から
3. 12号住居跡カマド全景 南から
4. 12号住居跡カマドセクションL 西から
5. 12号住居跡貯蔵穴全景 西から
6. 12号住居跡カマド掘り方全景 西から
7. 13号住居跡遺物出土状態 西から
8. 13号住居跡全景 西から
- PL.11 1. 13号住居跡貯蔵穴全景 西から
2. 13号住居跡カマド全景 西から
3. 13号住居跡掘り方全景 西から
4. 13号住居跡カマド掘り方セクションG 西から
5. 13号住居跡カマド掘り方全景 西から
6. 14号・24号住居跡遺物出土状態 西から
7. 14号・24号住居跡全景 西から
8. 24号住居跡竈方出土状態 西から
- PL.12 1. 14号住居跡カマド全景 西から
2. 14号・24号住居跡掘り方全景 西から
3. 14号住居跡カマド掘り方セクションK 西から
4. 14号住居跡カマド掘り方全景 西から
5. 15号住居跡遺物出土状態 西から
6. 15号住居跡遺物出土状態 西から
7. 15号住居跡全景 西から
8. 15号住居跡カマド全景 西から
- PL.13 1. 15号住居跡掘り方全景 西から
2. 15号住居跡カマド掘り方セクションG 西から
3. 15号住居跡カマド掘り方全景 西から

	4. 16号住居跡全景 西から		2. 30号住居跡遺物出土状態 北西から
	5. 16号住居跡貯蔵穴全景 北から		3. 30号住居跡全景 北から
	6. 16号住居跡カマド遺物出土状態 西から		4. 30号住居跡貯蔵穴黒土器出土状態 北から
	7. 16号住居跡カマド全景 西から		5. 30号住居跡カマド全景 西から
	8. 16号住居跡掘り方全景 西から		6. 30号住居跡掘り方全景 北から
PL14	1. 16号住居跡カマド掘り方セクションG 西から		7. 31号住居跡遺物出土状態 西から
	2. 16号住居跡カマド掘り方全景 西から		8. 31号住居跡掘り方全景 西から
	3. 17号住居跡全景 西から	PL20	1. 32号住居跡全景 西から
	4. 17号住居跡カマド全景 西から		2. 32号住居跡掘り方全景 西から
	5. 17号住居跡貯蔵穴セクションE 西から		3. 32号住居跡ビット1セクションG 西から
	6. 17号住居跡掘り方全景 西から		4. 32号住居跡ビット2セクションH 西から
	7. 18号住居跡遺物出土状態 西から		5. 32号住居跡ビット3セクションI 西から
	8. 18号住居跡遺物出土状態 南から		6. 32号住居跡ビット4セクションJ 西から
PL15	1. 18号住居跡カマドセクションG 西から		7. 33号住居跡全景 北東から
	2. 18号住居跡カマド全景 西から		8. 34号住居跡遺物出土状態 西から
	3. 18号住居跡カマド掘り方全景 西から	PL21	1. 34号住居跡全景 西から
	4. 18号住居跡掘り方全景 西から		2. 34号住居跡カマドセクションS 西から
	5. 19号住居跡全景 南から		3. 34号住居跡カマド掘り方全景 西から
	6. 20号住居跡全景 西から		4. 34号住居跡掘り方全景 西から
	7. 21号住居跡全景 北西から		5. 34号住居跡カマド掘り方セクション 西から
	8. 22号住居跡カマドセクション 東から		6. 34号住居跡掘り方全景 西から
PL16	1. 22号住居跡遺物出土状態 西から		7. 35号住居跡全景 北西から
	2. 23号住居跡全景 南から		8. 36号住居跡遺物出土状態 南西から
	3. 24号住居跡カマド全景 西から	PL22	1. 36号住居跡全景 南西から
	4. 24号住居跡カマド掘り方セクションM 西から		2. 36号住居跡カマド全景 南西から
	5. 24号住居跡カマド掘り方全景 西から		3. 36号住居跡掘り方全景 南西から
	6. 25号住居跡セクションA 東から		4. 36号住居跡貯蔵穴セクションC 北西から
	7. 25号住居跡遺物出土状態 西から		5. 37号住居跡遺物出土状態 西から
	8. 25号住居跡全景 西から		6. 37号住居跡全景 西から
PL17	1. 25号住居跡貯蔵穴セクションE 北から		7. 37号住居跡特種車出土状態 南から
	2. 25号住居跡カマド全景 西から		8. 38号住居跡遺物出土状態 南から
	3. 25号住居跡掘り方全景 西から	PL23	1. 38号住居跡全景 西から
	4. 26号住居跡遺物出土状態 南から		2. 38号住居跡カマド遺物出土状態 西から
	5. 26号住居跡全景 西から		3. 38号住居跡掘り方全景 南から
	6. 26号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 西から		4. 38号住居跡カマド全景 西から
	7. 26号住居跡カマド全景 西から		5. 39号住居跡・1号井戸全景 南西から
	8. 26号住居跡掘り方全景 西から		6. 40号住居跡全景 南東から
PL18	1. 26号住居跡カマド掘り方全景 西から		7. 40号住居跡南東隅遺物出土状態 南西から
	2. 26号住居跡カマド掘り方セクションN 西から		8. 40号住居跡貯蔵穴全景 東から
	3. 27号住居跡遺物出土状態 西から	PL24	1. 40号住居跡ビット1セクションG 西から
	4. 27号住居跡全景 西から		2. 40号住居跡ビット2セクションH 南から
	5. 27号住居跡カマド全景 西から		3. 40号住居跡ビット3セクションI 南から
	6. 27号住居跡掘り方全景 北西から		4. 40号住居跡ビット4セクションO 西から
	7. 28号住居跡全景 西から		5. 40号住居跡掘り方全景 南東から
	8. 29号住居跡全景 西から		6～8 1号・2号・3号掘立柱建物跡全景
PL19	1. 29号住居跡カマド全景 西から	PL25	1～8 4号～11号掘立柱建物跡全景

- PL.26 1～7 12号～18号掘立柱建物跡全景
8. 1号土坑全景 南から
- PL.27 1～8 1号～5号・11号・12号土坑
- PL.28 1～8 13号～15号・18号～22号土坑
- PL.29 1～8 23号～30号・32号・44号土坑
- PL.30 1～8 33号～38号・40号～43号土坑
- PL.31 1～8 45号～52号土坑
- PL.32 1～4 53号～56号土坑
5・6 1号溝遺物出土状態
7. 3号溝セクションC 北から
8. 3号溝セクションB 北から
- PL.33 1. 3号溝セクションA 南から
2. 4号溝セクションG 南から
3. 4号溝セクションI 北から
4. 4号溝中央部全景 南から
5. 4号溝内土坑全景 東から
6. 4号溝内土坑上面炭化物出土状態 東から
7. 5号溝セクションG 南から
8. 5号溝セクションI 北から
- PL.34 1. 5号溝中央部全景 北から
2. 4号・5号溝北半部全景 南から
3. 4号・5号溝分岐点 東から
4. 4号溝作業風景 北から
5. 6号・7号溝南半部全景 北から
6. 6号・7号溝Eセクション 南から
7. 6号溝セクションE 南から
8. 7号溝セクションE 南から
- PL.35 1. 8号溝確認状況 西から
2. 8号溝確認状況 東から
3. 9号溝確認状況 北から
4. 9号溝セクションA 南から
5. 1号井戸全景 南から
6. 1号井戸セクション 南から
7. 1号道・2号道全景 東から
8. 3号道全景 北から
- PL.36 1. 162号ビット石の出土状態 南から
2. 162号ビットセクション 南から
3. 161号ビット全景 南から
4. 163号ビット石の出土状態 南から
5. 163号ビットセクション 北から
6. 164号ビット石の出土状態 南から
7. 1区1面全景 北東上空から
8. 1区1面全景 北西上空から
- PL.37 作業風景
- PL.38 1. 3区北半部での作業風景 北西から
2. 2区作業風景 北上空から
3. 根沼の南上空から1区がある谷地を望む
4. 豊野Ⅱ遺跡南東上空から根沼上遺跡を望む
5. 2区全景 住居跡の掘り方調査が終了時点 南西から
6. 2区全景 住居跡の掘り方調査が終了時点 北東から
7. 3区南半部全景 4号・5号溝完掘時点 北から
8. 3区北半部全景 東から
- PL.39 3号・4号・5号住居跡出土遺物
- PL.40 6号・7号住居跡出土遺物
- PL.41 8号住居跡出土遺物
- PL.42 8号・9号・10号住居跡出土遺物
- PL.43 10号・11号・12号・13号住居跡出土遺物
- PL.44 13号・15号・24号住居跡出土遺物
- PL.45 15号・16号住居跡出土遺物
- PL.46 16号・17号・18号住居跡出土遺物
- PL.47 18号・19号・20号・22号・23号・24号・25号住居跡出土遺物
- PL.48 26号・27号住居跡出土遺物
- PL.49 27号・28号・29号・30号・31号住居跡出土遺物
- PL.50 31号・32号・34号住居跡出土遺物
- PL.51 35号・36号住居跡出土遺物
- PL.52 36号・37号・38号・39号住居跡出土遺物
- PL.53 40号住居跡、土坑、ビット出土遺物
- PL.54 1号・2号・3号・4号溝出土遺物
- PL.55 4号・5号溝、1号井戸、13号掘立柱建物跡、遺構外出土遺物
- PL.56 遺構外出土遺物

第1章 調査に至る経過

堤沼上（つつみぬまうえ）遺跡は、赤城山南麓、群馬県前橋市堤町・亀泉町にある。JR両毛線の駒形駅から北に5km、市街地からは東に4km、畑地が多い市街地近郊の農村地帯にある。（第1図）。

遺跡は、国道17号の改良工事、通称「上武道路」の建設に伴って発掘調査された。上武道路は、埼玉県深谷バイパスから前橋市田口町の現道に取り付け延長40.5kmの大規模バイパスで、都市間連絡道路として、地域の基盤整備と現道の交通混雑解消のために計画された。昭和45年度に国道50号以南の22.4kmがⅠ期工事として事業化、すでに平成元年度に供用されている。建設に先立っては、群馬県教育委員会および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下事業団）によって35遺跡、延べ53万4,000㎡が発掘調査され、26冊の発掘調査報告書にまとめられている。

国道50号以北は、平成元年度に延長13.1kmのうち（主）前橋大間々桐生線までの4.9km区間がⅡ期工事として事業化され、7工区と呼ばれている。Ⅰ期工事同様、建設に先立ち、建設省（現国土交通省）関東地方建設局と群馬県教育委員会との間で事業の円滑な遂行と文化財保護を前提とした協議が重ねられ、埋蔵文化財が破壊される地域においては事前に発掘調査を実施することとなった。国土交通省、群馬県教育委員会、事業団の三者は、平成11年4月1日付けで「一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その1）の実施に関する協定書」を締結し、国道50号から前橋市堤町までの調査に関する基本的な事項を確認し、発掘調査は整理作業を含めて平成18年3月31日までに完了させることとした。

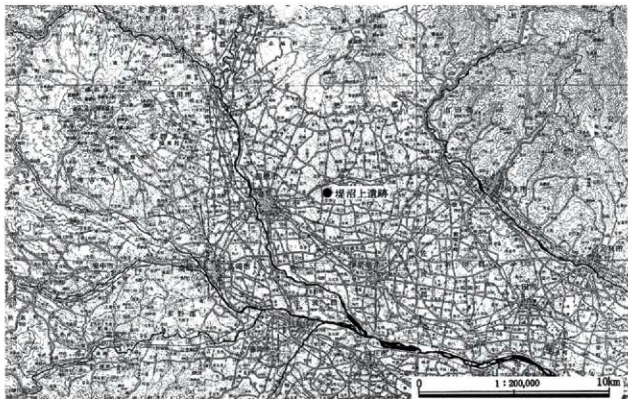
発掘調査は、平成11年度から事業団が「一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その1）」として受託し、平成14年度までに一部未収地を残して国道50号に接する今井道上Ⅱ遺跡から萱野Ⅱ遺跡までの12遺跡が終了した。表面積は20万9,000㎡に及んだ。

この動きを受けて、国土交通省は本体工事の着工と平成17年度に（主）前橋赤線までの暫定供用を提示した。これに伴い残る区間の調査終了が懸案となり、用地の買収が済んだ所から調査することになった。しかし、萱野Ⅱ遺跡から7工区の終点前橋市上泉町までが協定書の対象外であったため、調査するには協定を変更する必要が生じた。平成13年7月30日～8月9日群馬県教育委員会による試掘調査で発掘調査の必要があると判断され、さらに国土交通省との協議を経て調査することが決定した。

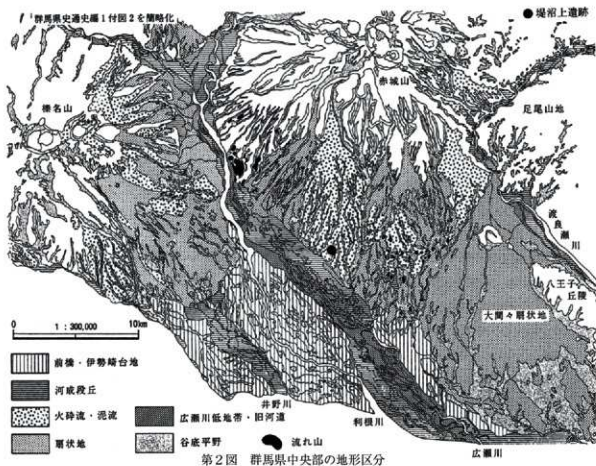
協定は、平成16年11月20日付けで先の三者による「一般国道17号（上武道路）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査（その2）の実施に関する協定書」が新たに締結された。

新協定書では、①当初7工区（その1）に東半分が含まれていた萱野Ⅱ遺跡について、同一遺跡であることから7工区（その2）の協定に移行・統合する。これに伴い7工区全体は、萱野Ⅱ遺跡以東を7-1工区、以西を7-2工区と分けることとなった。②調査期間は、整理期間を含め平成22年3月31日までに改める。③7-2工区は、東から順に萱野Ⅱ遺跡、堤沼上遺跡、亀泉坂上遺跡、亀泉西久保Ⅱ遺跡、荻窪南田遺跡、上泉唐ノ堀遺跡の6遺跡、表面積は7万8,404.9㎡である。

この区間には、一般河川寺沢川と上毛電鉄に架かる全長418mの仮称亀泉高架橋をはじめ、（主）前橋大間々桐生線との接続など構造物が連続し、工事との競合や調整が避けられない情勢にあった。国土交通省からは、調査の促進だけでなく効率化も求められ、調査を構造物の箇所だけに限するという案が提示され、最終的には実施に移されている。



第1図 堤沼上遺跡位置



第2章 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置と地形

赤城山麓の地形 堤沼上遺跡は、群馬県中央部、赤城山の南麓にある。

赤城山は、標高1,828mの黒檜山を最高峰に、荒山、地藏岳、鍋割山、鈴ヶ岳など10あまりの峰々から成る、那須火山帯に属する複合成層火山である。裾野は富士山に次ぐ広さといわれ、麓に住む前橋、伊勢崎、桐生の人たちからはおらが山として親しまれ、県内では利根川をはさんで好一對の榛名山、長野県境に近い妙義山と合わせて上毛三山の一つに数えられている。

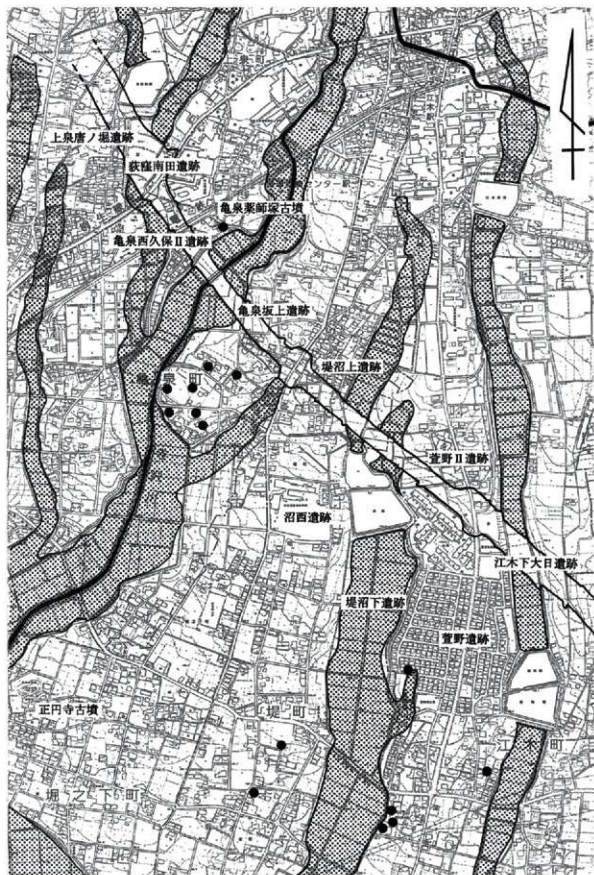
火山活動は、古期成層火山形成期（40～50万年前から13万年前）、新期成層火山形成期（13万年前から4～5万年前）、その後の中央火口丘形成期の3期に大きく分けられる。当初は2,000mを超す成層火山であったものが、噴火と山体崩壊を繰り返して現在の姿に至ったと考えられている。中央火口丘群を形成した後は、現在まで目立った活動はなく火山麓扇状地の形成期になっている。

裾野は長し赤城山、これは県内で広く普及している上毛カルタの一枚で、南麓をビタリと言いつつ表現である。その広くて長い裾野も、標高500m付近で頂上に向けて険しさを増す。ここに赤城神社が鎮座するの山と麓を区別するかのようで、地形や地質、植生などの違うことが指摘され、輻射谷の多くもこの付近で始まる。また、畑や水田が見られる限界でもある。裾野の南端は、標高90～130m前後で旧利根川の氾濫原である広瀬川低地帯と接し、対岸は前橋台地、さらにその先は関東平野に続く。

南麓は、中央を下る荒砥川で東西に二分される。西は、基底に古い大胡火砕流が堆積する一帯や赤城白川沿いの扇状地が続き、勾配もなだらかで速るものが少ない。一方の東には、山体崩壊で発生した岩屑なだれによってできた流れ山と呼ばれる小丘陵が連なり、起伏に富んだところを見せている。多田山、石山、峰岸山などが流れ山の代表格で、南端は権現山、さらに天神山と伊勢崎市の南部にまで達している。東には、唯一山頂から流れ出す粕川をはじめ、神沢川、桂川、早川、鍋木川など西に比べて河川の多いことも特徴で、流域は水田の比率が高い谷底平野となっている。

しかし南麓は、大正用水、さらに群馬用水が完成するまでは、長い間水不足に苦しんだ。苦闘の歴史をさかのぼれば、古代の女堀までたどりつくといってもよい。かつては県内を代表する養蚕地帯であったのも、蚕に適した地味もあるが、それ以上に水が乏しいからであった。そんな中でも谷地田が広がるのは、堤と呼ばれている大小の溜池の存在が大きい。川のように広い範囲ではないが、溜池は谷地一つひとつを丹念に潤すには確実な灌漑方法である。効果の程は、数の多さが証明している。2つの用水が完成しても依然健在で、広い裾野とともに南麓らしい景色の一つである。（第1・2図）。

堤沼上遺跡の立地 遺跡は、寺沢川の左岸、標高118m～120mの緩い傾斜の台地上に位置する。広瀬川低地帯までは1kmたらず、長かった裾野も終わりに近く山を抜け出すのあと一歩、里からすればわずかに足を踏み入れたという程度の距離である。台地は偏平、谷地との比高差も少ない。ここを選んだのは、低地帯で洪水に被災したためか、それとも新規に開発を目論んでといったところであろうか。ここならば洪水に遭うことも稀であったろうし、低地帯にもさらに山に進出することもできる。台地に村を構え、目の前の谷地を耕すのは現在の姿に似ている。最近でこそ、市街地近郊であるため変貌著しいが、寺沢川沿いには依然クス



第3図 周辺遺跡 (1) (1万分の1)

ギヤナラの雑木林が続き、かつての農村地帯の趣を残している。

明治11年上野国郷村帳勢多郡堤村の項には、地勢として村の東北は林を負う、西南は耕地を以て運輸の便宜敷薪炭贏余なりとある。地味は、総じて砂地にしてその質悪しく、水利欠乏して時々旱に苦しむ。林は、櫟、松、栎の樹多く大樹なし。物産は、米麦大豆小豆粟稗桑などがあるものの、質が悪くて出来も少ないとある。戸数は32戸、人口は191人である。当時としては、一般的な村のひとつである。

遺跡名は、旧大字の堤に、小字名沼上をつけて命名した。上武道路の遺跡区分は、台地と下流にある谷までをセットにして遺跡の範囲とした。ここでは、同一台地ながら亀泉町にあたる西半分を亀泉坂上遺跡と呼び、堤町にあたる東半分と谷地までを堤沼上遺跡とした。1区がある谷地の東が萱野遺跡、萱野Ⅱ遺跡、南の前橋市立桂登東小学校内が沼西遺跡、その東の低地が堤沼下遺跡である。遺跡の範囲は、調査した内容と周辺での遺物の散布状況からすると、東西は台地の幅一杯、南北は500m以上と推定される（第3図）。

2 周辺の遺跡

赤城山南麓の魅力は、平野に続く緩やかな斜面、そしてなんといっても広いことである。しかも、利根川に面して地の利としても申し分ない。自然と、人や物が集まるところであったのだろう。火山とはいえ、活動は久しく途絶えたままで、時間の経過とともに落ち着きを増していったのではないだろうか。

南麓で発掘調査された遺跡は多い。旧石器時代の岩宿遺跡、巨大な用水路女堀、大室の三古墳などを筆頭にして、集落、墳墓、水田や畠などが次々と明らかにされている。そんな中で堤沼上遺跡がある荒砥川の西側は、東に比べて発掘調査が少ないといわれてきた。それでも芳賀団地遺跡群のような大集落や、奈良三彩の小壺がポツンと出た檜峯遺跡のような注目すべき例もある。また、広瀬川低地帯での発見も続いている。関心は、荒砥川の西はどんな様子かである。

堤沼上遺跡では、旧石器時代、縄文時代の遺物、古墳時代から平安時代の集落、そして中世につながる遺構が検出された。ここでは、遺跡の周辺を時代別に概観し、地域の状況や課題について述べる（第4図）。

旧石器時代

岩宿遺跡の発見から半世紀がたつ。この間、南麓で発見された遺跡は数多く、県内では榛名山麓や鍋木川流域、利根川上流域と並んで研究の進んだ地域である。地域の中枢となる拠点集落と、その周辺に小遺跡が散在する遺跡の分布が知られている。伊勢崎市赤堀町下触牛伏遺跡は拠点集落の代表例で、直径50mを超す環状ブロック群が検出されている。桐生市新里町武井遺跡からは、十万点という原石産地以外としては異例ともいえる数の遺物が出土した。石材も種類が多く、さながら中継基地、集積センターの感がある。また、拠点集落ではないが富士見村小暮新山遺跡では、この時代としては稀な住居跡が発見された。頭無遺跡（1）からは、東北地方との関連を示す湧別技法による細石刃核と荒屋型彫器が共存していた。冒頭にあげた地の利は、以上の例からも証明できよう。

7工区では、亀泉西久保Ⅱ遺跡（2）を除いた全ての遺跡で遺物が出土した。これまでは二之宮谷地遺跡（3）、荒砥北三木堂遺跡（4）など暗色帯からの出土が多かったが、上層や上泉唐ノ堀遺跡（5）のように3面で出土した遺跡もある。縄文時代並みの遺跡分布といえよう。これが隣接した地域にまで続くのか、それとも通過する箇所だけにすぎないのか、注目するところである。

縄文時代

広い裾野は、格好の舞台となる。遺跡は、前期が馬の背状の丘陵性の台地に多く、中期になると一段高い台地性地域に移り、水系ごとにまとまりがあると指摘されている（鬼形1996）。

草創期では、隆起線土器と丸ノミ型石斧が共伴した小島田八日市遺跡（6）がある。早期とともに遺跡の少ない時期ではあるが、根利川沿いに集中することが分かってきた。やや離れてはいるが前橋台地上の徳丸仲田遺跡もそのひとつで、近くでは荒砥北三木堂遺跡（4）の無文土器がある。

遺跡の数が最も多いのは前期である。後半の集落が今井道上Ⅱ遺跡（7）、江木下大日遺跡（8）など7工区の遺跡、芳賀北部団地遺跡（9）など、5～10軒規模で点在している。わずかではあるが時期のちがうところを見れば、台地間を移動しながら生活したのであろう。今後も追加が期待できる時期である。

もう一つのピークが中期である。上ノ山遺跡（10）は40軒を越す集落が、五代伊勢宮遺跡（11）では稀少な中期前半の土坑群が目目である。ほかにも旧大胡町内には見るべき資料が多い。後期は、芳賀西部団地遺跡（12）がある。しかし、晩期まで遺跡の数は大きく減少する。西新井遺跡（13）は、表探資料ではあるが広瀬川低地帯にある。荒砥川の沖積地と思われていた所で中期後半の集落が検出された今井白山遺跡（14）の例もあり、次の時代を考えると台地上だけでなく広瀬川低地帯にも目をむける必要がある。

弥生時代

遺跡の少ないのが最大の特徴である。荒口前原遺跡（15）では、中期後半の竜見町式と山草花式が共伴している。導入は県の西部と大差ないが、東西地域のはざまに入ってしまうのか後続がない。小規模な遺跡がわずかに点在する程度である。関心は、この時代低地帯を利用していたのかである。

集落形成の動きは、後期も後半からである。富田東原遺跡（16）、荒砥上ノ坊遺跡（17）などでそれぞれ数軒の住居跡や方形周溝墓が検出されている。7工区でも富田西原遺跡（18）で住居跡6軒が検出されて貴重な一例となった。このほかにも遺跡の数は、これまでに比べれば格段に増加している。確実な歩みといえるが、加速されるのは樽式中枢城の周縁に広く分布する赤井戸式と呼ぶ終末期になってからである。このように南麓地域では、後期の集落が欠落し、中期および終末期には外来的要素の強いことが特徴である。また、後期の稀薄さが逆に古墳時代の導入・展開を容易にしたという見方もある。

古墳時代

芳賀東部団地遺跡（19）は、前期と中期で73軒、開発の初期段階としては、順当な滑り出しといえよう。継続性もあり、地域の動向を占うこともできる。この初期段階は、川に面するか近いことが必須条件のようで、芳賀団地遺跡群が藤沢川沿いにあるように、寺沢川沿いでは亀泉坂上遺跡（20）、大泉坊川沿いで富田西原遺跡、富田高石遺跡（21）が見られる。ただし、上流部に向かっての動きはよく標高150m付近が遺跡分布の限界のようで、可耕地の多い広瀬川低地帯とのつながりが強いからではないだろうか。

その低地帯への進出は、石関西梁瀬遺跡（22）、石関西田Ⅱ遺跡（23）で5世紀代の様子知られており、野中天神遺跡（24）でもその可能性が示唆されている。筑井八日市遺跡（25）の豪族居館は、低地帯を一望でき進出のための拠点であろうか。また、下流の下増田越渡遺跡（26）、常木遺跡（27）では、水田に方形周溝墓も検出されている。さらに、最新の資料では現利根川に近い山口下田尻遺跡で4世紀代の集落が検出され、これまでの見解をかえる成果として注目を集めている。中間での空白の場所を埋める日も近いであろう。弥生時代はまだまだ可能性にとどまるが、桃ノ木川沿いに点々と連なる鳥状の微高地に住まいを構え、河

道沿いに開田していた可能性がいよいよ高くなってきた。

開発が本格化するのは6世紀代、古墳がその象徴で東の大室古墳群と連動するものであろう。まずは6世紀前半、寺沢川との合流点を臨む台地上に初めてともいえる大型の前方後円墳正円寺古墳(28)が作られ、次いで後半に低地帯の中に桂萱大塚(29)、台地上にはオプ塚(30)と続く。これらは牽引役、開発は軌道にのったとみるべきであろう。7世紀になると、大日塚(31)、新田塚古墳(32)が続く。周辺には集落とともに、10~20基前後で群集墳が点在している。終末期古墳は、数の少なから地域的有力者に限られるといわれるが、堀越古墳(33)と至近距離に萱野Ⅱ遺跡1号墳(34)がある。

上毛古墳総覧によると、古墳の数は荒砥川の西にある桂萱村79基、芳賀村64基、南橋村45基、木瀬村19基である。これに富士見村の29基をたしても365基という荒砥村の半分ほどであるが、低地帯沿いには村が出揃ったところであろう。低地帯で基盤となる力を蓄え、川を遡上するように山に分け入る。これが、この時代の地域の姿である。

古代

南麓は、勢多郡として整備された。「和名抄」の勢多郡の項には、深田、田邑、芳賀、桂萱、真壁、深栗、深澤、時澤、藤澤の9郷がある。その位置は、全てではないにしても古墳時代の様子から荒砥地区、およびその周辺と考えるのが妥当であろう。現在のところ、二之宮洗橋遺跡(35)で「芳郷」の墨書土器が出土したことから、二之宮の付近に芳賀郷が推定されている。

発見当時は勢多郡衙と推定され、現在は寺院跡とみられているのが上西原遺跡(36)である。その内容は、佐位郡衙とされた国史跡十三宝塚遺跡と類似し、掘立柱建物群、櫓で方形に囲まれた基壇建物などが検出され、「勢」と刻印のある国分寺系瓦や塑像、奈良三彩、銅製飾金具などが出土している。郡衙、寺院のいずれにしても遺立者や占地の意味を考えると、地域にとって魅力のある遺跡であることにかわりない。

今井道上道下遺跡にある櫓で囲まれた方形区画(37)は、富豪層の居館ではないかと考えられている(神谷2004)。区画の南には、あづま道(38)と呼ばれる幹道が東西に通過しており、立地としても妥当な見解である。周辺では、先の「芳郷」墨書のほかに荒砥洗橋遺跡(39)から「大郷長」の墨書土器や「大」の焼印、荒子小学校遺跡(40)からは「識」の銅印が出土している。これらは先の寺院や居館との関連と思われるが、焼印は官衙的な様相をもつ堀越中道遺跡(41)からも出土している。また、茂木山神Ⅱ遺跡(42)では、山ノ上碑の大胡臣を連想させる墨書「大兒万財」が出土している。ポツンと出たのは繪筆遺跡(43)の奈良三彩の小壺だけでない。皇朝十二銭も富田宮下遺跡(44)、富田下大日Ⅲ遺跡(45)で出土している。いずれも数ある集落のひとつにすぎないが、開発の拠点や有力者のいたことを示し、郷の所在を考える手がかりとなる。

弘仁九年(818)、南麓を地震が襲った。類聚国史には、山崩れが多く発生し土砂が谷を埋め、これにより圧死者が多く出たとある。発掘調査では地割れ、噴砂、洪水など被災内容が明らかになってきた。荒砥川沿いにある上ノ山遺跡(10)では大規模な地割れの跡、今井白山遺跡(14)では噴砂、中宮関遺跡(46)、中原遺跡群(47)では洪水砂で埋没した水田が検出されている。

地震後も、水田は山に入った谷地はもちろんのこと、低地帯でも桃の木川沿いに増えている。茶木田遺跡(48)や箕井中屋敷遺跡(49)は、そこに点在していた村のひとつである。6世紀以降、点々としながらも継続した様子を描くことも可能のようだ。また、一方では農業分野以外も見逃すことができない。八ヶ峰生産産(50)は、主体が製炭と製鉄で8世紀の一時期須恵器を焼いている。富田漆田遺跡(51)では9世紀~

10世紀の須志器窯が6基検出されている。集落内で消費する小規模な生産の跡は、上野原遺跡（36）にも類例がある。

中世

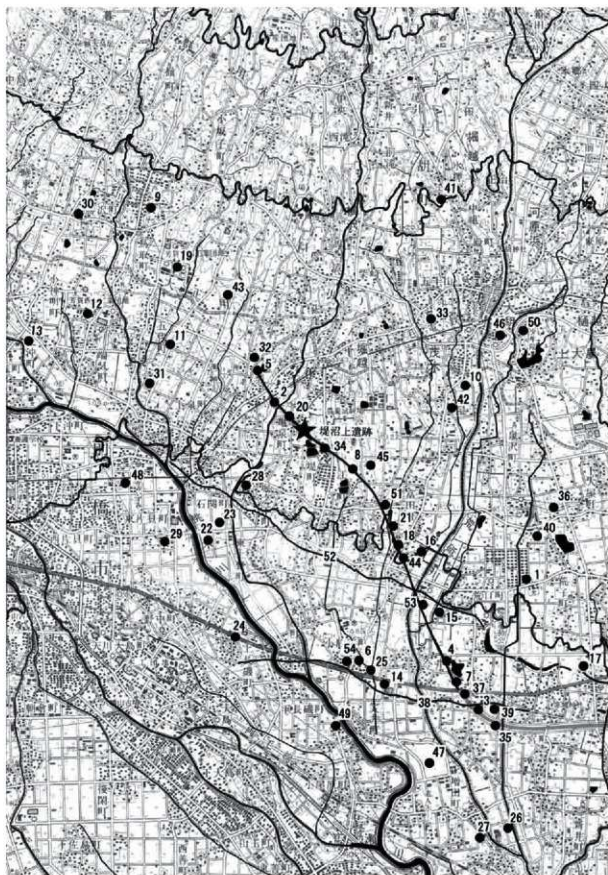
天仁元年（1108）浅間山の噴火は、左大臣藤原宗忠の日記「中右記」によれば上野国内壊滅とある。発掘された水田や畠に復旧された跡はなく、一時は途方に暮れたことであろう。この中で南麓に台頭したのが秀郷流武士団である。そのひとり大胡氏は、重俊を祖とし、「吾妻鏡」に大胡太郎、五郎などの名で記録され、「平家物語」「平治物語」にも登場する。「法然上人行状絵伝」には、大胡隆義とその子実秀が小屋原の運性を介して法然に帰依したとある。活躍は12世紀からおおよそ14世紀のころ、噴火後の復興や女堀（52）の開削と重なる。実態を解明したい、南麓の要となる一族である。基盤は、荒砥川流域から広瀬川低地帯に及ぶ一帯と考えられている。長楽寺文書、彦部文書には、建武二年（1335）六月十九日付の国宣「上野国大胡郷内野中村」、応安六年（1373）六月二十日付の大胡治部少輔秀重の請文「大胡郷三侯村」「堰口村」、応安六年（1373）六月二十日付の沙弥道喜の請文「大胡郷三侯村」、康暦三年（1381）四月五日付の藤原政宗の法券「大胡郷三侯神塚村」など、広瀬川低地帯でなじみのある地名が並んでいる。

女堀は、前橋市上泉町から伊勢崎市西国定まで延長約13km、未完の用水路である（52）。掘削年代は、荒砥前田Ⅱ遺跡（53）で堤の盛り土下で粕川テフラが検出されたことから、1128年からそう速くない時期であることが判明した。これで、浅間山噴火後の復興事業という見解もますます有力になってきた。完成していれば、それこそ一大事、大正用水や群馬用水のような効果があったことだろう。

前橋市小島田町大門（54）には、阿弥陀像を彫った異形板碑がある。橋清重が、息子のために仁治元年（1240）に建立した供養碑である。頂部が三角で初期の板碑説もあるが、将棋の駒のように厚く安山岩が使われている。同形のものが堤沼上遺跡の周辺にも数基ある。時代もややくだり、浄土教の普及によるものだろう。また、近くでは富田東原遺跡の古墓群（16）が知られている。

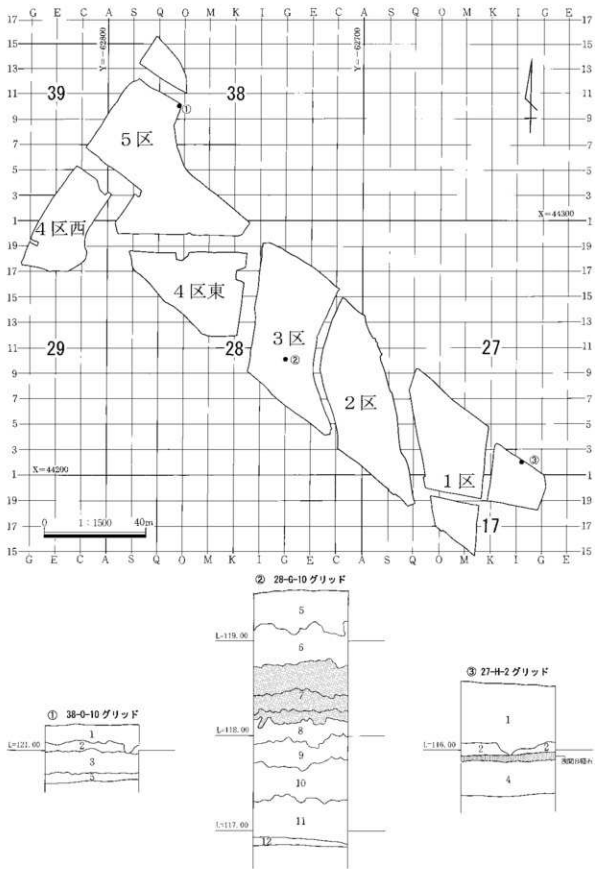
参考文献

- 「上野国郡村誌2 勢多郡（2）」1978 群馬県文化事業振興会
 勢多郡誌編纂委員会「勢多郡誌」1958 前橋市誌編纂委員会「前橋市史 第1巻」1971
 群馬県「群馬県史通史編1 原始古代1」1990「群馬県史通史編2 原始古代2」1991
 粕川村教育委員会「粕川村の遺跡-遺跡詳細分布調査報告書-」1985 群馬県勢多郡粕川村教育委員会
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「群馬県遺跡大辞典」1999
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「群馬の遺跡1～9」2005・2006
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「今井道上Ⅱ遺跡」2006
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「富田漆田遺跡 富田下大日遺跡」2006
 新里村教育委員会「赤城山麓の歴史地震 弘仁九年に発生した地震とその災害」1991
 群馬県教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「地域をつなぐ 未来へつなぐ」1995
 小菅将夫「赤城山麓の三万年前のムラ」2006 新泉社
 鬼形芳夫「赤城山麓における縄文文化の展開」『群馬県史研究』21 1985 群馬県史編さん委員会
 小林 修「赤城山西南麓の後期首長墓の展開」『群馬考古学手帳』12 2002 群馬土器観の会
 神谷佳明「古代上野における富豪層について」『研究紀要』22 2004 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
 近藤義雄「金沢文庫本「念仏往生伝」成立の背景」『信濃』30巻5号 1978



第4図 周辺遺跡(2) (5万分の1)

第2章 遺跡の立地と環境



第5図 調査区と基本土層

第3章 発掘調査の方法と結果

1 発掘調査の方法

(1) 調査区・グリッドの設定

調査区は、現道や水路で仕切られた区画ごとに、東から1区～5区と付けた。国土交通省による区画番号とは、1区=64、65、66、2区=67、3区=68、4区=69、5区=70と対応する。

グリッドは、国家座標第Ⅸ系（日本測地系）を用いて5mを基準に設定した。これは上武道路調査予定地の統一仕様で、1000m四方で大区画、その中を100m四方で中区画とし、さらに中区画をX軸に5mごとに南から1～20、Y軸に5mごとに東から西にA～Tをつけて小区画に細分したものに当たる。グリッド名称は、南東隅のグリッド杭名で表し、位置を特定するには、一例で7大区28A1とした。これを国家座標系であらわせれば、 $X=44200$ 、 $Y=-62700$ となる（第5図）。

このグリッド表記は、遺構図の作成をはじめ、遺物の取り上げや注記など、諸作業で使用した。ただし、大区画は諸記録の管理登録上の扱いで、実際には省略した。これに代わるものとして1期工事区にならない遺跡略称「JK」48を使用した。Jは上武、Kは国道の略である。

水準点は、1区が118.00m、2区が120.00m、3区が120.20m、4区が121.20m、118.80m、5区が120.80m、121.20mである。1区は谷地、2区から5区までが台地である。3区と4区の境あたりが最高点で、以下東西へわずかに下る地形である。調査対象面積は、11,154.1㎡である。

(2) 基本土層と遺構確認

調査に入る前は、1区が水田として耕作され、2区から5区一帯が宅地として利用されていた。戦後の食糧増産を機に開墾され、宅地化が進むのは昭和30年代、前橋市立桂萱東小学校が開校してからである。全体図では省略した攪乱の多くは、屋敷の境界と植栽、あるいは建物の跡である。

- 1層 暗褐色砂質土 細粒、均質、密、表土および耕作土、厚さ10～40cmで安定した状態
- 2層 浅間B軽石混入黒褐色砂質土 細粒、均質、密
- 3層 浅間C軽石混入黒褐色砂質土 細粒、均質、密、厚さ35～45cm
- 4層 暗～黒褐色砂質土 細粒、均質、密、厚さ20～35cm
- 5層 にぶい黄褐色砂質土 細粒、密、ローム漸移層
- 6層 黄褐色ローム 浅間大窪沢軽石（As-Ok）混入
- 7層 As-BPグループ スコリアと下位に室田パミス相当の粘質土からなる
- 8層 暗色帯上位
- 9層 暗色帯下位
- 10層 褐色ローム 北橋スコリアを含まない
- 11層 褐色ローム 北橋スコリアを含む
- 12層 暗褐色ローム

2層は、台地上でも厚さ10cm前後で堆積していたらしいが耕作で攪拌され、その後の宅地造成で削平されている。谷地や道路の敷地など、限られた所にだけ残されている。そのため台地の中央部では、1層が3層

第3章 発掘調査の方法と経過

の上に直接堆積しているような状態である。浅間B軽石層は、古墳時代の住居跡や溝の覆土、谷地など限られた範囲だけに見られた。また、アッシュを残しているところが多かった。3層は、台地上広く安定して堆積する土層で、重機による掘削、その後の遺構確認の目安とした。厚い所では、黒色の強い上層と暗褐色の下部に分けることができる。4層とともに住居跡をはじめとした遺構の覆土でもある。4層には5層が斑状に混入している。谷地では50cm以上の厚さを持つが、台地上では10cm前後で意外と薄い。5層は、ローム漸移層である。台地の中央では薄く、縁辺になって厚くなる。重機による表土等の掘削は4層の上面まで行い、遺構確認はその後4層の上面で行った。

1区の谷地では、2層以下の各層が厚かった上に湧水が多く、基盤までの調査をすることができなかった。浅間B軽石は、厚さ10cm前後の純層で見られた。安定した状態である。3箇所を確認トレンチを設定し、浅間B軽石層の上面まで重機で掘削し、その後遺構確認をした。

(3) 遺構・遺物の記録

調査にあたっては、図面・写真および調査のメモを記録した。遺構の図化は、前記のグリッドを使い、平面、遺物出土状態、断面をともに1:20、1:40を基本として個別に作成した。遺構図の総枚数は、A2サイズで450枚である。平板測量と電子平板測量を併用し、その業務は断面を除き測量会社に委託した。断面は、調査員と調査作業員が作成した。土層の観察は、各担当者の観察による。土層の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」による。

遺構写真は、土層の堆積状態、遺物出土状態、完掘を基本にして、35ミリモノクロフィルムとカラーフィルムおよびブローニーモノクロフィルムを用いて担当が地上撮影をした。総数は、35ミリモノクロが177本、ブローニーが51本である。各区の全景は、高所作業車とラジコンヘリで上空から撮影し、ラジコンヘリによる撮影は測量会社に業務を委託した。

2 調査の経過

堤沼上遺跡の調査は、中断をささみ平成14年度、15年度、16年度の3箇年にわたり、のべ14箇月をかけて行われた。荒砥川の東では本線の工事がはじまり、7-2工区でも仮称亀泉高架橋の着工が調整会議で話題になり出した頃である。調査は、開始から亀泉坂上遺跡1区とあわせて行い、15年度は工事用の仮設道路確保に追われて亀泉坂上遺跡との間を往復し、当初の予定を大幅に変更しての対応となった。最後の16年度は、残った旧石器調査と解決した未収地の調査を行った。調査経過は次の通りである。

平成14年度 平成14年12月1日～平成15年3月31日

冬期の洪水期ということで、堂野Ⅱ遺跡との間にある谷地、1区を対象とした。面積は2,994㎡、水路で3つに分割され、調査前は水田であった。2区から続く台地部分では、ローム漸移層面での縄文時代の遺構確認とその下層での旧石器確認調査の都合2面の調査を行い、残る低地は浅間B軽石層下の1面とさらに下層の遺構確認のため3箇所で2m×4mのトレンチ調査を行った。ただし、湧水が多く、基盤までの調査はできなかった。住居跡2軒、土坑1基、ピット10基、溝2条を調査した。

この間、2月4日、前橋市立荒砥中学校生9名の職場体験学習、2月21日とちぎ生涯学習文化財埋蔵文化財調査センター職員の視察が行われた。また、発掘調査中は、通学路の市道に面して掲示板を設置し、地

元の方々に情報を提供した。なお、遺跡掘削工事の業務委託はこの年から始まり、株式会社シン技術コンサルが荒砥前田Ⅱ遺跡に引き続いて受託した。調査の概要は、事業団「年報」22に掲載している。

平成15年度 平成15年5月1日～8月31日

2～5区の8,160㎡が対象である。年度当初の計画では、4月からは通年で上泉唐ノ堀遺跡を調査することになっていたが、仮称亀泉高架橋の工事専用道路を作るため急きょ予定を変更して対応したものである。該当するのは壹野Ⅱ遺跡から寺沢川畔まで、路線の南半分を優先的に調査し、その後全域を終了させるというのが新たな計画であった。9月から12月までは、上記の事情で亀泉坂上遺跡を調査している。開始するにあたっては、調査区の名称をはじめ、1区の方針を踏襲した。遺跡掘削工事の委託は、須賀工業株式会社が受託した。なお、4月は、当初の予定通り上泉唐ノ堀遺跡を調査した。この間に堤沼上遺跡の2区、3区の表土を掘削し、急きょ調査の体制を整えた。

5月 作業は、2区と3区の遺構確認から開始する。遺構は全域にわたり、住居、土坑、溝、ピット群を検出した。住居は、重機が少ないものの、県文化財保護課（現文化課）による試掘を大幅に上回る軒数で掘り方の深いものが半数以上を占める。しかもカマドなど残りの良いものが多くて、今後の調査工程や遺跡全体の遺構量が心配されるほどであった。3号溝が、3本のトレンチだけの調査になったのもこのためである。この間、作業は天候にも恵まれて順調に推移する。24号住居跡からは、銅製の巡方が出土する。

6月 好天続きで、はやくも11日には、2区の全景をラジコンヘリで上空から撮影することができた。撮影終了後には、ただちに2区から住居の掘り方調査を開始し、3区では遺構の精査、4区、5区は重機による表土の掘削をすませて遺構確認を行う。3区では、浅間B軽石層で埋まった2条の溝の下に、上幅が3mを超す大溝が2条もあることが判明した。住居の数は、大溝を境に大きく減少、集落の西を区切る可能性が高くなり今後の調査にも期待が持たれる。

7月 調査の主体は、台地の中央部4区、5区に移る。11日には、3区と4区の全景をラジコンヘリで上空から撮影した。精査が進むにつれて、住居が西へ行くほど散漫になるのは決定的となる。住居は5軒、その散漫な様子から逆に畠や平地式建物を想定して調査を進めたが、結果は溝やピットを検出したのみである。しかし、時期は、古墳時代までさかのぼり、逆に市道をはさんで西に広がる亀泉坂上遺跡との関連が強まる。15日からは、グリッドを設定して旧石器の確認調査を2区から始める。グリッドは、縦2m×横5mの範囲で、深さ2mまでが暗色帯の下位までを調査の内容とした。一部は、暗色帯の下、八崎軽石層まで掘り下げた所もあるが全てではない。面積は、調査対象の4パーセントが目安である。2区がグリッド9基、3区が2基、4区が11基を設定した。記録は、北面、東面の2面の断面図を作成した。

8月 7日に5区の全景をラジコンヘリで上空から撮影する。遺構は、2区、3区に比べると極端に少なく、点々と浅間B軽石層が残されていたのが印象的である。18日～19日、ソフトローム上面まで重機で掘削し2面目の調査をした。掘り残したピットや倒木痕がはっきりとしたが、ほかに遺構はなかった。終了後、3区、4区の旧石器確認調査を行ったが遺物の出土はなく、これにより調査区南半分の調査を終了した。

平成16年1月7日～平成16年3月31日

1月 7日、亀泉坂上遺跡から移動して3区北側、5区北側の調査を開始する。3区では、住居跡3軒、4号から7号までの溝のほか、重機による掘削面を浅くしたためかピットが多数検出された。5区では、住居跡1軒のほか土坑9基、溝2条、道3条を検出した。冬の凍結で遺構確認がむずかしい上、北と南で分割

第3章 発掘調査の方法と経過

調査したために16号掘立柱建物跡のようにプランが不備なままで終わったというものもある。

2月 10日、3区の全景をラジコンヘリで空中から撮影する。ただちに3区と5区で、旧石器の確認調査を開始する。3区は、縦2m、横5mのグリッドを4基、5区では9基を設定し調査した。

3月 8日、旧石器の確認調査終了。3区28G-15グリッドの暗色帯から遺物出土を確認する。また、5区では38Q-16グリッドでナイフ形石器1点が出土したため、10m四方に拡張して調査したが1点のみに終わった。調査中は、前年度と同様に広報目的で「堤沼上・亀泉坂上遺跡だより」1～15号を発行し、これまで同様に掲示するとともに地元希望者には配布した。調査の概要は、事業団「年報」23に掲載している。

平成16年度 平成16年4月1日～平成16年4月30日

3区で確認した旧石器の本調査を行う。遺物が出土した28G-15グリッドを中心に、南北20m、東西20m、面積400㎡を対象とした。暗色帯の上部からAs-BP位にかけて、ナイフ形石器、剥片111点が出土した。30日には全景撮影、記録作成の後、埋め戻して全てを終了した。これにより調査は、5区の未収地を残すだけとなった。この間、15日、足利工業大学長尾昌助教授以下学生41名の見学があった。調査の概要は、事業団「年報」24に掲載している。

平成16年6月14日～21日

5区に残っていた未収地の調査である。宅地への入口を確保するという制約のため、調査範囲は南北にトレンチの2本を設定しただけである。攪乱も少なく、土層も安定していたが56号土坑とピットを調査しただけで、3号道と9号溝の北側延長部分にあたるがここでは検出できなかった。遺物は、縄文土器と土師器の小破片が少量出土した。

以上で出土した遺物数量は、64×42×15cmの遺物収納箱で38箱である。

3 整理作業の方法

整理は、平成18年4月から同19年3月までの1年間の予定で行った。

(1) 遺物整理

遺物総数は、前記のように収納箱38箱である。遺構ごとに分けた後、まず土器の接合を行った。次に復元・彩色し、写真撮影を経て、器械実測により素図を作成の後、それをもとに実測図を作成した。実測した遺物は、土器286点・石器28点・石製品61点・金属製品33点のあわせて408点である。掲載を断念した遺物は、出土した遺構・グリッドごとに種類・器種を分類し、集計をした。

金属製品は、当事業団保存処理室でレントゲン撮影をして、残存状態を確認の上、クリーニングを行った。

(2) 遺構図・遺構写真整理

遺構図は、全てに通番をつけて台帳を作成した。平面図と断面図は、照合・修正の上トレースをした。さらに報告書印刷原稿として版下作成をして編集した。遺構写真は、ネガに通番をつけ台帳、ネガ検索台紙を作成した。この中から報告書に掲載した写真を選択し、印刷原稿を作成した。

第4章 検出された遺構と遺物

1 概要

遺跡は、およそ6世紀後半から10世紀前半にかけての集落である。8世紀中頃から後半と9世紀前半の2つのピークがあり、検出したのは住居跡40軒、掘立柱建物跡18棟、土坑56基、溝9条、井戸1基、道3条、ピット164基である。その分布は、分析でAsB下の水田が推定されている東の谷地に面して多く、台地の内側、西に行くほど散漫となる。集落としては中心が、それに近いところであろう。

時期別に見ると、7世紀までは同じ台地の西にある亀泉坂上遺跡からの飛び地として展開する。同遺跡は、4世紀に集落の形成が始まり、5世紀、6世紀と段階を経て、7世紀にかけては7基の古墳が築かれる拠点集落である。遺構が西に多く、東に少ないのはこの影響を受けたものである。

これが8世紀になると一転して、台地の東寄りに集住するようになる。谷地での水田経営の本格化、谷地を隔てた萱野Ⅱ遺跡など周辺遺跡との関係強化が、その大きな理由であろう。第3図で見るとおり、遺跡は接するように並んでいる。境界線を引くのがむずかしい状態である。開発は、川沿いの耕作適地だけではなく、川を離れた谷地にまで及んでいる。その象徴が3号、4号、5号の大型水路である。規模の大きさもさることながら、台地の中心を縦断し、水の流れた跡が歴然としている。全貌は推測の域を出ないが、取水源を考えればはるか上流であろうし、配水は堤沼上遺跡ひとつで収まる範囲ではない。掘削は、おそらくは村の範囲を越え、その後の維持・管理も地域一体のものとして取り組んだのであろう。

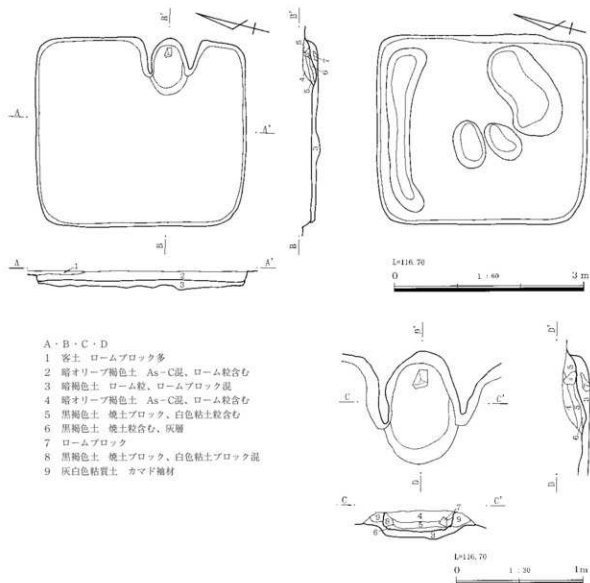
遺物は、収納箱にして38箱が出土した。1軒1箱以下という分量で、遺構の残りが良いにもかかわらずこの遺物の少なさが特徴である。甕がほとんどなく、数点の杯だけというのが大半で、日常の土器組成を残しているのはきわめて稀である。巡方、円面硯、勢多の墨書土器に目が集まるが、いずれも住居を離れて投棄されたものである。

2 竪穴住居跡

住居は、縦長2軒に対して、可能性のあるものを含めると残り34軒が横長である。東にカマドを持ち、規模の点でも差が少なく似かよっている。数軒単位で群をつくり、その群ごとに建て替えをしている。住居間での土器の接合は、この間の動きを示しているのだろう。この群には、数棟の掘立柱建物跡が併設されている。おそらく、群は宅地のような割り当てのもとに成立していったのだろう。

住居は重複が少なく、単独がほとんどである。この影には、規制のようなものがはたらいていたのであろう。明らかに重複とわかるのは、9号と20号、14号と24号、30号と35号の3例だけである。遺物では、甕の類が極端に少ない。完形の個体もあるが、2～3cm大の細片が大半である。床直ではなく、埋没時に混入したか半埋没時に投棄された。これは、8号と15号の2軒が該当する。カマドは、両方に軸石を持つ。山石の割石が主で、人頭大に粗く割れている。中には、寺沢川の崖から抜き取った大胡火砕流と思われる砂岩が使われている。軸の壁土には、シルト質の粘土と浅間C軽石混入土が使われている。

第4章 検出された遺構と遺物



第6図 1号住居跡平・断面、掘り方平面、カマド平・断面

1号住居跡 (第6図 PL. 3)

位置 1区 270-1 重複関係 なし、南2mに2号住居跡がある。

形状 方形 規模 東西3.00m、南北3.40m、壁高14cm 面積 10.54㎡ 主軸方向 N76° E

覆土 1～2層に分けた。2層は、2号住居跡Aの2層と同じである。

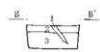
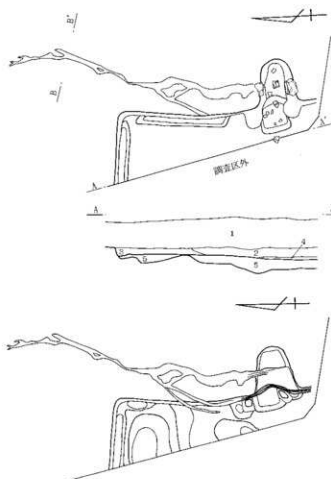
カマド 東壁の南寄りに構築されている。全長103cm、焚き口幅57cmを測る。燃焼室は完全に壁外にある。燃焼室の両側は、白色の粘土を用いて壁面を構築する。壁面よりもやや内側に支脚の石がある。柱穴なし
周溝 検出されなかった。 **貯蔵穴** 検出されなかった。

床面 やや硬くはあるが、はっきりとした硬化面は検出できなかった。掘り方は、ロームブロックを覆土とする。カマド前を楕円形に掘り込んでいる。北壁に沿って溝状に掘られている。

遺物と出土状況 カマドの周辺から土師器の杯と甕の破片数点が出土したのみである。図示したものはない。

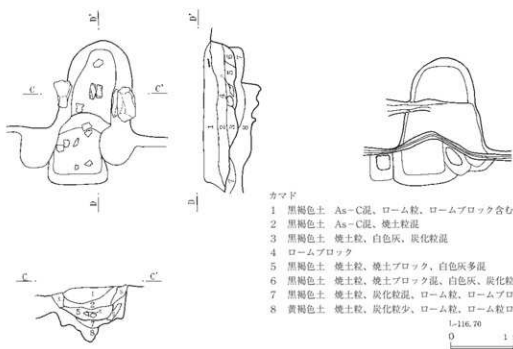
所見 時期は、わずかな遺物とカマドの形態を考慮して8世紀初頭と考えられる。

2 竪穴住居跡



- 地割れ部分
- 1 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック混、住居付近で焼土粒、炭化粒含む
 - 2 明黄褐色土 As-OK混
 - 3 明黄褐色土 As-OK少混

- A
- 1 黄灰色土 表土
 - 2 暗オリーブ褐色土 As-C混、ローム粒、ロームブロック含む、焼土粒、炭化粒含む
 - 3 黒褐色土 As-C混ローム粒、ロームブロック含む、焼土粒少混
 - 4 黒褐色土 As-C混、焼土ブロック多、炭化粒、白色灰混、硬化している
 - 5 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック多混



- カマド
- 1 黒褐色土 As-C混、ローム粒、ロームブロック含む
 - 2 黒褐色土 As-C混、焼土粒混
 - 3 黒褐色土 焼土粒、白色灰、炭化粒混
 - 4 ロームブロック
 - 5 黒褐色土 焼土粒、焼土ブロック、白色灰多混
 - 6 黒褐色土 焼土粒、焼土ブロック混、白色灰、炭化粒含む
 - 7 黒褐色土 焼土粒、炭化粒混、ローム粒、ロームブロック含む
 - 8 黄褐色土 焼土粒、炭化粒少、ローム粒、ローム粒ロームブロック多混



第7図 2号住居跡平・断面、掘り方平面、カマド平・断面

2号住居跡（第7図 PL.3・4）

位置 1区 170P-19・20 **重複関係** 地割れより古い、北2mに1号住居跡がある。

形状 推定方形、東側のみ検出する。西側及び南側は用水路により調査不可能であった。また、地震による地割れで東の壁やカマドに影響を受けている。As-YP層を掘り抜いている。壁の崩落は少ない。

規模 東西1.15m以上、南北3.20m以上、壁高12cm **面積** 1.84㎡以上 **主軸方向** N96°E

覆土 客土層を除いて2～4層に分けた。5層は掘り方である。

カマド 東壁の南寄りに構築されている。地割れで3つに分割されている。住居の壁線上より南東に30cmほどズレている。特に燃焼室中央は、2筋の地割れによる影響が大きく使用面から陥没状態が見られ、掘り方では地山のロームがブロック化していた。全長115cm、焚き口の幅35cm、燃焼室は壁外にある。燃焼室は、両側が長軸30cmほどの石で補強して作られている。奥壁が特に焼けていた。 **柱穴** なし

周溝 北壁は、幅25cm前後、深さ4～8cmである。東壁は、幅25cm、深さ2cmである。

貯蔵穴 調査区外にあると考えられる。

床面 硬く踏み締められていた。カマドの前は、特に硬化している。

遺物と出土状況 カマド内で甕1個体が押しつぶれて出土したが細片で接合できず、復元はしていない。

所見 時期は、甕やカマドの形態から8世紀初頭。なお、土層観察から1号住居跡より古いと考えられる。

3号住居跡（第8～11図 PL.4・39）

位置 2区 17RS-19・20 **重複関係** なし、2区の南東、半分近くは調査区外にある。

形状 推定方形、北壁やカマドの位置からすると、2区、3区の中では大型の住居に属す。

規模 縦4.60m、横3.60m以上、壁高60cm **面積** 8.28㎡以上 **主軸方向** N96°E

覆土 2～6層に分けた。2層と3層に遺物が多い。

カマド 東壁の中央部にある。全長125cm、焚き口幅35cm、矩形の掘り方の中に粘土を厚く貼付して作られている。左袖もロームを舌状に掘り残し、これを芯として粘土を厚く貼付して作られている。遺存状態は良好で、煙道部と崩落した天井の一部が残っていた。焚き口には、つぶれてはいたものの甕が残されていた。焚き口に灰掻き用の床下土坑があるのとカマド内に複数枚の灰層のあるところから、少なくとも1回は造り替えをしている。1穴式である。

柱穴 床面では検出できず、掘り方の北東で1本のピットを検出した。ただし、やや中央にも近く、対となるものが調査区外で検出できず断定はできない。床面で図示したピット1は、妥当な位置ではあるが住居よりも新しく、2基が重複している。4号土坑周辺にあるピットのひとつであろう。

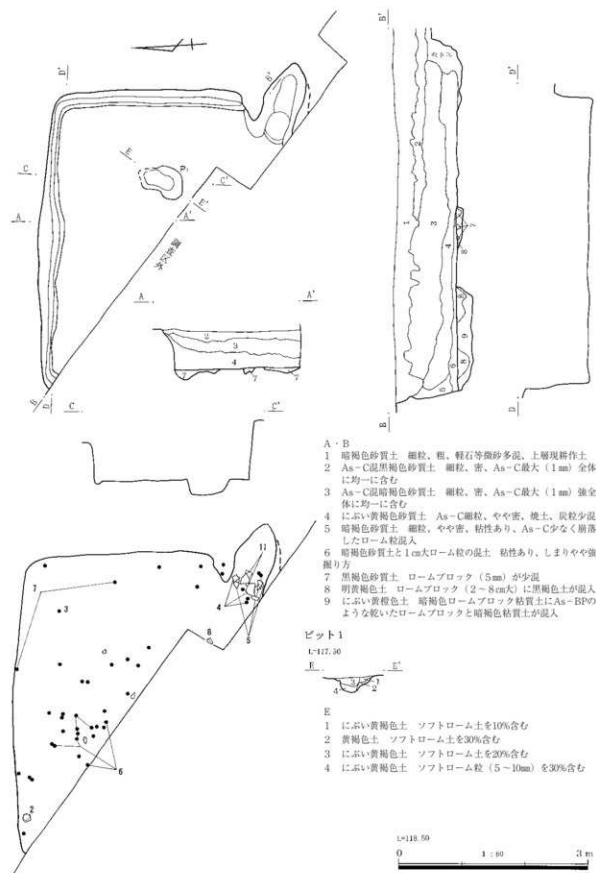
周溝 全周すると思われる。幅20cm前後、深さ4cm前後である。北壁の掘り方では、筋による掘削痕が2列に残されていた。内側の方が古く、ロームを多く含んだ土で埋め戻されていた。

貯蔵穴 カマドの右側に設置されていたものと思われるが、調査区外のために未検出である。

床面 ロームを大量に含んだ褐色土で厚く貼床をしている。一様に硬化しており、平坦にならされていた。掘り方は、壁際を一段深くして中央部を島に残すタイプである。

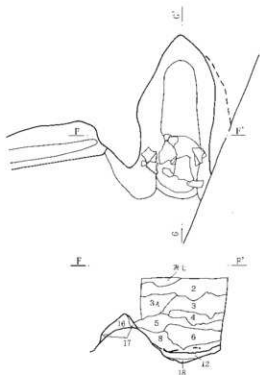
遺物と出土状況 杯、甕、須壺器杯、長頸壺、コップ形、すり石を取り上げた。7の長頸壺は埋設時の混入と思われるが、ほかは原位置である。4と5の甕は、カマド内で出土した。下胴部を欠損し、被熱で変色している。粘土が付着しているところからカマドの袖の芯材に転用したものである。

所見 時期は、7世紀末から8世紀前半である。



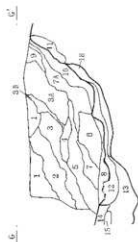
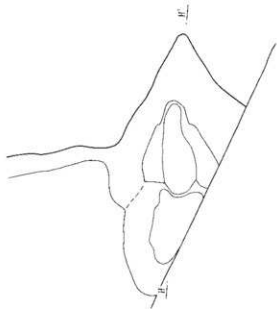
第8図 3号住居跡平・断面及び遺物分布

第4章 検出された遺構と遺物



カマド

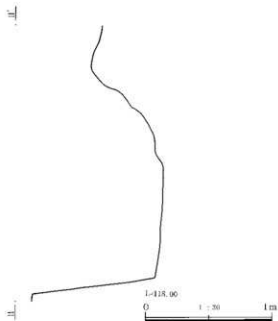
- 1 黒褐色砂質土 軽石少量あり
- 2 暗褐色粘質土 焼土粒、ローム粒3%点在
- 3 暗褐色粘質土 灰白のシルト質～灰白色の粘土がブロック状に20%混入、焼土ブロック(5～10mm)が3%混
- 3A 灰白色土・褐灰色粘質土・灰白色のシルト質土のブロック状混入、焼土ブロック(3～4cm大)あり
- 3B 褐灰色砂質土 3層や3A層の灰白色シルト質土がブロック状(3～4cm)に混入
- 4 黒褐色砂質土
- 5 にぶい黄褐色砂質土 灰白～灰色の灰または粘土のシルト質土がブロック状に入る。焼土ブロック(5cm大)あり



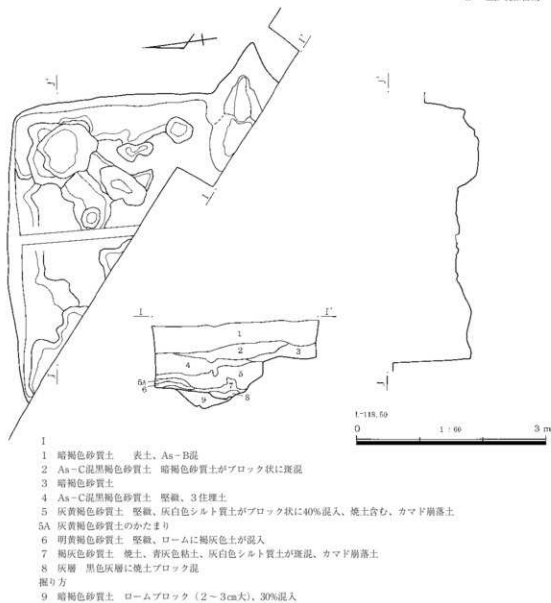
- 6 青灰色・黄褐色粘質土 ブロック状に混入。焼土暗赤褐色、湿り気ある砂質土混入
- 7 黒褐色砂質土 湿り気がある
- 7A 煙道部 明赤褐色の湿った砂質土に青灰色の灰をところどころ含む
- 8 暗赤褐色砂質土 湿り気がある。礫石に近づくとどカリカリと焼き締まった焼土、8層と6層の混入、7層の炭灰も混入
- 9 煙突部の天井の焼土かたまり 橙色の焼土ブロックににぶい橙色の砂質土が入る
- 10 煙突下部の焼土かたまり 明赤褐色の焼土ブロック(3～7cm以上)に赤灰色の砂質土が入る

カマド掘り方

- 11 橙色の砂質土 ローム
- 12 黒褐色砂質土 焼土粒、ローム粒混
- 13 暗褐色砂質土 ロームブロック(1～3cm)、粘土ブロック(1～3cm)40%混
- 14 暗褐色砂質土 ローム粒、焼土粒、粘土粒
- 15 黄褐色ロームブロックのかたまり、貼床
- 16 灰粘質土 左袖部分
- 17 にぶい黄褐色砂質土
- 18 にぶい黄褐色土に明青灰色粘質土が入る



第9図 3号住居跡カマド平・断面



4号住居跡（第12～14図 PL. 4・5・39）

位置 2区 27ST-1グリッド 重複関係 なし

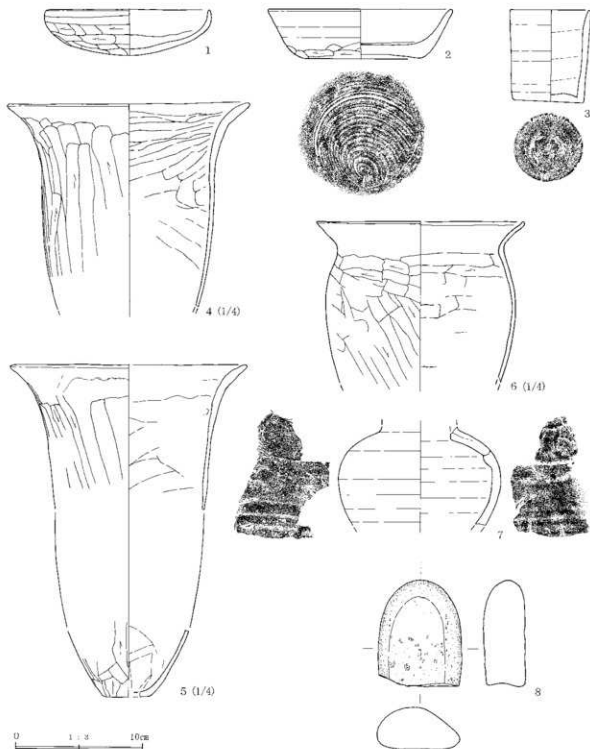
形状 方形、北壁よりも南壁が広い。また西壁よりも東壁の方が広い。南壁の中央部には、入り口に関係すると思われるしみの跡がある。範囲としては、間口1m強、奥行き60cmで弧状にめぐる様子が観察できた。床に特別段差はないが、南壁側が北に比べて広いこともあり、ここだけ周溝も途切れ、位置としては妥当である。また、周溝の北西隅だけにズレがあり、改築の跡かと思われる。

規模 縦4.05m、横3.52m、壁高58cm 面積 14.25㎡ 主軸方向 N98°E

覆土 1～9層に分けた。As-Cを混入する暗褐色砂質土と黒褐色砂質土で埋没しているが、混入するロームが多く、人為的に埋没したと考えられる。

カマド 東壁の中央部より南寄りにある。住居の南東隅を仕切り、貯蔵穴とセットで作られているのがよく分かる。全長128cm、燃焼部の幅48cm、天井部は完全に崩落していて両袖を残すだけである。壁外への掘り

第4章 検出された遺構と遺物



第11図 3号住居跡出土遺物

込みは30cmとほかの住居に比べて少なく、燃焼部も床より一段高いような印象を得る。両袖は、燃焼部と一体で掘り残したロームを芯にして暗色帯らしい粘土を貼付している。燃焼部の中には、最大で10cm近い厚さの灰が残されたままである。遺物は出土していない。焚き口の床下では焼土などで埋まる土坑が検出された。灰掻き用の穴とも思われる。掘り方では、両方の袖石と支脚の穴が検出されている。柱穴 なし

周溝 南東隅を除いて全周している。幅22~30cm、深さ4~8cm、北西隅は前記のように、図示していないが二重になっていた。掘り方では、カマドの右袖との間がロームを掘り残して仕切られていた。

貯蔵穴 南東隅にある。長軸・短軸・深さは、70・61・45cmである。中からは杯1点が出土している。同じ壁際では、貯蔵穴をはさんで対にあるやや小型のピット2基が検出されている。掘り方はしっかりとしており、壁を養生する補助的な柱穴が貯蔵穴自身を区画するためのものかもしれない。

床面 ロームを主とする黒褐色砂質土で貼り床をしている。全体に堅緻で、カマドの前がわずかに高い。掘り方は、壁際を深くし中央部を矩形に残す。

遺物と出土状況 土師器杯3、砥石1、鎌2、釘1、金具1、鉄塊1を取り上げた。全体に遺物は少なく、小破片である。接合率も低い。取り上げた内で、杯を除いて出土レベルが高く埋没時の流れ込みか。

所見 時期は、8世紀前半である。

5号住居跡 (第15~17図 PL.5・39)

位置 2区 27T-2グリッド **重複関係** なし

形状 方形

規模 縦290m、横360m、壁高40cm **面積** 10.44㎡ **主軸方向** N91°E

覆土 1~4層に分けた。2層は南壁寄りで炭化物が多く混入、3層には北の壁際でロームの硬いブロックが多い。2層もレンズ状の縞になっていた。

カマド 東壁の中央より南寄りに構築されている。全長92cm、焚口の幅40cm、壁側に石を据え、燃焼部を壁外に掘り込む1穴式である。掘り方では、左右の袖石と支脚の穴が検出されているが、右だけは袖石が残されていた。石は、地山の粗粒輝石安山岩の割り石で、幅と厚さを調整した跡がみられる。断面Hで見ると壁や袖の粘土は少なく、袖石が抜き取られ自然に崩落したものであろう。出土した遺物はない。

柱穴 掘り方で北西を除く3本の柱穴を検出した。それぞれの長径・短径・深さは、P1が40・24・7cm、P2が26・22・7cm、P3が42・29・8cmである。北西だけが土坑状のものとの重複で未確認であるが、4本であったと思われる。柱間は、P1とP2の間が220cm、P2とP3の間が180cmである。

周溝 住居の南東隅、カマド部分を除いて全周していた。幅は15cm前後、深さは5cm前後である。

貯蔵穴 南東隅で長径45cm、短径38cm、深さ25cmの円形土坑が検出された。これとは別にカマド右の東壁で室状のものがある。貯蔵穴の延長線上であり、間口45cm、壁からの奥行き15cmで、床よりも数センチ低い。カマド右脇で棚が推定される箇所である。遺物は出土していないがこれも貯蔵穴かもしれない。

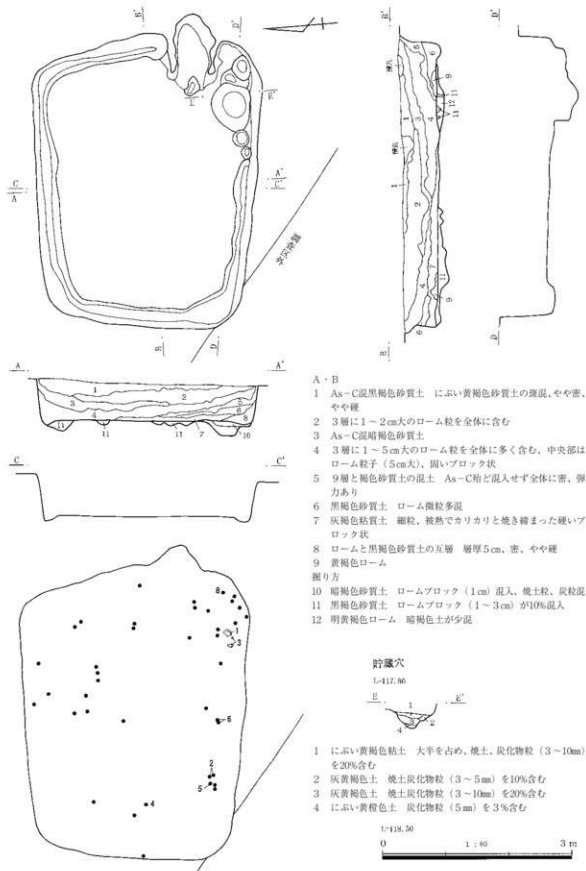
床面 ロームブロックを多く混入した黒褐色土、黄褐色土で貼床をしている。平坦、全体に堅緻であるが、カマド前の1m四方が特に硬化しており、長期にわたる使用を感じさせた。南壁際から50cm内側で炭化物があり、まわりに焼土が付着していた。

掘り方は、周溝を除くと土坑状のものが中央で1基、北西と南西の隅で各1基検出された。中央のものは、長径2m、短径1.3m、深さ10cmである。図示はしていないが、北東の隅でP1にかなり地割れの跡らしいものが検出された。幅10cm、南北方向に蛇行している。

遺物と出土状況 1の須恵器蓋と4の須恵器杯は床面と床上20cm前後の上下に分かれて集中していた。1の須恵器蓋と4の須恵器杯は出土レベルが高く埋没時の流れ込みである。

所見 時期は、9世紀中頃から後半である。2、3、6、7の出土遺物で時期決定をした。

第4章 検出された遺構と遺物



A・B

- 1 As-C混黒褐色砂質土 土に黄褐色砂質土の塊混、やや密、やや硬
 - 2 3層に1~2cm大のローム粒を全体に含む
 - 3 As-C混暗褐色砂質土
 - 4 3層に1~5cm大のローム粒を全体に多く含む、中央部はローム粒子(5cm大)、固いブロック状
 - 5 9層と褐色砂質土の混土 As-C粘と混入せず全体に密、弾力あり
 - 6 黒褐色砂質土 ローム微粒多混
 - 7 灰褐色粘質土 細粒、被熱でカリカリと焼き締まった硬いブロック状
 - 8 ロームと黒褐色砂質土の互層 層厚5cm、密、やや硬
 - 9 黄褐色ローム
- 掘り方
- 10 暗褐色砂質土 ロームブロック(1cm)混入、焼土粒、炭粒混
 - 11 黒褐色砂質土 ロームブロック(1~3cm)が10%混入
 - 12 明黄褐色ローム 暗褐色土が少混

貯蔵穴

L-417.66

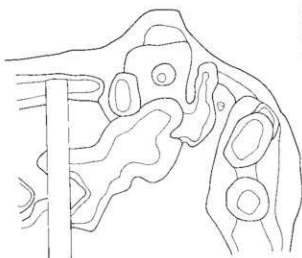
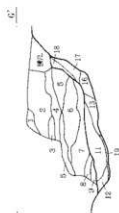
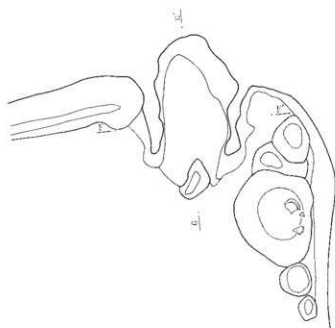


- 1 土に黄褐色粘土 大半を占め、焼土、炭化物粒(3~10mm)を20%含む
- 2 灰黄褐色土 焼土炭化物粒(3~5mm)を10%含む
- 3 灰黄褐色土 焼土炭化物粒(3~10mm)を20%含む
- 4 土に黄褐色土 炭化物粒(5mm)を3%含む

1:100.00

0 1:60 3m

第12図 4号住居跡平・断面及び遺物分布



カマド

- 1 黄褐色土 ハードローム土が50%以上を占める
- 2 黄褐色土 ハードローム土が50%を占める
- 3 黄褐色土 ハードローム土が30%を占め、白色粘土粒(5mm)が10%を占める
- 4 褐色土 As-BPブロック(3~5cm)まばらに(30%)含む
- 5 明褐色土 カマド材が50%以上を占める、6層よりも明るい
- 6 明褐色土 カマド材が50%以上を占める
- 7 灰褐色土 カマド材が50%以上を占める
- 8 褐色土 カマド材が50%以上を占める
- 9 にぶい黄褐色土 カマド材が50%以上を占める
- 10 褐色土 灰が50%以上を占める

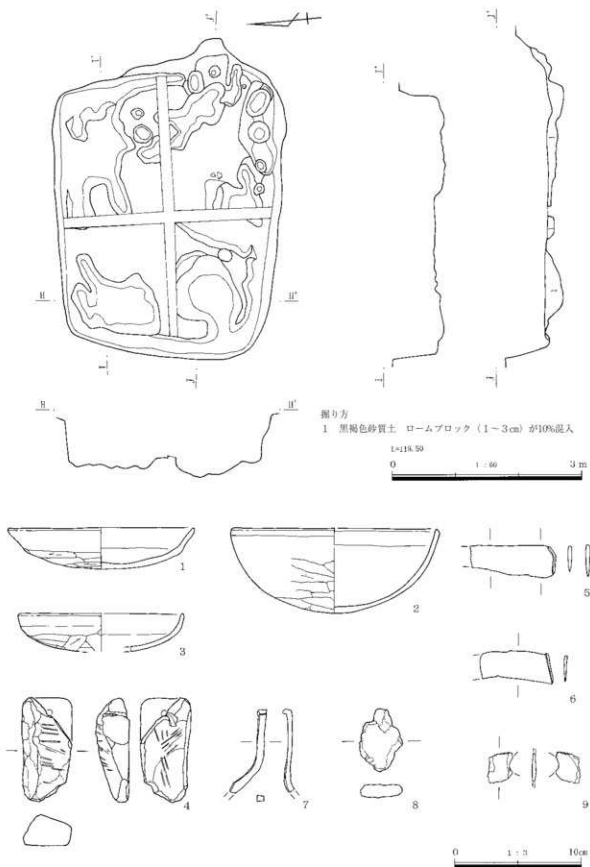
カマド掘り方

- 11 青灰色灰層 やわらかい、黒い灰も混入
- 12 青灰色灰層
- 13 暗赤褐色砂質土 焼土粒、ローム粒、炭粒混入
- 14 灰色の粘質土 焼土粒、炭粒混入
- 14A 暗灰色土 粘土質
- 15 黒褐色砂質土 ローム粒が混入、粘土形成物のマット
- 16 明赤褐色砂質土 明赤褐色の焼土粒50%混
- 17 褐色粘質土 灰が粘質化したか
- 18 黒褐色灰
- 19 黒褐色砂質土とローム粒子(50%)の混土、一番底に、にぶい黄褐色粘質土が貼付

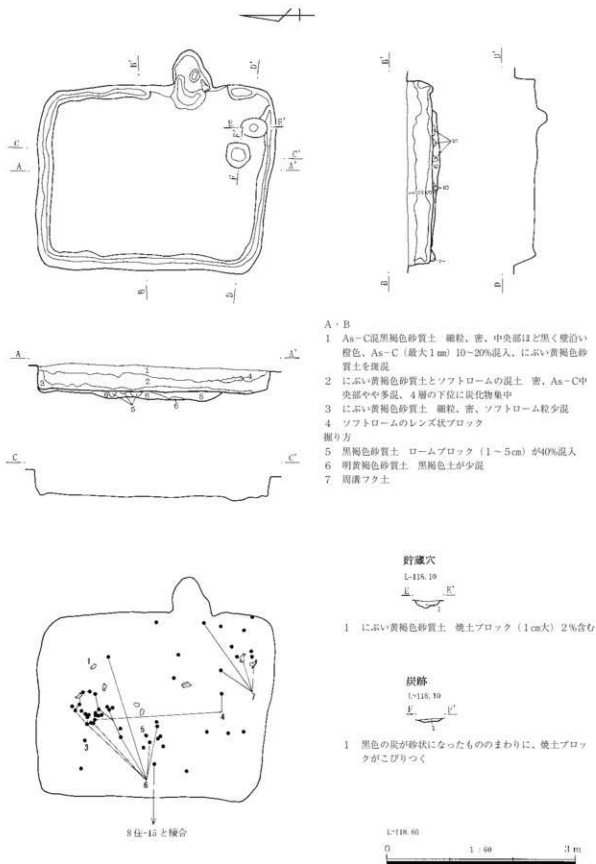
E=1/18.30

0 1 : 30 1m

第13図 4号住居跡カマド平・断面

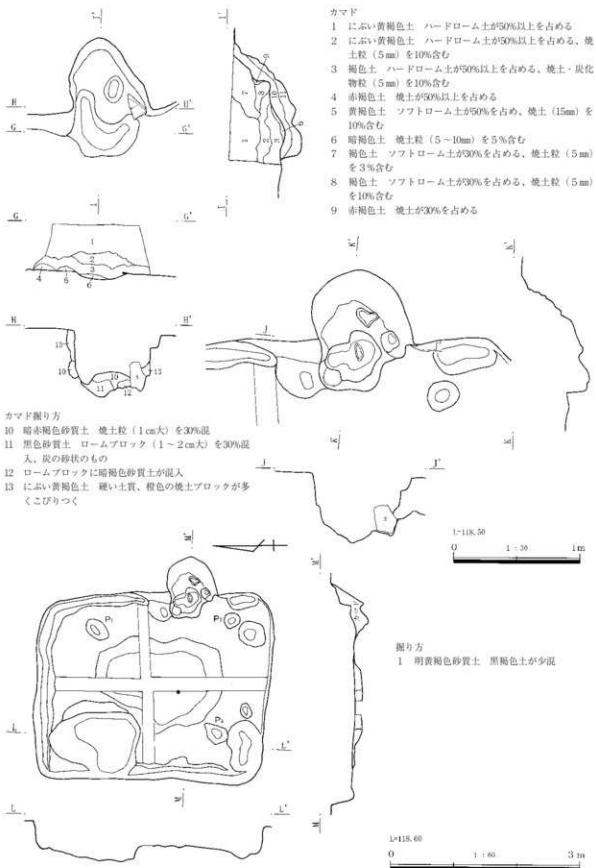


第14図 4号住居跡掘り方平・断面及び出土遺物

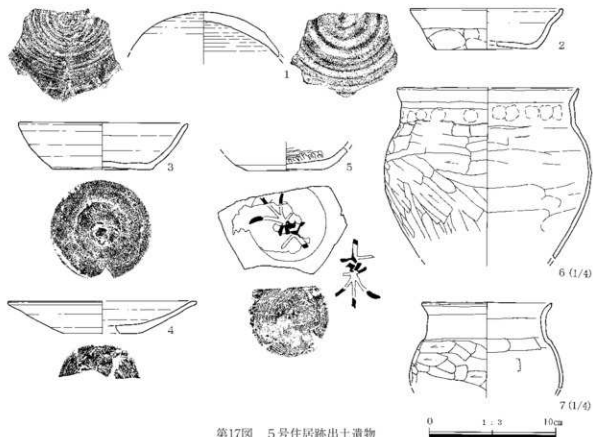


第15図 5号住居跡平・断面及び遺物分布

第4章 検出された遺構と遺物



第16図 5号住居跡掘り方・カマド、平・断面



第17図 5号住居跡出土遺物

6号住居跡 (第18~23図 PL. 5・6・40)

位置 2区 27・28TA-3~5 重複関係 なし

形状 方形 規模 縦7.40m、横7.20m、壁高20cm 面積 53.28㎡ 主軸方向 N82°E

覆土 1~7層に分けた。住居全体を覆うのはAs-Cが混入する黒褐色砂質土と暗褐色砂質土である。

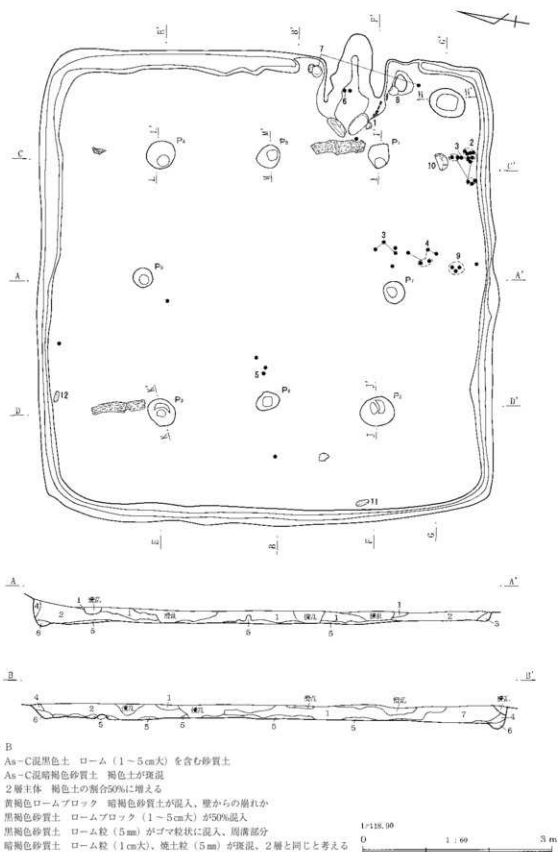
カマド 東壁の南寄りにある。土手状に掘り残したロームを芯に、青灰~青黒色の粘土を貼付して作られている。全長125cm、焚口幅45cm、煙道を除いて屋内に作られ、内部は平坦で殆ど傾斜もない。両袖口には、角閃石安山岩の転石がハの字状に倒れていた。支脚はない。左袖の壁際には、寛の上胴部を転用した置き台が据えてあった。右袖の脇には、粘土塊があった。床に密着しており、カマド補修用のものと考えられる。

柱穴 P1~P4が主柱穴、P5~P8が補助柱穴である。それぞれの長径・短径・深さは、P1が45・43・80cm、P2が45・40・90cm、P3が55・46・83cm、P4が47・39・65cm、P5が38・35・62cm、P6が32・31・42cm、P7が37・34・44cm、P8が47・40・62cmである。円筒形の掘り方をしたものが多く、底面には白濁した圧着痕がある。ローム層に貼付したものが、丸く白濁している。

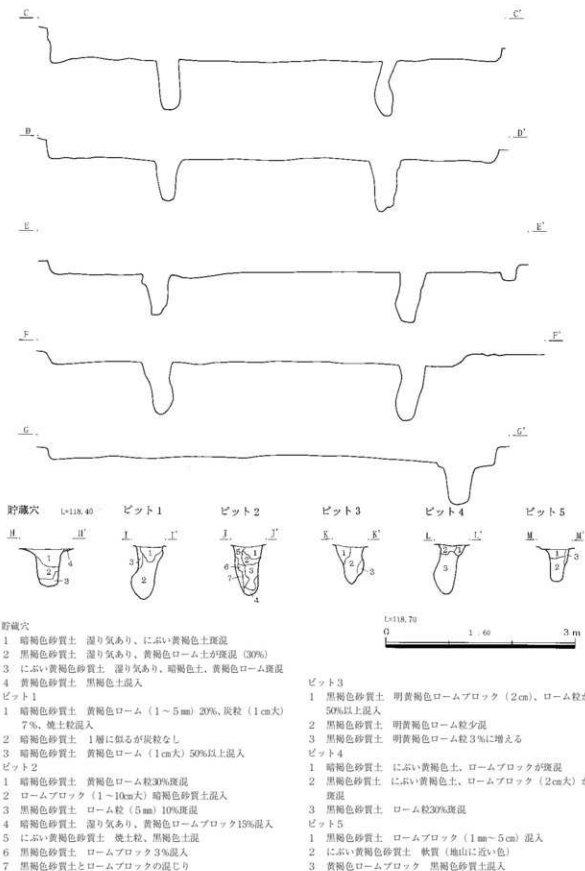
周溝 全周している。幅20cm前後、深さ3~12cmである。

貯蔵穴 南東隅にある。長径75cm、短径68cm、深さ64cmの円形である。

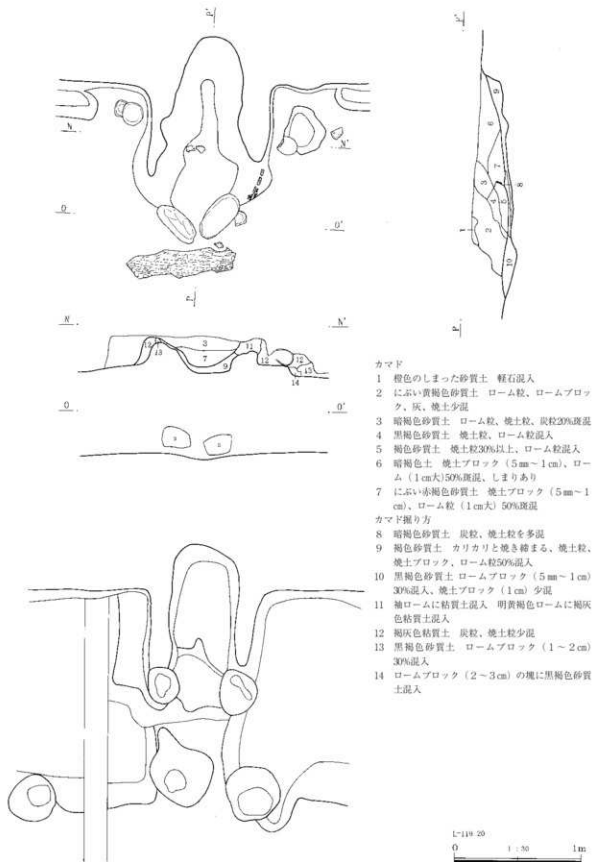
床面 平坦、ロームを多く混入した黒褐色土で貼り床をしている。掘り方は、主柱穴を結んだ中が一段高い。薄く貼り床をしているだけであった。これに対して壁際との間は、畳にして半分か1畳ほどの広さで矩形に掘り込まれていた。特に東壁は顕著で、北壁にまで続いていた。それに対して西と南ははっきりとせず、主柱穴の周辺に限られた。そこでは、円形をしたものが多くて、一人あたりの作業単位を思わせた。3箇所ですべて根太が検出されたが、調査中の所見からすると、北と東は柱ごとにあったのではないだろうか。



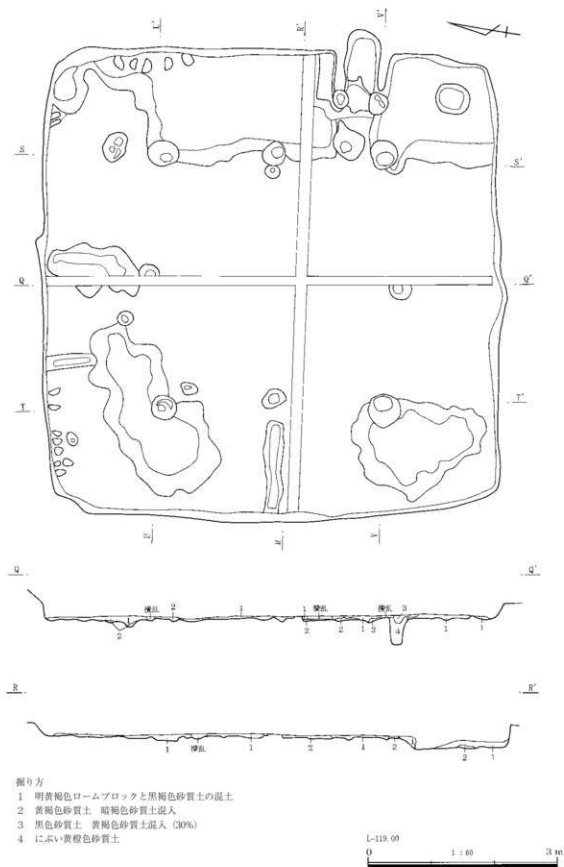
第18図 6号住居跡平・断面



第19図 6号住居跡断面

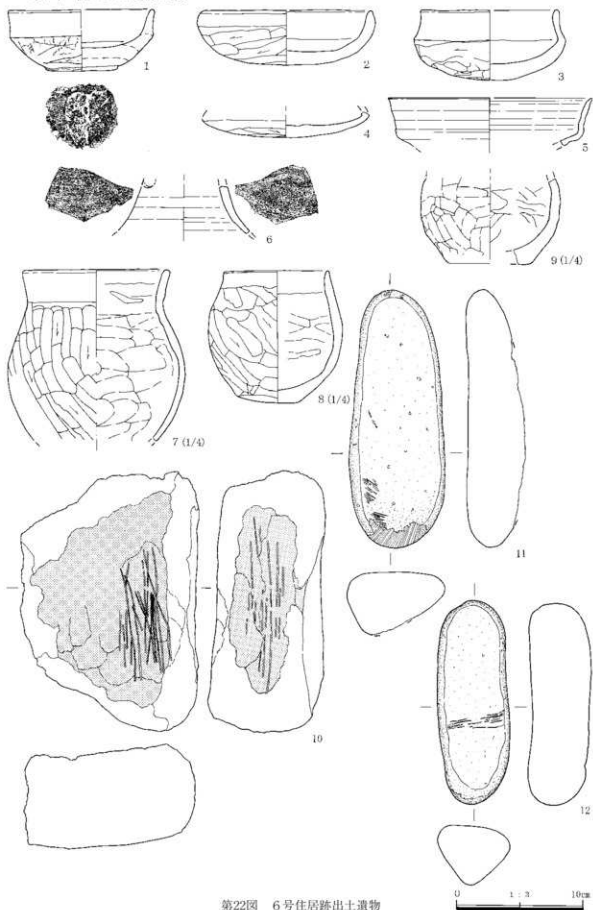


第20図 6号住居跡カマド平・断面

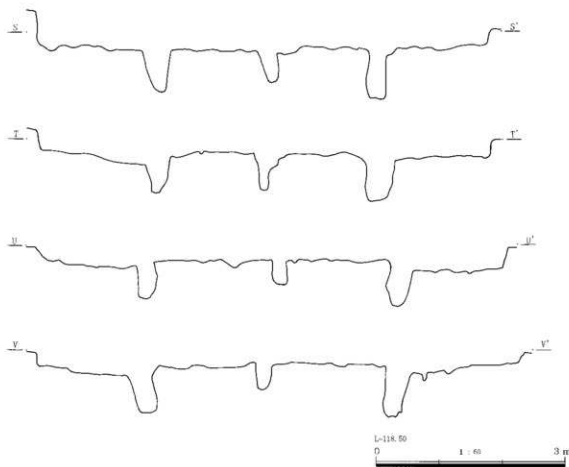


第21図 6号住居跡掘り方平・断面

第4章 検出された遺構と遺物



第22図 6号住居跡出土遺物



第23図 6号住居跡断面

遺物と出土状況 カマドの周囲は、原位置である。組成としては、甕、小型甕、杯、須恵器高杯がある。土器とは別に、P1とP4までをまたぐように炭化材が検出された。長さ約4m、最大幅20cmである。状態は悪いがP3の北にもある。二つは板のようでもあるが、平行しており、桁か棟木とみられる。

所見 時期は、6世紀末から7世紀前半である。

7号住居跡 (第24～27図 PL. 7・40)

位置 2区 28AB-5・6 **重複関係** なし

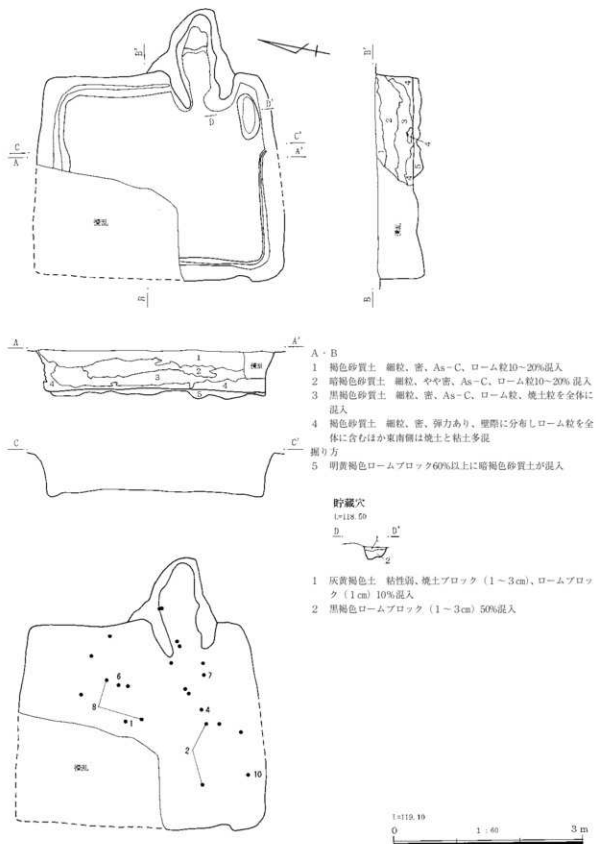
形状 推定方形、全体の四分の一に相当する北西隅が攪乱されている。

規模 縦3.30m 横3.65m、壁高54cm **面積** 12.05㎡ **主軸方向** N81° E

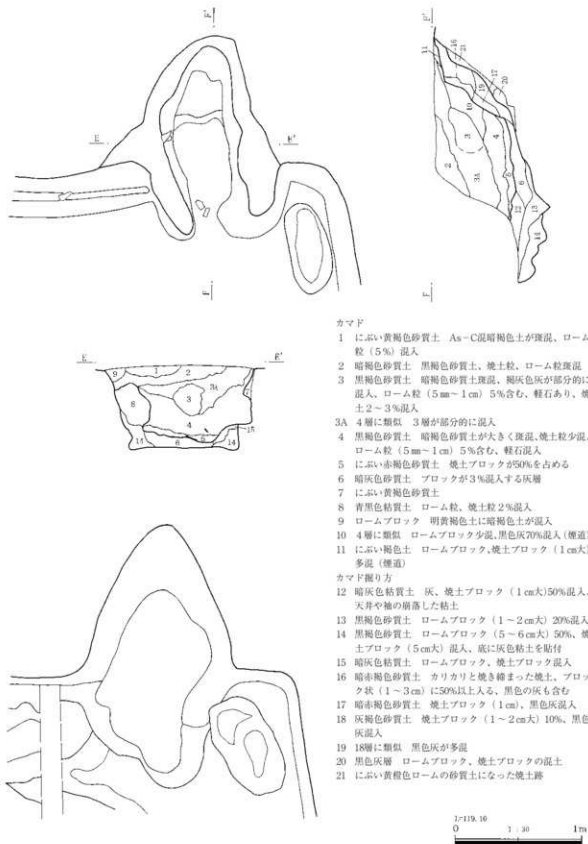
覆土 1～4層に分けた。As-Cが混入する暗褐色砂質土や黒褐色砂質土で自然埋没。3号や5号住居跡で見られたロームブロックの混入が少ない。遺物は床面に近い4層に多い。

カマド 東壁の中央より南に構築されている。全長150cm、焚口の幅は45cm、並置2穴式である。天井部は既に崩落していたが、袖から煙道にかけての右側が良く残っていた。燃焼部は、壁外に矩形に掘り込み粘土を貼って作られている。袖も壁際のロームを高さ10cmほど掘り残した上に、シルト質の粘土を貼付している。掘り方でも袖穴と思われるものは検出されていない。残された粘土の厚さ、壁外への掘り込みの深さから見

第4章 検出された遺構と遺物



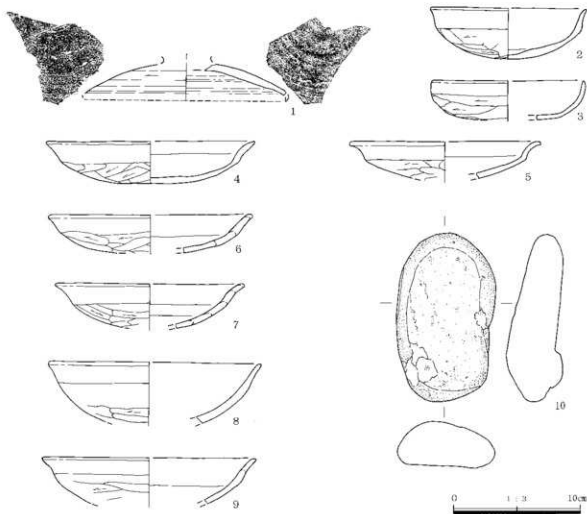
第24図 7号住居跡平・断面及び遺物分布



カマド

- 1 におい黄褐色砂質土 As-C混暗褐色土が埋混、ローム粒(5%)混入
 - 2 暗褐色砂質土 黒褐色砂質土、焼土粒、ローム粒少量混入
 - 3 黒褐色砂質土 暗褐色砂質土少量混入、褐色灰が部分的に混入、ローム粒(5mm~1cm)5%含む、軽石あり、焼土2~3%混入
 - 3A 4層に類似 3層が部分的に混入
 - 4 黒褐色砂質土 暗褐色砂質土が大きく混入、焼土粒少量、ローム粒(5mm~1cm)5%含む、軽石混入
 - 5 におい赤褐色砂質土 焼土ブロックが50%を占める
 - 6 暗灰色砂質土 ブロックが3%混入する灰層
 - 7 におい黄褐色砂質土
 - 8 青黒色粘質土 ローム粒、焼土粒2%混入
 - 9 ロームブロック 明黄褐色土に暗褐色土が混入
 - 10 4層に類似 ロームブロック少量、黒色灰70%混入(煙道)
 - 11 におい褐色土 ロームブロック、焼土ブロック(1cm大)多混(煙道)
- カマド掘り方
- 12 暗灰色粘質土 灰、焼土ブロック(1cm大)50%混入、天井や柱の崩落した粘土
 - 13 黒褐色砂質土 ロームブロック(1~2cm大)20%混入
 - 14 黒褐色砂質土 ロームブロック(5~6cm大)50%、焼土ブロック(5cm大)混入、底に灰色粘土を貼付
 - 15 暗灰色粘質土 ロームブロック、焼土ブロック混入
 - 16 暗赤褐色砂質土 カリカリと焼き締まった焼土、ブロック状(1~3cm)に50%以上入る、黒色の灰も含む
 - 17 暗赤褐色砂質土 焼土ブロック(1cm)、黒色灰混入
 - 18 灰褐色砂質土 焼土ブロック(1~2cm大)10%、黒色灰混入
 - 19 18層に類似 黒色灰が多混
 - 20 黒色灰層 ロームブロック、焼土ブロックの混入
 - 21 におい黄褐色ロームの砂質土になった焼土跡

第25図 7号住居跡カマド平・断面



第26図 7号住居跡出土遺物

て本来袖石を持たないのだろう。煙道の残された焼土層は、15・16層と20層の2枚があり1回かそれ以上の造り替えをしていることがわかる。

柱穴 なし、掘り方においても検出することはできなかった。

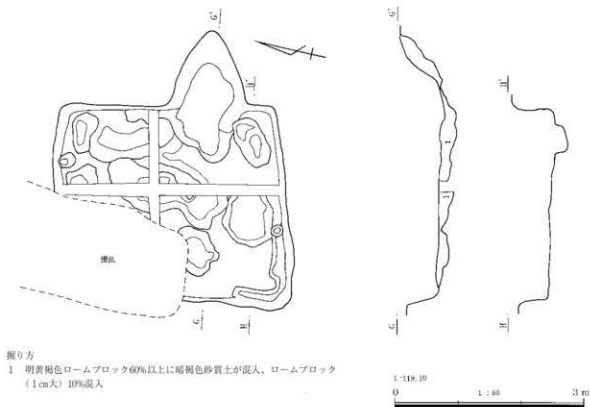
周溝 南東隅を除いて全周している。床面では、北壁から東壁のうちカマド前まで、西と南は一部だけで検出した。その他は掘り方で検出した。幅は10cm前後で、西と南は掘りすぎである。

貯蔵穴 南東隅、長径74cm、短径35cm、深さ18~21cmである。掘り方を見ると、東西に2基重複しているために楕円形になっているのがわかる。

床面 ソフトロームの中位まで掘り込み、ロームを大量に含む暗褐色土で貼り床をしている。中央部は平坦で堅緻、西側の壁際全体が1~2cmほど高く、幅1m弱のベッド状となっている。

遺物と出土状況 甕、杯、蓋の組成があり、床面の近くに集中する。1の蓋は埋設時の混入である。

所見 時期は、8世紀前半である。



掘り方

- 1 明黄褐色ロームブロック60%以上に暗褐色砂質土が混入、ロームブロック
(1cm大)10%混入

第27図 7号住居跡掘り方平・断面

8号住居跡 (第28~32図 PL. 7・8・41・42)

位置 2区 27T-5・6 **重複関係** なし **形状** 方形、外周に幅1m前後の周堤帯がつく。

規模 縦3.12m 横3.30m、壁高62cm **面積** 10.29㎡ **主軸方向** N72°E

覆土 1~8層に分けた。As-C混入の黒褐色砂質土と暗褐色砂質土で自然埋没している。

カマド 東壁の中央からやや南に作られている。全長140cm、焚き口の幅35cmである。壁外には30cmほどしか張り出さず、燃烧部の大半は屋内にある。右袖に石を残す。石を芯にして、大量のシルト質粘土を貼付していたが流れ落ちている。石は、地山の粗粒輝石安山岩で、全体に赤みを帯びているが一部は光沢を帯びるほどに変色して、使用した時間の長さを感じさせる。 **柱穴** なし

周溝 全周している。幅10cm前後、床より1~3cm低く、帯状にくぼんだ状態である。

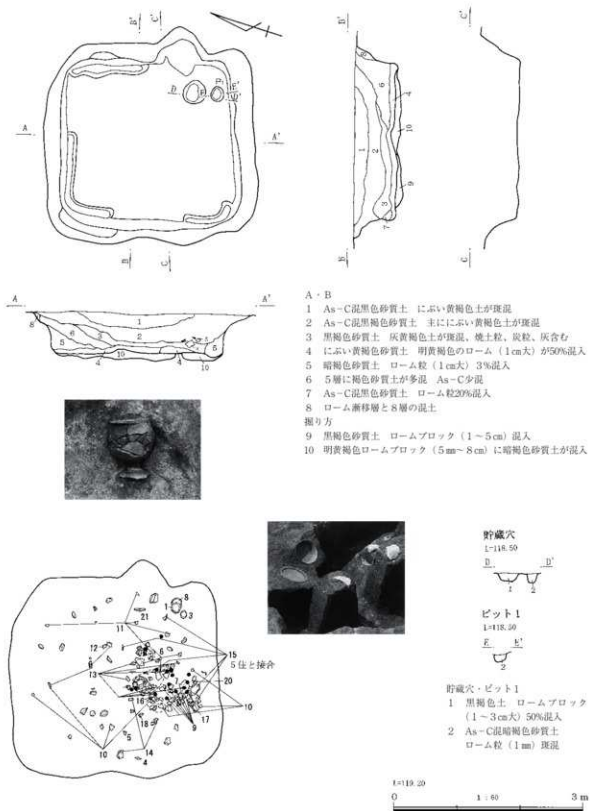
貯蔵穴 南東隅にある。長径38cm、短径35cm、深さ12cmである。南には、長径23cm、短径19cm、深さ12cmのひとまわり小型のピットがある。

床面 平坦で堅緻、ロームを大量に含む暗褐色土で貼り床をしている。掘り方は、周溝の部分を除いて全体が掘り下げられている。

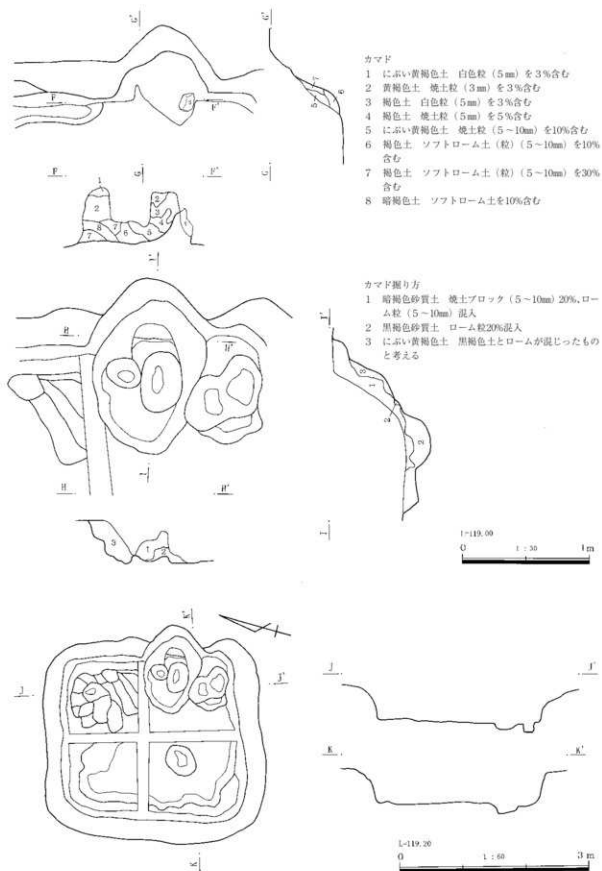
遺物と出土状況 大半は覆土の上半分、住居全体の南西にまとまって出土した。土層の傾斜からすると、住居が半埋没した頃に住居の西側から投棄されたものらしい。時期は、7世紀後半から8世紀前半である。住居にははっきりと伴うのは、8の台付甕と3の杯である。15の須恵器甕は5号住居から出土した破片と接合した。住居の肩が一様に崩れているのは、周堤帯の内側が崩落したものである。

所見 時期は、カマド脇の台付甕の特徴から9世紀前半である。遺物を見ると、7世紀後半、7世紀後半から8世紀前半、8世紀末から9世紀前半の3つの時期が混在する。

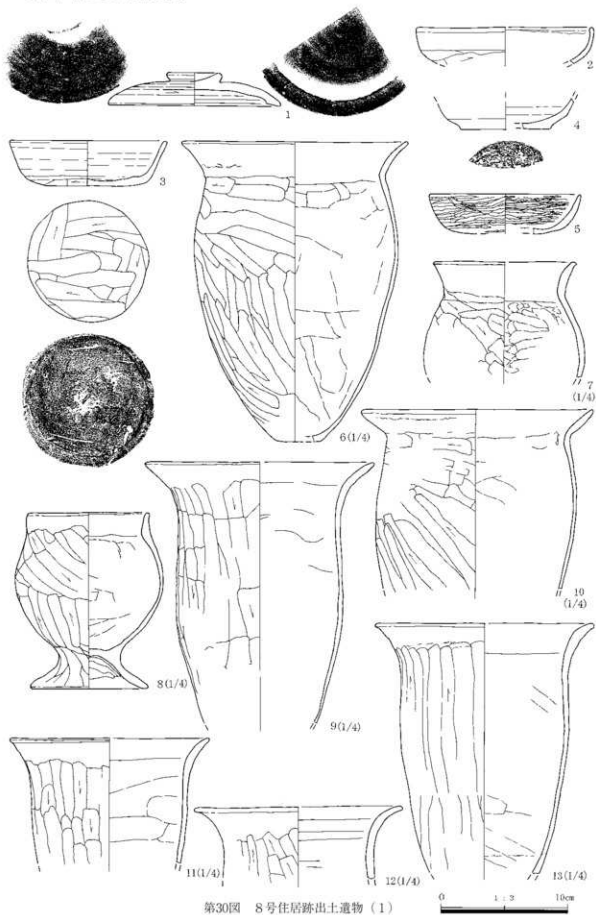
第4章 検出された遺構と遺物



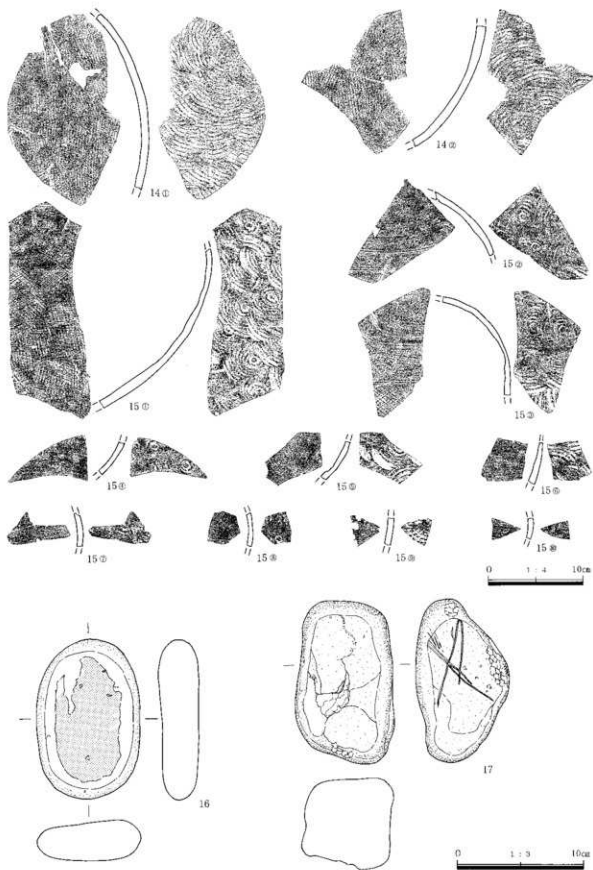
第28図 8号住居跡平・断面及び遺物分布



第29図 8号住居跡掘り方及びカマド平・断面

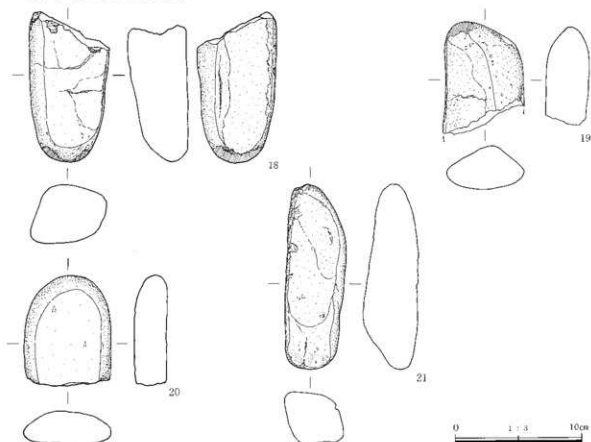


第30図 8号住居跡出土遺物(1)



第31图 8号住居跡出土遺物(2)

第4章 検出された遺構と遺物



第32図 8号住居跡出土遺物(3)

9号住居跡 (第33~36図 PL. 8・9・42)

位置 2区 27RS-5・6 重複関係 20号住居跡よりも新しい。

形状 推定方形、南東側が20号住居跡に重複し、完全に埋没後構築されている。北東側は市道敷にかり調査区外のため未確認である。

規模 縦3.50m、横4.30m、壁高52cm、東側がわずかに広がる。面積 15.05㎡ 主軸方向 N100° E

覆土 As-C 混入の黒褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土、暗褐色砂質土で自然埋没している。

カマド 20号住居跡の埋没土中にあり、半円形に掘り込んだ上に褐色の粘土を馬蹄形に貼付して作られている。全長110cm以上、焚き口の幅55cm、煙道を除いて屋内にある。天井部が残り、燃焼部には焼土が大量に残されていた。推定される広い焚き口の幅からすると2穴並置式である。

柱穴 なし、掘り方でも検出されていない。

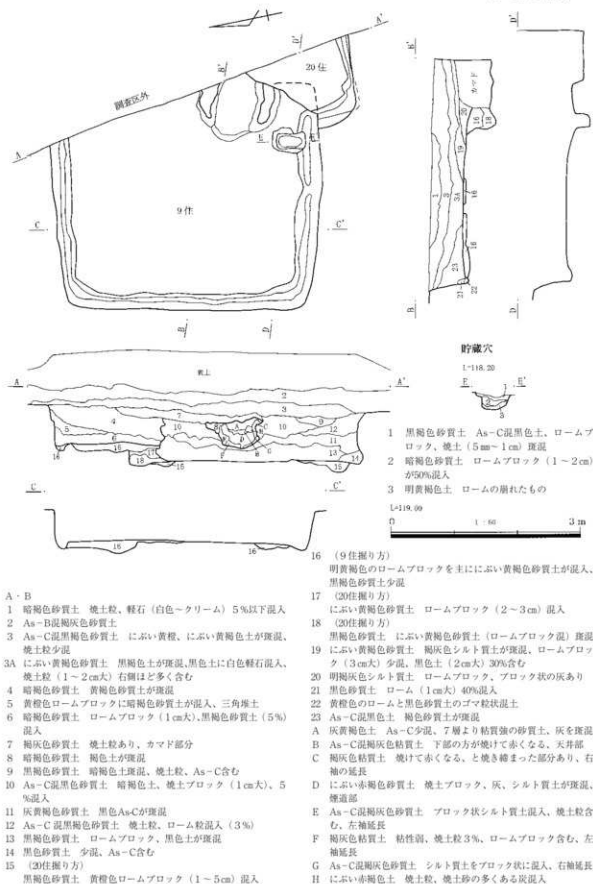
周溝 全周するとみられ、北、西、南の三辺で検出した。幅15~20cm、深さ6~10cmとほぼ一定している。

貯蔵穴 南東隅、長軸55cm、短軸37cmの長方形、深さ22cmである。

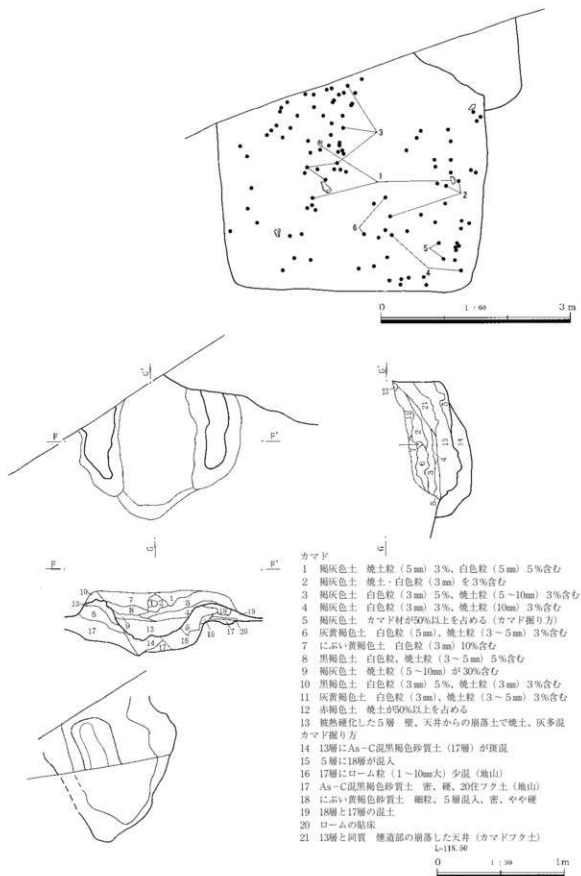
床面 掘り方は、壁際を帯状に掘り下げ、中央部が方形の島状に残る。帯の幅は1m以下、楕円形や円形の集合したもので円は1人、1回あたりの掘削をあらわす単位である。単位の中には、手の平大、鱗状の跡による掘削痕が連続している。隅は、角から住居の内側にむかって掘られている。辺の中央部分は、壁と平行に2列かそれ以上で跡を入れている。

遺物と出土状況 住居の全体で出土しているが、覆土の中位より上からのものが多い。

所見 20号住居跡と重複し、9号住居跡が新しい。時期は、8世紀後半である。

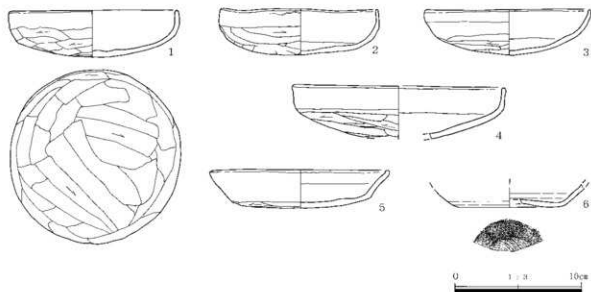


第33図 9号・20号住居跡平・断面

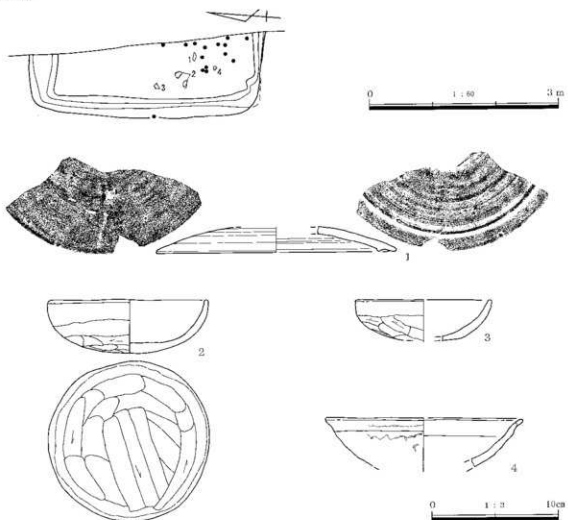


第34図 9号住居跡遺物分布及びカマド平・断面

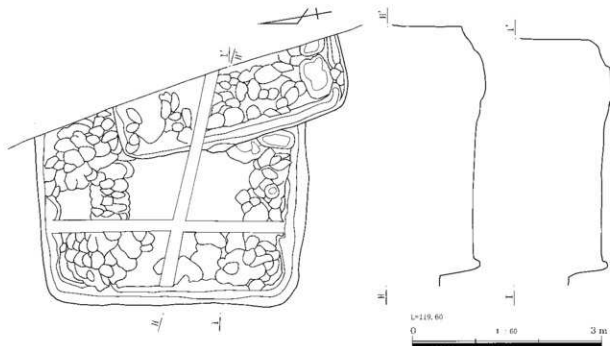
9号住居



20号住居



第35図 9号住居跡出土遺物及び20号住居跡遺物分布・出土遺物



第36図 9号・20号住居跡掘り方平・断面

20号住居跡 (第33・35・36図 PL. 8・15・47)

位置 2区 27R-5・6 **重複関係** 9号住居跡と重複し、9号よりも古い。

形状 推定方形、9号住居より小型で主軸もずれている。 **規模** 東西1.20m以上、南北3.60m、壁高52cm

面積 3.70㎡以上 **主軸方向** N88° E

覆土 9号住居跡と重複するうち、7～14層が相当する。AsCを混入する暗褐色砂質土と黒褐色砂質土などで自然埋没している。わずかな色調の差か、焼土の混入量で違いが見られる程度で均質である。9号住居跡を作る時には、完全に埋没している。 **カマド** 市道で未調査となった東壁に推定される。 **柱穴** なし **周溝** 全周する。幅16～24cm、深さ10cmである。 **貯蔵穴** 東壁側に推定される。

床面 平坦、やや堅緻である。掘り方は、検出した全域に跡がある。掘り方圓に現した円形のもので、大きさは20cm前後、深さも一定、鱗のように連続している。深さも全体に一定しており、土坑のようにはならない。また周溝部分だけは避けており、あらかじめ意識して掘り下げたものらしい。深い箇所は、暗色帯まで達している。9号住居跡との床面のレベル差は約20cmである。

遺物と出土状況 中ボリ2袋と少なく、しかも小破片が殆どである。1の蓋と4の杯はレベルからみて、重複する9号住居に伴う可能性が高い。

所見 時期は、9号住居跡の8世紀後半以前である。

10号住居跡 (第37~40図 PL.9・42・43)

位置 2区、27ST-6・7 **重複関係** 5号掘立柱建物跡と重複、新旧関係は不明である。

形状 方形、8号住居跡と同じく、住居まわりの路肩が斜めになっている。周堤帯と壁の間の棚のような部分と推定した。四辺全体に一樣に見られること、2層や3層が均一に覆っていることから埋没途中の崩落ではなく人為的な造作と判断した。カマドの遺存状態から見ても、当時の地表面に近く妥当と思われる。北東部が5号掘立柱建物跡と重複している。

規模 縦3.20m、横4.40m、壁高82cm **面積** 14.08㎡ **主軸方向** N86°E

覆土 1~7層に分けた。主にAs-Cを混入する黒褐色砂質土で自然埋没。下位の6層、壁際の7層で混入するロームが多くなり、一部では斑点状になっていた。

カマド 東壁の中央よりやや南に作られている。遺存状態は良好で、天井部の大半と煙道が残されていた。全長160cm、焚き口の幅30cmである。掘り方は矩形で、内側に対で石を組み、それを芯にして厚く粘土を貼付して作られている。焚き口で出土した甕は、鳥居状に架けたものが横滑りになったのか、それとも二重に重ねてカマドに架けてあったものだろうか。 **柱穴** なし

周溝 全周する。幅15~22cm、深さ8~10cm、掘りすぎもあって一定しない。

貯蔵穴 南東隅にある。長径52cm、短径36cm、深さ32cmの円形である。掘り方では、まわりに小さなピットが3基検出されている。蓋のための造作か、棚のようなものを想定して調査したが確定できなかった。

床面 ロームを大量に含む黒褐色土で貼り床をしている。平坦で一樣な硬さである。掘り方は、床面全体が掘り下げられている。深さは一定し、作業の単位なのか直径1m前後の半円形でのまとまりもみえる。掘り返すことに意義があったのだろう。南壁の中央では、梯子の据え方の穴と思われるピットもある。

遺物と出土状況 遺物は、カマド周辺の床からと住居の南東部覆土中位の3層に多い。7と8は、入れ子の状態にありカマドでの使用状態を良く示している。一方3層のものは、住居が半埋没した頃に南側から廃棄されたものであろう。遺物分布図にあるように南東部に偏りが見られる。その中でカマドの左側、壁の中段で長さが20cm、幅7cmの皮付き有芯炭化材が出土した。床からは30cm上にある。1点だけではあるが、壁際で崩落した垂木の一部と判断した。

所見 時期は、8世紀後半である。

11号住居跡 (第41図 PL.10・43)

位置 2区 27R-7 **重複関係** 7号掘立柱建物跡と重複、新旧関係は不明である。

形状 推定方形、2区の東にある市道敷に大半がかかり、南西隅のみを検出した。

規模 東西1.10m以上、南北2.70m以上、壁高45cm **面積** 1.48㎡以上 **主軸方向** N93°E

覆土 2層以下が覆土で、As-C混入の黒褐色砂質土、褐色砂質土で自然埋没している。北側に10号住居跡と同様な住居まわりの棚状のものがあるのがわかる。

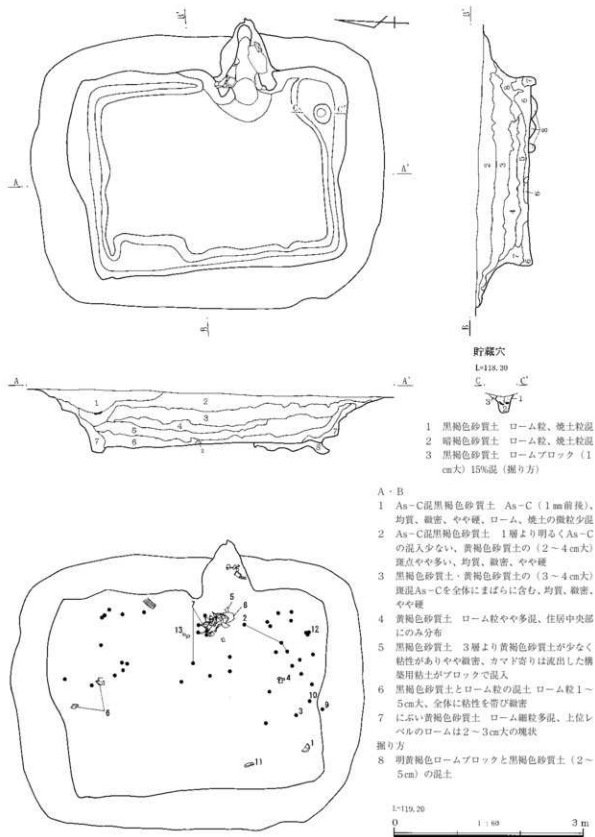
カマド 未確認 **柱穴** 未確認 **周溝** 西壁際のみめぐる。幅24~32cm、深さ10cm **貯蔵穴** 未確認

床面 平坦、堅緻、掘り方の調査はしていないが、5層の様子からすると厚い貼り床と思われる。

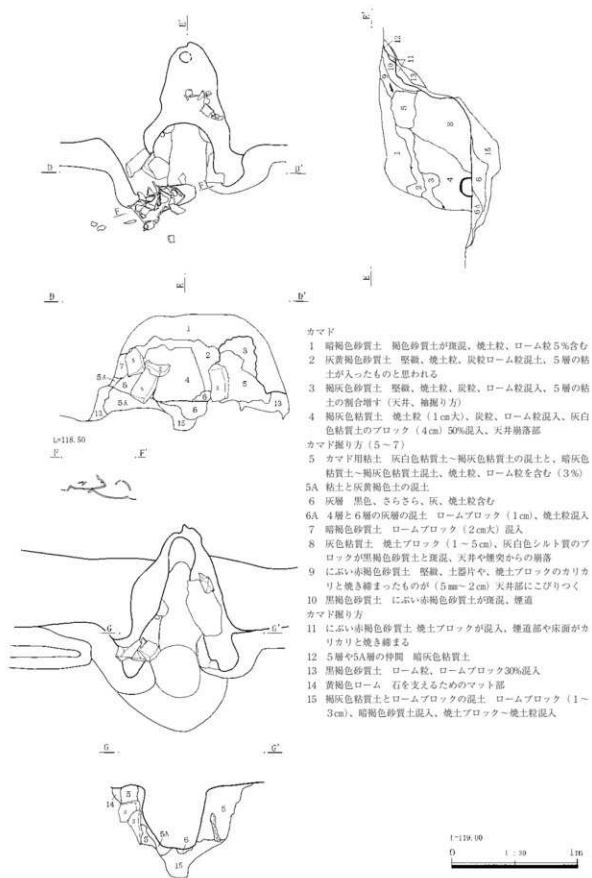
遺物と出土状況 覆土の上位で少量の土器が出土した。埋没時の混入と考えられ、床面では南西の隅で粗粒輝石安山岩の角礫が壁に立てかけるような状態で出土した。1の杯底部外面には刻書「×」がある。

所見 一部分だけで詳細を欠くが、隣接する9号住居跡や10号住居跡と近い規模、内容であろう。時期は、少量の遺物から9世紀前半と考えられる。

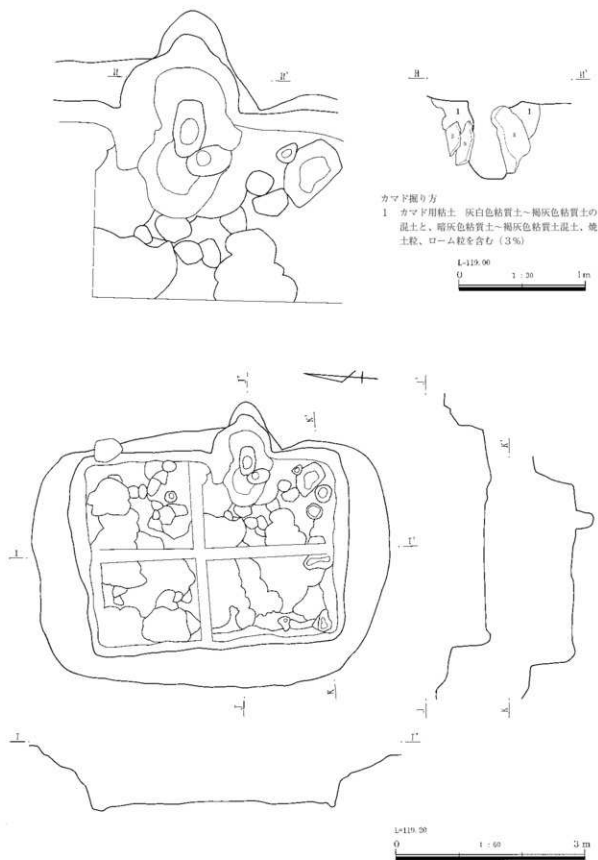
第4章 検出された遺構と遺物



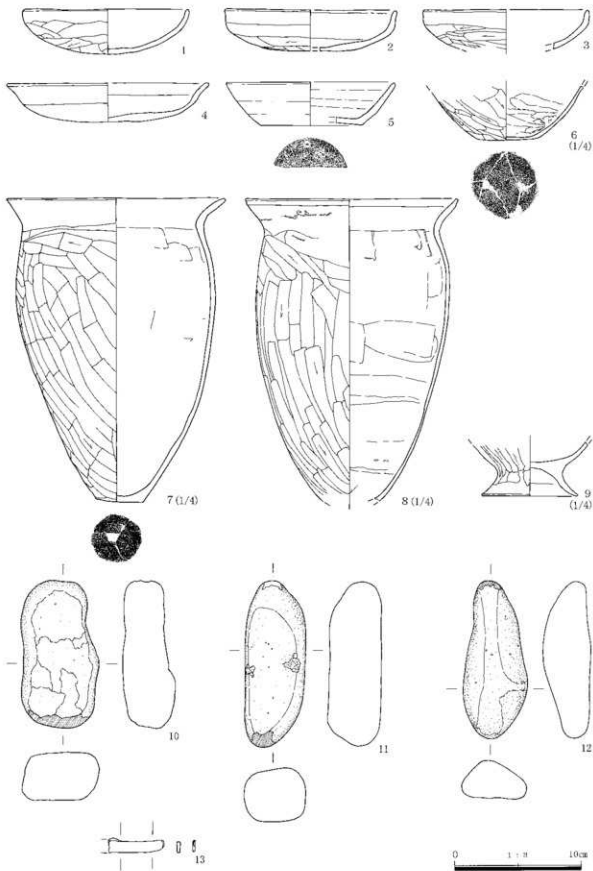
第37図 10号住居跡平・断面及び遺物分布



第38図 10号住居跡カマド平・断面

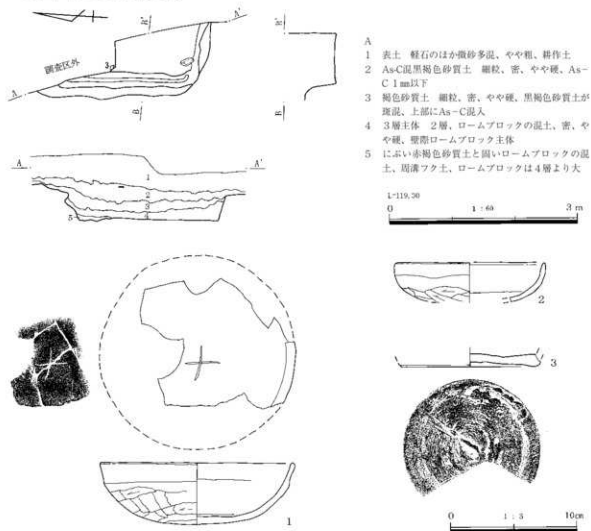


第39図 10号住居跡掘り方及びカマド平・断面



第40図 10号住居跡出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



第41図 11号住居跡平・断面及び出土遺物

12号住居跡 (第42・43図 PL.10・43)

位置 2区 27・28TA-8・9 **重複関係** なし **形状** 方形、隅が丸くなっている。西辺寄りが帯状に攪乱されている。 **規模** 東西2.25m、南北2.90m、壁高18cm **面積** 6.52㎡ **主軸方向** N100° E

覆土 1～3層に分けた。As-Cを混入する暗褐色砂質土で自然埋没する。

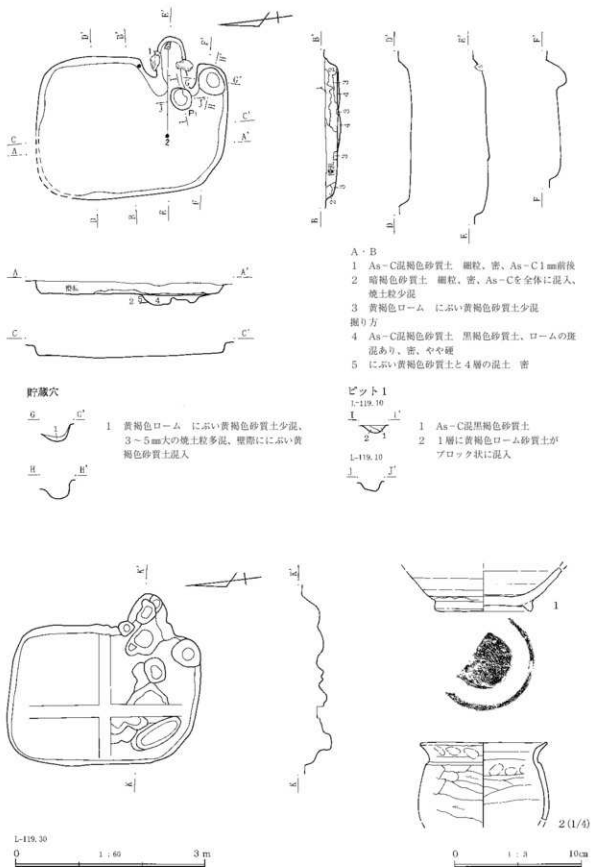
カマド 東壁の南寄りに作られている。全長98cm、焚き口の幅35cm、深さ18cmである。燃焼部は壁外にあり、両方の袖口と支脚の石が残されていた。袖は対に置かれ、長さが29cmに調整されていた。掘え穴を持たず、燃焼部の高さを示している。支脚は、長さ25cmの角柱状、床に10cm近く埋め込まれていた。

柱穴 なし **周溝** なし **貯蔵穴** 南東隅、北側と西側が掘り残したロームの土手で仕切られた中にある。長径45cm、短径38cm、深さ12cmである。北側は、カマドの右袖を兼ねて地山のロームが土手状に掘り残されている。覆土は、住居の3層と同じで、その中には直径3～5mm大の焼土粒が多い。

床面 全体に硬化した印象を受けるが、硬化面はない。掘り方は、住居の南半分だけに土坑状のものがあげられている。貯蔵穴に近い黒褐色砂質土主体のローム混土で、炭と焼土をわずかに含む。

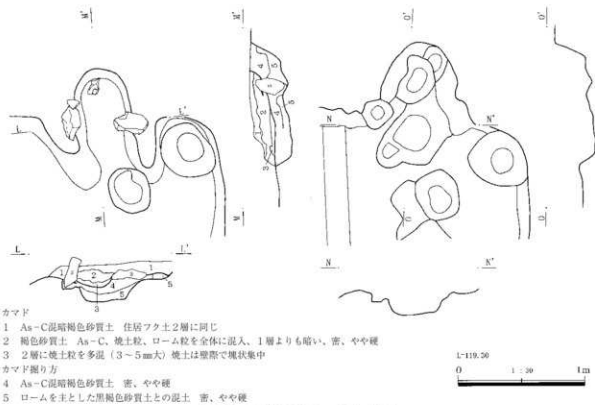
遺物と出土状況 杯、碗、甕の破片が少量出土した。

所見 最も小型の住居である。カマドの位置や構造に特徴が現れている。時期は、9世紀後半である。



第42図 12号住居跡及び掘り方平・断面、出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



第43図 12号住居跡カマド平・断面

13号住居跡（第44～47図 PL.10・11・43・44）

位置 2区 27・28TA-9・10 **重複関係** なし **形状** 方形、南西隅が西に向かって張り出している。2軒重複も想定して作業したが、周溝が壁に沿ってめぐることや掘り方でも差異のないことから1軒単独とした。**規模** 東西3.70m、南北5.15m、壁高34cm、張り出しは間口2.20m、奥行き0.85mである。

面積 19.05㎡ **主軸方向** N83°E **覆土** 主にAs-Cを混入する暗褐色砂質土、黒褐色砂質土で埋没。

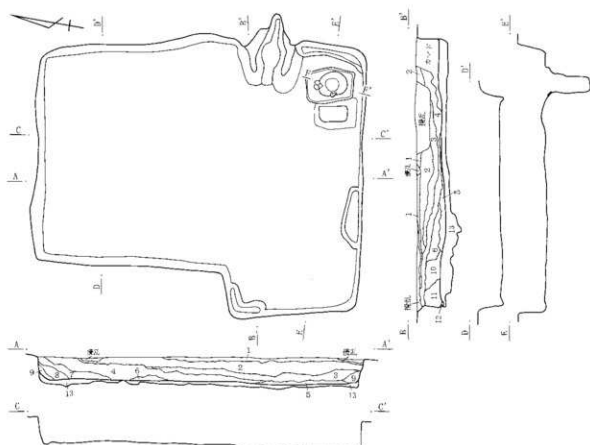
カマド 東壁の南寄りに作られている。壁から屋外に向かって矩形に掘り込み、燃燒部を作る。燃燒部の中心は壁の線上にあり、粘土を芯にした袖がつく。全長120cm、焚き口の幅は40cmである。貼付した粘土の量が少なく、ロームの壁が直に焼けていた。左壁は直立しているが、右壁が内傾していた。間口が狭く、1穴式か。支脚はない。**柱穴** なし **周溝** ほほは全周している。床面では部分的であったが、掘り方では幅20cm前後、深さ10cm前後のしっかりとしたものが出されている。南壁の中央だけが途切れている。

貯蔵穴 南東隅の仕切られた中にある。仕切りの北側はカマドの右袖を利用し、西側は縦67cm、横45cm、高さ5cmの粘土の帯である。さらに仕切りの中は、全体が10cm前後低く作られている。この段差の分が臺にあたるのであろう。長径45cm、短径40cm、深さ60cmである。

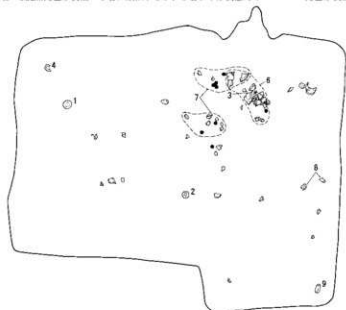
床面 ロームを大量に含む暗褐色土で貼り床をしている。平坦ながら、南半分が1～3cmわずかに低い。全体に堅硬ではあるが硬化面は見られない。掘り方は、掘り込みが全体に浅く、土坑状のものは少ない。北東部は、鋤跡が騎状に連続していた。その中で張り出し部分だけが深い。

遺物と出土状況 床面での出土が多い。杯、カマド前の甕は原位置である。4の杯内面には、×の刻書がある。5の杯底内面には、判読不可の墨書がある。

所見 時期は、8世紀前半である。



- | | |
|--|--|
| 1 褐色砂質土 堅緻、As-C混入、2層が鉄により赤味がある | 8 暗褐色砂質土 |
| 2 As-C混暗褐色砂質土 ローム(1cm)少混 | 9 にぶい黄褐色砂質土 黒褐色土、褐色土混 |
| 3 As-C混黒褐色砂質土 ローム(1cm)少混、暗褐色土混 | 10 As-C混黒褐色砂質土 にぶい黄褐色砂質土が混 |
| 4 にぶい黄褐色砂質土 褐色砂質土混、C軽石混入、ところどころ黒褐色土がブロック状に混入 | 11 黒褐色砂質土 ロームブロック(1cm大)少混 |
| 5 にぶい黄褐色砂質土 褐色砂質土混、13住床土 | 12 黄褐色ローム 黒褐色土がブロック状に混入 |
| 6 As-C混黒褐色砂質土 褐色砂質土混 | 13 明黄褐色ロームブロック(1~5cm)大きいものは10cm大に暗褐色砂質土が混入 |
| 7 As-C混黒褐色砂質土 6層に類似するが、6層より砂質感あり | |



貯蔵穴

L=118.90

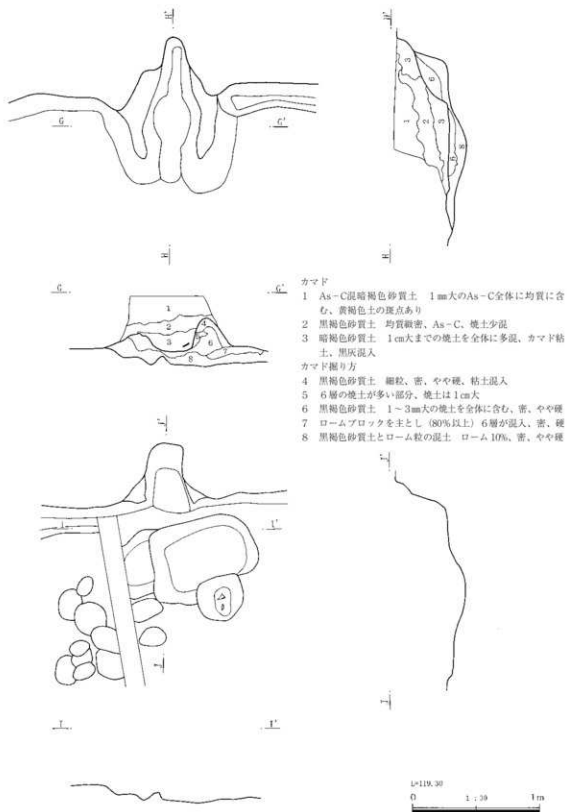


- | |
|-----------------------------------|
| 1 As-C混黒褐色砂質土 |
| 2 褐色砂質土 |
| 3 黒褐色砂質土 全体にしまり弱い、1層とロームがブロック状に混入 |

L=115.40

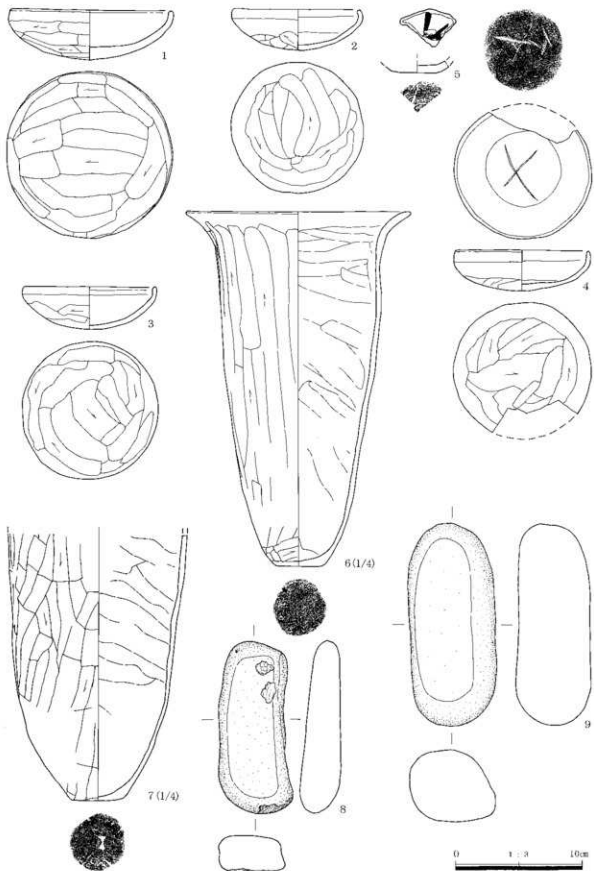
0 1 : 60 3 m

第44図 13号住居跡平・断面及び遺物分布

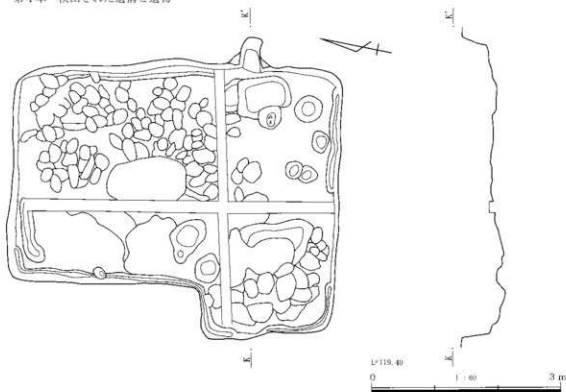


第45図 13号住居跡カマド平・断面

2 整穴住居跡



第46圖 13号住居跡出土遺物



第47図 13号住居跡掘り方平・断面

14号住居跡 (第48・49・51図 PL.11・12)

位置 2区 27ST-10 **重複関係** 24号住居跡と重複し、14号が古い。西壁と北壁を使い、24号に拡張、建て替えたものである。調査の時点では、14号が新しいと見なして遺物の取り上げをした。遺物は報告時点で14号から24号に変更したが、取り上げ時の注記は変えていない。**形状** 方形 **規模** 東西3.70m、南北4.10m、壁高32cm **面積** 15.17㎡ **主軸方向** N99°E

覆土 暗褐色と褐色の砂質土で埋没している。焼土やカマドに使われた粘土、ロームが混入している。

カマド 東壁の中央に作られている。袖を壁際に持ち、燃焼部から煙道は壁を掘り込んで作られている。全長96cm、焚き口の幅48cmである。袖石は抜かれ、天井部も崩落していたが煙道には煙突がわりの堯が据えられていた。掘り方では、2基の掘り込みが検出されている。右側から左側へと造り替えをしている。

柱穴 なし **周溝** 掘り方でも検出できなかった。 **貯蔵穴** 南東隅にある。長径70cm、短径60cmのややゆがんだ円形である。24号カマド構築のため埋められている。

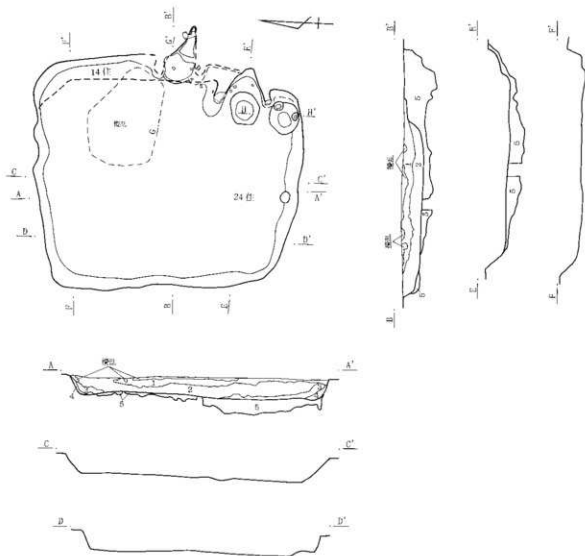
床面 24号住居跡の重複で、わずかにカマドの前に残るだけである。24号とはレベル差がない。ロームとにぶい黄褐色砂質土の斑混土で貼り床をしている。平坦で堅い。

遺物と出土状況 8の堯がカマドの煙道に使われている。

所見 時期は、カマドに使われた堯の特徴から見て、10世紀前半である。

24号住居跡 (第48・50・51・52図 PL.11・12・16・44・47)

位置 2区、27ST-10 **重複関係** 14号住居跡と重複し、24号が新しい。14号の西壁と北壁を使い拡張、建て替えたものである。**形状** 推定方形 **規模** 東西3.30m、南北4.20m、壁高32cm **面積** 13.86㎡ **主軸方向** N93°E **覆土** 1～4層に分けた。褐色と暗褐色の砂質土で埋没している。2層は、人為的な



- 1 褐色砂質土 緻密、均質、弾力あり。全体に1mm大ローム粒混入。中に1~2cm大まばら
- 2 1層と暗褐色砂質土の混混土 人為的攪拌か、1層同様1~10mm大ローム粒やや多混。焼土、カマド粘土も混入
- 3 1層に1cm大ローム粒が斑点状に混入 密、ややしまりあり
- 4 褐色砂質土 細粒、均質で弾力あり。南辺細周溝付近のみ分布
掘り方
- 5 ロームとにぶい黄褐色砂質土の混混土

24住との新田セクション

I=119.30



貯蔵穴

I=119.30



- 1 褐色砂質土 焼土粒、軽石混入
- 2 暗褐色砂質土 褐灰色土（粘土または灰）や焼土粒、ローム粒、炭粒が90%混混
- 3 黒褐色砂質土 炭粒、焼土粒混混（20%）
- 4 暗褐色砂質土 ローム、焼土、炭が50%混混
- 5 暗褐色砂質土 ローム粒、焼土粒、軽石が混混

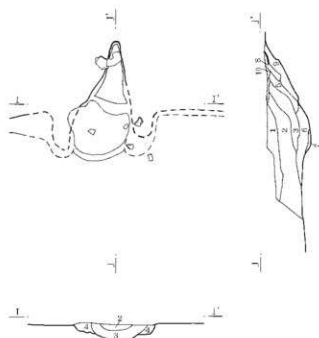
- 1 黒褐色砂質土 ロームブロック（2cm大）を含む暗褐色砂質土層を混混
- 2 暗褐色砂質土 焼土粒、炭粒、ロームブロック（1cm大）を混混

I=119.40

0 1.00 2.00

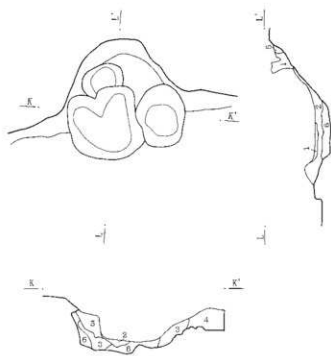
第48図 14号・24号住居跡平・断面

第4章 検出された遺構と遺物



カマド

- 1 As-C混暗褐色砂質土 褐灰色土、焼土粒、ローム粒、炭粒が30%混入
- 2 As-C混黒褐色砂質土 炭粒、焼土粒が混入(30%)
- 3 暗褐色砂質土 ローム、焼土、炭が50%混入
- 4 灰黄褐色砂質土 軽石混、焼土粒、炭粒含む、しまりあり
- 5 灰褐色砂質土 焼土ブロック(1cm大)、炭、灰、ロームが混入、焼土、炭、灰は層突個に、ロームは壁口側に多い
- 6 にぶい黄色砂質土になったローム 焼土粒、炭粒が5%混入
- 7 黒褐色砂質土 焼土粒が5%混入
- 8 明褐色のかりかりと焼き締まった焼土と灰の塊、壁突の天井側の焼土
- 9 褐灰色砂質土 炭粒、焼土粒が5%混入、煙道部
- 10 褐色砂質土 焼土粒、軽石25%混入

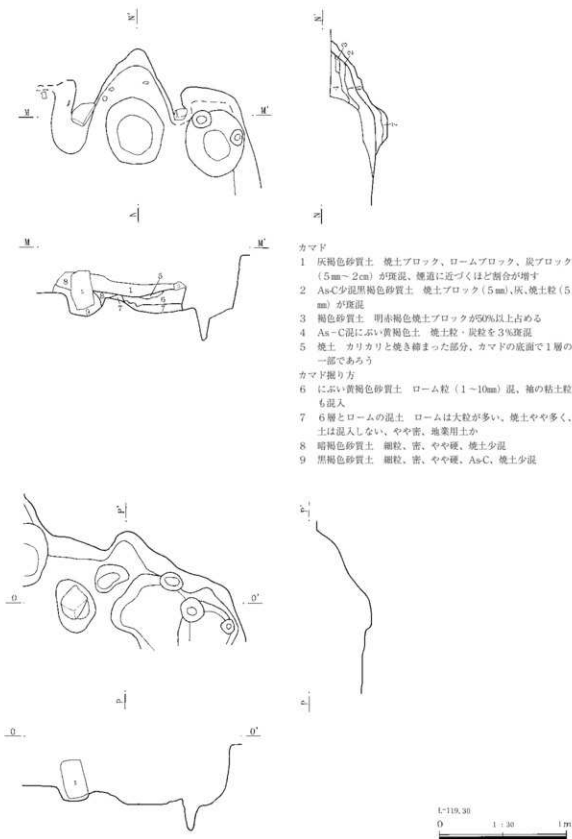


カマド掘り方

- 1 にぶい黄褐色砂質土
- 2 焼土 ソフトロームが被熱赤変、壁寄り混土化進む
- 3 褐灰色粘質土 ローム粒、焼土粒混入、右袖は粘土多く、左袖混土化進む
- 4 As-C混暗褐色砂質土 ローム、焼土の粒子、まばらに混入
- 5 As-C混にぶい黄褐色砂質土 黒褐色砂質土が小窪点で混入、下位に(3-5mm)焼土粒混入
- 6 As-C混にぶい黄褐色砂質土 5層よりもローム多混、カマド地盤土か、焼土混入なし、しまりが強くボソボソしている

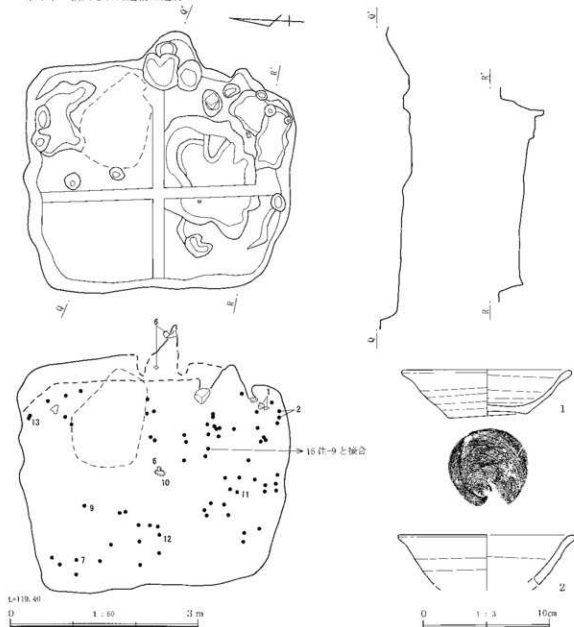


第49図 14号住居跡カマド平・断面



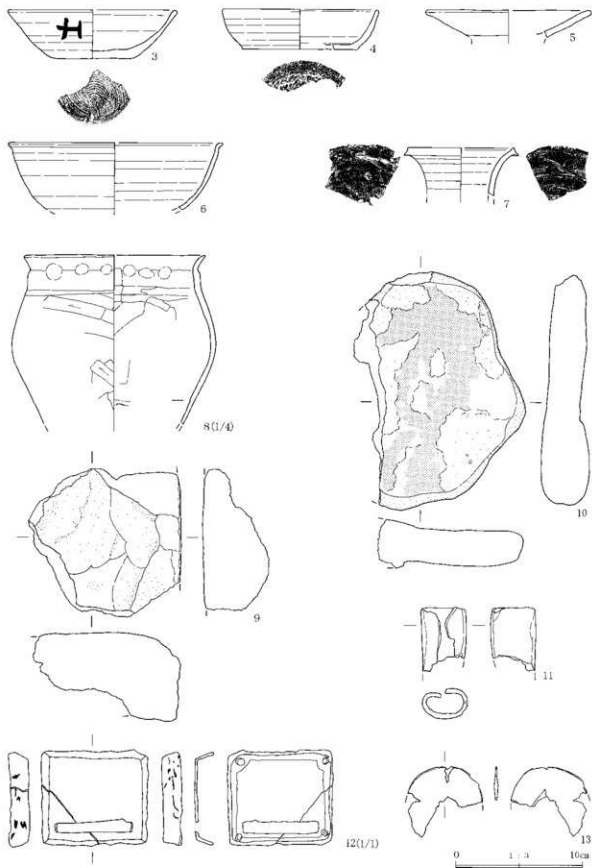
第50図 24号住居跡カマド平・断面

第4章 検出された遺構と遺物



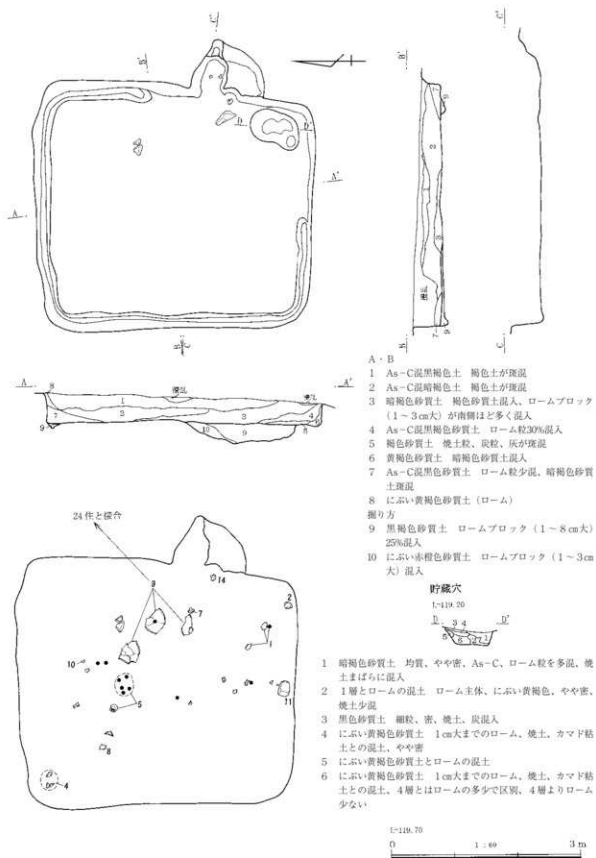
第51図 14号・24号住居跡掘り方平・断面、遺物分布及び24号住居跡出土遺物(1)

攪拌土なのかロームブロックやカマドからの焼土、粘土が多く混入している。3層、4層は壁際のみ分布する。**カマド** 東壁の南隅寄り、壁際に袖を持ち、燃焼部から煙道は壁外に作られている。14号住居跡の南東隅にあたり、貯蔵穴にしている。全長60cm、焚き口の幅60cm、袖口には、砂岩の面取りをした石を対に据えている。床にはカリカリに焼けた焼土を残していたが、支脚は据えた穴を残すのみで抜き取られていた。**柱穴** なし **周溝** なし **貯蔵穴** 南東隅にある。長径61cm、短径48cm、深さ22cmの円形である。**床面** 14号とはレベル差がない。ロームと暗褐色砂質土の混土で貼り床をしている。平坦で堅い。**遺物と出土状態** 1層と2層に多く、床直は少ない。南西は2層の上下に集中する。碗だけがよく甕や杯は少ない。碗は底部だけがよく、口縁が打ち欠かれている。15号住居跡で取り上げた須恵器の甕の破片がここでも出土している。巡方は、1層からの出土で埋没時の混入である。**所見** 時期は、10世紀前半である。

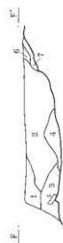
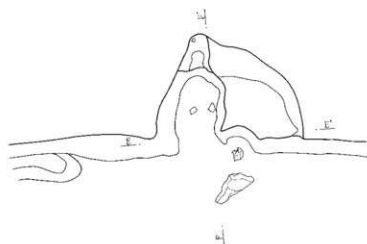


第52图 24号住居跡出土遺物(2)

第4章 検出された遺構と遺物

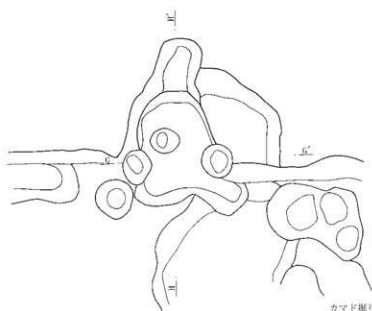


第53図 15号住居跡平・断面及び遺物分布



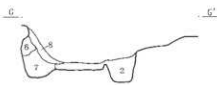
カマド

- 1 暗褐色砂質土 軽石含む
- 2 暗褐色砂質土 焼土粒少混、軽石含む
- 3 黒褐色砂質土
- 4 暗褐色砂質土 焼土粒、ローム粒、灰粒20%混入
- 5 にふい黄褐色砂質土 ロームブロック 5mm大混入
- 6 褐灰色砂質土 焼土ブロック 2cm大混入
- 7 褐灰色砂質土 煙道部分



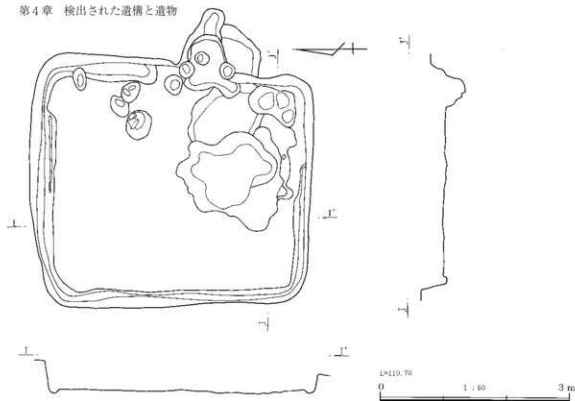
カマド掘り方

- 1 黒褐色砂質土 2層、焼土粒、灰混入、密、やや硬
- 2 にふい黄褐色砂質土 細粒、密、やや軟
- 3 灰黄褐色砂質土 焼土とロームの細粒混入、密、やや硬
- 4 2層と灰の互層 1cm弱の厚さで各2枚あり、密
- 5 灰 内部からのかき出し、主に黒灰
- 6 褐灰色粘質土 細粒、密、やや硬、袖と壁の地業土としてロームに直に貼付
- 7 明褐色砂質土 左袖石掘え穴の埋土、焼土とロームの細粒混入、しまり高くボンボソしている
- 8 焼土 貼付した2層混入の6層が焼けたもの



1:49.20
0 1:20 1m

第54図 15号住居跡カマド平・断面



第55図 15号住居跡掘り方平・断面

15号住居跡 (第53～57図 PL.12・13・44・45)

位置 2区 27・28TA-10・11 **重複関係** なし

形状 方形、カマドの右が一段低い。間口、奥行きともに60cm、棚と考えられる。

規模 東西4.10m、南北4.40m、壁高45cm **面積** 18.04㎡ **主軸方向** N93° E

覆土 1～8層に分けた。3層はロームを大量に含む人為的な埋没土である。南から流入している。

カマド 東壁の中央南寄りにある。壁際に袖石を立て、燃焼部全体が壁外にある。全長95cm、燃焼部の長さ60cm、焚き口の幅40cmである。並置2穴式と思われる。煙道、燃焼部ともに強く焼け、焚き口前には掻き出された焼土と灰が残されていた。袖石、支脚は、ともに抜き取られていた。住居の中央から北寄りに地床跡と思われるピットがある。焼土と灰で埋まり、上には石が置かれていた。 **柱穴** なし

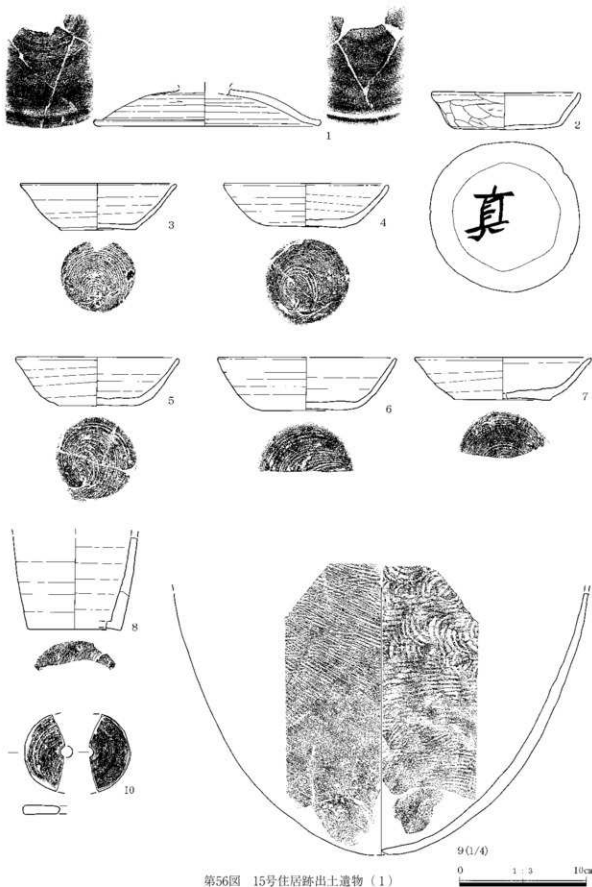
周溝 南東隅を除いて全周。幅20cm前後、深さ5cmである。北壁の掘り方では、2条分が検出されている。

貯蔵穴 南東隅にある。新旧2つのものが重複している。新期が長径60cm、短径40cm、深さ20cmの楕円形、古期が長径50cm以上、短径52cm、深さ24cmの円形である

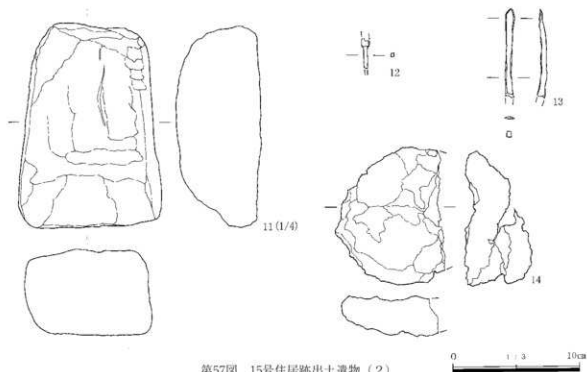
床面 ロームまで掘り込んでそのまま床面になっている。平坦、堅緻である。掘り方は、南半分だけである。土坑1基とカマド手前の浅い掘り込みがある。ロームと黒褐色砂質土の珪土で埋没している。

遺物と出土状況 遺物は2層に多い。半分ほど埋没した頃に廃棄されたものと思われる。9の須恵器の大甕もこのうちのひとつで、隣接の14号住居跡をはじめとして複数の住居に投棄されている。割れ口が研磨しており、破損した後、下胴部だけを利用して広口の椀のように転用されている。鉄滓は、本遺跡最大の椀形滓である。2点の鉄鏝の出土位置はわかっていないが、11の置き砥の存在からすると、本住居に伴うと考えられる。2の土師器杯は、底部の外面に「真」の墨書がある。

所見 時期は、9世紀後半である。貯蔵穴と周溝の様子から改築していると考えられる。



第56图 15号住居跡出土遺物(1)



第57図 15号住居跡出土遺物(2)

16号住居跡 (第58～61図 PL.13・14・45・46)

位置 2区 28AB-11・12 重複関係 なし

形状 推定方形、カマドをはさんで左右の壁に45cmの食い違いがある。棚を持つ住居と考えられる。北東と北西の隅が攪乱されている。

規模 東西3.70m、南北4.90m、壁高24cm 面積 18.13㎡ 主軸方向 N118° E

覆土 1～13層に分けた。As-Cを混入する暗褐色砂質土、黒褐色砂質土で自然埋没している。

カマド 東壁の中央に作られている。壁外に燃焼部を持ち、壁際に掘り残したロームを袖にする。全長130cm、焚き口の幅60cmの並置2穴式である。燃焼部は、内壁に貼付した粘土の量が少なく、ロームの壁が直に焼けていた。全体に勾配は少ないが、煙道と燃焼部との間には20cmの段差がある。

柱穴 床面では検出されなかったが、掘り方で円筒形のビット3本が南北の中軸線上で検出されている。直径は30cm前後と一定し、深さは30～45cmと周囲のビットや土坑などに比べて深く柱穴の可能性がある。

周溝 北壁を中心にコの字状にめぐる。幅20cm前後、深さ4～7cmである。

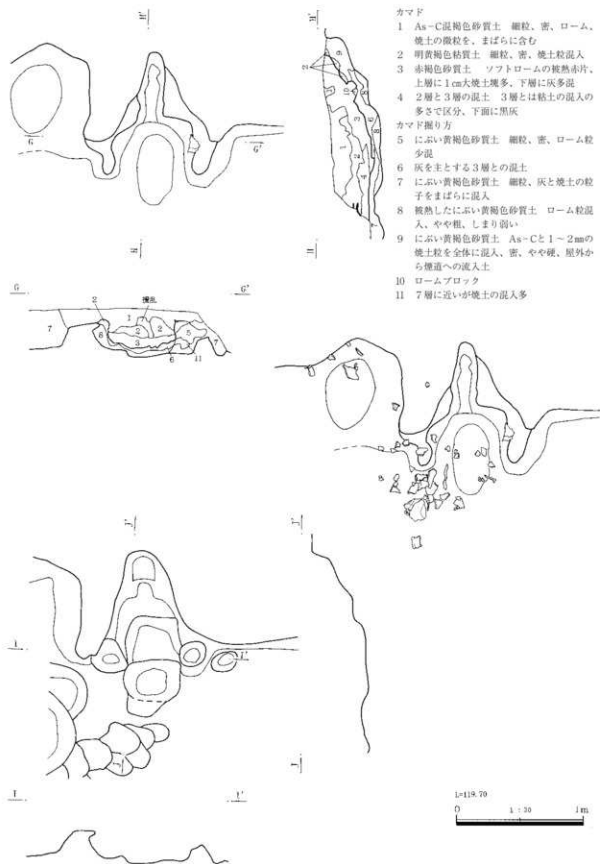
貯蔵穴 南東隅の壁際にある。長径55cm、短径40cm、床からの深さが62cmである。壁際はやや斜めにえぐられてムロ状になっている。中からは杯2点が重なって出土した。

床面 掘り方は、住居全体にある。円形や楕円形をした形状が整ったものと、浅くて不定形のものがある。中には、底面に薄い膜のように粘土を貼付したものや、カマド用らしい粘土塊が詰め込まれたものがある。

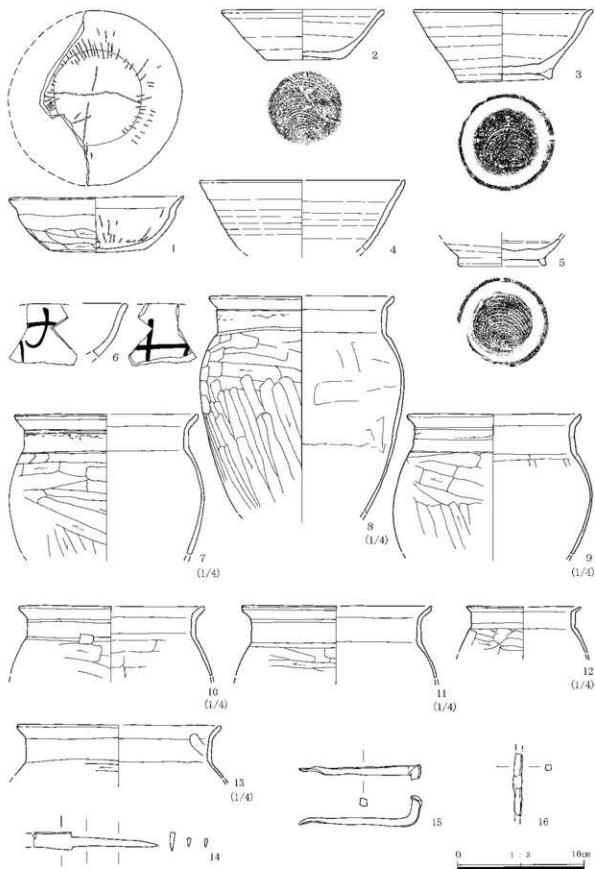
遺物と出土状況 カマド内から周辺にかけて比較的多くの遺物が残されていた。カマドの前にある7～10の甕は、架けてあったものが崩落したものであろう。これらに混じって、14の刀子、15の鉤、16鉄鏝(長頸鏝)が出土している。6の墨書は、覆土中で位置は特定できない。そのほか炭化したモモの果核1点が、西壁際の中央から出土した。また、カマドの右側、棚と推定した所からは出土した遺物はない。

所見 時期は、9世紀前半である。

第4章 検出された遺構と遺物

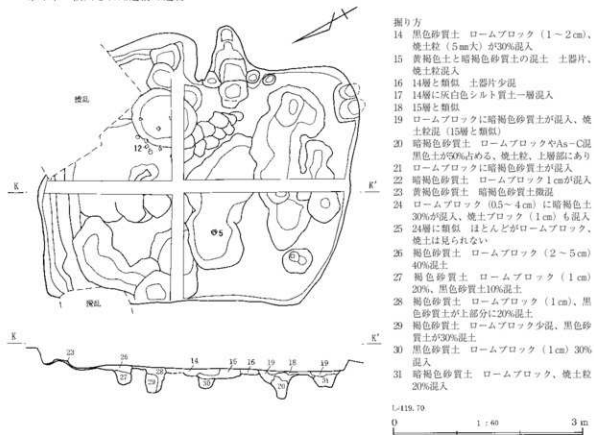


第59図 16号住居跡カマド平・断面



第60図 16号住居跡出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



第61図 16号住居跡掘り方平・断面

17号住居跡 (第62~64図 PL.14・46)

位置 2区 28BC-10・11 **重複関係** なし **形状** 方形、プランは、調査当初主軸を誤り掘り方で確定をした。しかし、攪乱もあって南辺については、大きく弧を描いているように、さらに広がる可能性がある。

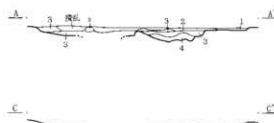
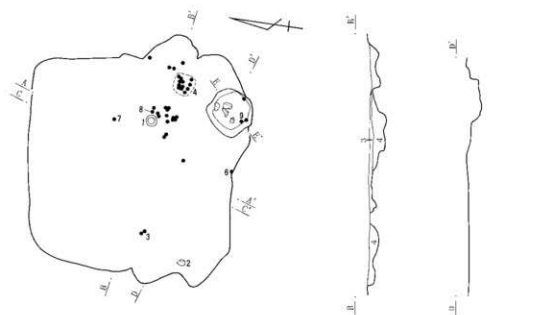
規模 東西3.30m、南北3.20m、壁高8cm **面積** 10.56㎡ **主軸方向** N84° E

覆土 1~4層に分けた。検出時、既に床面がなかば露出していた。住居全体を覆うのは、ロームを大量に含んだにぶい黄褐色砂質土である。ロームのほかにも焼土、炭、粘土の混入が多い。

カマド 東壁の中央に作られている。住居全体が削平されていたこともあって、燃焼部の掘り方だけを検出した。壁の位置に支脚用の穴があり、燃焼部と煙道とが段差を持つ13号住居と同じタイプであろう。全長122cm、推定される焚き口の幅40cmで1穴式と思われる。袖には、砂岩の面取りした切石が使われている。

柱穴 なし **周溝** 西壁と南壁の一部にめぐる。しかし、途切れがちである。幅が10~15cm、深さは3~7cmである。 **貯蔵穴** 南東隅、壁に接している。唯一、遺存状態が良好な遺構である。長軸70cm、短軸68cm、深さ15cmの隅丸方形である。西側から北側にかけて粘土質の土がL字形の帯でめぐっていた。床面との間に数センチの段差を作り、その段差を利用して蓋をするための縁取りと思われる。中からは、割れたカマドの袖石や粘土塊、焼土が出土した。これを見ると、カマドは改築されたのであろうか。石は割られていて、粘土も拳大の塊である。単なる流れ込みではなく、始末したというような印象である。

床面 平坦、やや堅緻である。掘り方は、全体が掘られているが北東部が大きく攪乱されていた。その中で傾向として四隅に不整形のもの、中央部に円形をした土坑状のものがあいている。西壁寄りのひとつは整った円形で、遺物とともに粘土や焼土が出土しており改築したカマドの残土を始末した跡でもあろう。



- A・B
- 1 明黄褐色土 ハードローム土が50%以上を占める
 - 2 にふい黄褐色土 白色粒(3-5mm)が10%、焼土粒(5mm)を3%含む
 - 3 黒褐色土 白色粒(5mm)を10%含む
 - 4 にふい黄褐色砂質土 弾力のある細粒土、1cmまでのローム粒少混、密、やや硬

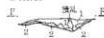
貯蔵穴

I-119.20

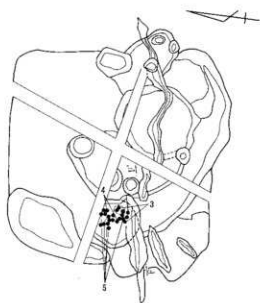


- 1 黒褐色砂質土 As-C少混、密、炭混入
- 2 暗褐色砂質土 As-C、焼土、ローム粒を全体に含む
- 3 焼土ブロック
- 4 2層とロームブロックの混土(5mm大)「焼土多混、炭含む

I-119.20

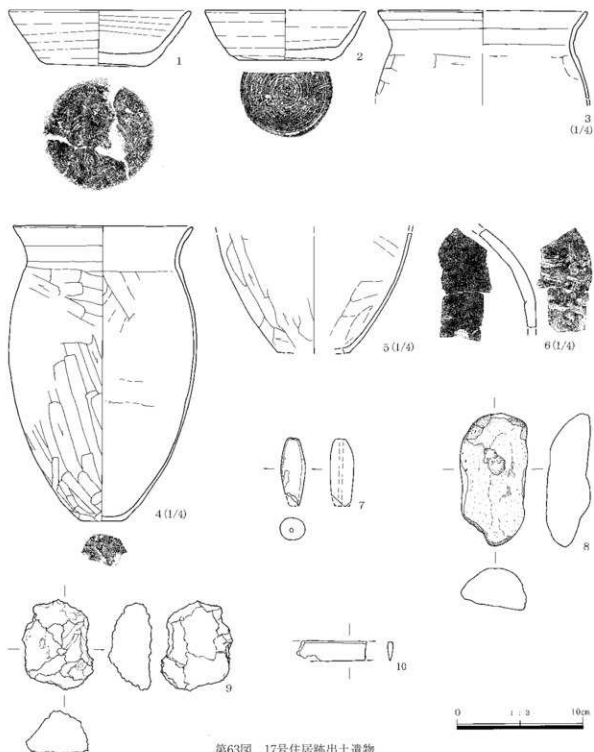


- 1 As-C混褐色砂質土 密、硬
- 2 黄褐色砂質土 ローム漸移層様の細粒土、やや密



第62図 17号住居跡及び掘り方平・断面

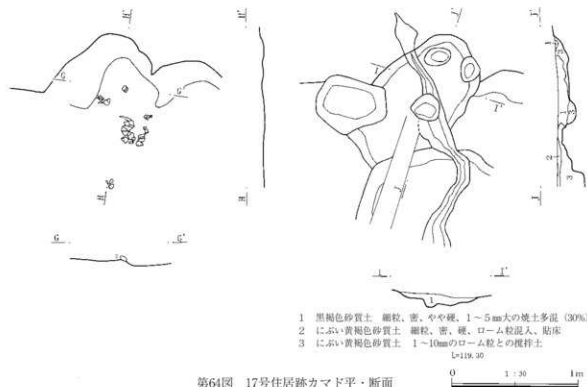
第4章 検出された遺構と遺物



第63図 17号住居跡出土遺物

遺物と出土状況 カマド前、貯蔵穴内、床下の土坑と分散して出土した。4の甕は、カマド内と床下の土坑とで接合している。7の土錘は、本遺跡唯一の出土例である。9の軽石は、両側面のさざみから錘とみたが、手持ちの荒砥の可能性もある。10の刀子は、覆土から出土位置は不明である。

所見 時期は、9世紀前半である。掘り方に、弘仁九年(818)地震による地割れがある。南壁に平行するようにカマドの中央部から西へ抜けているものと、それに平行する短い2条とがある。地割れは、最大で幅30cm、深さは床面から34cmである。この延長線上には、32号住居跡に重複するものがある。



第64図 17号住居跡カマド平・断面

18号住居跡 (第65～68図 PL.14・15・46・47)

位置 2区 28BC-9 重複関係 3号溝に重複している。18号住居跡が新しい。

形状 方形、四隅が丸く、南辺が弧状である。 **規模** 東西3.20m、南北3.60m、壁高50cm **面積** 1152㎡
主軸方向 N89° E **覆土** 1～9層に分けた。As-Cが混入する暗褐色砂質土や黒褐色砂質土、褐色砂質土で自然埋没している。全体にロームの混入が多い。

カマド 東壁のほぼ中央に作られている。壁の段差を利用して内側が燃焼室、外側が煙道である。全長155cm、焚き口の幅25cmである。燃焼室は、削り残しのロームを台にした上に、石を左右対に置いて粘土混じりの土でしっかりと固めている。両方の袖石には、寺沢川の崖面から抜き取った砂岩の切石が使われている。高居状に架けた石が焚き口に落ちていた。復元される焚き口の高さは25cmである。 **柱穴** なし

周溝 途切れながらも、ほぼ全周している。幅10cm前後、深さ2～5cmである。

貯蔵穴 南東隅、壁から離れている。長径48cm、短径46cm、深さ17cmである。

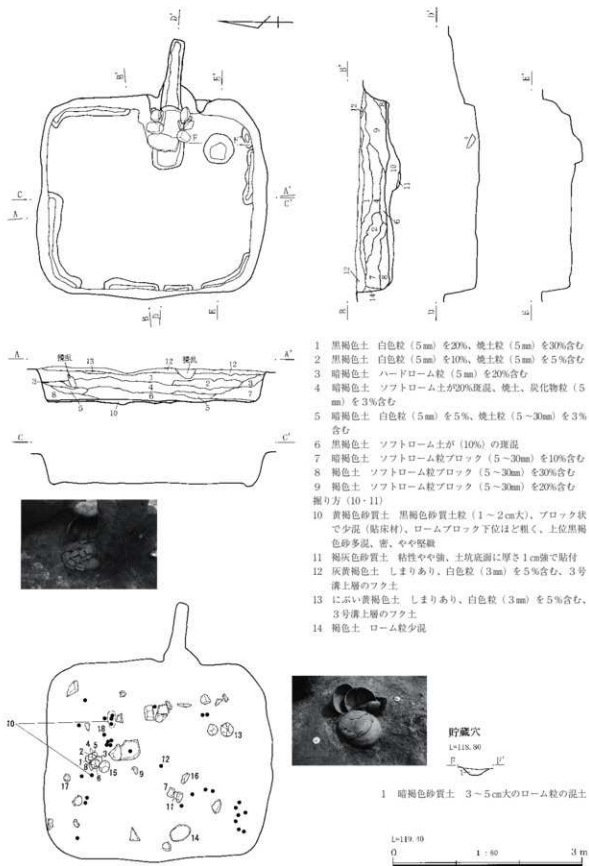
床面 中央部が高い。若干の凹凸がある。堅緻。掘り方は、形状のはっきりとしたものは中央の円形土坑1基だけである。長径90cm、短径70cm、深さ13cmである。底面には、厚さ1cmの薄い膜状に粘土が貼付してあった。覆土もロームを大量に含み、この土坑自身は意図的に埋められていたことが分かる。

また、17号住居跡ほどではないが、弘仁九年の地震による地割れ跡と思われるものがカマドから南壁にかけて検出されている。カマドの焚き口のもの、地割れではなく、陥没したようにも見える。

遺物と出土状況 覆土の上層と下層に集中する。上層には、拳大～手の平大の石が多い。埋没時に投棄されたような印象を受ける。床面では、西壁際で台石が据えられたままであった。注目、床中央の北壁寄りでの杯5点が集中していたことである(写真参照)。いずれも完形かそれに近い状態で、籠か箱に取っていたのか端にある3点は斜めになっていた。組成の中では、杯が目立つが甕が少ない。接合率は高い。

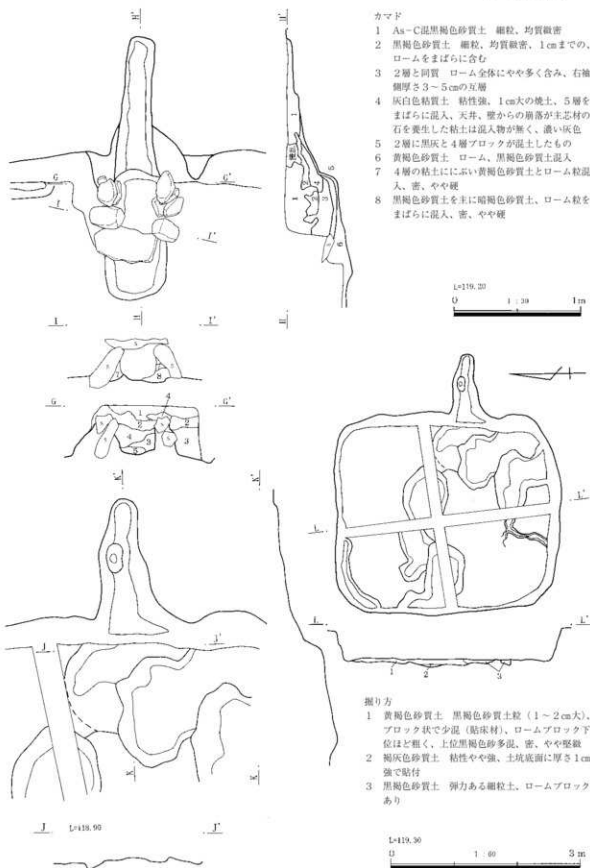
所見 時期は、8世紀前半である。

第4章 検出された遺構と遺物



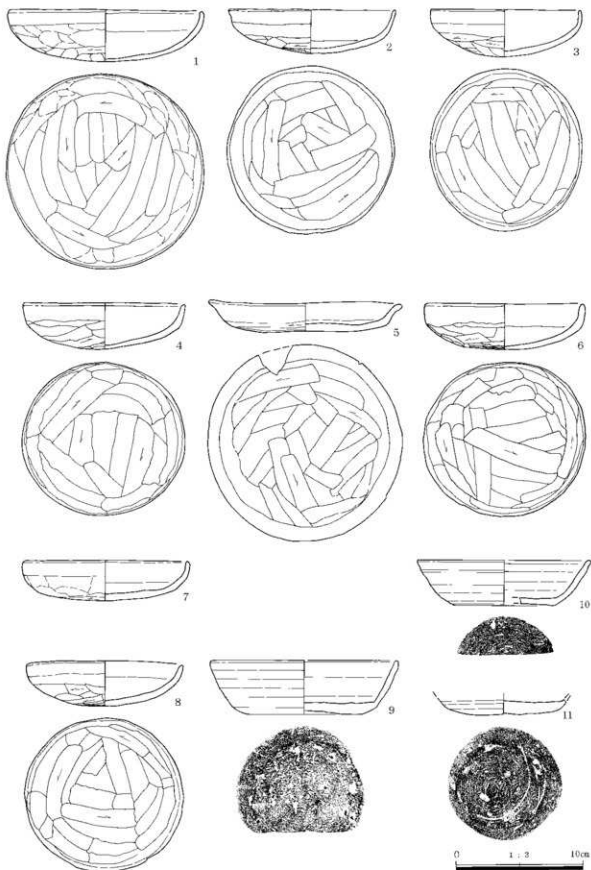
第65図 18号住居跡平・断面及び遺物分布

2 竪穴住居跡

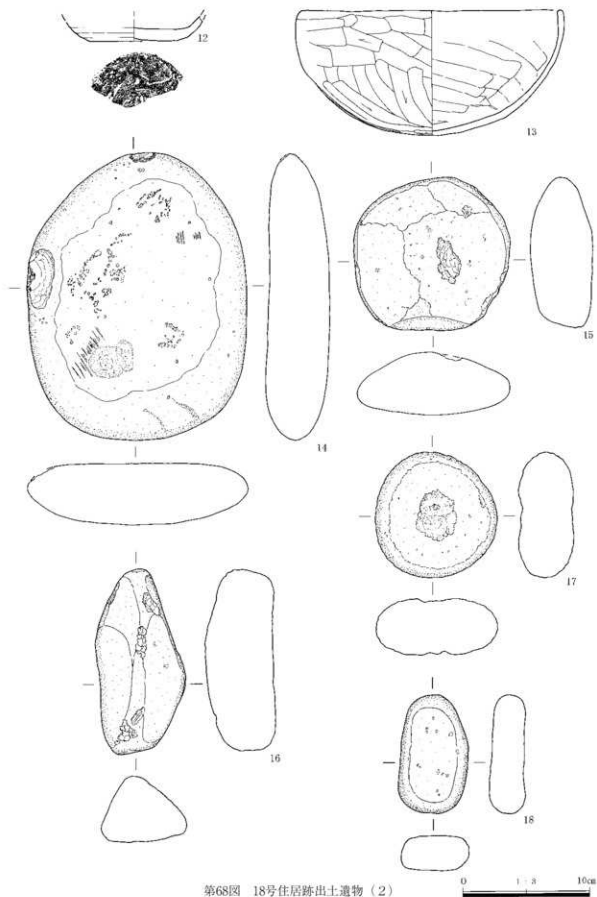


第66図 18号住居跡振り方・カマド平・断面

第4章 検出された遺構と遺物

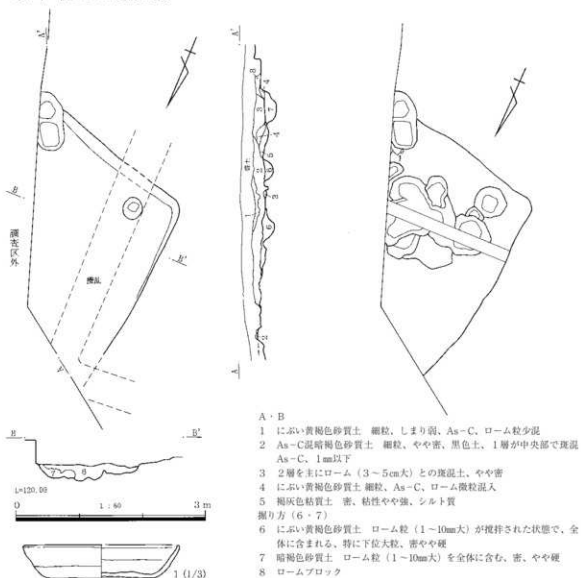


第67図 18号住居跡出土遺物 (1)



第68図 18号住居跡出土遺物(2)

第4章 検出された遺構と遺物



第69図 19号住居跡平・断面、掘り方平面及び出土遺物

19号住居跡 (第69図 PL.15・47)

位置 2区 27・28TA-13 **重複関係** なし **形状** 推定方形、南西側だけを検出した。北東側は市道のため未検出である。 **規模** 東西2.50m以上、南北3.30m以上、壁高16cm **面積** 6.38㎡以上

主軸方向 N107°E **覆土** 1~5層に分けた。3~5層は、貯蔵穴覆土とカマド関連土である。

カマド 東カマド、市道敷部分にあると推定される。覆土の5層に混入している粘土はカマドに使われていたものであろう。 **柱穴** なし **周溝** なし

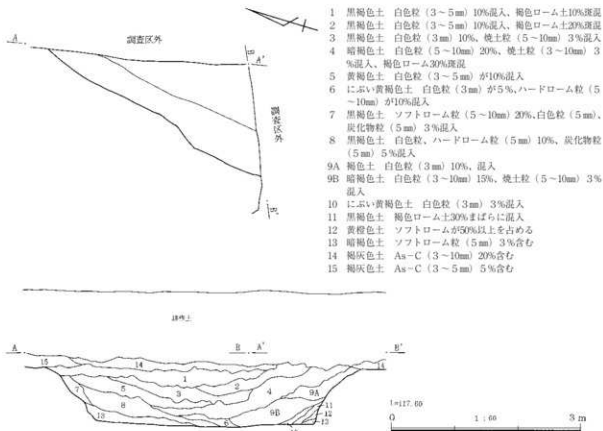
貯蔵穴 南東隅にある。長径49cm、短径37cm以上、深さ20cmである。1の杯が出土した。

床面 ロームを大量に含むにぶい黄褐色砂質土で、厚く貼り床をしている。貯蔵穴の左側、南北1mほどの範囲は周囲よりも一段低い上に硬化している。掘り方は、カマドの右側、住居の南半分だけにあり円を基本とした土坑状のものが重複する。中央部に一段と深い掘り込みで円形の土坑状のものがあいている。

遺物と出土状況 覆土に混入して杯、黒色土器が出土。いずれも小破片で、量も少ない。

所見 時期は、9世紀前半である。

2 整穴住居跡



第70図 21号住居跡平・断面

21号住居跡 (第70図 PL15)

位置 2区 17PQ-18・19 **重複関係** なし 2区では最南端の住居跡、東側が市道、南側は調査区外である。**形状** 推定方形、大型の住居と思われるうち西壁の一部分である。**規模** 東西1.80m以上、南北3.20m以上、壁高96cm **面積** 2.88㎡以上 **主軸方向** N104° E

覆土 1～15層に分けた。主にAs-Cを混入する黒褐色砂質土と褐色砂質土、黄褐色砂質土で自然埋没している。壁は中段までが直立しているのに対して、それ以上は外反するという深い住居に共通した特徴を持っている。土層も、それに沿って傾斜して堆積している。10～13層は、壁際の三角堆土である。ロームの混入が多く、周堤帯からの崩落土であろう。

カマド 調査区外の東壁に作られていると推定される。**柱穴** 検出されていない。

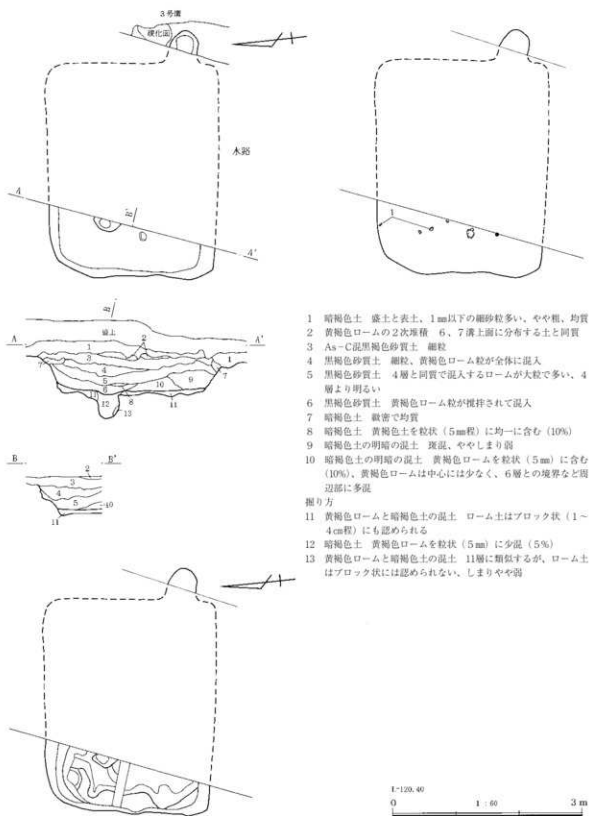
周溝 壁際が帯状に窪んでいる。掘り方調査をしていないので断定はできないが、覆土の埋没状況からすると周溝である可能性が高い。**貯蔵穴** 未調査である。

床面 As-BPまで掘り込み、ロームを大量に含む暗褐色砂質土で貼り床をしている。平坦、堅緻である。

遺物と出土状況 土師器の甕、杯の細片が少量出土した。いずれも埋没土への混入である。住居に伴うと思われる遺物は出土していない。

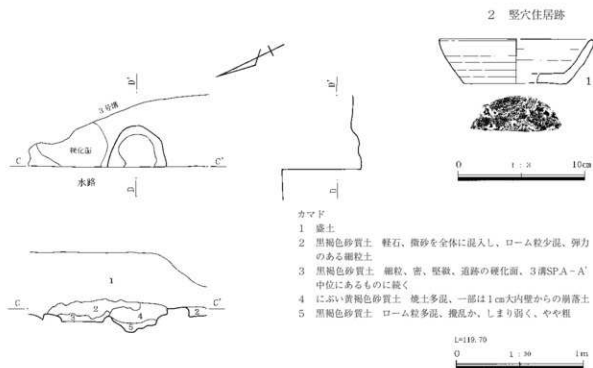
所見 横に長い方形で、周囲にある住居跡よりも掘り込みが一段と深い。大型の住居かと思われる。主軸がわずかに違うが、3号住居跡と掘り方など類似点が多い。時期は、形状や規模、掘り方の特徴が類似することから3号住居跡と同じ8世紀代と思われる。

第4章 検出された遺構と遺物



- 1 暗褐色土 盛土と表土。1mm以下の細砂が多い、やや粗、均質
 - 2 黄褐色ロームの2次堆積 6、7階上面に分布する土と同質
 - 3 As-C混黒褐色砂質土 細粒
 - 4 黒褐色砂質土 細粒、黄褐色ローム粒が全体に混入
 - 5 黒褐色砂質土 4層と同質で混入するロームが大粒で多い、4層より明るい
 - 6 黒褐色砂質土 黄褐色ローム粒が混拌されて混入
 - 7 暗褐色土 緻密で均質
 - 8 暗褐色土 黄褐色土を粒状(5mm程)に均一に含む(10%)
 - 9 暗褐色土の明暗の混土 斑混、ややしまり弱
 - 10 暗褐色土の明暗の混土 黄褐色ロームを粒状(5mm)に含む(10%)、黄褐色ロームは中心には少なく、6層との境界など周辺部に多混
- 掘り方
- 11 黄褐色ロームと暗褐色土の混土 ローム土はブロック状(1~4cm程)にも認められる
 - 12 暗褐色土 黄褐色ロームを粒状(5mm)に少混(5%)
 - 13 黄褐色ロームと暗褐色土の混土 11層に類似するが、ローム土はブロック状には認められない、しまりやや弱

第71図 22号住居跡平・断面及び掘り方平面



第72図 22号住居跡カマド平・断面及び出土遺物

22号住居跡 (第71・72図 PL.15・16・47)

位置 28BC-14・15 **重複関係** 無名の道と重複、溝よりも古い。中央部を用水路が縦断し、2区と3区に分断されている。カマドの北側には、道が重複している。3号溝の断面Aで検出された道の一部で、西は4号、5号溝にまで続いている。

形状 方形 **規模** 東西3.30m以上、南北2.60m、壁高57cm **面積** 8.58㎡以上 **主軸方向** N95° E **覆土** 1～10層に分けた。As-Cを混入する黒褐色砂質土が主で、下位の層ほどロームが多くなる。2層の黄褐色ロームの2次堆積層は、6号、7号溝でAs-B直上に堆積する黄褐色砂質土と同質である。

カマド 東壁の南隅寄りで燃焼部から煙道を検出した。燃焼部には、シルト質のロームが使われている。 **柱穴** なし、北西寄りの床面にあるピットは、住居よりも新しい。 **周溝** なし

貯蔵穴 未調査 **床面** ロームを掘り込んだ上に、暗褐色砂質土と黄褐色ロームの混土で貼り床をしている。平坦にならされ、全体にやや軟らかい。掘り方では、壁際が周溝のように窪んでいたのが観察できた。

遺物と出土状況 As-Cが混入する黒褐色土で自然埋没、最上層に6号溝、7号溝を埋めている黄褐色ロームが堆積している。遺物は、埋没時の混入で少量である。

所見 時期は、9世紀前半である。

23号住居跡 (第73図 PL.16・47)

位置 2区 27ST-11 **重複関係** なし、15号住居跡の東、調査区の東壁にかかり南西隅を検出した。

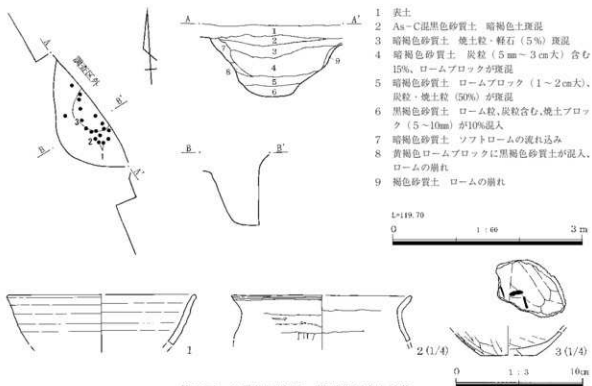
形状 推定方形 **規模** 東西0.96m以上、南北1.60m以上、壁高94cm **面積** 0.76㎡以上 **主軸方向** N96° E **覆土** As-Cを混入する黒褐色土と暗褐色砂質土で自然埋没している。 **カマド** 東壁にあると思われる。

柱穴 なし **周溝** 検出した範囲にはない。 **貯蔵穴** 未調査 **床面** 暗褐色土で貼り床をしている。

遺物と出土状況 覆土全体から出土しているが、出土レベルが高く細かな破片が多い。埋没時の混入と思われる。3の黒書は、そのうちのひとつで破損した甕の底部に書かれた珍しい例である。

所見 時期は、出土した土器の特徴から9世紀後半から10世紀代である。

第4章 検出された遺構と遺物



第73図 23号住居跡平・断面及び出土遺物

25号住居跡(第74・75図 PL.16・17・47)

位置 4区東 28M・12・13 **重複関係** なし **形状** 方形、わずかに南西隅が調査区の壁にかけり未調査である。 **規模** 東西3.60m、南北3.90m、壁高70cm **面積** 14.04㎡ **主軸方向** N96° E

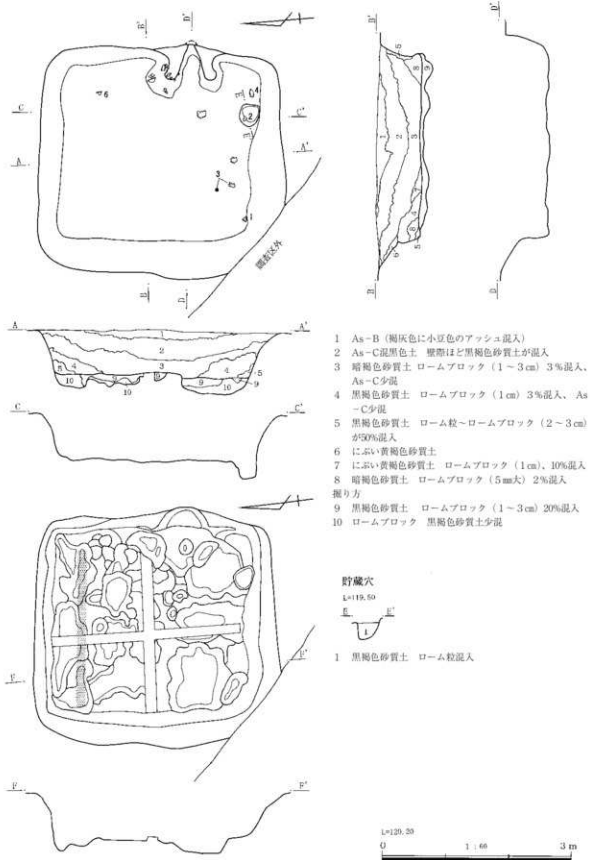
覆土 1~8層に分けた。主にAs-Cが混入する暗褐色砂質土と黒褐色砂質土で自然埋没している。検出面には、As-Bの1次層が厚さ15cmが残っていた。壁は中段までが直立し、それ以上は外反している。これは21号住居跡で見たように深い住居に共通した特徴で、土層もこの傾斜に沿って流入堆積している。6層、8層は、壁際の三角堆土でロームの混入が多く、周堤帯からの崩落土であろう。

カマド 東壁の南寄りに作られている。全長85cm、焚き口の幅35cm、1穴式と思われる。壁の外には煙道の先端が出るだけで、燃焼部をはじめとした大半は屋内に作られている。そのために、燃焼部の床と煙道とは1m近い段差である。袖は、壁際にわずかに掘り残したロームを土台にしてシルト質の粘土を貼付して作られている。7層が相当し、8層が土台の補強である。燃焼部には大量に焼土を残しているが、天井部や袖は自然に崩落したものであろう。袖石や支脚も、既に抜かれて住居の中央に散乱していた。 **柱穴** なし

周溝 床面では、はっきりとした掘り方は見られないが、断面図で見ると西壁側が窪んでいる。

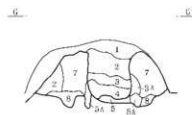
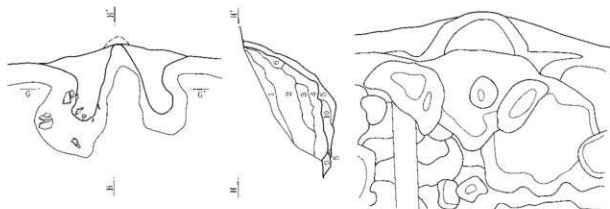
貯蔵穴 南東隅から西へ80cmとやや離れた所に作られている。長径35cm、短径32cm、深さ25cmの円形である。このほかに南西の隅が硬化面もなく、わずかに窪んでいた。仕切られたような気配もあり、穴ではなく棚のような施設があったのではないだろうか。掘り方では、壁際で楕円形の土坑が検出されている。

床面 ロームを大量に含む黒褐色砂質土で貼り床をしている。カマド前を中心にして住居の中央部が硬化している。貯蔵穴がある南東隅は、周囲よりも5cmほど低くなる。貯蔵穴に蓋をするための段差か、それとも地震による陥没なのか特定することはできなかった。また、明瞭ではないが北壁から1m弱の所に細く続く溝のようなものが観察された。掘り方平面図でスクリーントーンの箇所は、壁際を間仕切りしたベッドのよ

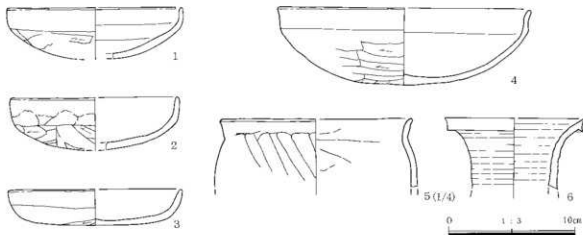


第74図 25号住居跡及び掘り方平・断面

第4章 検出された遺構と遺物



- 1 As-C混黒褐色砂質土 焼土粒ブロック (5mm) 3%混入
 - 2 褐灰色シルト質土 焼土ブロック (橙色3mm~1cm) 10%混入、天井部の落下と考える
 - 3 褐灰色シルト質土 明赤褐色 (1mm~1cm) の焼土ブロック、50%混入、天井部焼土部分の落下と考える
 - 3A 2層及び3層の混土
 - 4 黒褐色灰を多く含む層に焼土 (5mm~1cm) 少量にロームブロック (5mm~1cm) 3%混入
 - 5 ロームブロックに黒色灰が混入、壁に近い
 - 5A ロームの大きさ小さくなる
 - 6 灰黄褐色砂質土 明灰色シルト質土が40%混入、煙道部の落下と考える
 - 7 明灰色シルト質-粘質土を主に灰黄褐色砂質土20~30%混入、袖部分
 - 8 ロームブロック (3cm大) に黒褐色砂質土が混入、マット部
- カマド掘り方
- 9 褐灰色シルト質土 焼土ブロック、ロームブロックの混入
 - 10 明赤褐色土

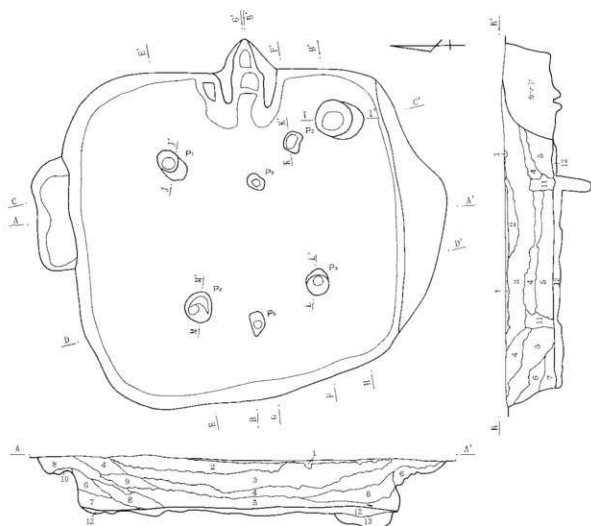


第75図 25号住居跡カマド平・断面及び出土遺物

うな跡ではないだろうか。掘り方は、床全体が掘られている。南半分の両隅が深く土坑状に見えるのに対して、北側は小さく円を描くか帯状になるという対照的な傾向が見られた。

遺物と出土状況 平面図で示したように出土した遺物は少ない。特に北東側では出土した遺物がなく、わずかに南壁からカマド寄りで甕や杯、灰釉陶器瓶が出土したにすぎない。個体数は少なく、接合率も低い。5の甕は出土位置が特定できず、6の瓶は出土位置が高く埋設時に混入したものである。1~4のうち、2が貯蔵穴から出土している。

所見 時期は、8世紀第2四半期である。



A・B

- 1 As-B軽石、黒褐色砂質土、アッシュ少しあり
- 2 暗褐色砂質土 As-C (7%) 混入
- 3 黒褐色砂質土 堅細、暗褐色砂質土を混混、As-C (20%) 混入
- 4 黒褐色砂質土 As-C (5%) 混入
- 5 におい・黄褐色砂質土 ロームブロック (1~2cm) 少混、As-C混入
- 6 におい・黄褐色砂質土 As-C混黒褐色土、少量を混混

- 7 黄褐色砂質土 ロームブロック (2~3cm) 少混
- 8 As-C混におい・黄褐色砂質土 焼土ブロック (1~2cm) 混入
- 9 黒色砂質土 As-C (5%) 混入
- 10 ロームにおい・黄褐色土がブロック状に混入
- 11 3層に類似 砂質土、3層に暗褐色砂質土が混混 掘り方
- 12 黒褐色土ローム (1~2cm) 40%混入貼床、堅緻
- 13 におい・褐色土 堅緻

貯蔵穴

1/119.60



貯蔵穴

- 1 灰黄褐色土 軟質、ローム粒20%混入
- 2 黒色砂質土 ローム粒20%混入
- 3 暗褐色土 軟質、ロームブロック (1~2cm) 30%混入
- 4 におい・黄褐色土 軟質

ピット1



ピット2



ピット3



ピット4



ピット1~4

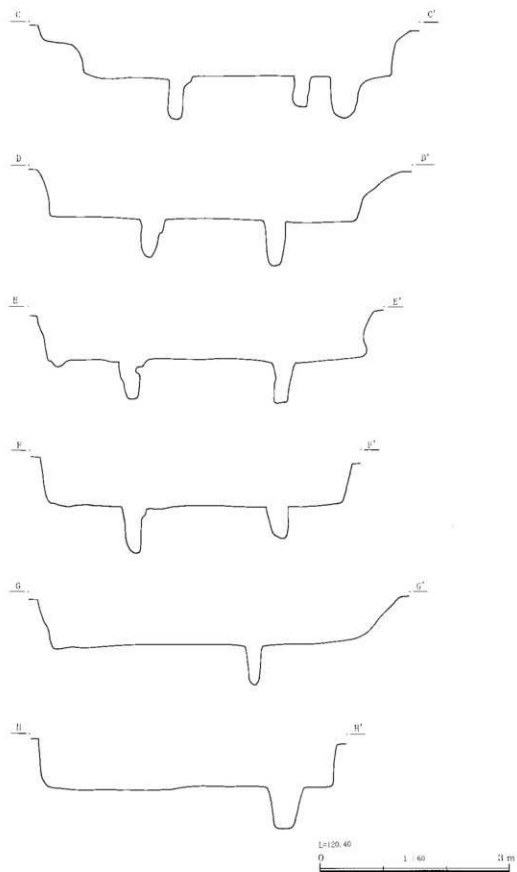
- 1 黒褐色砂質土 ローム粒少混
- 2 ロームブロック (2~3cm) 暗褐色砂質土50%混入
- 3 暗褐色砂質土 壁寄りにロームブロック (5mm) 混入
- 4 黒褐色砂質土 ロームブロック (1~5cm) 20%混入

L=126.40

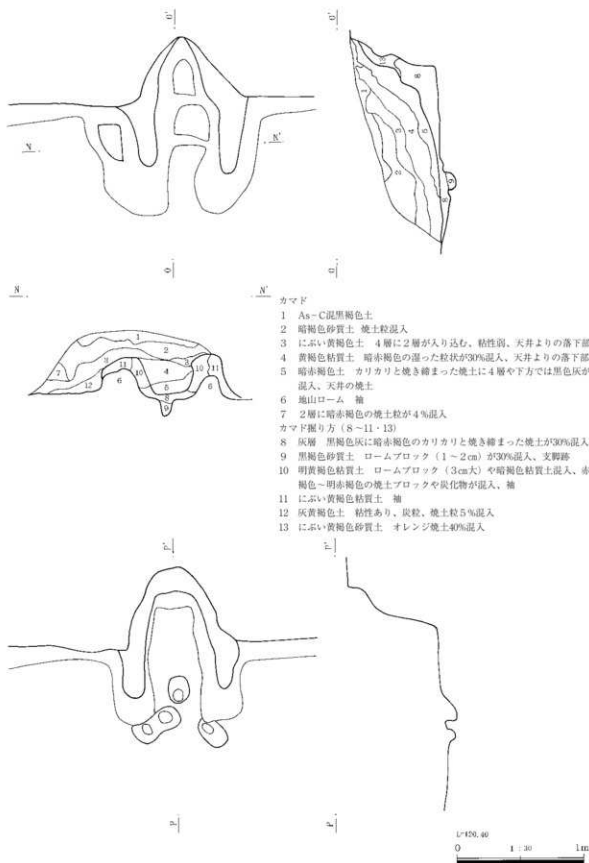
0 1.00 3.00

第76図 26号住居跡平・断面

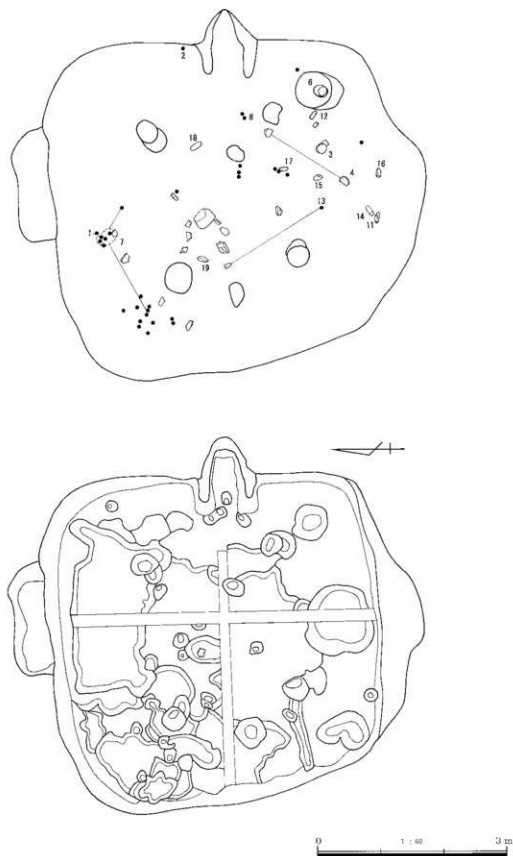
第4章 検出された遺構と遺物



第77図 26号住居跡断面



第78図 26号住居跡カマド平・断面



第79図 26号住居跡遺物分布及び掘り方平面

26号住居跡（第76～81図 PL.17・18・48）

位置 4区東 28K-M-16-18 重複関係 なし

形状 方形、北壁が広く、南が狭い。その差は70cmである。主柱穴の位置もプランとは、少しずれている。北壁の中央に張り出しがある。間口180cm、奥行き60cm、検出面からの深さは25cmである。また、反対側の南辺には入り口の跡であろうか、同じように弧状にふくらんで一段低くなっている。

規模 東西5.30m、南北5.20m、壁高80cm 面積 27.56㎡ 主軸方向 N85° E

覆土 1～11層に分けた。主にAs-Cを混入する黒褐色砂質土と暗褐色砂質土で自然埋没している。検出面には、As-Bの1次層が厚さ10cmが残っていた。この堆積状態は、25号住居跡とよく似ている。壁は、ここでも深い住居跡と共通するハードルームに相当する中段までが直立し、それ以上は外反していた。単なる崩落なのか、それとも屋内を広く見せるための工夫の跡か。壁際では、ルームの混入が多い。

カマド 東壁の中央寄りに作られている。全長165cm、焚き口の幅38cmである。焚き口の幅から見て、1穴式と思われる。燃焼部は屋内に作られ、煙道は40度を越す角度で壁外に延びている。袖は、掘り残したルームを土台にして暗色帯を貼付して作られている。両袖とも良好な状態が残っていたが、天井部は焚き口に向かって滑り落ちるように崩落していた。袖石は掘り方でも確認できなかったが、支脚は穴だけ残して抜かれていた。9層が、その痕跡であろう。

柱穴 主柱穴4本（P1～P4）、補助柱穴2本（P5、P6）がある。それぞれの長径・短径・深さは、P1が38・32・72cm、P2が32・25・53cm、P3が35・33・76cm、P4が48・44・63cm、P5が30・20・53cm、P6が35・21・13cmである。主柱穴とした4本は、直立するのではなく、いずれも10cm強内側に傾いている。屋根の重みで傾いてしまったと見るよりは、屋根の傾斜にあわせた工夫の跡かと思える。一方補助の2本は、住居の中軸線上にあって直立している。主柱穴による小屋組みとは東西方向にずれているが、中軸線上という位置から見て棟木を支えたものであろう。直立する様子は、断面の11層でわかる。これによれば覆土の上位まで立ち上がり、住居が廃棄された後もしばらくの間は朽ち果てずに残っていたものと思われる。これは断面に偶然にかかったものであるが、主柱穴も同様に残っていたかと思われる。

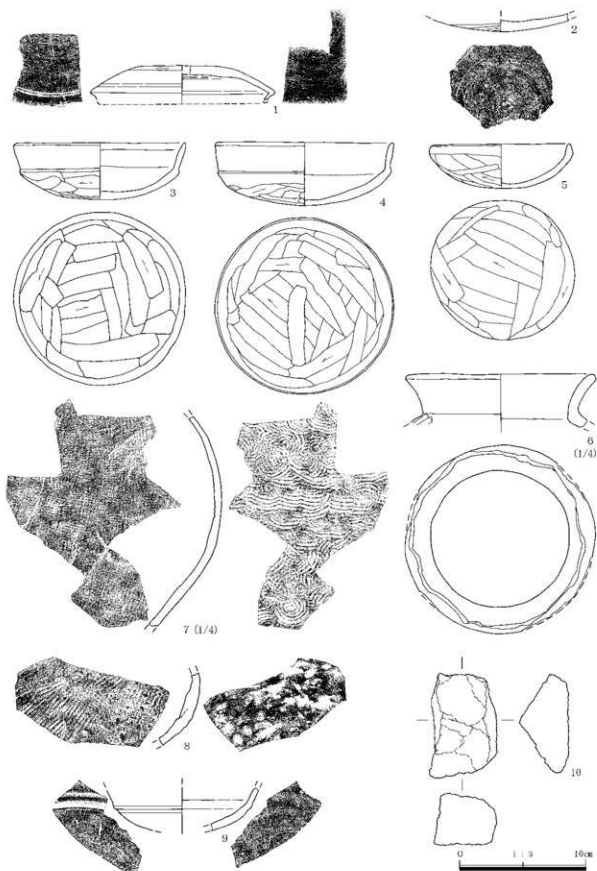
周溝 掘り方でも検出できなかった。

貯蔵穴 南東隅にある。長径60cm、短径58cm、深さ65cmの円形である。大型で深いことが特徴である。

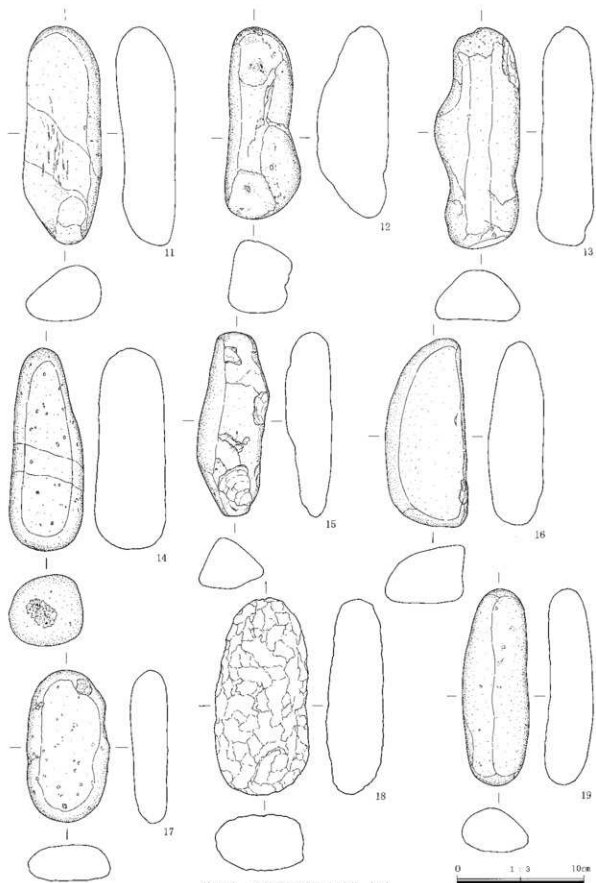
床面 ルームを大量に含む黒褐色砂質土で貼り床をしている。平坦、堅密である。住居の中央部が特に硬化しており、厚さ1cm弱、壁際を除いて薄い硬化面が見られた。その中で、唯一南西隅だけがわずかに低く、やや軟弱である。掘り方は、主柱穴を結んだ内側が高く、壁沿いに低い。P3から壁までの間には、間仕切り溝が検出されている。また、南壁際の中央には、やや大型の円形の土坑があいている。

遺物と出土状況 住居の北西から南東にかけていくつかのブロックで出土した。P4の周辺、P2の北側を除くと床の近くが多く、レベルの上では床の近くと高い位置とははっきりと二分される。3、4の杯が床の近くで、7、8の須器器甕は3層中からで廃棄されたらしく出土位置が高い。6は、丸胴甕の口縁部を土器の置き台に転用したもので貯蔵穴に落ちかかっていた。貯蔵穴の蓋の上に置いてあったのだろうか。本来は、カマドの右が定位置であろう。カマドからの出土はない。9点のこも編み石は、住居中央の床近くと壁際の中段とで出土した。石は、このほかにも大小40点あまりが出土している。この中には作業台と見られる大きな石もあるが、明瞭な使用痕もなく報告からは除外した。

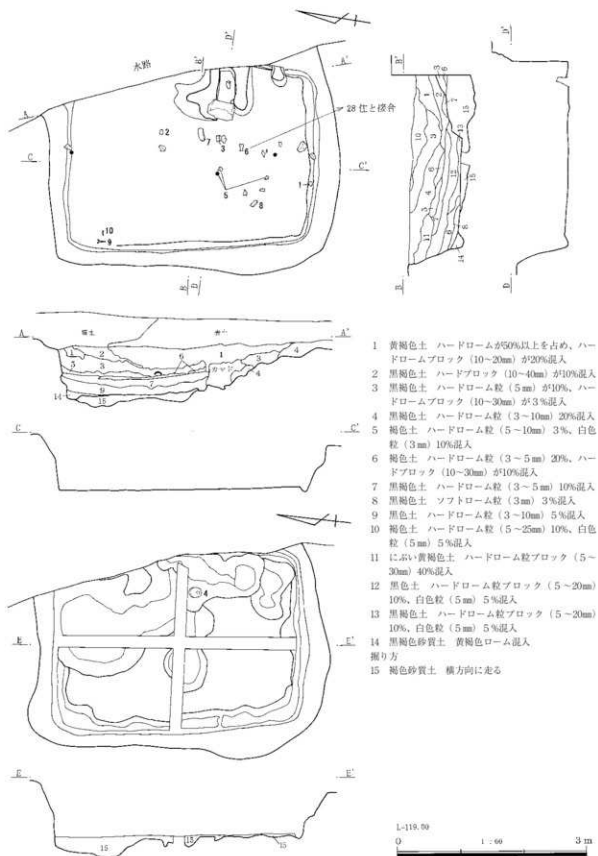
所見 時期は、6世紀後半である。



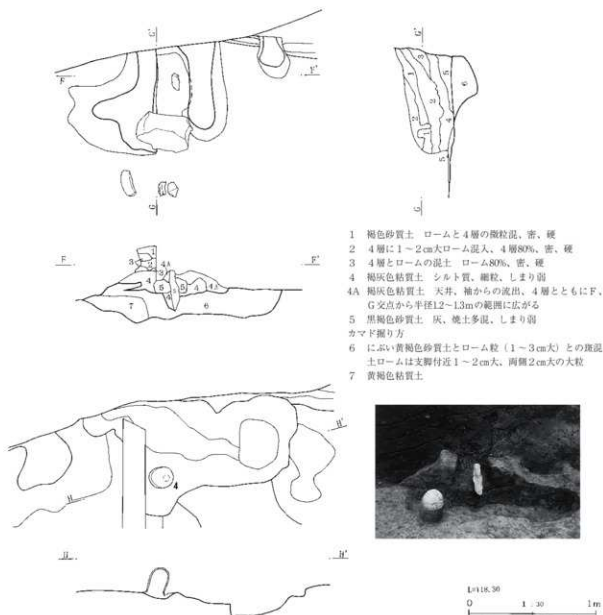
第80図 26号住居跡出土遺物(1)



第81图 26号住居跡出土遺物(2)



第82図 27号住居跡及び掘り方平・断面



第83図 27号住居跡カマド平・断面

27号住居跡 (第82~84図 PL.18・48・49)

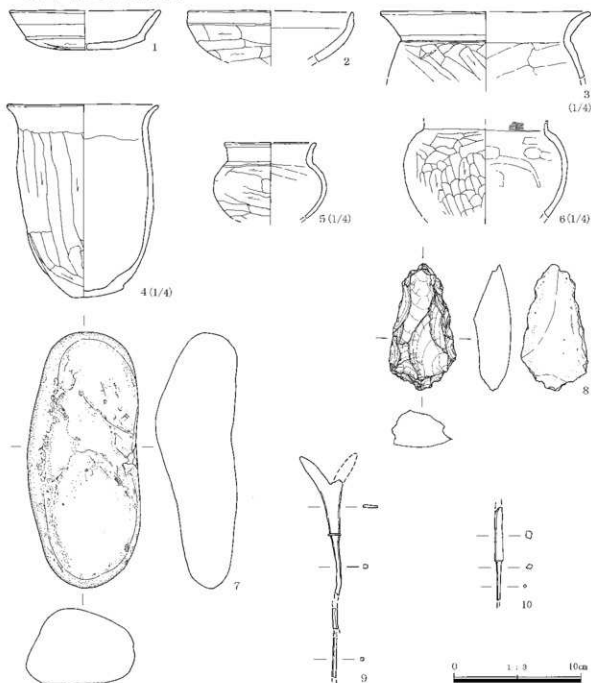
位置 3区 28CD-4・5 **重複関係** なし **形状** 推定方形、南東隅を除いて東壁が未調査である。

規模 東西2.80m、南北4.00m以上、壁高75cm **面積** 11.20㎡以上 **主軸方向** NS2°E

覆土 1~14層に分けた。上位の1~3層は多量にロームを含み、3号溝の掘削残土と考えられる。4層以下もロームと黒褐色砂質土の互層で人為的に埋め戻されたと考えられる。

カマド 東壁の中央寄りに作られている。全長65cm以上、焚き口の幅25cmである。焚き口の幅から見て1穴式と思われる。燃焼部は、シルト質の粘土で屋内に作られ、煙道は壁を使って直立する。焚き口に架けた石と支脚を残したままで、粘土も焼けてカリカリとしていた。架けていた甕を取り外しただけ、というような状態にも見える。左袖口の小型甕は芯材である。煙道は、強く焼け、燃焼部内部にも厚く焼土、灰を残したままである。 **柱穴** なし **周溝** 全周している。幅10cm前後、深さ5cm前後である。

第4章 検出された遺構と遺物



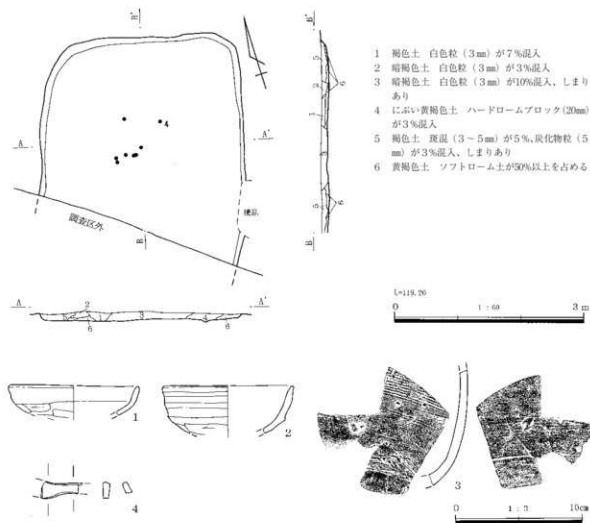
第84図 27号住居跡出土遺物

貯蔵穴 床面では検出することができず、掘り方の南東隅で2箇所窪んでいるのが確認できた。円形か方形のようで大きさは70cm前後、深さは10～15cmである。周溝も途切れており、妥当なところである。

床面 ロームを大量に含む褐色砂質土で貼り床をしている。平坦、堅緻である。掘り方は、東半分は土坑状のものが連続してあき、貼り床の範囲はここに限られる。西半分は、薄く貼り床されているだけである。

遺物と出土状況 床上20cm前後の覆土中位にまとまっている。人為的に投げ込んだ土に混入していたものである。9の鉄鏃は、検出面での出土である。6の甕は28号住居跡のものと接合したが、このほかにも杯の中に28号住居跡のものと接合する個体がある。

所見 時期は、カマドの支脚に転用されていた4の甕の特徴からみて6世紀後半である。



- 1 褐色土 白色粒 (3mm) が7%混入
- 2 暗褐色土 白色粒 (3mm) が3%混入
- 3 暗褐色土 白色粒 (3mm) が10%混入、しまりあり
- 4 にぶい黄褐色土 ハードロームブロック(20mm) が3%混入
- 5 褐色土 珪泥 (3-5mm) が5%、炭化物粒 (5mm) が3%混入、しまりあり
- 6 黄褐色土 ソフトローム土が90%以上を占める

第85図 28号住居跡平・断面及び出土遺物

28号住居跡 (第85図 PL.18・49)

位置 3区 28DE-5 **重複関係** 中央部で11号掘立柱建物跡と重複している。28号住居跡が古い。

形状 推定方形、南壁は調査区外のため未調査である。

規模 東西3.20m、南北3.60m以上、壁高12cm **面積** 11.52㎡以上 **主軸方向** N104° E

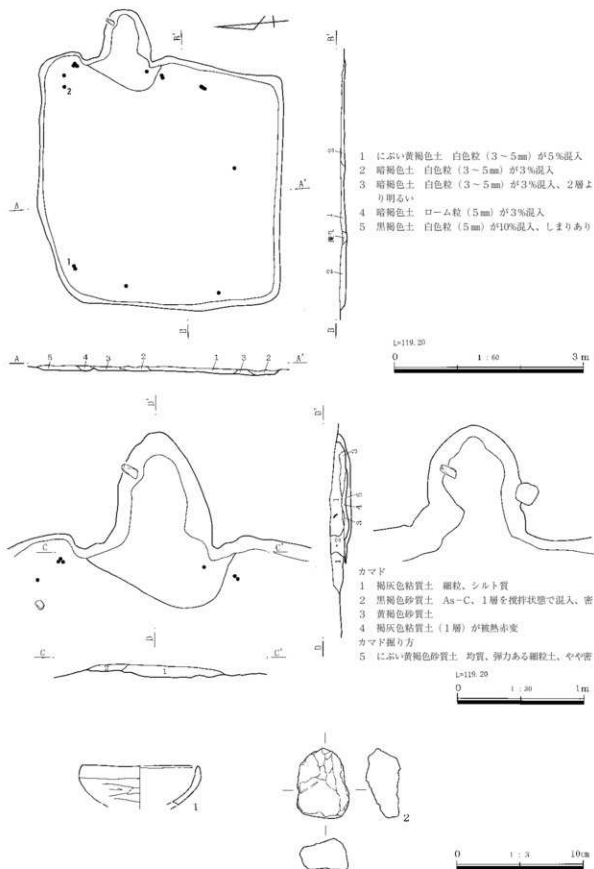
覆土 褐色砂質土、暗褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土に分けられる。カマド 東壁の相当箇所が攪乱されている。焼土や炭は見られない。柱穴 なし 周溝 なし 貯蔵穴 なし

床面 暗褐色砂質土で貼り床をしている。硬化面が見られず、掘り方もロームに達していない。

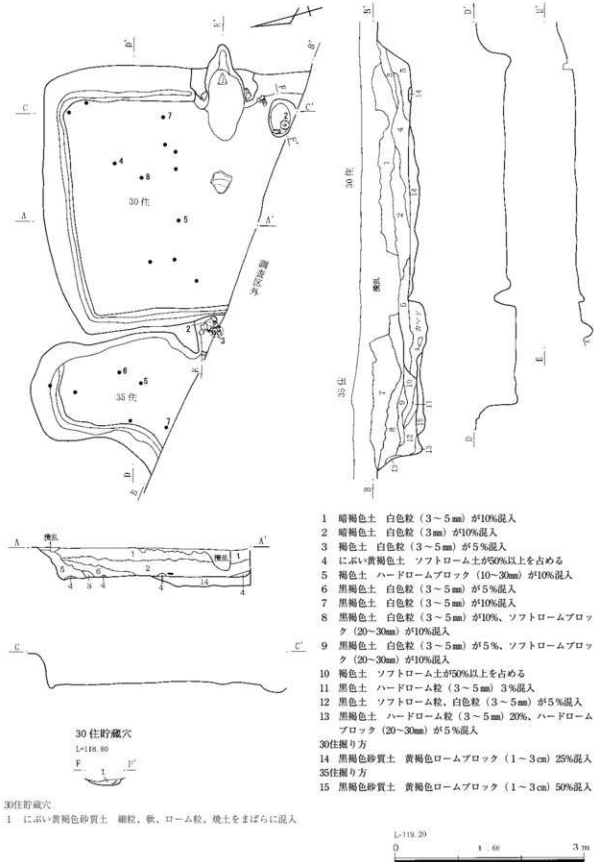
遺物と出土状況 中央部で、甕、杯が少量出土している。杯は、27号住居跡で出土した破片と接合した。

所見 住居と判断したのは、住居に特有のAs-C混入黒褐色砂質土が分布していること。わずかではあるが、遺物が出土したことの2点である。時期は、遺物からすると6世紀後半ではあるが確定は難しい。隣接する27号住居跡に比べても、床面の高さが70cm以上も違う。竪穴式住居跡と見るよりは、カマドが見あたらないことから平地式の建物跡と見た方がよいのだろうか。

第4章 検出された遺構と遺物



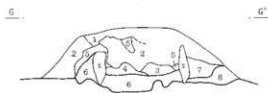
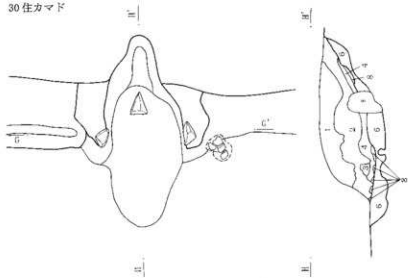
第86図 29号住居跡及びカマド平・断面、出土遺物



第87図 30号・35号住居跡平・断面

第4章 検出された遺構と遺物

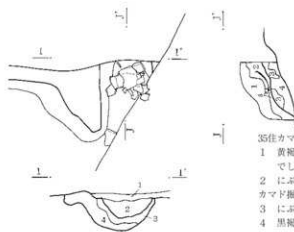
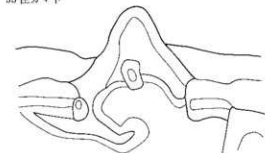
30住カマド



30住カマド

- 1 As-C混黒褐色砂質土 細粒、弾力あり
- 2 黄褐色砂質土 細粒、5層の2次堆積、As-Cが全体に混入し、中央部で焼土少混
- 3 2層に焼土多混 焼土(1~2mm大)が壁際に集中
- 4 5層の2次堆積 焼土混入
- 5 黄褐色シルト質土 焼土と粘土混入
- 6 褐色砂質土 均質、弾力ある細粒土、ローム粒とOK-I相当のロームブロックまばらに混入、焼土、灰を殆ど含まず、強く熱を受けてもいない(カマド全体の地業土)
- 7 6層と褐色粘質土の混土 輪石を固定するための土
- 8 被熱変化した6層

35住カマド



35住カマド

- 1 黄褐色砂質土 密、硬、焼土混入、ウズラ帯大砂礫混入、妻付近は顆粒状でしまり弱い、天井、壁からの崩落土
- 2 におい黄褐色砂質土 密、やや硬、黒褐色砂質土、ローム粒混入カマド掘り方
- 3 におい黄褐色砂質土 細粒、密、焼土多混
- 4 黒褐色砂質土とロームブロックの混混 密、やや硬、ローム80%以上



第88図 30号・35号住居跡カマド平・断面



第89図 30号・35号住居跡掘り方平・断面

29号住居跡 (第86図 PL.18・19・49)

位置 3区 28DE-5・6 **重複関係** 10号掘立柱建物跡と重複し、29号住居跡が新しい。 **形状** 方形、北西隅にゆがみがある。 **規模** 東西3.85m、南北3.90m、壁高10cm **面積** 15.01㎡ **主軸方向** N95° E

覆土 暗褐色砂質土が主となり、にぶい黄褐色砂質土、黒褐色砂質土で埋没している。

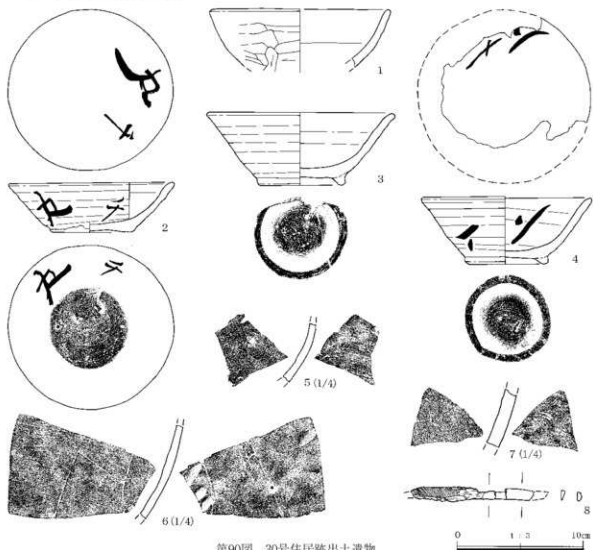
カマド 東壁の北寄りに作られている。壁の線上に燃焼部の中心がある。燃焼部は、ロームの上にシルト質の粘土を貼付して作られ、拳大程度の割り石を芯材に使っている。全長133cm、焚き口の幅43cmである。内部には、カリカリの焼土が一面に残されていた。焼土塊には、スサが混入している。全体が押しつぶれたようではあるが、硬く締まっているのが特徴的である。 **柱穴** なし **周溝** なし

貯蔵穴 床面では検出できなかった。

床面 暗褐色砂質土で貼り床をしている。平坦ではあるが、硬化面があるというものではない。

遺物と出土状況 壁際でわずかながら、土師器の甕、杯が出土した。接合はしないが、甕の中には28号住居跡と同一個体のものがある。また、同じように杯も31号住居跡と同一個体のものがある。2の軽石は、砥石か浮子として利用したものである。同様なものが近くの26号住居跡からも出土している。

所見 時期は、甕や杯の特徴から8世紀第1四半期である。カマドの様子からすると、改築が考えられる。それはカマド右側の硬化面が理由であるが床を掘り抜いてプランを誤認したか、別の住居の可能性もある。



第90図 30号住居跡出土遺物

30号住居跡 (第87~90図 PL.19・49)

位置 3区 28F-5・6 重複関係 西壁が35号住居と重複している。30号が新しい。

形状 方形、南壁は、掘り方で南東隅が検出されている。

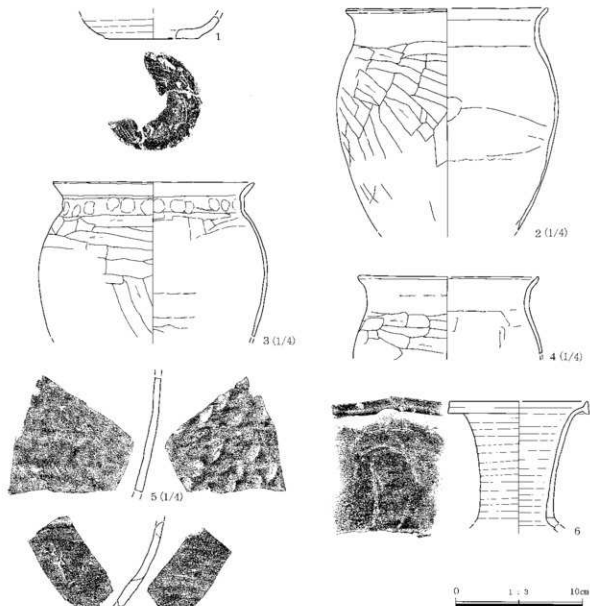
規模 東西3.80m、南北4.00m以上、壁高50cm 面積 15.20㎡以上 主軸方向 N98° E

覆土 暗褐色砂質土が住居の大半を覆い、床面と壁際ににぶい黄褐色砂質土、褐色砂質土がブロックでみられる。4層はカマドからの流出土、自然埋没である。

カマド 東壁の中央やや南に作られている。ロームへの掘り込みが浅いためなのか、6層を地業土にして丁寧に作られている。全長116cm、焚き口の幅60cmである。壁際に袖石を立てかけ、燃焼室は壁外に大きく掘り込まれている。焚き口は広く、両方の袖石と支脚が残されていた。支脚は、中心から左に寄る。袖は、粗粒輝石安山岩の角柱状に割ったものを芯材にしてシルト質の粘土を貼付して作られ、そのまま天井部へと続いている。内部は、支脚よりも奥と中心の右側の方が強く焼けている。この焼け方からすると、2穴式であろうか。左袖口に向かって灰が掻き出され、中には炭化材が混じていた。柱穴 なし

周溝 全周している。幅20cm前後、深さ10cm前後である。

貯蔵穴 南東隅にある。長径60cm、短径43cm、深さ10cmの楕円形である。中から「千」の墨書のある碗が出



第91図 35号住居跡出土遺物

土している。浅くて、掘り方もしっかりとしていない。

床面 ロームを大量に含む黒褐色砂質土で貼り床をしている。平坦でやや堅緻である。

遺物と出土状況 住居の中央部に集中している。7の須恵器の甕は出土レベルが高い。2点の墨書土器は、2が貯蔵穴内、4がカマドの左1.7mの床面からの出土である。8の刀子も4の脇で床からの出土である。覆土中には、少量ながら灰軸陶器も混入している。

所見 時期は、9世紀末から10世紀初頭である。

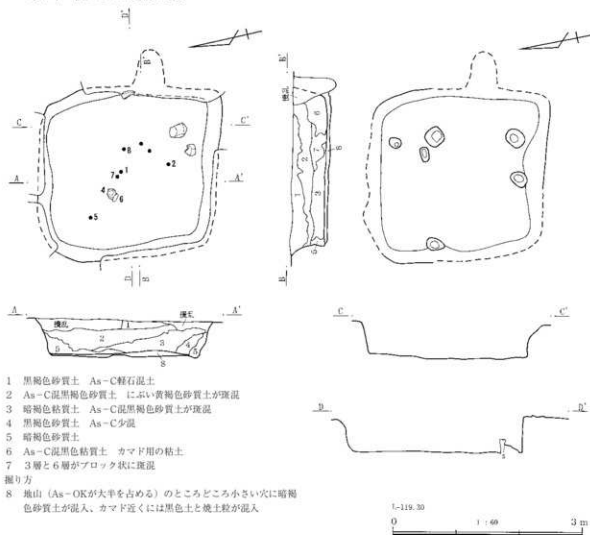
35号住居跡（第87～89・91図 PL.21・51）

位置 3区 28FG-6 **重複関係** 東壁に30号住居が重複している。35号の方が古い。

形状 推定方形、北東隅が張り出している。張り出した部分だけを調査した。

規模 東西2.20m以上、南北2.80m以上、張り出しは、間口、奥行きともに1.60m分である。壁高は、70cm

第4章 検出された遺構と遺物



第92図 31号住居跡及び掘り方平・断面

である。面積 6.16㎡以上 主軸方向 N96° E

覆土 7～13層に分けた。As-Cを混入する黒褐色砂質土、褐色砂質土、黒色砂質土で自然埋没している。

カマド 東壁の中央に作られている。全長68cm以上、焚き口の幅推定30cmである。両袖は、三角形に掘り残したロームに石を立てかけ、ロームで被覆して袖から天井までを作る。煙道は、破損した甍が天井の代わりに据えられていた。焚き口の横架石は手前にずり落ちていたが、支脚は立ったままで残されていた。内部は、強く焼けてカリカリの状態である。床には、灰を残すが下位には黒灰が薄い層となっていた。

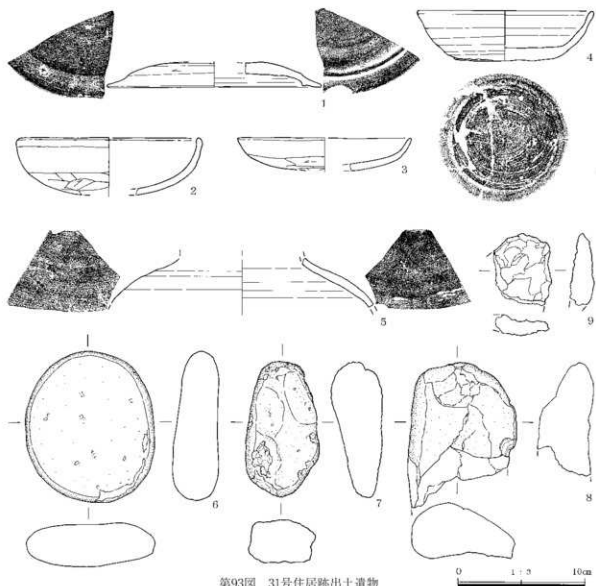
柱穴 なし **周溝** 全周する。 **貯蔵穴** 調査区外 **床面** ロームを大量に含む黒褐色砂質土で貼り床をしている。平坦、堅緻である。掘り方は、周溝部分を残して全体を掘り下けている。その中に円形の土坑状のものがある。覆土に焼土を含み、カマドの改築に伴うと考えられる。

遺物と出土状況 カマド内で2と3の土師器甍が出土し、5～7の須恵器は住居の中央で出土した。

所見 時期は、9世紀第4四半期である。

31号住居跡 (第92・93図 PL.19・49・50)

位置 3区 28F-7 重複関係 なし 形状 推定方形



第93図 31号住居跡出土遺物

規模 東西2.70m、南北2.80m、壁高50cm **面積** 7.56㎡ **主軸方向** N101°E

覆土 As-Cが混入する黒褐色砂質土を明暗の差とロームの状態で分けた。自然埋没である。6層はカマドに使用されていた粘土が流出したものである。

カマド 東壁の中央やや南寄りに作られている。全体が攪乱されていて、壁際に左の袖石を残すのみである。袖石の位置からみて、壁を利用して焚き口を作り燃焼部は壁外にある。

柱穴 なし。掘り方では、6基のピットを検出した。このうちで西と南の壁際のもは、床面で検出された。

周溝 はっきりとした掘り込みではないが、壁際が一様に窪んでいる。

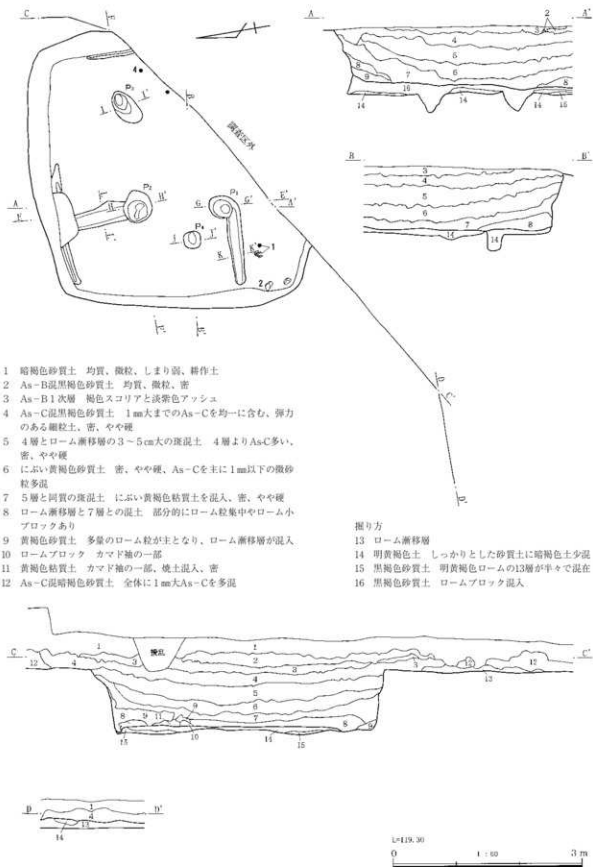
貯蔵穴 掘り込んではいないが、南東の隅が弧状、断面も袋状となり、隅を利用した貯蔵施設であろうか。

床面 掘り方は、全体が2~3cm下がる程度で、特に深い土坑状のものはない。黒褐色砂質土をわずかに含むだけのロームで貼り床されている。

遺物と出土状況 覆土の中位、床上10~20cmに多い。杯が10~15個体と多いが、細片で接合率は低い。

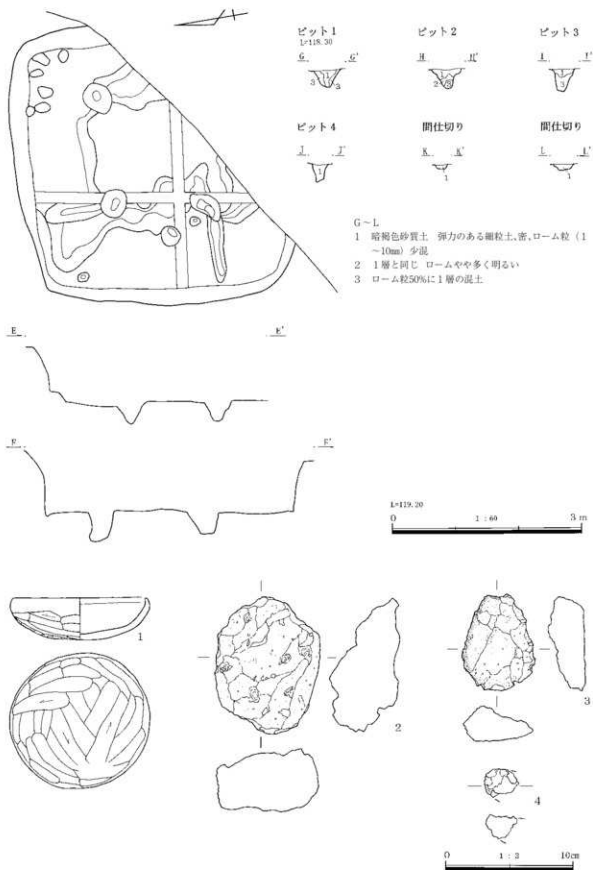
所見 時期は、2、3の杯の特徴から8世紀前半である。

第4章 検出された遺構と遺物



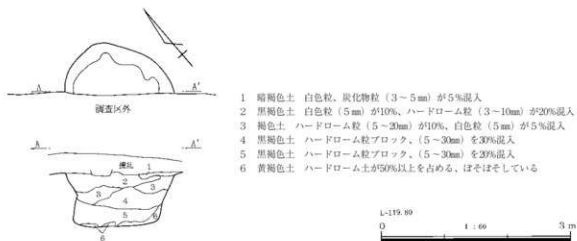
第94図 32号住居跡平・断面

2 竪穴住居跡



第95図 32号住居跡断面、掘り方平面及び出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



第96図 33号住居跡平・断面

- 1 暗褐色土 白色粒、炭化物粒（3～5mm）が5%混入
- 2 黒褐色土 白色粒（5mm）が10%、ハードローム粒（3～10mm）が20%混入
- 3 褐色土 ハードローム粒（5～20mm）が10%、白色粒（5mm）が5%混入
- 4 黒褐色土 ハードローム粒ブロック、（5～30mm）を30%混入
- 5 黒褐色土 ハードローム粒ブロック、（5～30mm）を20%混入
- 6 黄褐色土 ハードローム土が50%以上を占める、ほそぼそしている

32号住居跡（第94・95図 PL.20・50）

位置 4区西 29BC-17・18 **重複関係** なし **形状** 推定方形、南東隅は調査区外のため、未調査である。

規模 東西4.30m、南北4.10m以上、壁高100cm **面積** 17.63㎡以上 **主軸方向** N92°E

覆土 As-Cが混入する黒褐色砂質土をロームの状態に12層に分けた。自然埋没である。検出面では、As-Bの1次層が厚さ10cmのレンズ状に残っている。

カマド 東壁の中央部に作られている。左袖の一部と流失した粘土を検出しただけである。

柱穴 4本主柱穴のうち3本を検出した。それぞれの長径・短径・深さは、P1が58・30・32cm、P2が47・29・38cm、P3が49・40・48cmである。P4は補助柱穴である。規模は上記の28・26・29cmである。

周溝 北壁、東壁の一部で検出された。また、P1とP2は壁際までの間には、間仕切り溝がついている。床面では、南西のP1のものがわかっただけで、残る1本は掘り方で検出した。貯蔵穴 未調査である。

床面 主柱穴の内側は、削り出したロームを直に床としている。入り口にも関係するのであろうか、カマドの前からP1のあたりまでは非常に硬い。逆に壁際までの外側は、内側に比べて1～3cm低い上に軟らかい。しかも帯状であることから、単なる土間ではなく板張りをした壁際のベッド施設と推定される。また意味不明であるが、北壁の中央では、床上10cm、壁に付いて焼土塊がボツンと出土している。

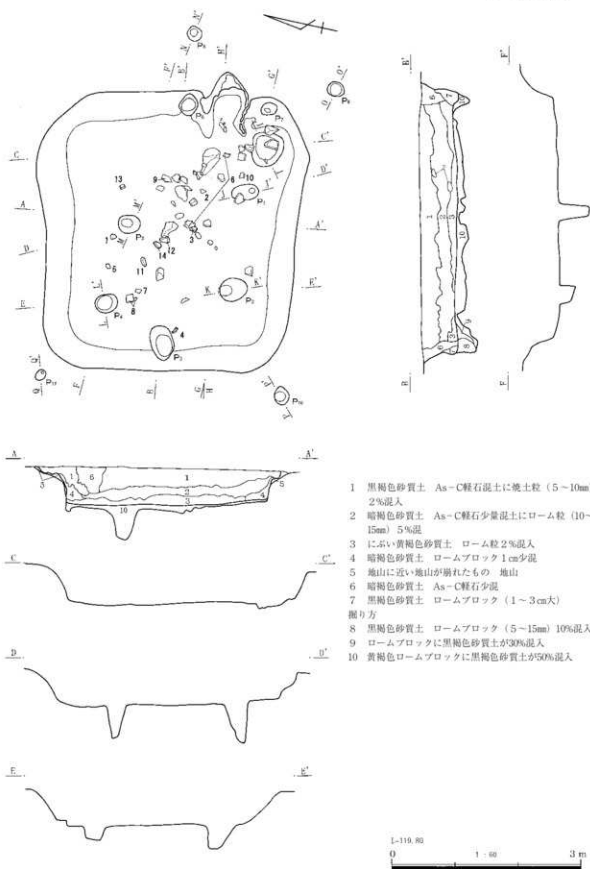
遺物と出土状況 覆土からの出土品は少ない。1は覆土の上位で埋没時の混入である。南西隅の床で、椀形鍛冶滓が出土している。

所見 時期を決定できる遺物はないが、覆土の様子や住居のプランからは6世紀代と考えられる。基本土層4層のAs-C混入黒褐色砂質土の下に幅30cmの硬化面がある。覆土の上層では、As-Bの純層が堆積していた。硬化面との差は少なく、住居に伴う道と思われる。

33号住居跡（第96図 PL.20）

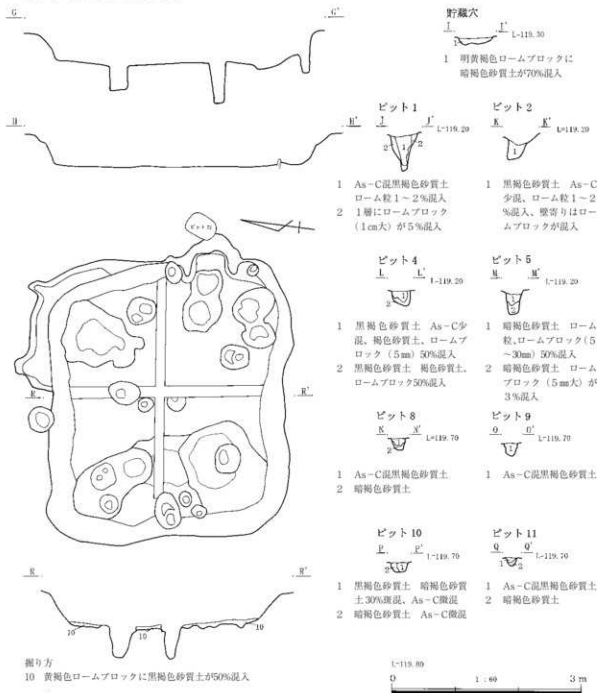
位置 3区 28G-6・7 **重複関係** 35号住居跡と重複している可能性もある。 **形状** 推定方形、調査区の壁にかかり、北東隅の半分程度が検出された。 **規模** 東西0.80m以上、南北1.60m以上、壁高82cm

面積 1.18㎡以上 **主軸方向** 計測不可 **覆土** 1～6層に分けた。黒褐色砂質土や暗褐色砂質土にロームを多く含み、人為埋没である。 **カマド** 不明 **柱穴** 不明 **周溝** 不明 **貯蔵穴** 不明 **床面** 平坦さはあるが床らしき硬化した様子ではない。 **遺物と出土状況** 小破片のために図化できなかったが、土師器の



第97図 34号住居跡平・断面

第4章 検出された遺構と遺物



第98図 34号住居跡断面及び掘り方平・断面

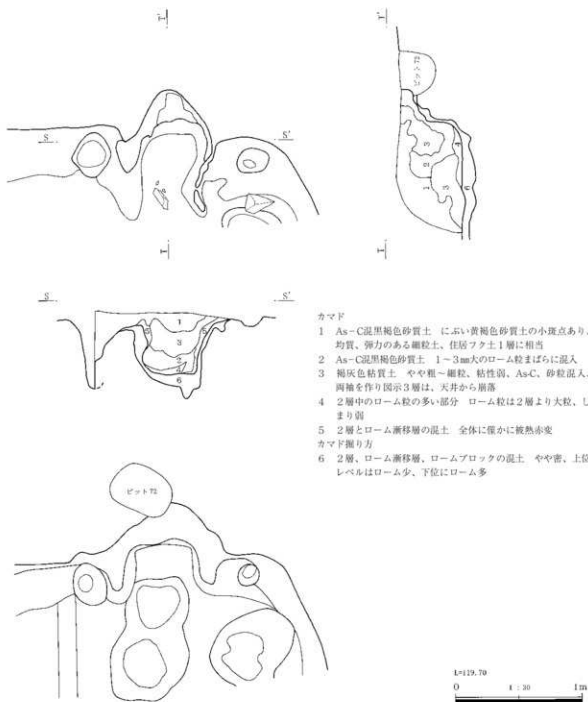
堯、須恵器の輪が出土している。

所見 35号住居の張り出しに似た形状と掘り方である。壁の線は丸みを持ち、底面に半円状の凹凸がある。床面らしいものがなく、土坑の可能性もある。時期は、堯の特徴から9~10世紀前半である。

34号住居跡 (第97~101図 PL.20・21・50)

位置 3区 28EF-11 **重複関係** 12号掘立柱建物跡と重複している。

形状 方形、南東隅が南辺全体から外側に向かって張り出している。

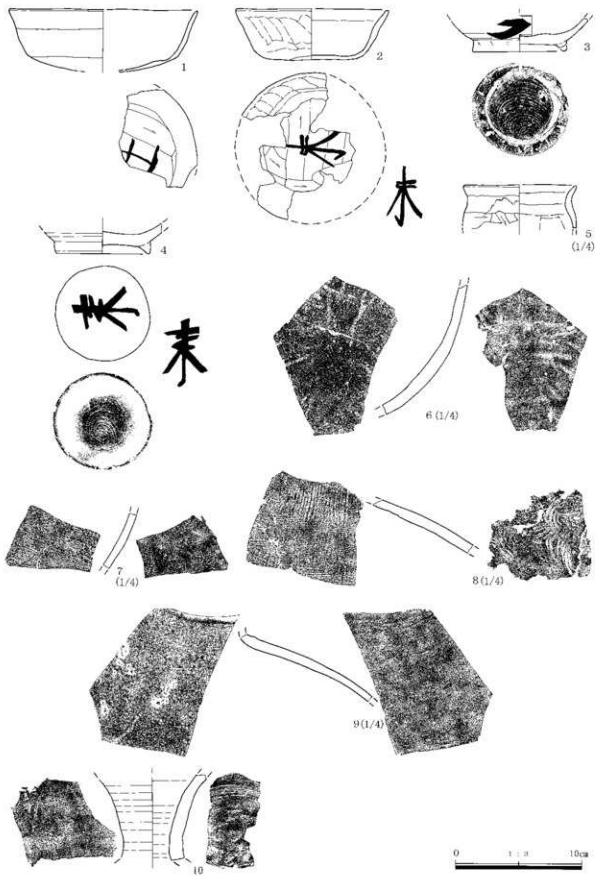


規模 東西4.40m、南北4.20m、壁高60cm、カマドのある東壁が30cmほど広い。

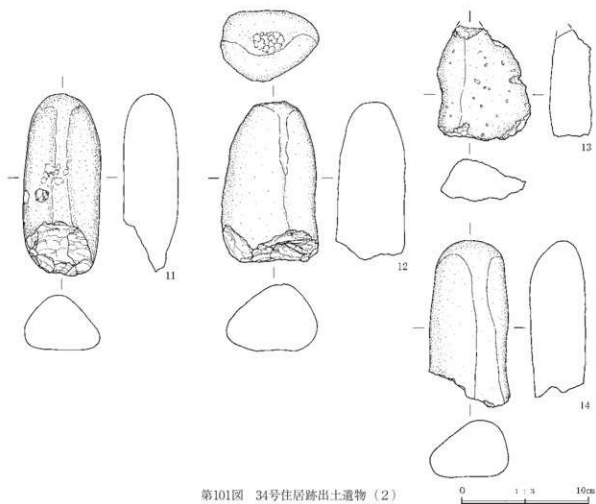
面積 18.48㎡ **主軸方向** N78° E

覆土 1～7層に分けた。壁際で変化が見られるが、住居中央部はAs-Cを混入する黒褐色砂質土と暗褐色砂質土で自然埋没している。

カマド 東壁の南寄りに作られている。壁の線上で燃焼部と煙道を区別するタイプである。燃焼部は、大きく箱形に掘りこまれ、煙道とは壁で段差を作る。袖は、掘り残したロームを土台にしてシルト質粘土を貼付して作られている。天井も同様な粘土で作られていたが、覆土の中位に崩落していた。焼土や灰を残さず、



第100図 34号住居跡出土遺物(1)



第101図 34号住居跡出土遺物(2)

全体の焼け方も弱い。人為的に壊されたようで、住居内には土器に混じり20点を超す石が投棄されていた。この中には、袖や焚き口のものも含まれている。カマドの両脇には、対でビットが検出された。深さはともに60cm前後もあり、上屋を支える補助柱穴と考えられる。焼土や灰を残さず、全体の焼け方も弱い。使用期間は短い。出土した遺物はない。

柱穴 屋内に5基、壁の周辺で4基のビットが検出されている。 **周溝** なし

貯蔵穴 南東隅にある。長径54cm、短径49cm、深さ10cmのほぼ円形である。

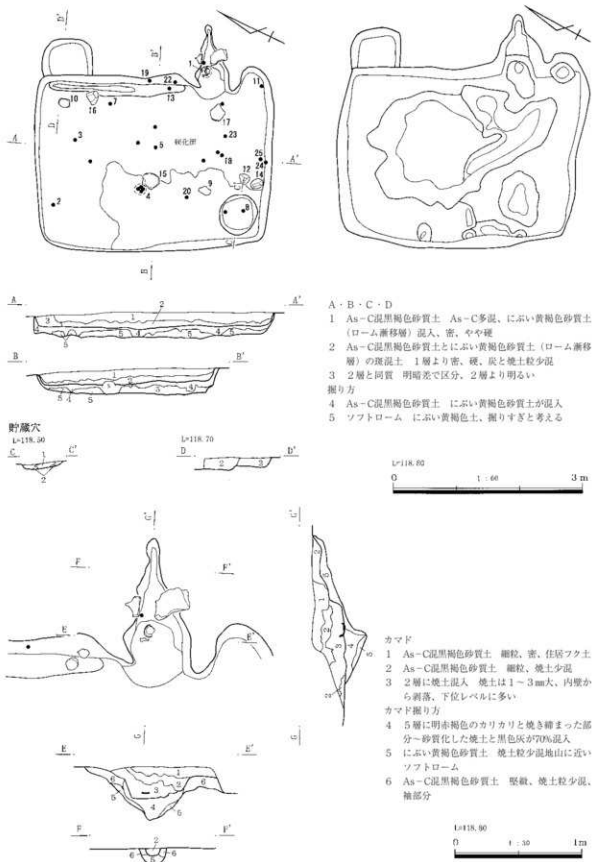
床面 でこぼことした状態、北西-南東方向で地割れが4箇所以上確認されている。

遺物と出土状況 覆土の中位以下、床面との間で出土した。図示した遺物も出土位置の高いものが多く、土師器コの字口縁甕、須恵器甕、長頸壺などがある。その中には4点の墨書土器が含まれている。このうちの2点が「来」の字である。

所見 弘仁九年の地震で被災した住居と思われる。壁のゆがみ、床の地割れ、陥没が被害の内容である。北壁と南壁は、ともに内側に20～30cmほどせり出している。地割れはほぼ東西の方向にあり、幅1m強の間隔で4本がある。幅は、最大で20cmである。深さについては観察をしていない。床の陥没は、5cm程度の段差である。地割れは、17号住居跡で見られたが方向はやや異なる。

時期は、9世紀後半である。

第4章 検出された遺構と遺物



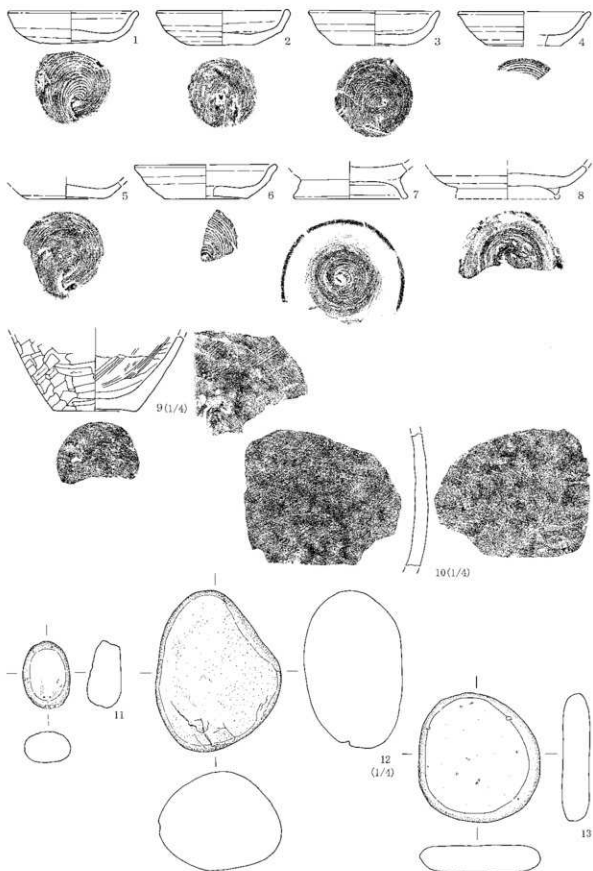
- A・B・C・D
- 1 As-C混黒褐色砂質土 As-C多混、にぶい黄褐色砂質土 (ローム漸移層) 混入、密、やや硬
 - 2 As-C混黒褐色砂質土にぶい黄褐色砂質土 (ローム漸移層) の混入。1層より密、硬、炭と焼土粒少混
 - 3 2層と同質 明暗差で区分、2層より明るい
- 掘り方
- 4 As-C混黒褐色砂質土 にぶい黄褐色砂質土が混入
 - 5 ソフトローム にぶい黄褐色土、掘りすぎと考える

0 1:60 3m

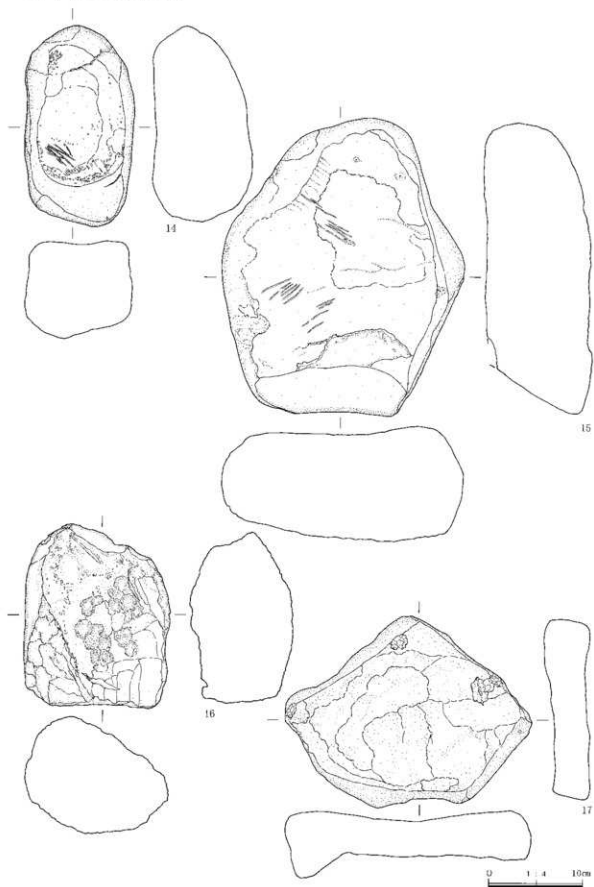
- カマド
- 1 As-C混黒褐色砂質土 細粒、密、住居フク土
 - 2 As-C混黒褐色砂質土 細粒、焼土少混
 - 3 2層に焼土混入 焼土は1~3mm大、内壁から剥落、下位レベルに多い
- カマド掘り方
- 4 5層に明赤褐色のカリカリと焼き締まった部分→砂質化した焼土と黒色灰が70%混入
 - 5 にぶい黄褐色砂質土 焼土粒少混地山に近いソフトローム
 - 6 As-C混黒褐色砂質土 堅緻、焼土粒少混、補部分

0 1:30 1m

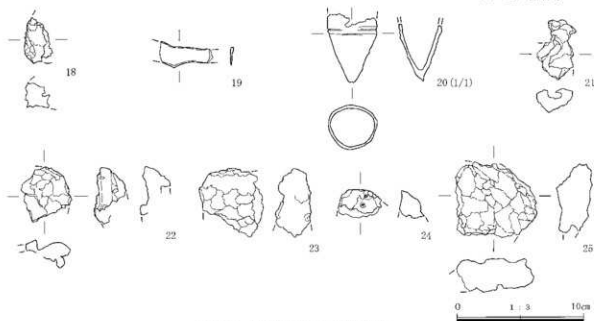
第102図 36号住居跡及び掘り方、カマド平・断面



第103图 36号住居跡出土遺物(1)



第104図 36号住居跡出土遺物（2）



第105図 36号住居跡出土遺物(3)

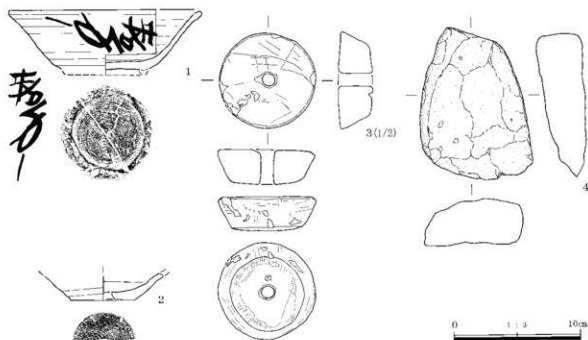
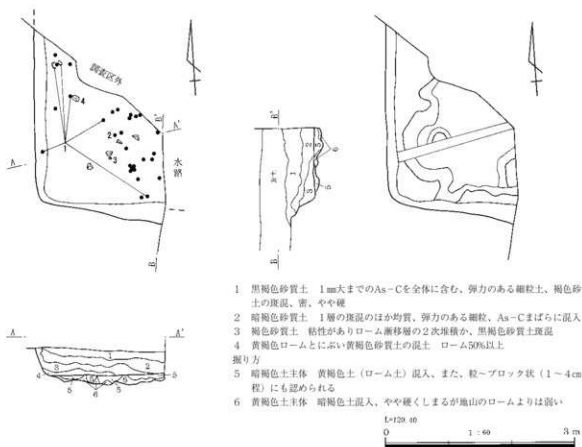
36号住居跡(第102~105図 PL.21・22・51・52)

位置 4区西 39C-3・4 **重複関係** 北東隅で土坑と重複、土坑の方が古い。**形状** 方形 **規模** 東西2.80m、南北3.80m、壁高20cm **面積** 10.64㎡ **主軸方向** N63°E **覆土** 1~3層に分けた。As-Cを混入する黒褐色砂質土で自然埋没している。**カマド** 東壁の南東隅寄りに作られている。全長120cm、焚き口の幅45cm、壁際に掘り残したロームを袖とし、全体は壁よりも外側にある。1穴式と思われる。焚き口には石が使われていた様子で、図示した17が手前に滑り落ちていた。燃焼部は、中央と左半分の焼け方が強く焼け土を厚く残している。1の杯は支脚の受け皿として床に据えたようにも見え、床を判断する基準としたが、灰の厚さや焼け方からすると図示したよりも深くなるのではないだろうか。煙道との境には、板状の石を対に置いている。右側の石は、直立していたものが倒れたらしい。煙道は、幅10cmの掘り方で緩く傾斜し、先端だけが45度の角度で立ち上がる。**柱穴** なし **周溝** 東壁にのみめぐる。幅15cm前後、深さ6cmである。西に向かって下りとなるため、壁面の養生も兼ねて雨水の入りやすい東側だけに限定されるのであろう。

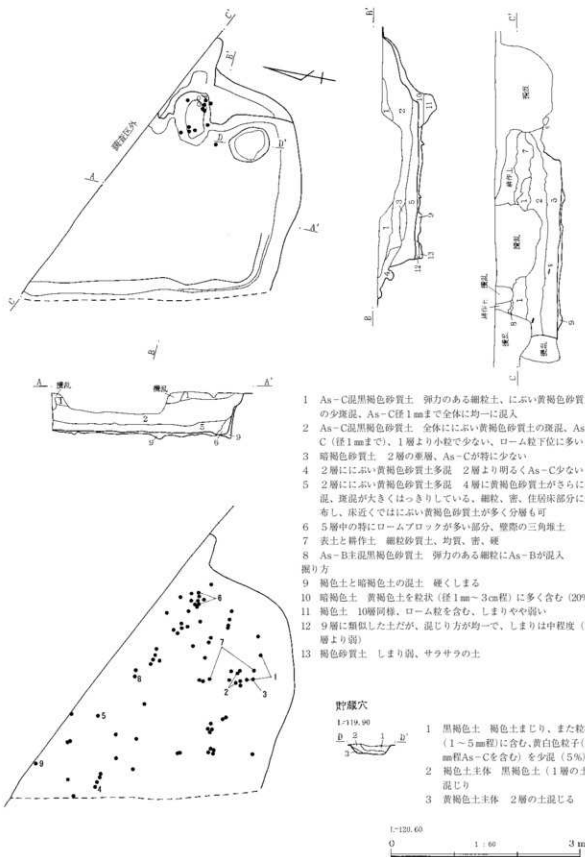
貯蔵穴 床面では、南西隅に長径63cm、短径58cm、深さ10cmの円形土坑が検出された。カマドが南東の隅に近いことによるためと思われるが、掘り方はカマド脇の南東隅で長径34cm、短径30cm、深さ9cmの円形土坑が別に検出されている。両者ともに貯蔵穴の可能性がある。

床面 壁際までの、ほぼ全体が硬化していた。カマドの焚き口前は、特に顕著で黒灰が薄く分布している。**遺物と出土状況** 住居の全体に散在している。床面かその近くのものか殆どで、廃棄時点の室内の様子をよく現している。15の台石は、床より2~3cm高い位置に据えてあった。粗粒輝石安山岩が使われ、まわりを打ち欠いた上に磨かれている。一面に敲打の跡があり、中央部は浅く窪んでいる。滓を含めて8点の鉄製品も出土しているが、小鍛冶であることをより印象付けるものである。ほかの石については、敲打痕や擦り跡がみられるものの15のように床に据えるのではなく、壁際に点在している。鉄滓は、6点が出土している。いずれも碗形鍛冶滓で、大きいものでも6cm、いくつかに割れたうちのひとつである。既に溶かされて消費された残りか、搬入された時のままなのかは不明である。19は刀子の茎の破片であるが、20の金具としたものは矢柄のような棒の端に被せるものであろうか。なお、この製品と鉄滓との同定分析はしていない。

所見 時期は、10世紀後半から11世紀前半である。小鍛冶とみているが、炉は検出されていない。

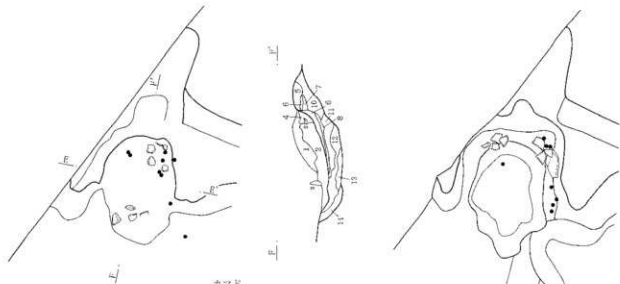


第106図 37号住居跡平・断面、掘り方平面及び出土遺物



第107図 38号住居跡平・断面及び遺物分布

第4章 検出された遺構と遺物

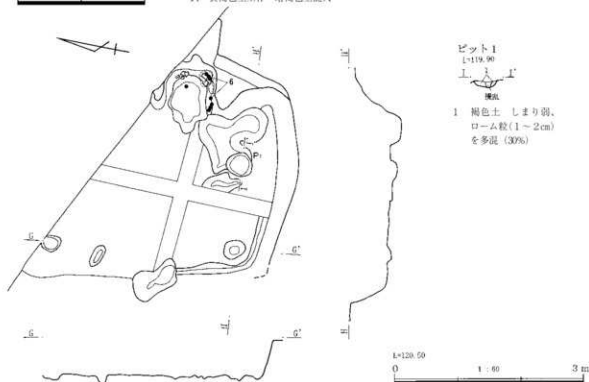
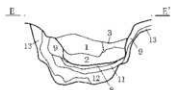


カマド

- 1 As-C混黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、密、焼土、ローム粒少混(10%)
- 2 As-C少混黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、密、焼土粒のほか(1cm大)焼土粒まばらに混入
- 3 2層に灰白色粘質土が混入、煙道の先端ほど粘質土が多い
- 4 焼熟した灰白色粘質土

カマド掘り方

- 5 灰黄褐色粘土 硬くしまる、下方に焼土粒(1mm程)少混(5%)
- 6 赤褐色土 焼土主体層
- 7 灰黄褐色粘土主体 硬くしまる
- 8 暗褐色土 焼土粒状(5mm程)に少量含む(5%)、11層よりやや暗色味を帯び、やや硬く締まる
- 9 褐色土 焼土粒状(5mm程)に少量含む(5%)、11層よりやや暗色味を帯び、やや硬く締まる
- 10 暗褐色土 褐色土を粒状(5mm程)に少量含む(5%)、焼土粒状(1mm程)少量含む
- 11 暗褐色土 黄褐色土を粒-ブロック状(5~20mm)に含む(15%)
- 12 暗褐色土 黄白色粒土(As-C含む、5mm程)を微混(5%以下)、黄褐色土の含みは11層より少なく比較して暗色味あり、黒褐色、褐灰色粘質土がブロック状(5cm程)に認められる、焼土粒(1mm程)を特に、F-FのF側に含んでいる(5%以下)
- 13 11層に類似、12層を挟むため分層
- 14 黄褐色土主体 暗褐色土混入

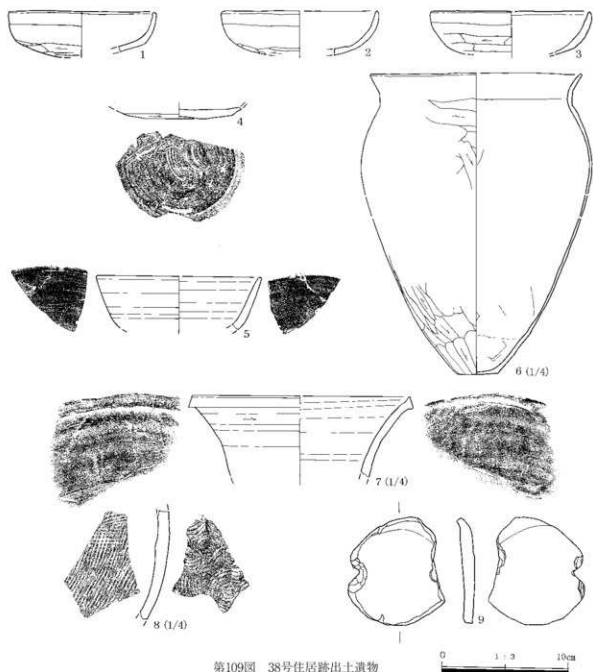


ピット1
L=119.90
1:1

- 1 褐色土 しまり弱、ローム粒(1~2cm)を多混(30%)



第108図 38号住居跡掘り方及びカマド平・断面



第109図 38号住居跡出土遺物

37号住居跡 (第106図 PL.22・52)

位置 3区 28BC-15 **重複関係** 3号溝との重複が考えられるが、水路があるために確定できない。

形状 推定方形、その南西隅を検出した。 **規模** 東西2.05m以上、南北2.70m以上、壁高40cm **面積** 3.99㎡以上 **主軸方向** N95°E (南辺で計画)

覆土 1～4層に分けた。As-Cを混入する黒褐色砂質土、暗褐色砂質土、褐色砂質土で自然埋没している。4層は、ロームの混入が多い。 **カマド** 不明 **柱穴** なし **周溝** なし **貯蔵穴** 不明

床面 ロームを含む暗褐色土で貼り床をしている。平坦でやや堅緻であるが、硬化面は見られない。掘り方は、壁際を残して浅い皿のように窪んでいる。特に出土した遺物はない。

遺物と出土状況 検出部分のほぼ全体から出土している。細片で床上の20cm前後からが多く、ここに含まれ

第4章 検出された遺構と遺物



第110図 39号住居跡及び1号井戸平・断面、出土遺物

る「勢多」と書かれた墨書の椀は投棄された可能性がある。紡錘車、敲石は、床から出土している。

所見 時期は、9世紀末から10世紀初頭である。

38号住居跡 (第107～109図 PL.22・23・52)

位置 3区 28GH-18・19 **重複関係** なし

形状 推定方形、北西隅は検出しているが、カマドの左から北東側は調査区外のため未調査である。カマドの右側は一段低い斜面となって、棚のように見える。南東の隅と煙道を結んで大きな三角形をしており、奥行きは最大で70cmである。この様子はカマドの左側にも続краしい。覆土は、上層の2層に覆われている。覆土全体の中では新しく、棚ではなく単に埋没時に壁が崩落したという見方ができる。

規模 東西3.20m、南北3.90m、壁高54cm **面積** 10.72㎡以上 **主軸方向** N86°E

覆土 As-Cを混入する黒褐色砂質土を、混入するロームの状態に分けた。自然埋没である。断面図には現れていないが、検出時にはAs-Bの1次層が最大5cmの厚さで残っていた。

カマド 東壁の中央やや南寄りで作られている。壁際に袖を作り、全体は壁の外に大きく掘り込まれて作られている。全長175cm、焚き口の幅55cmである。燃焼部と煙道との境は20cm以上の段差で仕切られている。燃焼部は、箱形の掘り方で東西85cm、南北60cmという大きなものである。その規模の大きさからして2穴式であろうか。袖から煙道にかけては、箱形の掘り方の内側に灰白色の粘土を厚く貼り込んでいるが、土器の破片や細かに割った石を混ぜ込んでいたらしい。煙道の先端寄りでは、天井部が残っていた。それを見ると煙道は、30度強の傾斜で外側に通じている。支脚は抜き取られていた。また、焼け土や灰、炭はほとんどなく、崩落する前に掻き出されている。

柱穴 なし 掘り方では、西壁の両隅でピットがそれぞれ検出されているが浅い。

周溝 西壁と南壁の一部で検出された。南東隅を除いて全周すると考えられる。幅10cm、深さ5cmである。

貯蔵穴 南東隅にある。長径62cm、短径51cm、深さ16cmの楕円形である。覆土が堅く締まっていた。

床面 平坦、全体が硬化し、壁際を除いて安定した硬化面が見られた。

遺物と出土状況 遺物は、覆土上層の2層に多く含まれ床面からのものは少ない。6の土師器甕は、カマド内から出土した。9は、杯の底部を転用したおもりである。手の平大の石8点が出土している。

所見 時期は、8世紀末から9世紀初頭である。

39号住居跡 (第110図 PL.23・52)

位置 3区 28F-17・18 38号住居跡と同じくローム漸移層上で、As-Cを混入する暗褐色砂質土の分布で検出した。精査の結果、住居に伴うカマドはなく、床らしい一定の硬化面も見られないことから竪穴状の遺構であると推定した。ただ、このような箇所は、4号溝の東、28E6～7グリッドにもあり平地式建物や竪穴住居に伴設される遺構の痕跡であろうか。遺構として取り上げたのはこれ1軒だけであるが、不明瞭な土層分布や不定形な掘り方をしたものは4区東に数箇所あった。遺構の少ない箇所でもあり、簡易な施設を想像したが確定できずに、いずれも図面としては掲載していない。また、重複する1号井戸との関係で上屋を推定したが、住居を切り込んで作られており井戸の方が新しい。

形状 推定方形、北西隅が狭く台形状に歪んでいる。

規模 東西3.70m、南北3.30m、壁高20cm **面積** 12.21㎡ **主軸方向** N45°E (南壁で計測)

覆土 6、7層に表記した。自然埋没である。

第4章 検出された遺構と遺物

カマド なし **柱穴** なし、南東隅や西側でピット4基が重複しているが、いずれもピットの方が新しい。
周溝 なし **貯蔵穴** なし **床面** ローム漸移層である暗褐色砂質土まで掘り込まれている。各階で15cm前後のレベルの差があり、一定の硬化面は検出できなかった。

遺物と出土状況 須恵器の杯と図示していないが碗が出土した。

所見 平面形態から住居として調査したが、カマドや貯蔵穴などの主要施設がなく、床面らしき跡も検出できなかった。住居に併設された竅穴状遺構が、重複する井戸の上屋施設とも考えられる。時期は、唯一の出土品である須恵器杯からすると9世紀代である。

40号住居跡（第111～114図 PL.23・24・53）

位置 5区 38M-O-3・4 **重複関係** なし

形状 推定方形、カマドを含む、北東側は調査区外のため未調査である。

規模 東西5.50m以上、南北5.20m、壁高52cm **面積** 20.28㎡以上 **主軸方向** N66° E

覆土 1～11層に分けた。主にAs-Cを混入する黒色砂質土や黒褐色砂質土で自然埋没している。検出面にはAs-Bが厚さ10cmで堆積していた。床面に近い壁際では混入するロームが多い。また5層には、隣接する8号溝を埋める黄褐色の細砂と同質のものが点々と混入している。

カマド 東壁に作られているが、右袖の一部を検出しただけである。出土した石の数からみて左右2対かそれ以上の石組みで壁外への掘り込みが少なく、煙道を除いた大半は屋内にある構造であろう。焚口で鳥居状に組まれていた石の4点は、P1と貯蔵穴の西側でまとまって出土した。住居を廃棄するに伴い、抜かれて放置されたものであろう。

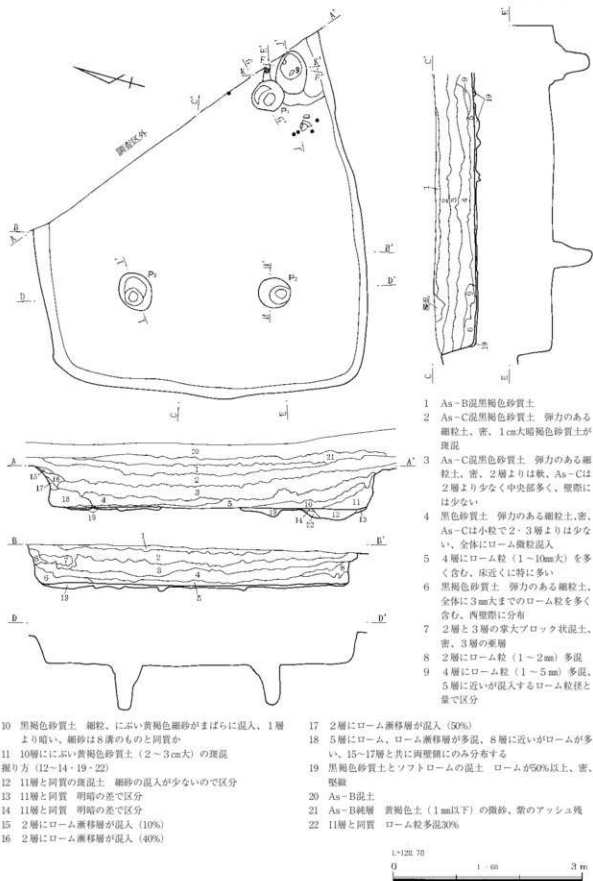
柱穴 4本主柱穴のうち、北東を除く3本を検出した。それぞれの長径・短径・深さは、P1が51・48・56cm、P2が49・48・64cm、P3が65・51・72cmである。26号住居跡のように壁に寄った穴の外側が深い。

貯蔵穴 南東隅、P1と接するようにある。長軸68cm、短軸52cm、深さ45cmの住居の長軸にあわせたような長方形である。穴のまわりは1m四方が床面から一段下がりが、西側には高さ数センチの土手つけられている。また、段の東側では調査区の壁にかかって炭化した板材が出土している。図示はしていないが、框目、最大で長さ10cm、幅15cmである。貯蔵穴の上にかぶせた蓋材の一部とみられる。さらに西側の土手に密着して灰白色の粘土が手の平大の塊になっていた。このような粘土は、量としては少ないが27号住居跡のカマドの右脇でも見られた。カマドの補強を目的に置かれていたのであろうか。 **周溝** なし

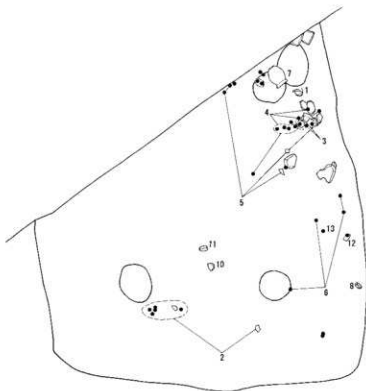
床面 ハードロームまで掘り込む。中央部が1～2cm程度高く、壁際が低い。柱穴に囲まれた住居の中央部に薄い硬化面が見られた。土間として、カマドの焚き口前まで続く気配である。

遺物と出土状況 全体に少ない。南壁側の覆土上位に集中している。7の甕は、袖のものらしい石と一緒に出土した。表面には炭化物が付着し、カマドで使われていたものである。炭化物は、厚さ1～2mmで一部はタール状をしている。内面には、うっすらと米粒らしい跡が残っている。13の鎗砲も、南壁の壁に沿った集中部分から出土した。

所見 時期は、甕の特徴から7世紀前後である。



第111図 40号住居跡平・断面



貯蔵穴



貯蔵穴

- 1 黒色砂質土 住居のフク土 11層と同質の灰混土 細砂の混入が少ないので区分
- 2 黒褐色砂質土

L=120.60

J



L=120.60

K



ピット1



ピット1

- 1 黒褐色砂質土 住居のフク土、5層の土
- 2 黒褐色砂質土 ローム(5~10mm大) 30%混入
- 3 黒褐色砂質土 軟弱、ローム粒少混
- 4 黒褐色砂質土 ロームブロック(5~10mm大) 40%混入、柱を支えるために詰め込んだ土と考える
- 5 黒褐色砂質土 2~4層よりずっとしまりあり、ロームブロック(3cm大) 30%混入、住居の掘り方の土と考える

ピット2



ピット2

- 1 黒褐色砂質土 住居フク土、5層の土
- 2 灰黄褐色砂質土 黄褐色砂質土50%混入
- 3 黄褐色砂質土 2層が20%混入
- 4 明黄褐色のロームの塊に黒褐色砂質土が40%混入、2、3層よりしまりあり、柱を支えるための土と考える
- 5 As-C混黒褐色砂質土 ロームブロック1cm大20%混入、掘り方の土と考える

ピット3



ピット3

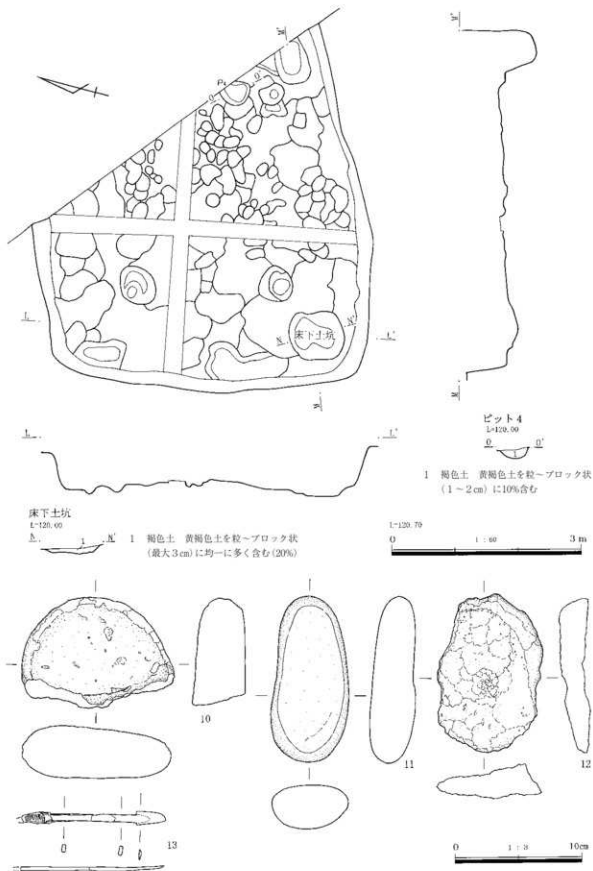
- 1 黒色砂質土 As-C少混、ローム粒(5~10mm) 10%混入
- 2 1cm大の黄褐色ロームブロックに1層が50%混入
- 3 ロームブロック(5cm)の固い土に黒褐色砂質土50%混入、柱を支えるための土と考える
- 4 黒褐色砂質土 黒色土30%混入、柱を支えるための土と考える
- 5 1層にロームブロック(1~3cm大)が30%混入、掘り方と考える

L=120.10

N

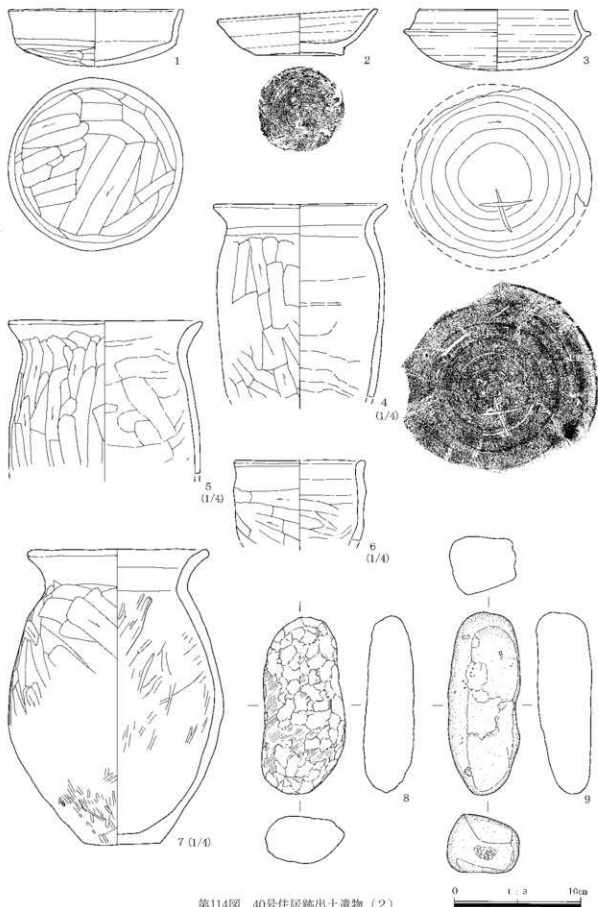


第112図 40号住居跡断面及び遺物分布



第113図 40号住居跡掘り方平・断面及び出土遺物(1)

第4章 検出された遺構と遺物



第114図 40号住居跡出土遺物(2)

3 掘立柱建物跡

概要 18棟を検出した。内訳は、2区が1号から9号までの9棟と最も多い。以下、3区が10号から14号、17号、18号の7棟、5区が15号、16号の2棟と、調査区の東が多く、西になると少ない。

検出状況 ローム漸移層で確認した。2区では、3箇所ですべて20基～50基のビットが集中していた。記録の中では、A群、B群、C群と仮称したものである。検討の結果、A群が2号から4号、8号となり、B群が5号から7号、9号となった。3区では、住居跡の精査や掘り方の調査で検出したものが多く、大型であることから当初は土坑として扱っていた。土坑に欠番があるのは、このためである。また、この手の大型のものは人為的に埋め戻されていて確認がむずかしかった。そのため、確認から漏れているものが既存の周囲に予想できる。このほかに、5号溝から4区の東側にかけても多数のビットを検出した。直径こそ小さいが一様に深い。しかし、建物としてのプランが組めず、構として検討したがビットのまま報告した。

占地傾向 数棟で小さな群を作る。小群は、住居の群と対応する。

- 1群 1号
- 2群 2号～4号、8号
- 3群 5号～7号、9号
- 4群 10号、11号、14号

構造 側柱式のみで、総柱式はない。3号には庇がついている。

- 梁間1間×桁行1間 6号、9号、12号
- 梁間1間×桁行2間 17号
- 梁間2間×桁行2間 2号、5号、15号
- 梁間2間×桁行3間 3号、4号
- 不明 1号、7号、8号、10号、11号、13号、14号、16号、18号

柱穴の特徴 一辺が60cm前後の方形のものと、直径が30～50cmまでの円形のものとに分けられる。方形のものは、典型例として10号、11号があげられ、重複している住居よりも古い。類例は6号、18号である。一方、円形のものは3号、4号を代表にあげることができる。方形のものに比べて小振りである。

遺物 13号では、ビット2から輪が1点出土した。埋設時に混入したと見るには完形に近く、地鎮具のように意図的に埋め込んだものであろうか。ほかの掘立柱建物跡では、これといった出土遺物がない。

重複関係 3号と4号が重複し、4号が新しい。

- 6号と9号が重複、新旧は確認していない。
- 10号と29号住居跡が重複し、住居跡が新しい。
- 12号と34号住居跡が重複、新旧は確認していない。
- 13号と4号溝が重複し、溝よりも新しい。
- 11号と14号が重複し、14号が新しい。

時期 13号をのぞいて出土遺物はなく、時期を知る資料としては遺構同士の重複だけである。住居との重複関係からすると、方形で大型の柱穴のものが先行し、円形のものが後に続くという変遷である。住居跡は、8世紀代と9世紀前半を境に前後で2つのピークがあり、これに対応するのであろう。

その他の特記事項 15号の桁の延長上で、遺らしきものが2条検出されている。路面自身は既になく、硬化面の下にある圧痕であるが、往来に使った通路の跡でもあるのだろうか。

第4章 検出された遺構と遺物

1号掘立柱建物跡 (第115図、PL24-6)

位置 2区 17QR-18・19グリッド 21号住居跡と3号住居跡の間にある。

重複 なし **主軸方向** N84° W 東西棟

形態 梁間2間、桁行3間か、東西3.70m以上、南北3.10m。各ピットの長径・短径・深さは、P1が60・47・16cmである。P2が35・29・26cm、P3が38・35・28cm、P4が36・34・22cm、P5が35・35・30cm、P6が43・42・34cmである。柱間は、P1とP2が160cm、P2とP3が70cm、P3とP4が140cm、P4とP5が190cm、P5とP6が120cmである。柱穴の覆土は、黒褐色砂質土かその下位にぶい黄褐色砂質土が自然堆積している。南西側は、調査区外のため未調査である。 **出土遺物** なし

所見 2号や3号、4号とは離れており、別の一群であろう。

2号掘立柱建物跡 (第115図、PL24-7)

位置 2区 17QR-20グリッド、1号掘立柱建物跡と3号・4号掘立柱建物跡との間にある。

重複 なし **主軸方向** N1° E 南北棟

形態 梁間2間、桁行2間、東西2.76m、南北3.06m。長径・短径・深さは、P1が34・28・20cm、P2が37・33・21cm、P3が31・28・21cm、P4が29・25・6cm、P5が27・24・5cm、P6が41・35・15cm、P7が32・30・16cm、P8が39・35・20cmである。柱間は、P1とP2が132cm、P2とP3が126cm、P3とP4が182cm、P4とP5が114cm、P5とP6が126cm、P6とP7が150cm、P7とP8が220cm、P8とP9が95cmである。桁は精査を重ねたが、柱穴のない所があり不揃いのままである。柱穴の覆土は、灰褐色砂質土、褐色砂質土による自然埋没である。

出土遺物 なし

所見 3号、4号、8号と一群である。

3号掘立柱建物跡 (第116図 PL24-8)

位置 2区 27QR-1・2グリッド

重複 4号掘立柱建物跡と同一位置に占地、北西に1mずれている。2棟の関係を示すP5の重複関係によると、4号の方が新しい。西梁間に3号土坑が重複している。 **主軸方向** N5° E 南北棟

形態 梁間2間、桁行3間の南北棟、東側に1間の庇がついている。身舎の東西は3.80m、南北4.70mである。庇は1.62mである。各柱穴の長径・短径・深さは、P1が35・35・28cm、P2が40・37以上・27cm、P3が35・33・20cm、P4が44・42・56cm、P5が45以上・38・23cm、P6が32・28・31cm、P7が58・54・43cm、P8が53・49・47cm、P9が34・30・29cm、P10が36・36・45cm、P11が45・40以上・41cm、P12が30・30・16cm、P13が36・32・27cm、P14が52・48・31cm、P15が43・31・13cm、P16が29・28・33cmである。ピット2、4、7、8、11は2基以上が重複している。柱穴の覆土は、暗褐色砂質土やぶい黄褐色砂質土で埋没しているが、ロームの混入がやや多い。 **出土遺物** なし

所見 2号、4号、8号と一群である。その中でも規模が大きく、庇を持ち、中心的な建物であろう。

4号掘立柱建物跡 (第117図 PL25-1)

位置 2区 27QR-1・2グリッド、周囲に住居に囲まれている。

重複 3号掘立柱建物跡と同一位置に占地、北西に1mずれている。2棟の関係を示すP2の重複関係によると、4号の方が新しい。北桁行に4号土坑が重複している。 **主軸方向** N11° E 南北棟

形態 梁間2間、桁行3間、東西は3.96mと4.24m、南北は3.24mと4.00mである。東側が狭く、台形となる。柱穴の長径・短径・深さは、P1が36・26・28cm、P2が53・49・80cm、P3が32・21・28cm、P4が44・35・38cm、P5が51・49・51cm、P6が36・33・13cm、P7が28・25・18cm、P8が37・31・25cm、P9が40・38・20cm、P10が18・18・42cmである。 **出土遺物** なし

所見 2号、3号、8号とは一群である。

5号掘立柱建物跡 (第117図 PL25-2)

位置 2区 27ST-7・8グリッド

重複 10号住居跡と重複しているが、調査時に新旧は確認していない。 **主軸方向** N12° W

形態 梁間2間、桁行2間か、南西は10号住居跡に重複して不明である。東西3.52m、南北3.94mである。柱穴の長径・短径・深さは、P1が47・42・24cm、P2が49・45・46cm、P3が48・44・22cm、P4が50・46・14cm、P5が46・42・19cmである。柱間は、P1とP2が168cm、P2とP3が189cm、P3とP4が191cm、P4とP5が200cmである。柱穴の覆土は、暗褐色砂質土、褐色砂質土で埋没している。自然埋没と思われるが、全体にロームの混入が多い。 **出土遺物** なし

所見 6号、7号、9号と一群である。掘り方に統一感がある。総柱式の可能性もある。

6号掘立柱建物跡 (第118図 PL25-3)

位置 2区 27・28TA-6・7グリッド

重複 南西隅は攪乱されている。9号掘立柱建物跡との新旧は確認していない。 **主軸方向** N2° E

形態 梁間1間、桁行1間、南西は宅地造成による攪乱のため不明である。東西2.94m、南北2.86mである。柱穴の長径・短径・深さは、P1が86・78・13cm、P2が98・90・33cm、P3が97・88・20cmである。柱穴の覆土は、暗褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土で自然埋没している。 **出土遺物** なし

所見 5号、7号、9号と一群である。この一群の中では、大型の掘り方で構成されている。大型の掘り方でも3区の一郡と違うのは、掘り込みがソフトロームの上位までと浅いことである。

7号掘立柱建物跡 (第118図 PL25-4)

位置 2区 27S-7・8グリッド

重複 11号住居跡に重複、新旧関係は不明である。 **主軸方向** N1° W 東西棟か

形態 梁間2間 南東は、市道で調査区外のため未調査である。南北は4.66mである。柱穴の長径・短径・深さは、P1が49・23・51cm、P2が38・36・33cm、P3が60・55・53cmである。柱間は、P1とP2が250cm、P2とP3が230cmである。柱穴の覆土は、暗褐色砂質土、褐色砂質土で自然埋没している。

出土遺物 なし **所見** 5号、6号、9号と一群である。掘り方の点では、5号とよく似ている。

8号掘立柱建物跡 (第118図 PL25-5)

位置 2区 27Q-1・2グリッド

重複 3号・4号掘立柱建物跡と隣接している。 **主軸方向** N19° W 南北棟か

形態 梁間2間、南北4.68m、南東は、市道で調査区外のため未調査である。柱穴の長径・短径・深さは、P1が50・45・58cm、P2が33・26・41cmである。P3が42・33・84cmである。柱間は、P1とP2が260cm、P2と

第4章 検出された遺構と遺物

P3が220cmである。柱穴の覆土は、暗褐色砂質土、黒褐色砂質土で自然埋没している。

出土遺物 なし **所見** 2号、3号、4号と一群である。棟方向に違いが見られる。

9号掘立柱建物跡（第119図 PL.25-6）

位置 2区 27・28TA-6・7グリッド

重複 6号掘立柱建物跡に重複している。新旧は不明である。 **主軸方向** N86° E 東西棟

形態 梁間1間、桁行1間、やや西辺が広く、東西が3.24mに対して、南北が2.24mと2.66mである。柱穴の長径・短径・深さは、P1が2基重複して57・40・48cm、P2が35・30・15cm、P3が40・38・53cm、P4が38・34・59cmである。柱穴の覆土は、黒褐色砂質土、暗褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土と一定しない。

出土遺物 なし

所見 5号、6号、7号と一群である。北西隅のP1は、新旧2基が重複している。プランは、そのうちの新しい柱穴で示したが古い方が深さも揃い、歪みは少ない。

10号掘立柱建物跡（第120図 PL.25-7）

位置 3区 28DE-5・6グリッド

重複 29号住居跡の貼床の下で検出され、住居跡が新しい。 **主軸方向** N80° W 東西棟

形態 梁間2間、桁行2間以上、東西4.06m以上、南北3.76mである。北東、南東は、攪乱されている上に水路にかかり調査区外である。柱穴の長径・短径・深さは、P1が71・55・32cm、P2が69・42・51cm、P3が65・53・47cm、P4が87・50・54cm、P5が82・61・74cm、P6が83・53・50cmである。いずれも方形のしっかりとした掘り方で、南桁行の2本の柱穴では直径15cm強の柱痕らしき硬化面が残されていた。柱間は、P1とP2、P4とP5が180cm、P3とP4、P5とP6、P6とP1が200cmである。柱穴の覆土は、にぶい黄褐色砂質土と黒褐色砂質土などとの混土で、人為的に埋められている。

出土遺物 なし **所見** 住居よりも古く方形で大型の掘り方で構成されている。この柱穴の掘り方は、11号、14号、18号とよく似ている。2間等間の総柱としても検討したが、該当する箇所にはなかった。

11号掘立柱建物跡（第119図 PL.25-8）

位置 3区 28DE-5グリッド

重複 28号住居跡より古い。14号掘立柱建物跡と重複している。 **主軸方向** N7° E 南北棟

形態 梁間2間、桁行1間以上、東西2.92m、柱穴の長径・短径・深さは、P1が52・45・48cm、P2が57・51・21cm、P3が75・62・52cm、P4が55・50・45cmである。柱間は、150cmである。 **出土遺物** なし

所見 住居よりも古い方形で大型の掘り方で構成されている。この掘り方は、10号、14号、18号とよく似ている。東に続くことはなく、西側は調査区外である。プラン内のピットは3基とも2基分が重複しているように、別棟があるのか、それとも建て替えをしていると考えられる。覆土の様子からは、建て替えが有力である。南北棟とみたのは、柱間が東よりも北の方が狭いからである。

12号掘立柱建物跡（第121図 PL.26-1）

位置 3区 28EF-11・12グリッド

重複 34号住居跡に重複している。新旧関係は不明である。 **主軸方向** N40° W 南北棟か

形態 梁間1間、桁行1間か、東西2.62m、南北3.84mである。柱穴の長径・短径・深さは、P1が43・41・22cm、P2が50・50・20cm、P3が40・33・21cmである。柱穴の覆土は、As-Cを混入する黒褐色砂質土で自然埋没している。 **出土遺物** なし

所見 東西を基本とする棟が多い中、唯一斜交している。34号住居跡の周辺にあるピットで、方1間のプランでまとめた。なお、周囲に同規模のピットが数基あり、住居の周帯帯に伴うものか、あるいは住居の外周の簡易な施設という見方もできる。

13号掘立柱建物跡 (第121図 PL.26-2、55)

位置 3区 28GH-7・8グリッド

重複 4号溝に重複している。溝よりも新しい。 **主軸方向** N89° E 東西棟か

形態 梁間2間、桁行2間以上、南西は調査区外のため不明である。東西3.86m以上、南北4.32mである。柱穴の長径・短径・深さは、P1が30・25・36cm、P2が60・49・78cm、P3が80・67・34cm、P4が46・43・33cm、P5が54・47・25cmである。P4は3基、P5は2基が重複している。また、P5では、底に円形をした柱痕らしき硬化面が検出されている。柱間は、P1とP2が180cm、P2とP3が170cm、P3とP4が255cm、P4とP5が195cmである。柱穴の覆土は、As-Cを混入する黒褐色砂質土で自然埋没している。 **出土遺物** 北桁行のピット2から、椀1点が出土している。

所見 4号溝より新しい。ピットの掘り方は、直径30cm以下ではかかに比べて細い。

14号掘立柱建物跡 (第122図 PL.26-3)

位置 3区 28E-5グリッド

重複 28号住居跡よりも古い。11号掘立柱建物跡のプラン内にある。 **主軸方向** N87° W 東西棟か

形態 梁間1間以上、桁行1間以上、南西は調査区外のため不明である。東西2.20m以上、南北1.86m以上である。柱穴の長径・短径・深さは、P1が33・30・47cm、P2が55・48・62cm、P3が48・43・30cmである。柱間は、P1とP2が210cm、P2とP3が146cmである。この間隔の違いで棟の方向を決定した。柱穴の覆土は、暗褐色砂質土と黒褐色砂質土の混土で自然埋没している。 **出土遺物** なし

所見 10号、11号と一群である。11号のプランに重複しているが、棟の方向は10号に近い東西棟らしい。柱穴の規模の違いから10号、11号と変遷し、3棟の中では最も新しいと考えられる。

15号掘立柱建物跡 (第122図 PL.26-4)

位置 5区 28・38OP-20・1グリッド、ローム漸移層で複数のピットを検出した。形状や大きさが似ていることから15号掘立柱建物跡とした。北東隅に柱穴は検出できず、掘立柱建物跡としては疑問が残る。立地の点では、40号住居跡に近く、併存する可能性をもつ。 **重複** なし **主軸方向** N12° E 南北棟

形態 梁間2間、桁行2間、東西はP3からP5が3.46m、南北はP1からP5が3.40mである。柱穴の長径・短径・深さは、P1が38・37・41cm、P2が32・30・34cm、P3が39・34・23cm、P4が37・35・17cm、P5が44・43・22cm、P6が42・34・48cmである。柱間は、P1とP2が165cm、P3とP4が180cm、P4とP5が166cm、P5とP6が140cm、P6とP1が230cmである。柱穴の覆土は、As-C混入黒褐色砂質土と暗褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土で自然埋没している。 **出土遺物** なし

所見 建物の西側に1号と2号、2本の道がある。

第4章 検出された遺構と遺物

16号掘立柱建物跡 (第123図 PL.26-5)

位置 5区 38OP-1・2グリッド、15号掘立柱建物跡の北側にある。

重複 P1は48号土坑より新しい。P2は47号土坑より新しい。 **主軸方向** N23° E (南辺)

形態 東西はP3とP5の間で4.80m、南北はP1とP3の間で5.40mである。柱穴の長径・短径・深さは、P1が36・29・39cm、P2が36・20・57cm、P3が41・38・59cm、P4が42・36・51cm、P5が51・41・55cmである。柱穴の覆土は、As-Cを混入する黒褐色砂質土で自然埋没している。図示していないが、ピット5の北東1mの所に粗粒輝石安山岩の割石を上面に置いたピットが1基あった。 **出土遺物** なし

所見 15号掘立柱建物跡の柱穴を精査中に南辺柱列と東辺柱列を検出した。掘り方、間隔、覆土の点で申し分なかったが直交せず、さらに残る二辺では柱穴を検出することができなかった。

17号掘立柱建物跡 (第123図 PL.26-6)

位置 3区 28DE-16・17グリッド

重複 P5は37号土坑よりも古い。 **主軸方向** N41° E 南北棟

形態 梁間1間、桁行2間、東西はP1とP2が2.06m、南北はP2とP4が3.80mである。柱穴の長径・短径・深さは、P1が35・33・25cm、P2が41・38・31cm、P3が39・37・39cm、P4が35・33・30cm、P5が30・25・39cm、P6が45・40・61cm、P7が40・30・54cmである。柱間は、P1とP2が260cm、P2とP3が70cm、P3とP4が140cm、P4とP5が180cm、P5とP6が120cmである。柱穴の覆土は、にぶい黄褐色砂質土、黒褐色砂質土で自然埋没している。 **出土遺物** なし

所見 ピット94-96、102、116、117で構成される。柱穴は円形で、P2とP4がほかの穴に比べてやや浅い。土坑として扱った長径60-80cm程の柱穴と考えられる穴は、3区の東側、18号掘立柱建物跡の周辺に集中する。ピットとして扱った長径40-50cm以内の穴は、3区全体で確認したが掘立柱建物跡もしくは柱穴として認識できたのは17号掘立柱建物跡のみである。

18号掘立柱建物跡 (第124図 PL.26-7)

位置 3区 28C-14・15グリッド **主軸方向** 東西棟 N54° W

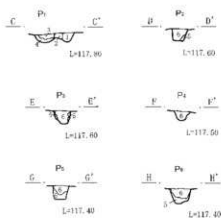
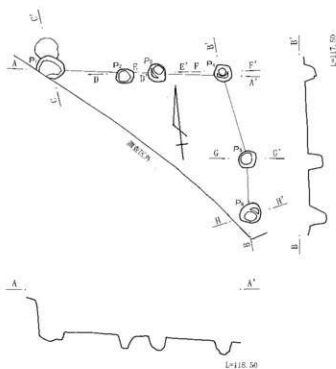
重複 プラン内に22号住居跡がある。住居跡よりも古い。P1は31号土坑、P2は42号、43号土坑、P3は28号土坑と重複している。また32号土坑は、18号掘立柱建物跡よりも古い。

形態 梁間2間、南北は、P1とP3の間が4.44mである。柱穴の長径・短径・深さは、P1が79・61・52cm、P2が53・43・53cm、P3が57・54・56cm、P4が63・54・78cm、P5が70・55・57cmである。柱穴の覆土は、As-Cが混入する黒褐色砂質土、黒褐色砂質土で人為埋没している。 **出土遺物** なし

所見 3区北半の土坑やピットが最も密集している中にある。17号と違うのは、10号に似ている方形で大型の掘り方である。各ピットは、土坑で取り上げたものを検討の結果、18号掘立柱建物跡とした。なお、P2は43号土坑と重複し、P3は32号土坑内で少なくとも3基の柱穴と重複している。プランとしては、P3から43号土坑、30号土坑と並ぶ列も考えられる。

3 掘立柱建物跡

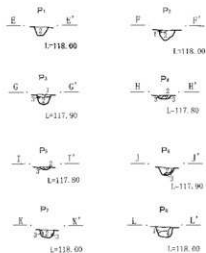
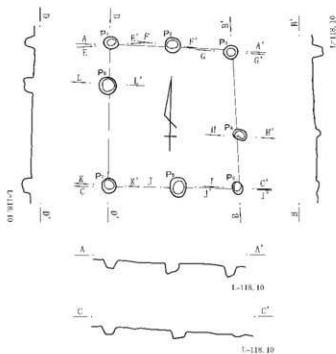
1号掘立



ピット1～6

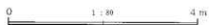
- 1 褐色土 ソフトローム
- 2 にぶい黄褐色土 ソフトローム土が30%見られる
- 3 にぶい黄褐色土 ソフトローム土が20%見られる
- 4 黒褐色土 ローム粒(3～5mm)が5%見られる
- 5 にぶい黄褐色土 ソフトローム土が50%以上を占める
- 6 黒褐色土 ソフトローム土が塊点状に30%見られる

2号掘立



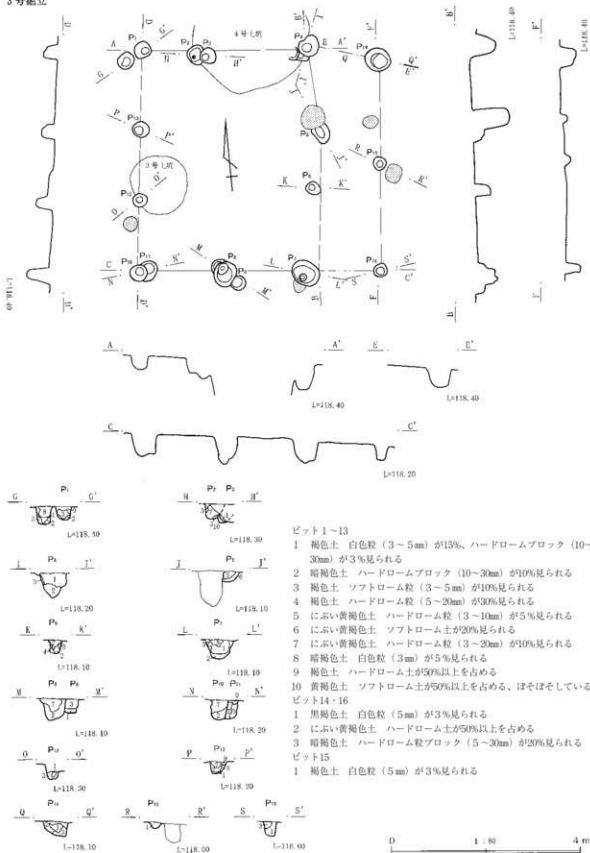
ピット1～8

- 1 褐色土 ローム粒(5～20mm)が3%見られる
- 2 灰黄褐色土 ローム粒(5～10mm)が3%見られる
- 3 黄褐色土 ソフトローム土が50%以上を占める
- 4 暗褐色土 ハードローム粒(5mm)が5%、ハードロームブロック(10～20mm)が3%見られる



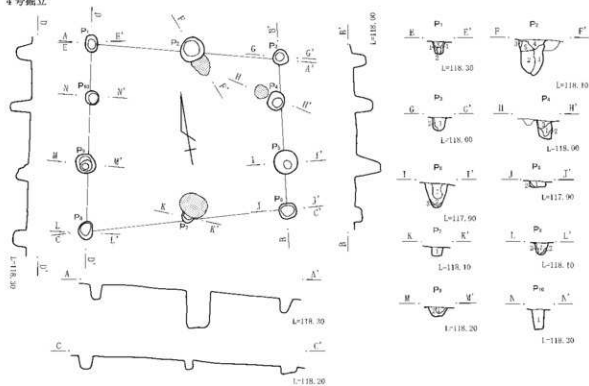
第115図 1号・2号掘立柱建物跡平・断面

3号掘立



第116図 3号掘立柱建物跡平・断面

4号掘立



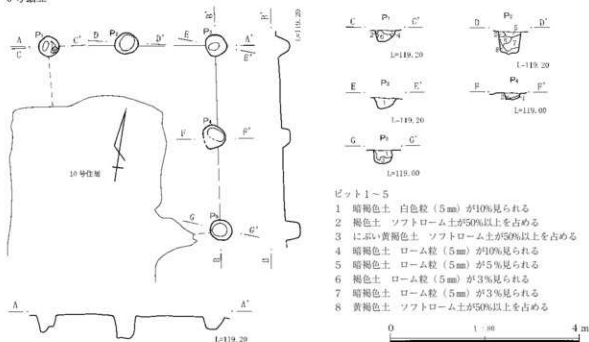
ビット1・3-10

- 1 暗褐色土 白色粒 (3~5mm) が5%見られる
- 2 暗褐色土 ローム粒 (3mm) が3%見られる
- 3 黒褐色土 ソフトローム粒 (3mm) が5%, ハードローム粒 (10~20mm) が30%見られる

ビット2

- 1 褐色土 白色粒 (3~5mm) が15%, ハードロームブロック (10~30mm) が3%見られる
- 2 暗褐色土 ハードロームブロック (10~30mm) が10%見られる
- 3 褐色土 ソフトローム粒 (3~5mm) が10%見られる
- 4 暗褐色土 ハードローム粒 (5~20mm) が10%見られる
- 5 褐色土 ハードローム粒 (5~20mm) が30%見られる

5号掘立



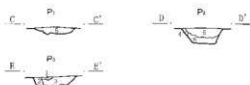
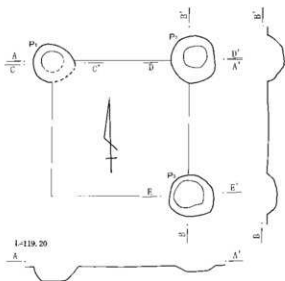
ビット1-5

- 1 暗褐色土 白色粒 (5mm) が10%見られる
- 2 褐色土 ソフトローム土が50%以上を占める
- 3 に近い黄褐色土 ソフトローム土が50%以上を占める
- 4 暗褐色土 ローム粒 (5mm) が10%見られる
- 5 暗褐色土 ローム粒 (5mm) が5%見られる
- 6 褐色土 ローム粒 (5mm) が3%見られる
- 7 暗褐色土 ローム粒 (5mm) が3%見られる
- 8 黄褐色土 ソフトローム土が50%以上を占める

第117図 4号・5号掘立柱建物跡平・断面

第4章 検出された遺構と遺物

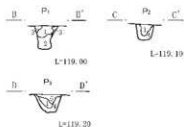
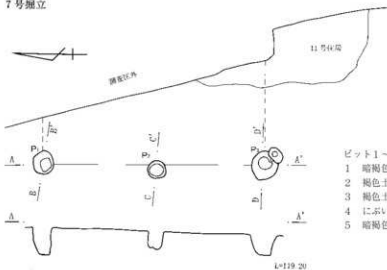
6号掘立



ビット1~3

- 1 灰黄褐色土 白色粒 (3mm) が5%見られる
- 2 にぶい黄褐色土 白色粒 (3mm) が3%見られる
- 3 暗褐色土 白色粒 (3~5mm) が10%見られる
- 4 褐色土 ソフトローム土が50%以上を占める
- 5 にぶい黄褐色土 ローム粒 (3~10mm) 20%、焼土粒 (5mm) が3%見られる
- 6 にぶい黄褐色土 ハードローム粒 (5~20mm) が10%見られる

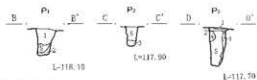
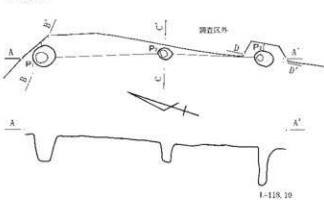
7号掘立



ビット1~3

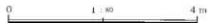
- 1 暗褐色土 白色粒 (5mm) が10%見られる
- 2 褐色土 ソフトローム粒 (5~10mm) が10%見られる
- 3 褐色土 ソフトローム土が50%以上を占める
- 4 にぶい黄褐色土 ソフトローム土が50%以上を占める
- 5 暗褐色土 ローム粒 (5mm) が10%見られる

8号掘立



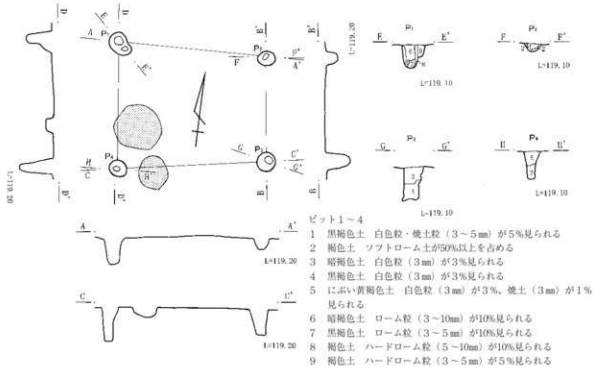
ビット1~3

- 1 黒褐色土 白色粒 (5mm) が3%見られる
- 2 にぶい黄褐色土 ハードローム土が50%以上を占める
- 3 黒褐色土 白色粒 (5mm)、ハードローム粒 (5~10mm) が3%見られる
- 4 にぶい黄褐色土 ハードローム土が50%以上を占める
- 5 暗褐色土 ハードローム粒ブロック (5~30mm) が20%見られる

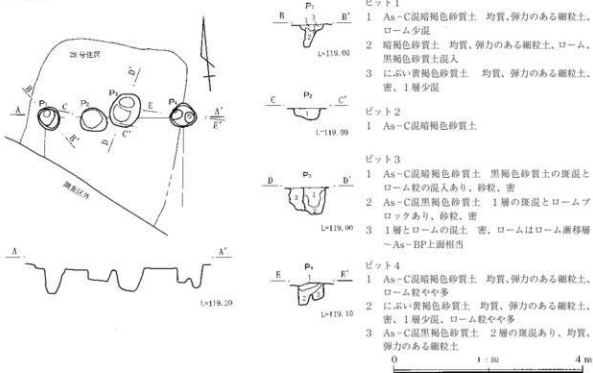


第118図 6号・7号・8号掘立柱建物跡平・断面

9号掘立



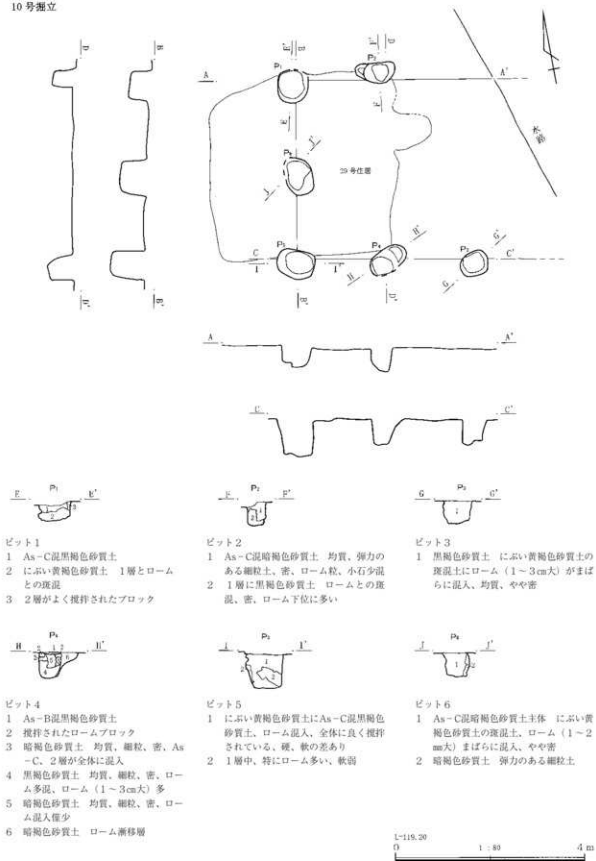
11号掘立



第119図 9号・11号掘立柱建物跡平・断面

第4章 検出された遺構と遺物

10号掘立



ビット1

- 1 As-C混黒褐色砂質土
- 2 におい黄褐色砂質土 1層とロームとの混混
- 3 2層がよく攪拌されたブロック

ビット2

- 1 As-C混暗褐色砂質土 均質、弾力のある細粒土、密、ローム粒、小石少混
- 2 1層に黒褐色砂質土 ロームとの混混、密、ローム下位に多い

ビット3

- 1 黒褐色砂質土 におい黄褐色砂質土の混混土にローム(1~3cm大)がまばらに混入、均質、やや密

ビット4

- 1 As-B混黒褐色砂質土
- 2 攪拌されたロームブロック
- 3 暗褐色砂質土 均質、細粒、密、As-C、2層が全体に混入
- 4 黒褐色砂質土 均質、細粒、密、ローム多混、ローム(1~3cm大)多
- 5 暗褐色砂質土 均質、細粒、密、ローム混入僅少
- 6 暗褐色砂質土 ローム薄層

ビット5

- 1 におい黄褐色砂質土にAs-C混黒褐色砂質土、ローム混入、全体に良く攪拌されている。硬、軟の差あり
- 2 1層中、特にローム多い、軟弱

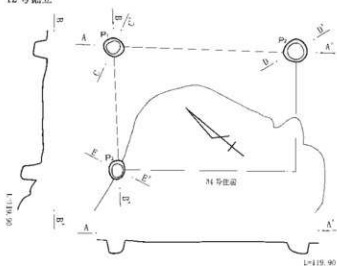
ビット6

- 1 As-C混暗褐色砂質土主体 におい黄褐色砂質土の混混土、ローム(1~2mm大)まばらに混入、やや密
- 2 暗褐色砂質土 弾力のある細粒土

第120図 10号掘立柱建物跡平・断面

3 掘立柱建物跡

12号掘立



ピット1

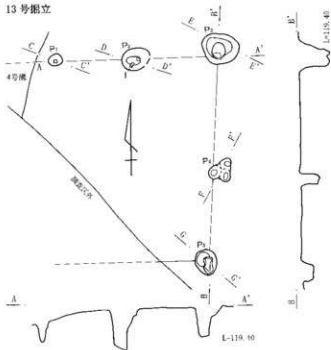
- 1 As-C混黒褐色土 やや硬、暗褐色砂質土 50%炭泥



ピット2・3

- 1 As-C混黒褐色砂質土 暗褐色砂質土50%炭泥
- 2 暗褐色砂質土

13号掘立



ピット1

- 1 As-C混黒褐色砂質土
- 2 1層とロームの炭泥



ピット2

- 1 As-C混黒褐色土 暗褐色土が炭泥
- 2 褐色砂質土 ローム粒15%が混入
- 3 黒褐色砂質土



ピット3

- 1 As-C混黒褐色土 暗褐色土が炭泥
- 2 暗褐色砂質土 褐色砂質土が炭泥



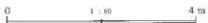
ピット4

- 1 As-C混黒褐色土 暗褐色土少混
- 2 暗褐色砂質土 As-C少混



ピット5

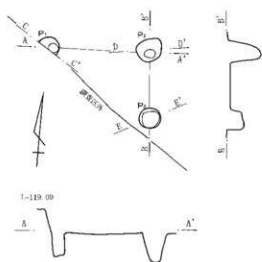
- 1 As-C少混黒褐色砂質土
- 2 にふい、黄褐色砂質土 ローム粒混入、やや密
- 3 ロームブロック



第121図 12号・13号掘立柱建物跡平・断面及び出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

14号掘立



ビット1

- 1 にぶい黄褐色砂質土 ロームブロック(5~10mm)が3%混入、As-C少混
- 2 黒褐色砂質土 焼土粒、微混
- 3 As-C混黒褐色砂質土 暗褐色砂質土混



ビット2

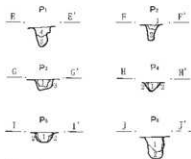
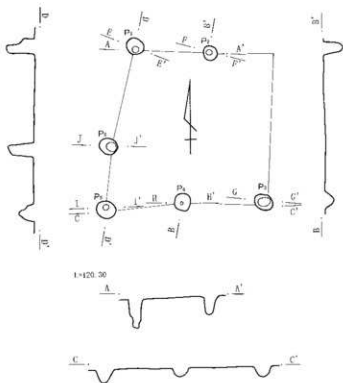
- 1 にぶい黄褐色砂質土 ロームブロック(5~10mm)が3%混入、As-C少混
- 2 黒褐色砂質土 ローム粒、ロームブロック(5mm)が10%混入
- 3 黄褐色砂質土 2層が30%混入



ビット3

- 1 暗褐色砂質土 As-C混黒褐色土、ローム粒、ロームブロック(1cm)が30%混入
- 2 にぶい黄褐色砂質土

15号掘立



ビット1~6

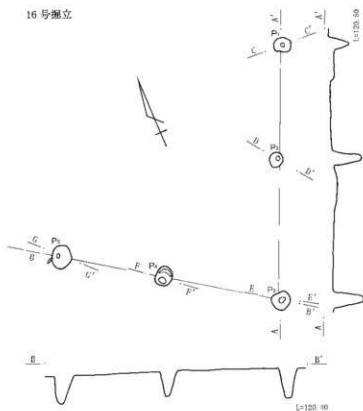
- 1 As-C混黒褐色砂質土 As-Cは1mm大、弾力のある細粒土、G-Iは黒に近く、E・F・Jは明るく褐色系、均質、密
- 2 暗褐色砂質土 1層に、ローム混入の細粒土、密
- 3 にぶい黄褐色砂質土 ローム漸移層給原の弾力のある細粒土、1cmまでのローム粒混入
- 4 1層にローム漸移層混入 カクラン様でしまり弱
- 5 暗褐色砂質土 粘性を帯び密、壁とは固さ、色調で区別され、埋没土と判断



第122図 14号・15号掘立柱建物跡平・断面

3 掘立柱建物跡

16号掘立



ピット1
 1 As-C混黒褐色砂質土
 2 黄褐色土 細粒、密、As-BP粒が攪拌状態で混入
 L=120.50

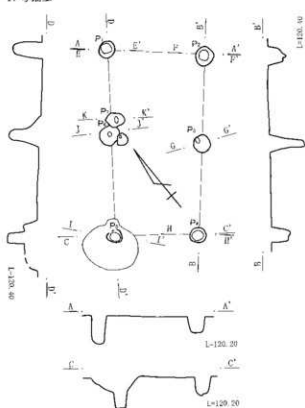
ピット2
 1 47号土坑フタ土
 2 1層にローム粒少混 1層とはロームの有無で区別
 3 1層にローム粒多混 細粒、密
 L=120.40

ピット3
 1 As-C混黒褐色砂質土 細粒、密
 2 1層に5mmまでのローム粒多混
 3 As-C混黒褐色砂質土 細粒、密、ローム粒(1-2mm)大が混入し、壁際1cm大のローム粒あり
 L=120.40

ピット4
 1 As-C混黒褐色砂質土 細粒、密
 2 As-C混黒褐色砂質土 細粒、密、壁際にローム粒混入
 3 1層に50%のローム粒混入、密
 L=120.30

ピット5
 1 As-C混黒褐色砂質土 ブロック状、2次堆積か
 2 にぶい黄褐色砂質土 ローム漸移層の2次堆積
 3 As-C混黒褐色砂質土 細粒、均質、密
 L=120.20

17号掘立



ピット1-2
 1 にぶい黄褐色砂質土 細粒、均質、密、微砂粒混入
 2 1層にローム粒混入
 L=120.40

ピット3
 1 黒褐色砂質土に褐色砂質土が混入
 2 にぶい黄褐色砂質土
 L=120.30

ピット4
 1 にぶい黄褐色砂質土と黒褐色砂質土の混混土 細粒、均質、密
 2 1層にローム粒混入
 L=120.30

ピット5
 1 黒褐色砂質土
 L=120.30

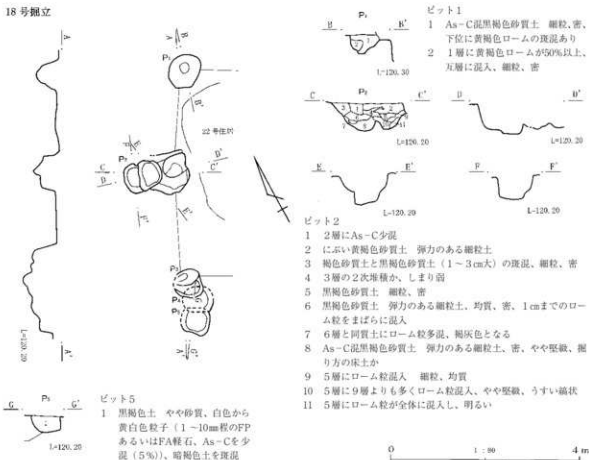
ピット6-7
 1 にぶい黄褐色砂質土
 2 As-C混黒褐色砂質土に1層混入
 3 黒褐色砂質土と1層(2-3cm大)の混混、密
 L=120.30

0 1:40 4m

第123図 16号・17号掘立柱建物跡平・断面

第4章 検出された遺構と遺物

18号掘立



第124図 18号掘立柱建物跡平・断面

掘立柱建物跡計測表

下線, ※は数値以上と推定されるもの

No.	区	グリッド	時代	棟方向	梁間・桁行	規模 (m)	重 複
1	2	17QR-18-19	9C	N84°W	2間×3間※	3.1 × 3.7	
2	2	17QR-20	9C	N 1°E	2間×2間	2.76 × 3.06	
3	2	27QR-1-2	9C	N 5°E	2間×3間	3.80 × 4.70	3掘立→4掘立
4	2	27QR-1-2	9C	N11°E	2間×3間	3.96 × 4.00	3掘立→4掘立
5	2	27ST-7-8	9C	N12°W	2間×2間	3.94 × 3.52	10住
6	2	27-28TA-6-7	9C	N 2°E	1間×1間	2.86 × 2.94	9掘立
7	2	27S-7-8	9C	N 1°W	2間× - ※	4.66 × -	11住
8	2	27Q-1-2	9C	N19°W	2間× - ※	4.68 × -	3・4掘立
9	2	27-28TA-6-7	9C	N86°E	1間×1間	2.66 × 3.24	6掘立
10	3	28DE-5-6	8C	N80°W	2間×2間※	3.76 × 4.06	10掘立→29住
11	3	28DE-5	8C	N 7°E	2間×1間※	2.92 × -	11掘立→28住 14掘立
12	3	28EF-11-12	9C	N40°W	1間×1間	2.62 × 3.84	34住
13	3	28GH-7-8	8C	N89°E	2間×2間※	4.32 × 3.86	4溝→13掘立
14	3	28E-5	8C	N87°W	1間×1間※	1.86 × 2.20	14掘立→28住 11掘立
15	5	28-38OP-20-1	9C	N12°E	2間×2間	3.40 × 3.46	
16	5	38OP-1-2	9C	N23°E	2間×2間※	5.40 × 4.80	47・48坑→16掘立
17	3	28DE-16-17	9C	N41°E	1間×2間	2.06 × 3.80	17掘立→37坑
18	3	28C-14-15	9C	N54°W	2間× - ※	4.44 × -	18掘立→22住、32坑→18掘立

4 土坑

概要 土坑は56基を検出した。このうち、2、6～10、16、17、28、31、42、43号の12基は掘立柱建物跡の柱穴に変更して報告した。また50号は、調査した時の遺構図の作成記録がないため、図版に断面の写真だけを掲載した。

1区は、1号の1基だけである。台地の縁辺部にあり、周辺にある4基のピットとともに、地震による地滑りで壁の中段以下が東西方向に50cmほどずれている。地震の様子を知る貴重な資料である。土坑として取り上げてはいるが、形状や規模から隣り合う住居跡に付属する、浅い井戸と考えられる。

2区は、22軒もの住居跡がありながら、2基だけとその数は少ない。4号は、氷室のような貯蔵施設か、形状から井戸と考えられる。長軸が250cm前後と大型で、底面は平坦で中央には穴があいている。上段は方形で井戸枠を連想させ、底面の穴は井筒に相当するであろうか。最深部は、検出面から157cmと深く、暗色帯にまで達している。

3区は、5号から44号、51、52号の42基である。このうち上記の11基は掘立柱建物跡の柱穴に変更した。それぞれは、10号と11号、18号掘立柱建物跡が該当する。いずれも方形で大型の掘り方が共通した特徴である。19号から25号は、5号溝の外側に柵や土塁を念頭に精査、検出したものである。覆土の点でAs-Cが混入するものが多い中、数基だけがAs-Bを混入して目を引いた。また、18号掘立柱建物跡と重複している32号は、4号と同じ形状である。

4区では検出がなく、5区で45号から50号、53号から56号の10基が検出されている。

以上のように、土坑は住居の分布傾向と同じく、調査区の東に行くほど多くなる。この分布傾向は、住居に関係した用途であることを示しているのであろうが、性格を特定できるようなものはほとんどなく、遺物にしても4号、40号、41号、47号が数少ない出土例である。

1号土坑 (第125図 PL26-8、PL27-1) 1区 17O-20グリッド、長軸110cm、短軸96cm、深さ121cmの円形である。断面は円筒形をしている。As-BPグループの上面、底面から50cmの箇所が地震のために西側に大きく50cmほどずれている。図の中では、I層、J層がAs-BPグループでG層とH層はその上層が液状化して横に滑っている層である。この上下には、厚さ1cm強の薄い黒色土がある。液状化とともに噴砂の跡と見られる。覆土は、4層、3層、2層と順に埋没し、その後陥没して最後に蓋をするように1層の堆積していることがわかる。3層と4層には石とともに、細かな川砂やローム粒を多く含んでいる。これらは、湧水により壁から剥落したものと外から流れ込んだものであろう。時期は、地震以前で1号や2号の住居跡と同じく8世紀代である。形状や規模の点から見て住居跡に伴う井戸の可能性が高く、廃絶するにあたっては大きさが揃えられた感がある石を混ぜて埋められたのであろう。出土した遺物はない。

3号土坑 (第125図 PL27-3) 2区 27R-1グリッド、長軸125cm、短軸117cm、深さ23cmの円形。断面は皿状、覆土はにぶい黄褐色砂質土である。3号、4号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。土師器杯の小片が出土した。

4号土坑 (第126・133図 PL27-4・5、53) 2区 26Q-2グリッド、住居跡に囲まれた中心にある。上面は、長軸257cm、短軸245cm、深さ157cmの隅丸方形をしている。断面は箱形で、底面の中央部には直径90cm、深

第4章 検出された遺構と遺物

さが30cmほどの穴があいている。覆土は、褐色砂質土と暗褐色砂質土を主体とし、上位ほど混入するロームの量が多い。ロームの状態や層が薄く、互層状態で連続しているところからみると、人為的に埋め戻されている可能性がある。133図1で示した杯は、覆土の上位で出土しているが、埋没時に混入したものであろう。3号、4号の掘立柱建物跡は、埋没後に作られている。遺構の時期は、掘立柱建物跡との前後関係や出土した杯の特徴からみて8世紀代と考えておきたい。用途は、底にあいた穴を井筒とみて井戸説をとるが、二段の掘り方をしていることから水室のような貯蔵施設とも考えられる。しかし井戸とした場合、壁にウロのような箇所はなく、水の湧いた形跡に乏しいのが難点である。32号土坑は、深さが半分ほどで違いがみられるものの規模、形状ともによく似ており、類例としてあげられる。

5号土坑 (第126図 PL.27-6) 3区 28F-12グリッド、34号住居跡の北2mに位置する。長軸178cm、短軸109cm、深さ25cmの楕円形である。断面形は浅い皿状である。覆土は、暗褐色砂質土が主体で、上面には最大でも2cm程度の炭化物が多く混入していた。炭化物は、板状のものが焼けて粉末化したものらしいが、薄く赤みが差す程度で焼土や灰らしいものはなく、一時的に火を焚いた跡かと思われる。覆土に混入して、土師器の甕の破片が出土した。時期は、覆土の様子から古代である。最も隣接している34号住居跡の屋外施設という関係が考えられる。

11号土坑 (第126図 PL.27-7) 3区 28E-8グリッド、31号住居跡の北5mにある。長軸70cm、短軸62cm、深さ27cmの円形である。覆土は、主に暗褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。

12号土坑 (第127図 PL.27-8) 3区 28G-7グリッド、33号住居跡の北2mにある。長軸137cm、短軸137cm、深さ42cmの円形。覆土は、主に暗褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。

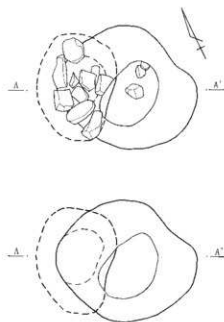
13号土坑 (第127図 PL.28-1) 3区 28G-7グリッド、長軸102cm、短軸54cm、深さ20cmの楕円形である。掘り込みはローム漸移層までと浅い。覆土は、主に黒褐色砂質土で自然埋没している。覆土に混入して、須恵器甕の破片が出土した。

14号土坑 (第127図 PL.28-2) 3区 28G-7・8グリッド、長軸83cm、短軸65cm、深さ19cmの楕円形である。覆土は、As-Cが混入した黒褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。

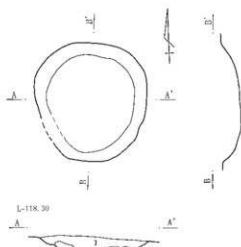
15号・18号土坑 (第127図 PL.28-3・4) 3区 28G-9・10グリッドで重複して検出された。18号が新しい。15号は長軸198cm、短軸145cm、深さ20cmの楕円形である。覆土は、にぶい黄褐色砂質土で、拳大のブロックで混入するロームが多い。攪乱と思わせるほどしまりがなかった。18号は長軸120cm、短軸120cm、深さ20cmの円形である。覆土は、にぶい黄褐色砂質土で埋没している。15号から土師器甕、須恵器椀、剥片、18号から土師器杯、甕、須恵器椀の破片が出土した。水道管の攪乱もあるが、18号にかかる南の1条は17号や34号の住居跡に見られる地割れのようなものである。方向としても一致している。

19号土坑 (第128図 PL.28-5) 3区 28I-10グリッド、長軸105cm、短軸100cm、深さ36cmの円形である。底面の中央に直径10cm大、深さ40cmのピットがあいている。覆土は、As-Cが混入した黒褐色砂質土で自然

1号土坑



3号土坑



3号土坑

- 1 にぶい黄褐色砂質土 細粒、やや密、1-2cm大ローム粒まばらに混入
- 2 にぶい黄褐色砂質土 細粒、やや密、1cm以下ローム粒を多混

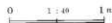
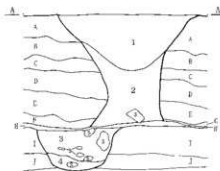
1号土坑

- 1 黒褐色土 As-C混黄褐色砂性ブロック含む
- 2 黒色土 As-C無、粘性有り、ロームブロック含む、褐色砂質ブロック含む
- 3 黒褐色土 砂質土、黒色土ブロック、ローム粒、川砂混、礫混
- 4 黒褐色土 砂礫、川砂多、ローム粒含む

1号土坑地山

- A 黒褐色土 白色軽石粒含む、褐色ブロック混入
- B 暗灰黄色土 As-YP含む
- C 明黄褐色土 As-YP多
- D 黄褐色土 As-OK混
- E 黄褐色土 As-OK少、砂質
- F 黄褐色土 砂質土
- G 黄褐色土 粘質土、白色粘質土ブロック含-地滑り層
- H 黒褐色土 ローム粒混
- I にぶい黄色土 As-BP、砂粒多
- J 黄褐色土 As-BP砂粒ブロック含む

L-118.00



第125図 1号・3号土坑平・断面

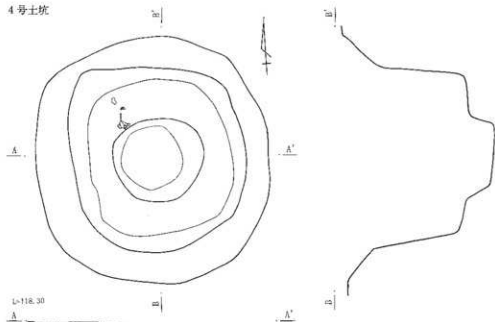
埋没している。As-Cの混入は上部ほど多い。出土した遺物はない。

20号土坑 (第128図 PL.28-6) 3区 28I-11グリッド、長軸92cm、短軸61cm、深さ20cmの楕円形である。As-Bが混入した黒色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。

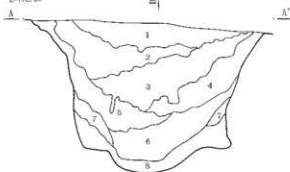
21号土坑 (第128図 PL.28-7) 3区 28HI-11グリッド、長軸135cm、短軸130cm、深さ30cmの円形である。覆土は、As-Bが混入した黒色砂質土で埋没している。土師器杯の破片が出土した。

第4章 検出された遺構と遺物

4号土坑



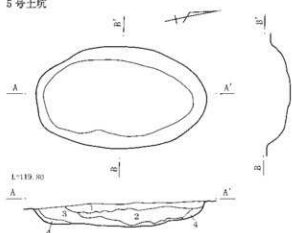
L-118.30



4号土坑

- 1 濃い黄褐色土 ソフトローム粒 (5mm) を20%、ソフトロームブロック (10-30mm) を10%含む
- 2 黄褐色土 ソフトロームブロック (30-50mm) を30%含む
- 3 黄褐色土 ソフトロームブロック (30-50mm) を40%含む
- 4 暗褐色土 ソフトローム土を10%含む、5層よりもしりあり
- 5 暗褐色土 ソフトローム土を10%含む
- 6 暗褐色土 ソフトローム土を5%含む
- 7 褐色土 ソフトローム土を20%含む
- 8 褐色土 ソフトローム土を10%、ソフトロームブロック (10-50mm) を30%含む

5号土坑



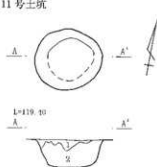
L-119.80



5号土坑

- 1 暗褐色土 As-C粒 (3-5mm) が20%、炭化物粒 (5-10mm) が5%見られる
- 2 暗褐色土 As-C粒 (3-5mm) が5%、炭化物粒 (5-10mm) が5%見られる
- 3 黒色土 As-C粒 (3-5mm) が20%、炭化物粒 (5-20mm) が10%見られる
- 4 褐色土 ソフトローム土が50%以上を占める

11号土坑



L-119.40



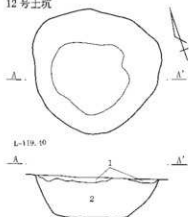
11号土坑

- 1 黒褐色砂質土 As-C混黒色土が少混
- 2 暗褐色砂質土 濃い黄褐色砂質土が混混



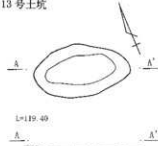
第126図 4号・5号・11号土坑平・断面

12号土坑



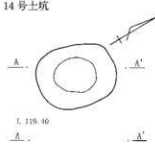
- 1 As-C混黒色砂質土
2 暗褐色砂質土 におい黄褐色砂質土が混入
(ソフトロームよりは暗い)

13号土坑



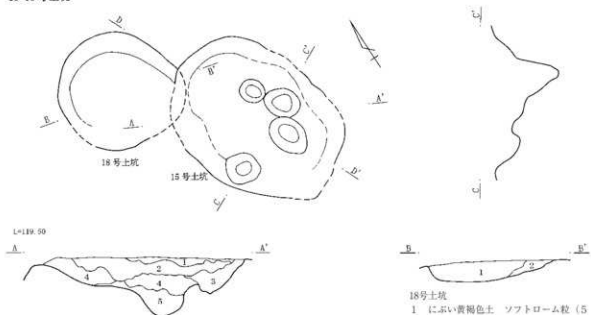
- 1 黒褐色砂質土にローム(5~10mm)3%混入

14号土坑



- 1 As-C混黒色砂質土に褐色~暗褐色砂質土が混入

15・18号土坑



15号土坑

- 1 におい黄褐色土 白色粒(3~5mm)が10%見られる
2 におい黄褐色土 ソフトローム粒(3~5mm)が10%、ソフトロームブロック(20~30mm)が5%、焼土粒(3~5mm)が3%見られる
3 暗褐色土 白色粒(5mm)が3%見られる
4 暗褐色土 ハードローム粒(5mm)が5%、ハードロームブロック(10~30mm)が3%見られる
5 におい黄褐色土 ソフトローム土が50%以上を占め、ハードロームブロック(20~30mm)が5%見られる

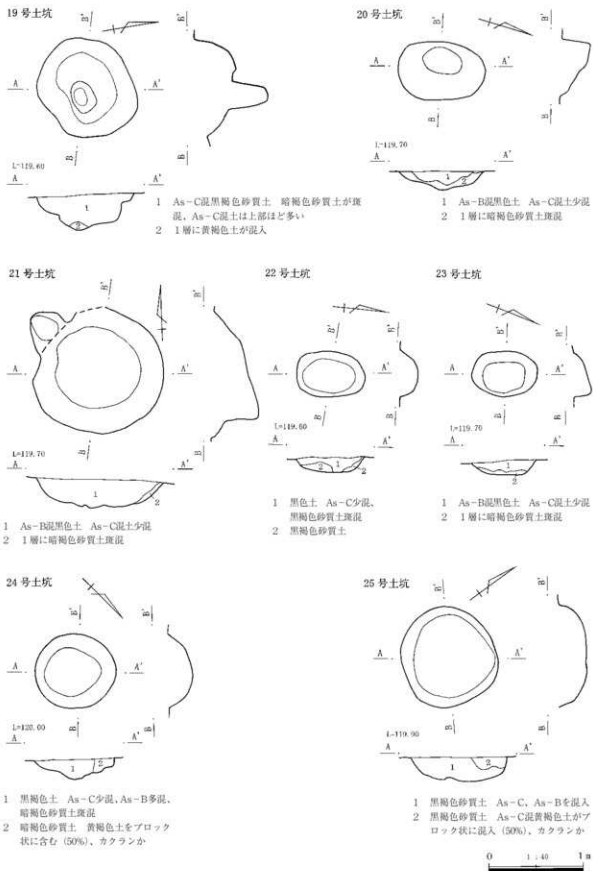
18号土坑

- 1 におい黄褐色土 ソフトローム粒(5mm)が3%、ソフトロームブロック(20~30mm)が5%見られる
2 褐色土 ソフトローム土が50%以上を占める

第127図 12号~15号・18号土坑平・断面

0 1:40 1m

第4章 検出された遺構と遺物



第128図 19号～25号土坑平・断面

22号土坑（第128図 PL.28-8） 3区 28I-11グリッド、長軸72cm、短軸49cm、深さ17cmの楕円形である。覆土は、黒褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。

23号土坑（第128図 PL.29-1） 3区 28H-11グリッド、長軸70cm、短軸47cm、深さ15cmの楕円形である。覆土は、As-Bが混入した黒褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。

24号土坑（第128図 PL.29-2） 3区 28H-13グリッド、長軸3cm、短軸82cm、深さ21cmの円形である。覆土は、As-Bが混入した黒褐色砂質土で自然埋没している。覆土から土師器甕の破片と、遺構外として165図35に掲載した滑石製有孔方板1点が出土した。有孔方板は、長さ4.70cm、最大幅3.30cm、厚さ0.50cm、やや青みがかった。片面穿孔、薄く剥がれた剥片の周囲と表裏両面に一部を粗く磨いて仕上げています。覆土の特徴から混入遺物と考えた。

25号土坑（第128図 PL.29-3） 3区 28H-13グリッド、長軸103cm、短軸100cm、深さ25cmの円形である。覆土は、As-Bが混入した黒褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。

26号土坑（第129図 PL.29-4） 3区 28CD-13グリッド、長軸90cm、短軸70cm以上、深さ12cmの円形。覆土は、As-Cが混入した黒褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。

27号土坑（第129図 PL.29-5） 3区 28D-15グリッド、長軸135cm、短軸67cm、深さ30cmの長方形である。円形や楕円形をした土坑が多い中では、唯一の長方形とわかる1基である。覆土は、黒褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。

28号土坑（第129図 PL.29-6） 3区 28C-14グリッド、32号土坑の南東隅に重複し、28号が新しい。長軸58cm、短軸41cm以上、深さ33cmの方形である。しっかりとした掘り方である。覆土は、黒褐色砂質土で自然埋没している。土師器杯の破片が出土した。18号掘立柱建物跡の柱穴に変更した。

29号土坑（第129図 PL.29-7・8） 3区 28CD-15グリッド、長軸83cm、短軸74cm、深さ23cmの円形である。底面は、波打っている。覆土は、As-Cが混入した黒褐色砂質土で埋没している。覆土の下位に最大1cm大までの炭粒が混入している。

30号土坑（第129図 PL.29-8） 3区 28C-15グリッド、長軸78cm、短軸65cm、深さ15cmの円形。覆土は黒褐色砂質土で埋没している。黄褐色ロームがブロックで混入している。土師器杯の破片が出土した。

32号土坑（第129図 PL.29-6） 3区 28C-14グリッド、3区北東隅の住居跡や土坑が集中する一角にある。長軸193cm、短軸170cm、深さ60cmの方形である。南東隅に28号土坑、北辺の中央に44号土坑が重複している。中には、A、B、Cと仮称した方形の掘り方がある。Aは土坑に伴う掘り方で、BとCは28号、44号と同じく掘立柱建物跡の柱穴になる可能性がある。覆土は、As-Cが混入した黒褐色砂質土で埋没しているが、2層にはにぶい黄褐色砂質土などが斑状に含まれており、人為的な埋没である。遺物は、覆土の上位で

第4章 検出された遺構と遺物

土師器甕、須恵器蓋の破片が出土した。4号土坑の類例である。

33号土坑 (第130図 PL.30-1) 3区 28G-18グリッド、34号土坑とともに38号住居跡に隣接する。長軸160cm、短軸145cm、深さ43cmの円形である。覆土は、ロームを間層にはさんで暗褐色砂質土、黒褐色砂質土で埋没している。覆土の1層で土師器杯と甕、須恵器杯の破片が出土した。

34号土坑 (第130図 PL.30-2) 3区 28G-18グリッド、調査区の壁にかりり南半分を検出した。長軸122cm、短軸53cm以上、深さ41cmの円形である。覆土は暗褐色砂質土で自然埋没している。下位になるほど混入するロームの量が多い。土師器甕の破片が出土した。

35号土坑 (第130図 PL.30-3) 3区 28D-15グリッド、長軸92cm、短軸90cm、深さ30cmの円形である。覆土は黒褐色砂質土、暗褐色砂質土で自然埋没している。土師器甕の破片が出土した。

36号土坑 (第130図 PL.30-4) 3区 28D-15グリッド、長軸132cm、短軸109cm、深さ30cmの円形。覆土はAs-C混入黒褐色砂質土で自然埋没している。下位にロームが混入する。出土した遺物はない。

37号土坑 (第130図 PL.30-5) 3区 28E-16グリッド、17号掘立柱建物跡と重複する。新旧関係は、土坑が新しい。長軸115cm、短軸98cm、深さ27cmの円形である。覆土は、As-Cが混入した黒褐色砂質土で自然埋没している。土師器の杯と甕の破片が出土した。

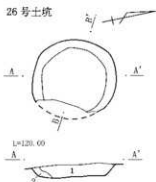
38号土坑 (第130図 PL.30-6) 3区 28D-16グリッド、長軸68cm、短軸58cm、深さ18cmの円形である。覆土は、黒褐色砂質土と暗褐色砂質土の混土で自然埋没している。出土した遺物はない。

39号土坑 (第131図) 3区 28C-15グリッド、115号ピットと重複するが新旧関係は不明である。長軸120cm、短軸97cm、深さ25cmの不整形である。覆土は、As-Cが混入した黒褐色砂質土で自然埋没している。下位にロームと暗褐色砂質土が混入する。出土した遺物はない。

40号土坑 (第131・133図 PL.30-7、53) 3区 28F-17グリッド、長軸100cm、短軸88cm、深さ33cmの方形である。39号住居跡の南東1mにあり、41号土坑と重複している。40号土坑が新しい。覆土は、As-Cが混入した黒褐色砂質土で埋没している。南寄りの覆土中位で、土師器の杯1点が伏せられた状態で出土した。また、底面には柱穴状のピットが4基ある。土坑に付属するものか、それとも土坑の周囲にあるピットと対になるのか、セクションでは新旧の判別がつかなかった。41号土坑とともに住居や井戸に伴う施設であろう。時期は、土師器の年代観からすると8世紀後半である。

41号土坑 (第131・133図 PL.30-7、53) 3区 28F-17グリッド、長軸70cm以上、短軸68cm、深さ25cmの方形である。39号住居跡の南東1mにあり、40号土坑と重複している。41号土坑が古い。黒褐色砂質土を覆土にし、下位には多量のロームを拳大のブロックで含んでいる。133図7で示した敲石のほか、土師器の杯や甕、須恵器の甕の破片が出土している。時期は40号土坑と前後し、ともに住居や井戸に伴う施設であら

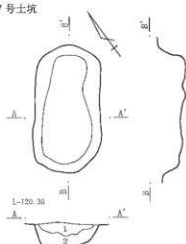
26号土坑



26号土坑

- 1 黒褐色土 白色～黄白色粒子 (1～5mm程, As-CとFP, もしくはFA軽石を含む) を均一に多く含む (30%), 炭化物, 焼土を粒状に微量含む (5%以下)
- 2 褐色土主体 1の黒褐色土層混入

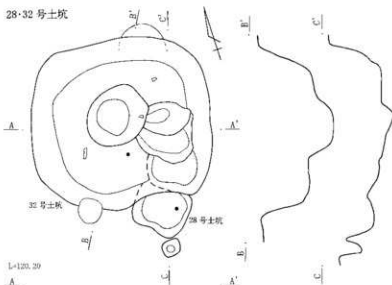
27号土坑



27号土坑

- 1 黒褐色土 白色～黄白色粒子 (FPかFA軽石とAs-C, 1～10mm程) を少混 (5%), 暗褐色土を混混, やや砂質
- 2 暗褐色土 均質, 1層の黒褐色土まじり, 軽石等は肉眼で殆ど認められない, 自然埋没と思われる

28・32号土坑

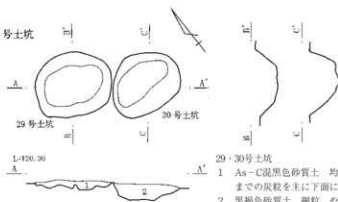


L=120.20

32号土坑

- 1 As-C混黒褐色砂質土 As-C (1mmまで)が10%, 細粒, 均質, 密
- 2 As-C混黒褐色砂質土 均質, 密, 黄褐色砂質土との粗い混混, 細粒, 均質, 密, 遺物出土
- 3 黒褐色砂質土 1層と同質, As-C含まず
- 4 均質黄褐色砂質土 黄褐色ロームが混入, 密

29・30号土坑



L=120.30

29・30号土坑

- 1 As-C混黒色砂質土 均質, 密, 最大1cmまでの炭粒を主に下面に多混
- 2 黒褐色砂質土 細粒, やや粗, 黄褐色ロームがブロッコ状に混入



第129図 26号～30号・32号土坑平・断面

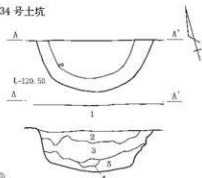
第4章 検出された遺構と遺物

33号土坑



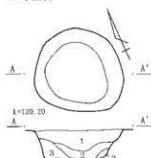
- 1 暗褐色土 やや砂質、やや黄色味帯びた土を混混、白色～黄白色粒子 (FPかFA軽石とAs-C10～20mm粒)を少量含む、(5%)
- 2 褐色土 黄褐色土をブロック状 (1～2cm粒) に少量 (5%) 含む、黒褐色砂質土混じる (3層の土)
- 3 黒褐色砂質土
- 4 褐色土 2層よりローム多い

34号土坑



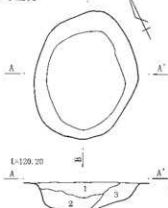
- 1 暗褐色砂質土 細粒、耕作土
- 2 暗褐色砂質土 細粒、As-B12が多混、耕作土
- 3 黒褐色砂質土 細粒、均質、壁際ロームブロック混入
- 4 黒褐色砂質土のブロック
- 5 黒褐色砂質土 細粒、密、全体にローム粒を多く含む3層、4層よりも明るい

35号土坑



- 1 黒褐色土 やや砂質、白色～黄白色粒子 (As-C、1～7mm粒)を均一に少混 (5%)、暗褐色土を混混
- 2 暗褐色土主体 黄褐色土と黒褐色土が混じる
- 3 2層に類似 黄褐色土と暗褐色土が主体、黒褐色土が混じる

36号土坑



- 1 As-C混黒褐色砂質土 細粒、密、褐色砂質土の混混
- 2 黒褐色砂質土と黄褐色砂質土の混土密、As-C混入
- 3 黄褐色砂質土主体 にい黄褐色砂質土との混土、密

37号土坑



- 1 黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、As-C少混、密
- 2 As-C混黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、均質、密、壁際にロームの混混あり
- 3 1層と黄褐色砂質土の1～2cm大の塊状土、密

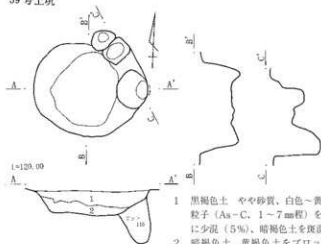
38号土坑



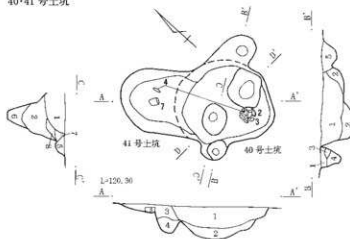
- 1 黒褐色土 暗褐色土を混混、下方は漸移的に暗褐色土も多く含むようになる

第130図 33号～38号土坑平・断面

39号土坑



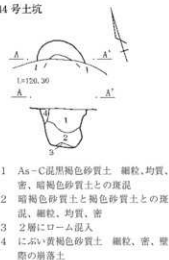
40・41号土坑



45号土坑

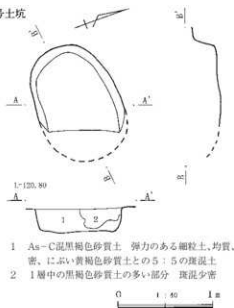


44号土坑



- 1 As-C混暗褐色砂質土 弾力のある細粒土、均質、密、ローム粒（1～2mm）混入
- 2 1層に1cmまでのローム粒やや多混
- 3 黒褐色砂質土 細粒、均質
- 4 黒褐色砂質土 ローム粒（1～10mm大）混入
- 5 1層にローム粒多混 ロームが2層より多く区分
- 6 1層にローム粒（1～3cm大）多混
- 7 As-C混黒褐色砂質土ブロック
- 8 ロームブロック

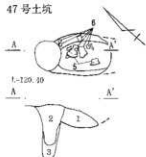
46号土坑



第131図 39号～41号・44号～46号土坑平・断面

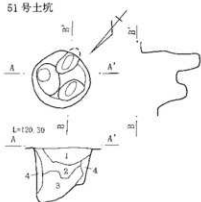
第4章 検出された遺構と遺物

47号土坑



- 1 黒褐色砂質土 細粒、密、As-C少混 (47坑フタ土)
- 2 1層にローム粒少混 1層とはロームの有無で区別
- 3 1層にローム粒多混 細粒、密 (2、3層は16号掘立柱穴)

51号土坑



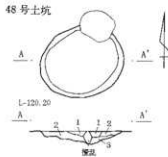
- 1 黒褐色土 暗褐色土が混混、黄白色粒子 (5mm程As-Cを混入)を少量含む (5%)
- 2 1層に類似 暗褐色土より多く混混、色調は1層より黄色味帯びる
- 3 1層に類似 黄白色粒子認められない、また褐色土を粒~ブロック状 (5~20mm)に混混 (5%以下)
- 4 褐色土 黒褐色土混

54号土坑



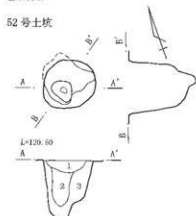
- 1 As-C混黒褐色砂質土
- 2 1層にローム粒多混
- 3 におい黄褐色砂質土 弾力のある細粒土、密、ローム粒少混

48号土坑



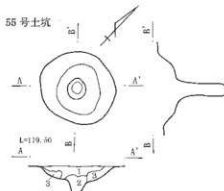
- 1 As-C混黒褐色砂質土 細粒、密、やや緻密
- 2 As-C混褐色砂質土 粒、密、3層が混混
- 3 As-Cを混入しない褐色砂質土

52号土坑



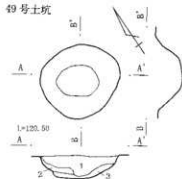
- 1 黒褐色土 暗褐色土が混混、黄白色粒子 (1mm程As-C含む)を少量 (5%)
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土 2層より暗い

55号土坑



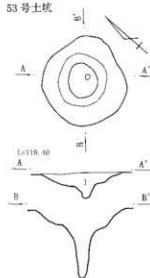
- 1 As-C混黒褐色砂質土
- 2 におい黄褐色砂質土に1層が混混
- 3 明黄褐色砂質土

49号土坑



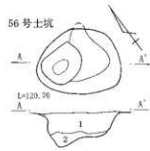
- 1 As-C混黒褐色砂質土
- 2 褐色砂質土と黄褐色砂質土の混混土、密
- 3 ローム主体の褐色砂質土との混土

53号土坑

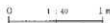


- 1 As-C混黒褐色砂質土 暗褐色砂質土混混

56号土坑



- 1 暗褐色砂質土
- 2 As-C混黒褐色砂質土



第132図 47号~49号・51号~56号土坑平・断面

う。敲石は、粗粒輝石安山岩の転石を使用。図の下端を打ち欠き、長さを調整している。左右側面の稜を刃部、敲打部としている。裏面は平らで、擦った跡がある。出土状態からみて、埋没時の混入である。

44号土坑 (第131図 PL.29-6) 3区 28C-14グリッド、32号土坑の北辺に重複、新旧関係は不明である。長軸47cm、短軸15cm以上、深さ40cmの方形か。覆土は、As-Cが混入した黒褐色砂質土、暗褐色砂質土と褐色砂質土との混土で自然埋没している。掘立柱建物跡の柱穴で、28号土坑や30号土坑と関連しているのであろう。掘り方も良く似ている。時期は、古代である。

45号土坑 (第131図 PL.31-1) 5区 38Jk-1グリッド、長軸102cm、短軸87cm、深さ40cmの円形である。掘り方は不明瞭で出土した遺物もない。周囲で土器や石器が出土していたことから縄文時代の土坑とみて調査したが、4層は地山との区別がむずかしくローム漸移層前後でのしみの可能性の方が高い。

46号土坑 (第131図 PL.31-2) 5区 38L-2グリッド、長軸125cm以上、短軸87cm、深さ25cmの長方形である。東側が攪乱されて消失しているが、しっかりとした掘り方の特徴を残している。覆土は、40号住居跡によく似たAs-Cが混入した黒褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はないが、覆土の様子からみて40号住居跡に近い時期のものか、あるいは住居に直接伴う土坑であろう。

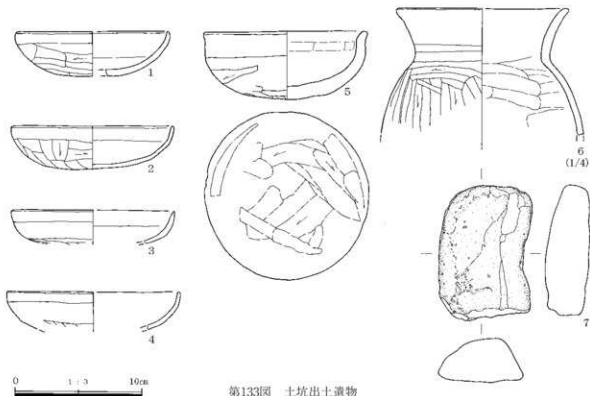
47号土坑 (第132・133図 PL.31-3、53) 5区 38O-1グリッド、ローム漸移層で検出した。長軸70cm以上、短軸45cm、深さ25cmの楕円形である。近くにある46号にくらべて、半分ほどの大きさである。16号掘立柱建物跡P1と重複している。土坑が古い。覆土は、As-Cが混入した黒褐色砂質土で自然埋没している。底面から10cm上で、133図5・6で示した土師器の杯と甕が出土した。重機による掘削中に割れてしまったが、本来は割れも少なく、セットであった可能性もある。時期は、土器の特徴から古墳時代後期、6世紀後半である。40号住居跡に伴う屋外の貯蔵用施設か、屋敷内での祭祀跡かと思われる。

48号土坑 (第132図 PL.31-4) 5区 38O-2グリッド、ローム漸移層で検出した。長軸85cm、短軸77cm、深さ14cmの円形である。16号掘立柱建物跡P2と重複している。土坑が古い。覆土は、As-Cが混入した黒褐色砂質土と暗褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。

49号土坑 (第132図 PL.31-5) 5区 38O-3グリッド、40号住居跡の西5mにある。長軸84cm、短軸77cm、深さ14cmの円形である。断面は輪状、掘り込みは浅い。出土遺物はなく、生活痕跡に乏しい。時期は、古墳時代が古代である。

50号土坑 (PL.31-6) 5区 38M-4グリッド、40号住居跡の東2mにある。調査区の壁にかかることから、40号住居跡当時の地表面と住居跡に伴う周堤帯をさぐる過程で検出した。円形と思われるうちの南半分、As-Cが混入した黒褐色砂質土で埋没している。出土した遺物はない。

51号土坑 (第132図 PL.31-7) 3区 28F-17グリッド、39号住居跡の北東隅寄りに重複している。新旧関係は不明である。長軸60cm、短軸60cm、深さ54cmの円形である。底面は、木の根によるものなのか凹凸が



第133図 土坑出土遺物

ある。覆土は、As-Cほかが入混した黒褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。

52号土坑（第132図 PL.31-8） 3区 28H-18グリッド、38号住居跡の西1mで検出した。長軸55cm、短軸50cm、深さ64cmの円形。覆土は、As-Cほかが入混した黒褐色砂質土で自然埋没しているが2層は柱痕のようである。柱穴とみられるが、周囲に類似したものがなく土坑とした。出土した遺物はない。

53号土坑（第132図 PL.32-1） 5区 39A-7グリッド、長軸93cm、短軸85cm、深さ25cmの円形である。底面の中央には直径20cm弱、深さ62cmのビットがあり、断面全体がロート状になる。覆土は、As-Cが入混した黒褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。

54号土坑（第132図 PL.32-2） 5区 39A-6グリッド、長軸70cm、短軸48cm、深さ10cmの方形である。断面は椀状、覆土はAs-Cが入混した黒褐色砂質土で自然埋没している。ロームの入混状態で3層に区分した。南西のビットは、土坑に伴うが用途は不明である。出土した遺物はない。

55号土坑（第132図 PL.32-3） 5区 38S-7グリッド、長軸79cm、短軸76cm、深さ28cmの円形である。断面は椀状、底面の中央に直径20cm弱、深さ50cmの円筒形のビットがあく。ビットは柱穴の可能性がある。53号と似た特徴である。出土した遺物はない。

56号土坑（第132図 PL.32-4） 5区 38D-15グリッド、長軸88cm、短軸80cm、深さ36cmの円形である。覆土は、As-Cが入混した黒褐色砂質土で自然埋没している。土師器甕の破片が出土した。

5 溝

概要 溝は9条を検出した。1区で2条、2区で1条、3区で重複して4条、5区で2条である。規模の大小はあるが、いずれも調査区外に続き、中でも4号や5号のように台地上を縦断して谷地にまで至るような大型水路もある。1号、2号は水田に伴う灌漑用水路、6号、7号も同様であろう。例外が8号と9号である。8号は、水路の役目も果たしていたようであるが地形の勾配とは直交しており、むしろ区画の方が主ではないだろうか。40号住居跡とは6mの距離である。周堤帯をはさんだ程度で、垣根を思わせる。9号は、As-Cの1次層で埋没していた。

1号溝 (第134・135図 PL32-5・6, 54)

位置 1区 17L~N-15-20, 27L~N-1~7グリッド、調査区の中央を縦断している。

重複関係 27M-4グリッドで2号溝が分岐する。2号溝が埋没後も使われている。

規模 検出長59m、このうち北側3分の2は最大幅1.2m~1.3mで一定しているが、南に行くに従って細くなる。この中で2号溝との分岐点は、ほかに比べて倍近い幅がある。これは、分岐するために設けた堰によりできた溜まりの跡と見られる。深さは15~20cm、土地改良で削平されているが本来の掘り込みも浅いものだろう。検出した南北両端でのレベル差は1mである。

走向 南北、直線的である。土地改良で削平されているが本来の掘り込みは浅く、台地の縁辺部に沿って東側に大きく緩い弧を描いている。南への下り勾配である。

覆土 黄褐色砂層が特徴である。強い水流で運ばれたようで、小砂利も含む。断面のAからEの底面には、大小のウォーターホールが点々とあき、上記の黄褐色砂層がつまっていた。

遺物 135図11の硯は、2号溝との分岐点で出土した。使用痕は乏しく、破損して転用を意図したのか脚が打ち欠かされている。磨滅もなく、近くからの流れ込みか投棄であろう。考えられるのは、至近距離にある1区、2区の住居群からである。量は多くはないが、硯と一緒に8世紀代の杯の破片が出土している。

所見 谷地にある水田への灌漑用水路である。時期は、As-B下水田に対応するとみられるが、2号住居跡に重複する地割れとは方向が違い、地割れのような形跡もないことからすると弘仁九年の地震よりは後のものではないだろうか。ただし、出土した遺物は、図示したように8世紀代のものが多い。

2号溝 (第134・135図 PL54)

位置 1区 27K~M-1~4, 27M-4グリッドで1号溝から逆Y字形に分岐している。

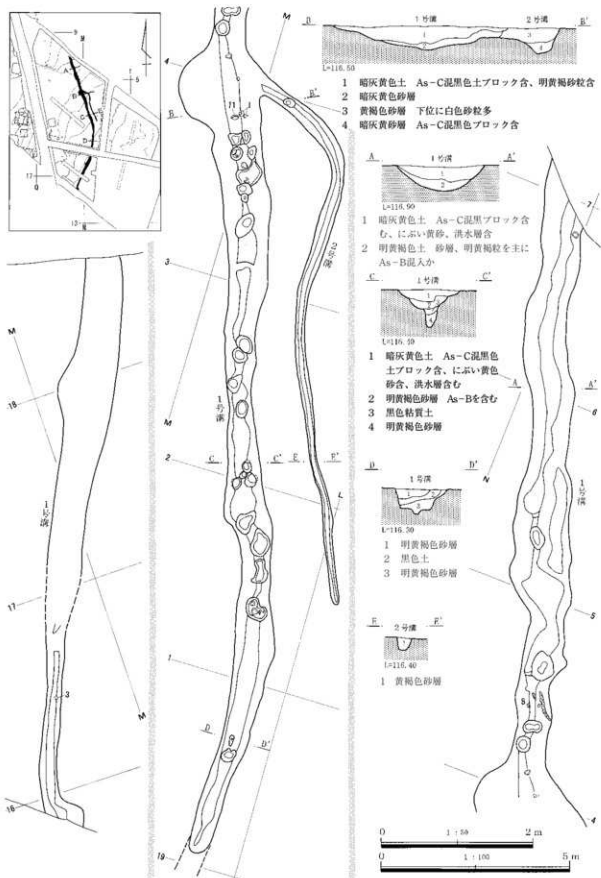
規模 検出長13m、上幅20~40cm、北は遺存状態が良好で幅も広い。南へ行くに従って細くなる。標高を利用して掛け流したのであろう。標高は、分岐点が116.18m、南端が116.07m、その差が10cm強である。

走向 南北、直線。南への下り勾配である。1号溝との間には1mあまりの余地がある。調査時に削平されているが、本来は土手のようになり2条の溝を養生する太畦の役割をはたしたのではないだろうか。

覆土 黄褐色砂層で埋没したままで、放棄されている。

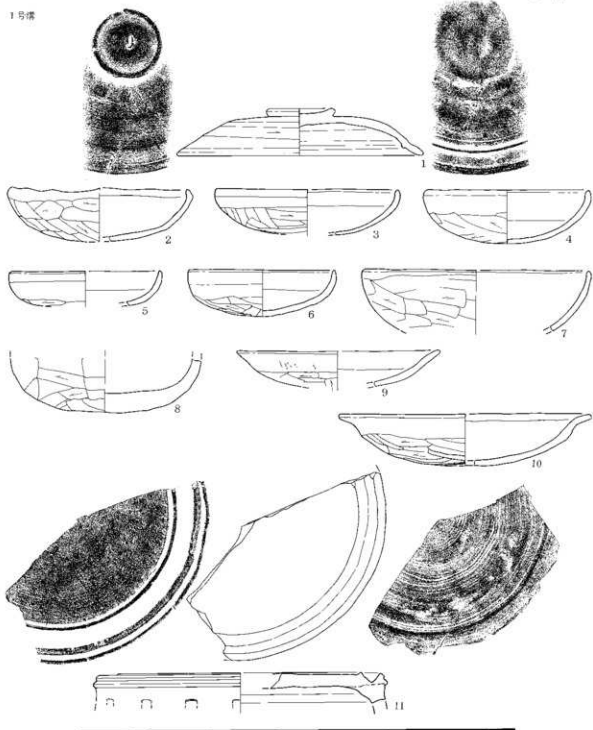
遺物 土師器の杯、甕、須恵器の蓋が出土している。この中で蓋を図化した。

所見 1号溝から分水して、水田に引き込むための灌漑用水路である。ただし、1号溝のような幹線水路ではなく、灌漑する時期にあわせた一時的なものであったろう。黄褐色砂層で埋没した後は、復旧されずに放棄されている。時期は、1号溝と同じ9~10世紀代である。

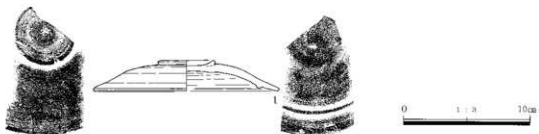


第134図 1号・2号溝平・断面

1号溝

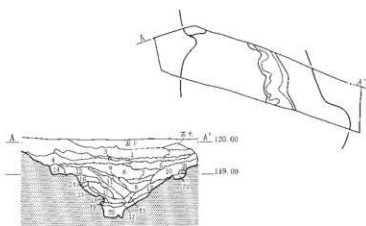


2号溝



第135图 1号·2号溝出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

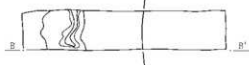


- 表土 灰黄褐色土 As-B混土、締まった砂質土
 1 暗灰色土 As-B混土、締まった砂質土、ローム粒(5m)3%混入
 2 暗褐色砂質土 ロームブロック(5~10m)混、砂層少混
 3 黒褐色砂質土
 4 2層より若干暗い ロームブロック(5~30m大)混入
 5 黒褐色砂質土 におい黄褐色土が珪混、ロームブロック混入
 6 黒褐色砂質土 におい黄褐色土が珪混、ローム粒3%混入
 7 におい黄褐色砂質土
 8 におい黄褐色砂質土 ローム、砂利を含む川砂と石
 9 7層と類似
 10 におい黄褐色砂質土 ロームが少混、やわらかい
 11 におい黄褐色砂質土 やわらかい土と暗灰色土が珪混
 12 暗褐色土 軟質、におい黄褐色土が珪混
 13 褐色の川砂化したロームの堆積

- 14 暗褐色砂質土 ロームブロック(2~5cm大)3%混入
 15 におい黄褐色土 軟質、シミ状に黒褐色土が混入
 16 黒褐色土 しまりあり、ローム粒混入、川砂が堆積した状態、22層と同時期か、4・5号溝合流部分のしまった土と同じか
 17 黒褐色・暗褐色の土や砂が、水が流れたように堆積している
 18 ロームブロックを主に17層が混入
 19 暗褐色のシルト質土 ロームブロック(2~3cm大)が3%混入
 20 暗褐色のシルト質土を主に黒褐色土の川砂が堆積
 21 ロームブロックを主に10層が混入
 22 暗褐色砂質土 ロームブロック少混
 23 黒褐色砂質土 ロームブロック(1~3cm大)5%混入
 24 黄褐色ロームブロック(2~10cm大)に暗褐色砂質土が固りを理める



- 1 におい黄褐色砂質土 細粒、やや粗
 2 1層と灰黄褐色砂質土の混土 やや密、最深部3層との境に10cm厚で黄色砂層が埋込状に集中
 3 黒褐色砂質土と暗褐色砂質土の珪混土(2~3cm大) 細粒、やや密、中央部が黒く東西両側に珪混
 4 黒褐色砂質土 細粒、軟、砂が埋込状に混入
 5 灰黄褐色砂質土 細粒、やや密



- 6 黒色砂と崩落したロームの互層 砂は最大2cmまでの円礫に始まり、細粒化して行く
 6A~6H 6層と同性状、底面に小砂利が薄い層を作らうミナ状で、短期間には連続して堆積か
 A~Hは1~10m大の小砂利層で区分、各々が流路に相当
 7 におい黄褐色砂質土 細粒、弾力あり
 8 3層にローム粒多混
 9 ロームブロック



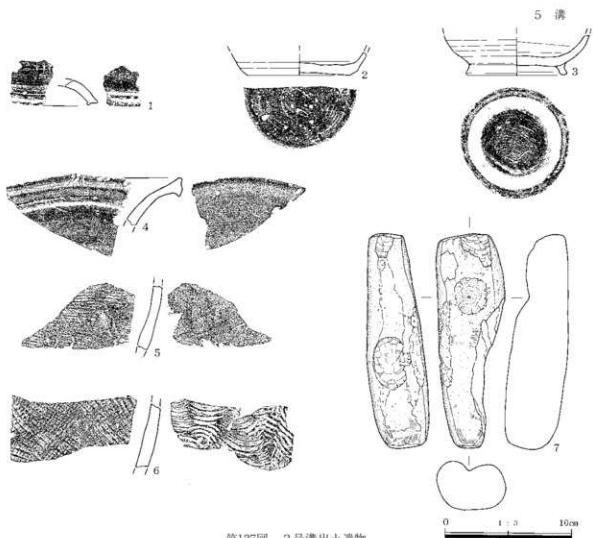
- 1 暗褐色砂質土 軽石多混、粗、耕作土
 2 暗褐色砂質土
 3 におい黄褐色砂質土 砂粒、粗、しまり弱、ローム混入
 4 黒褐色砂質土と暗褐色砂質土の珪混土(2~3cm大)、密、やや硬
 5 4層と同性状 黒褐色砂質土が主体
 6 4層に崩落した1~4cm大のローム粒が混入、特に東側多
 7 6層と同性状 ローム粒がやや少ない
 8 6層と同性状 ラミナ状に細砂が混入



- 9 黒褐色砂質土 砂粒、やや密、微砂混
 10 黒褐色粘質土 やや密、軟、ノロか、1~3cmの砂利層で11層と区分
 11 黒褐色粘質土 密、軟、ノロの互層か、ラミナ状の砂利が点々とある
 12 砂利層 粗~青灰、1~10m上位細粒下位粗粒、鉄分のしみ多、SPB-D6層、6A~6H層に相当



第136図 3号溝平・断面



第137図 3号溝出土遺物

3号溝 (第136・137図 PL.32-7・8, 33-1, 54)

位置 2区 28BC-2~4グリッド、2区の西端を蛇行しながら南北に縦断している。ただし、北、中央、南の3箇所に幅1mのトレンチを設けて調査しただけで、全貌はつかんでいない。

重複関係 重複はしていないが、22号、27号住居跡に関係が読み取れる。断面Aの中位にある16層は、22号住居跡のカマドと重複する道の跡で、続きは4号・5号溝を横断している。27号住居跡は、溝の掘削残土らしきロームを多量に含む土が覆土の上面を占めている。いずれも溝の年代を示す資料である。

規模 長さは50m以上、断面Aでの最大幅は3.60m、深さ1.60m、底面の幅0.60m、断面Bは最大幅3.30m以上、深さ1.50m、底面の幅1m、断面Cは最大幅4.10m以上、深さ1.35m、底面の幅60cmである。

走向 南北、緩く蛇行する。断面は葉研状、ただし、断面BとCでは、壁の左右が対称ではなく、西が1m近く低く棚ようになる。しかし、断面Aではその形跡がなく、左右の傾斜の違いだけが指摘できる。

覆土 8層、17層、20層に砂利層がある。16層は、粘質土と川砂の互層、鉄分で固く締まる道の跡である。

遺物 覆土の中位以下で、甕、杯、椀、蓋などが出土している。半数近くは割れ口が磨滅している。

所見 台地上を縦断する幹線水路で、4号・5号溝の前身と考えられる。当初は複数の砂利層からすると、一気に水の流れることが多く水量もあつたのであろうが、その後は規模を段々と縮小させ、流路変更を繰り返しながら使われている。時期は、As-B降下以前、集落のピークである8~10世紀代であろう。少なくとも4期以上の変遷がある。

第4章 検出された遺構と遺物

4号溝 (第138～141図 PL.33-2～6, 34-2～4, 54, 55)

位置 3区 28E-J-7～17グリッド、5号溝とは併走する。

重複関係 調査区の北側では1本であったものが28G15グリッドで分岐する。東が4号、西が5号である。4号自身では新旧の2本があり、平坦に埋没した上面に6号溝、7号溝がある。

規模 検出長51m、上幅3.50m、深さ1.30m。新期のものは、当初掘られた半分ほどの規模である。新旧いずれも直線的である。底面にあく土坑は、団子の串刺し状態、重複するものはないが隣り合うように縦に並んでいる。上から見ると正円が多く、断面は袋状、直径が1m前後の大型のもの(PL.33-5)と直径が1m以下の小型のものがある。大型のものは、中で人が楽々と作業ができるほどで、底が平らでサラサラとした粗砂と細砂の互層で埋まっている。これに対して直径が1mに満たないやや小型のものは、断面が筒状か中間のふくらんだロート状になり、覆土の粗砂にはロームが混じる。大型のものが古く、小型のものが新しいように感じられる。また若干の差はあるが、深さの点でいずれも暗色帯に達している。粘土の探掘も想定したが、直径が不揃いで形状が一定せず、自然にできた穴と判断した。しかし、水によるとすれば相当な勢いと水量であったろう。壁には水が渦を巻いた跡らしく、ロクロで削られた跡のような細い筋が幾重にも付いていた。

走向 南北、直線、南への下り勾配である。検出した範囲での南北両端のレベル差は、北が119.30m、南が118.10mとその差1.20mである。中間の断面E～Hは、118.20～118.40mでほぼ一定している。

覆土 黒ボク土を給源として、流水により連続して堆積している。一様に弾力のある細粒土で、若干の色調差とレンズ状に堆積した薄い砂利層で分けた。堆積状態を見ると、水は常時流れているというのではなく、強から弱、また強へと変化を繰り返し、合間にはノロが溜まる程度の時もあったらしい。新旧の違いは、断面Fをみると2層～6層が新期、7層～9層が古期である。粗砂から細砂へと変化していく様子や、段々と浅く幅の狭くなるのがわかる。

遺物 遺物収納箱にして1箱の量が出土した。土師器は杯、碗、甕、須恵器は杯、碗、甕、蓋がある。覆土の上位から中位までが大抵である。底面の土坑から出土したものは、全体量の2割ほどでツルツルに磨滅したものの、縄文土器や石器、古墳時代の土器など古い時期のものが多く見られた。その他は、覆土の中位から上位で出土した。また、断面Eの所にある土坑の上面からは、長さ1mあまりの炭化材が出土した(PL.33-6)。護岸の杭か板のようにも見えたが、遺存状態が悪く資料化することはできなかった。このほかには、目を引いたものとして羽口の小破片が1点出土している。

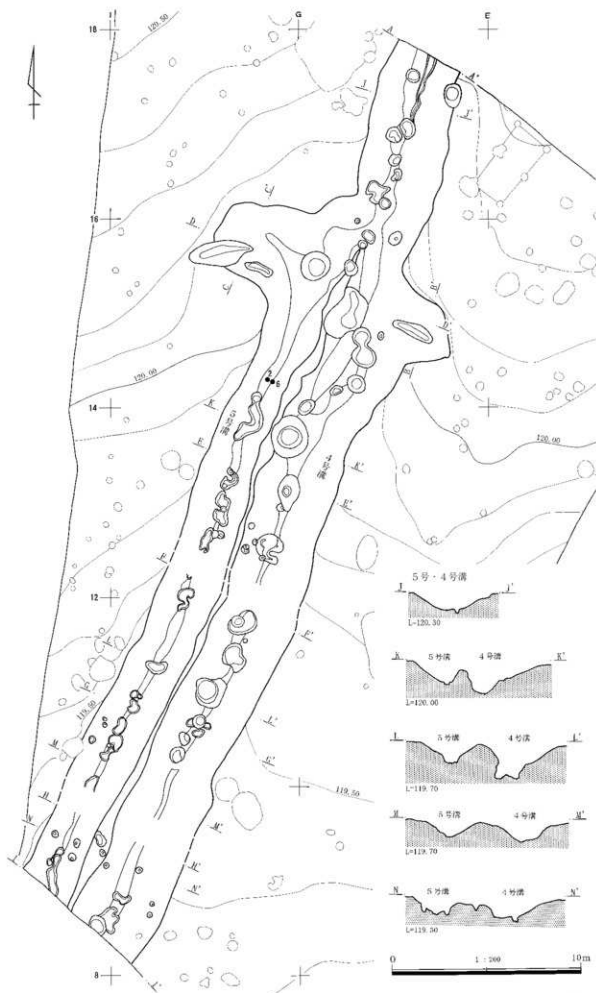
所見 5号溝とともに3号溝に接続する幹線水路である。3号溝が蛇行しているのに対して、台地の最高地点を一直線に縦走している。この両者の違いに時期差と整備された人工の水路としての特徴が現れている。時期はAs-B降下以前、周囲にある住居に対応する9～10世紀代が溝の機能したピークであろう。3号溝に重複する道は、4号・5号溝を横断している。しかし、作業用の通路のように溝に伴うものかどうか、それとも多少の時差があるのか、調査の中では明らかにできなかった。

5号溝 (第138～140・142図 PL.33-7・8, 34-1～3, 55)

位置 3区 28F-I-8～17グリッド、28G15グリッドで4号溝から分岐している。

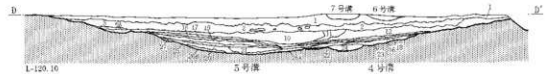
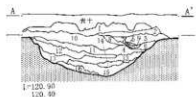
重複関係 4号溝と併存、6号溝、7号溝よりも古い。

規模 検出長51m、上幅2.30m、深さ1.00m。4号溝と同じく新旧の大別と砂利層で分けられる4期程度の変遷がある。底面には、4号溝のものよりは浅くて小型の土坑が点々とあいている。



第138图 4号·5号沟平·断面(1)

第4章 検出された遺構と遺物

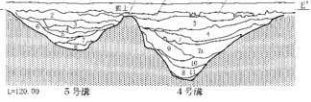


- B・C・D
- 1 黒色土と黒褐色土の混土 As-YP (1~10mm, AsCは軽石 (FPかFA軽石) を10%含む)
 - 2 黒色土と黒褐色土の混土 黒褐色土の混混が1層より少なく、全体的に暗色味帯びる。As-YP層より多混 (中央付近15%、他10%) 中粒に褐色土 (1~5mm程の粗粒が混じる、また長径7~8cm程のブロック状にも含む) (SP, Dから6~8mの範囲中)
 - 3 暗褐色土明褐色の混土
 - 4 暗褐色砂質土主体 As-C少量含む (5%)、2層の土層混入
 - 5 黒色土 As-C少量含む (5%)、暗褐色砂質土まじり、硬くしめる
 - 6A 暗褐色砂粒 極少量のAs-C含む (5%以下)、硬くしめる
 - 6B 黒褐色砂質土 As-C含む、硬くしめる
 - 7 6B層に暗褐色砂質土混入 黄褐色土をマール状、粒状 (1~10mm程) に含む、硬くしめる
 - 8 2層に類似 但しAs-C少量 (5%) で褐色土を含まない
 - 9 暗褐色砂質土 特に上位に砂粒まじる、As-C少量含む (5%) 硬くしめる
 - 10 黒褐色土 暗褐色細砂粒、しまり弱く緻密な土をマール状に含む、5mm程の小石を塊状に含む、As-C部分的に認められる

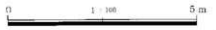
- E
- 1 As-C混黒褐色砂質土 細粒、密
 - 2 As-C混黒褐色砂質土 細粒、密、全体に黄褐色砂質土の混混
 - 3 As-C混黒褐色砂質土 細粒、2~8層の中で最も密
 - 4 黒褐色砂質土 7層が1~2cm大で度混する。弾力のある細粒土
 - 5 3~5層の中で最も粗粒、密
 - 6 黒褐色砂質土 均質、弾力のある細粒土、上位は壁崩落ロームブロック多、混入下位はわずかにローム粒が混入
 - 7 黄褐色砂質土 ソフトロームの2次堆積か、弱粘性、弾力のある細粒土

- A
- 1 耕作土 As-Bほかを給源とする砂質土。均質、密
 - 2 As-B層
 - 3 黒褐色砂質土 As-Bほかを全体に含む、均質、密
 - 4 3層に類似
 - 5 砂利層 径1~10mm大の円礫90%、青灰色の細砂混入
 - 6 3層にロームが度混 細粒、密、壁寄りにローム多い
 - 7 暗褐色砂質土
 - 8 暗褐色砂質土に黄褐色砂質土の混混
 - 9 6層中の黄褐色砂の単層、密、硬
 - 10 As-C混黒褐色砂質土 11層の方が黒く、10層の方が褐色砂の混混多い、密
 - 11 As-C混黒褐色砂質土
 - 12 黄褐色砂質土 シルト質か、灰白色軽石まばらに混入
 - 13 As-C混 密
 - 14 粗砂 密 下位程大
 - 15 黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、密、As-Cは径1mm以下の砂粒まばらに混入
 - 16 黄褐色砂質土 粗砂多混、ローム混入

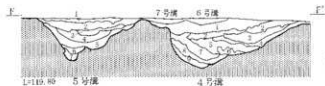
- 11 濃淡の黒褐色土の混混 褐色土をブロック状に (2~4cm) 含む、As-C (FPかFA軽石) を少量含む (5%)
- 12 11層に類似 但し黒褐色土、混混少なく、暗色味あり、ややしまり弱
- 13 暗褐色土主体 若干濃い暗褐色土混入
- 14 7層に類似
- 15 暗褐色土 均質、緻密、しまりやや弱
- 16 暗褐色砂質土 As-C少混 (5%)、硬くしめる
- 17 褐色砂質土 砂粒混、硬くしめる、As-C微混 (5%以下)
- 18 黒褐色土 砂粒混、硬くしめる、As-C微混 (5%以下)
- 19 16層に類似
- 20 17層に類似
- 21 褐色砂質土と円礫 (1~2cm) を含む砂層の互層、硬くしめる
- 22 17層に類似
- 23 暗褐色砂質土 As-C (またFPかFA軽石含む) を少混 (5%)
- 24 5~30mmの礫層粗粒混入
- 25 16層に類似
- 26A 暗褐色細砂粒 (5~10mm) の極少量含む、硬くしめる
- 26B 26A層に類似 黄褐色ローム土を粒状に少混 (5%)
- 27 黒褐色土 黄褐色ローム土を、マール状に含む、硬くしめる



- 7A
- 1 黄褐色砂質土主体 As-BPブロック、As-BPの採伴土を多く含む黄褐色砂質土との混混状土
 - 8 明褐色砂質土 ソフトローム~As-BP相当の2次堆積
 - 9 黒褐色砂質土に黄褐色砂質土の混混土、均質、密
 - 10 7A層の採伴土 ロームが主
 - 11 As-BPを主たる給源とする細砂層



第139図 4号・5号溝断面 (2)



F

5号溝

1 2層の2次堆積

2 As-C混黒褐色砂質土 におい黄褐色砂質土の堆積、均質、緻密

3 黒褐色砂質土 4層にローム粒混

4 E-E5層と同じ As-Cを始め、微砂を全体に多混、均質、密

5 E-E6層と同じ シルト質、ノロに相当か、壁際ローム多

6 E-E7層と同じ 細砂混入

7 As-BPを給源とする粗砂と青灰色細砂

F 4号溝

1 As-C混黒褐色砂質土 As-C 1mm大、におい黄褐色砂質土の混混

2 As-C混黒褐色砂質土 As-C 1mm大

3 As-C混黒褐色砂質土 密、弾力のある細粒土

4 黄褐色砂質土 ソフトロームの2次堆積か

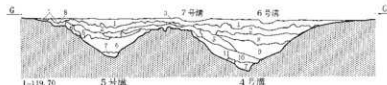
5 におい黄褐色砂質土 密、弾力あり、粗砂ブロックあり

6 黄褐色砂質土 ロームの2次堆積か、シルト質、細粒、密

7 As-C混褐色砂質土 弾力のある細粒土、密

8 黒褐色砂質土 As-C、ローム粒全体に混入、密

9 黒褐色砂質土 ローム粒混入、密、底面に青灰色細砂層



G

1 As-C混褐色砂質土 細粒、密、2層の小斑混あり

2 黒色砂質土 細粒、密、上位レベルにAs-C混入

3 2層とにおい黄褐色砂質土との混土

4 黒褐色砂質土 As-Cはか微砂混、弾力に富む細粒土

5 黒色砂質土 As-Cはか微砂混、弾力に富む細粒土

6 黒褐色砂質土 As-Cはか微砂混、弾力に富む細粒土

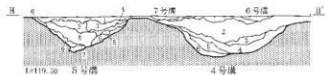
7 壁から崩落したロームと細砂層の混土 密、青灰色砂粒中、最大2cmの角礫あり

8 黒褐色砂質土 As-Cはか微砂混、におい黄褐色砂質土の混混少

9 におい黄褐色砂質土 壁から崩落したローム混入、ローム1~3cm大

10 黒褐色砂質土 におい黄褐色砂質土の混混、細粒、均質、密

11 ロームブロック



H 5号溝

1 As-C混黒褐色砂質土 2層よりAs-C多く、しまり弱

2 As-C混黒褐色砂質土 1層よりAs-C少なく、密

3 2層に褐色砂質土の混混あり 2層の亜層、粗砂混入多いが

4 3層にローム粒多混 7層より弱くしまり弱い

5 As-C混黒褐色砂質土 5層の2次堆積

6 5層にローム粒混入 細粒、密

7 6層に粗砂多混

H 4号溝

1 As-C混黒褐色砂質土 2層よりAs-C多く、しまり弱

2 As-C混黒褐色砂質土 均質、弾力のある細粒土、中央部と両端で明暗差

3 4層に黒褐色砂質土がまばらに混入 4層との境に厚さ1cm弱の明黄褐色シルト質土

4 灰黄褐色砂質土 細粒、弾力あり、シルト質、下位5層との境に砂粒と粗砂多

5 黒褐色砂質土 密、弾力のある細粒土

6 褐色砂質土 下位に粗砂と細粒の互層

I

1 表土

2 As-Bの攪拌土

3 As-C混暗褐色砂質土

4 As-C混黒褐色砂質土

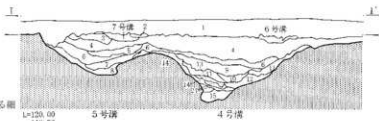
5 暗褐色砂質土 7層と同質、均質、弾力のある細粒土

6 As-C混黒褐色砂質土 均質、密、褐色土の斑点あり

7 暗褐色砂質土 5層と同質、5層よりも明るい

8 黄褐色砂質土 As-BPを給源とするロームの流水による2次堆積か

9 灰黄褐色砂質土 粗砂、ロームの2次堆積による黄褐色砂質土との織状互層、5溝寄りには6層に近い



10 灰黄褐色砂質土 6層に1cmまでの砂粒と粗砂がレンズ状に見られる

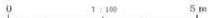
11 黄褐色砂質土 ソフトロームの2次堆積、シルト質、細粒、密

12 灰黄褐色砂質土

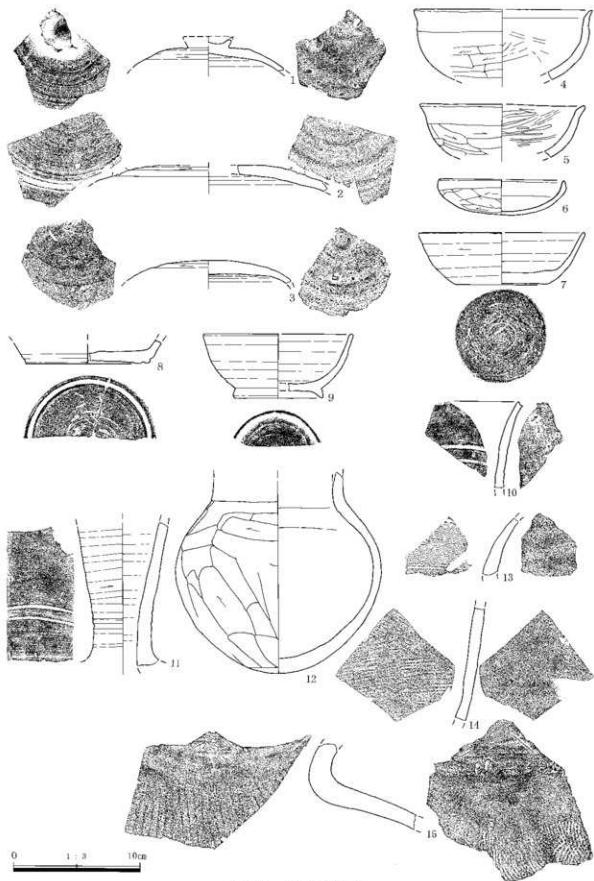
13 6層に1~2mmのローム粒を全体に多混

14 6層にローム粒多混 13層よりも大粒で上位レベルは壁からの崩落でブロック状

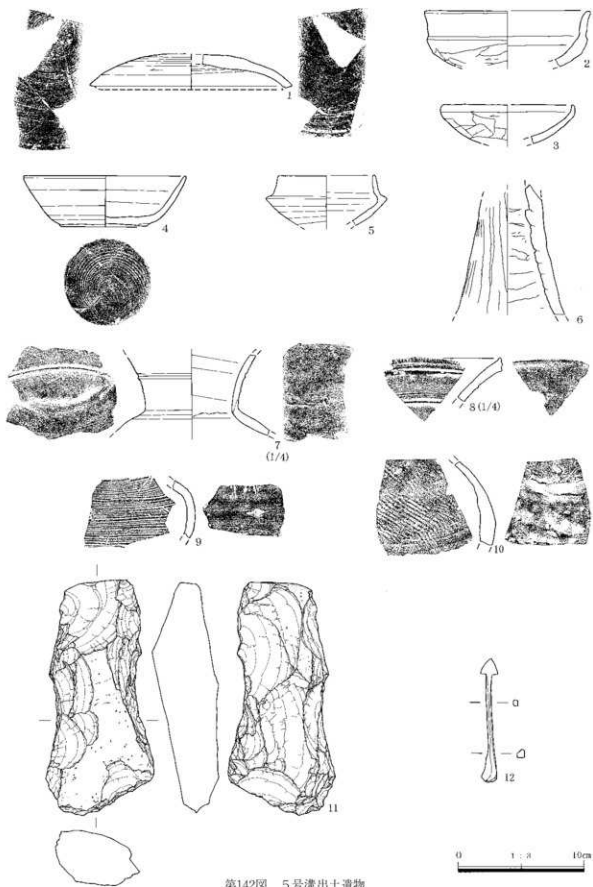
15 青灰、青緑の細砂層



第140図 4号・5号溝断面(3)



第141図 4号溝出土遺物



第142图 5号溝出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

走向 南北、直線、南への下り勾配である。検出した範囲でのレベル差は、分岐点が19.00m、南端の断面Iが17.45mで、その差1.55mである。4号溝と同様、調査区の南端で一段と深くなる。

形態 断面はV字形、断面Dでは、西が40度、東が25度の傾斜である。

覆土 4号溝と同じく黒ボク土を給源とした細粒土で、色調による差とレンズ状に堆積した砂利層で分けた。新旧の別は、断面Fで見ると3層～5層が新期、6層と7層が古期である。ただし、両者の間に大きな時差は感じられない。

遺物 遺物収納箱半分ほどの量が出土した。土師器よりも須恵器が多い。杯、椀、甕、蓋、高杯などである。142図11の打製石斧は、4号溝との分岐点近くの床から出土し、142図12の釘は確認面下5cmという浅い位置で出土した。釘は、6号溝や7号溝に伴うものであろう。

所見 4号溝ともに3号溝に後続する幹線水路である。4号溝とは併存する。幅は、同じながら4号溝に比べて20～30cm浅い。唯一断面Dの北側、分岐点の箇所まで逆に5号溝が深くなっている。4号溝から5号溝に付け替えたとする見方もできるが、併存とした。断面は、東側に比べて西側がやや急である。この角度の違いからすると、溝の東側にある住居を開く意識もあったのだろうか。時期は、As-B降下以前、4号溝と同じく9～10世紀代が機能したピークである。

6号溝 (第143・144図 PL34-5~7)

位置 3区 28E-I-8~17グリッド、4号・5号溝の上であり、その位置を踏襲したと思われる。

重複関係 断面Aによると、7号溝が先行し、その後6号溝に付け替えられている。

規模 検出長51m、断面Eで上幅1m、深さ20cmである。全体に幅、深さともに一定している。

走向 南北、直線、南への下り勾配である。断面は碗形である。検出した範囲でのレベル差は、北端が19.20m、南端が19.30mと、その差70cmである。

覆土 砂利混じりの黒褐色砂質土で埋没後、その後も流路として復活し、最終的にはAs-Bで埋没している。さらに上面は、黄褐色砂質土で覆われている。この黄褐色砂質土は、22号住居跡の上面でも確認されている。その範囲からすると、かつての流路に流れ込んだ洪水砂のようである。

遺物 土師器、須恵器の杯、甕などが少量出土している。細片で磨滅しているものが大半である。その中には、縄文土器や剥片が混入している。また、北側で点々と見られたのが、人頭大で、敲打痕や擦り跡がある扁平な石である。本来は住居内で使用する工作用の台か、砥石の役目をしていただようであるが、転用されて護岸や水の流れを調整していた可能性がある。

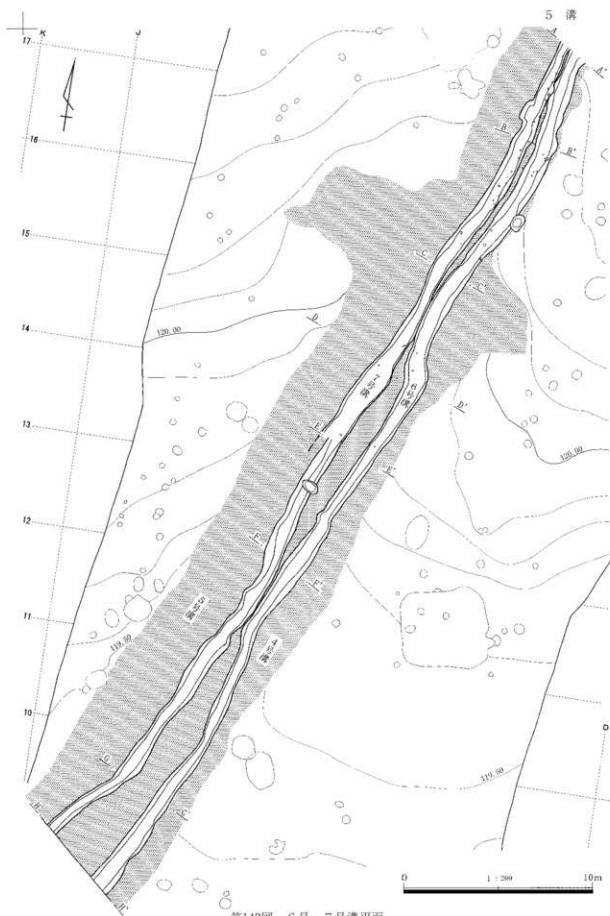
所見 配水を目的とした溝である。7号溝と規模、走向でよく似ており、機能としては、かつてここを流れていた4号や5号溝の役目を受け継ぐものであろう。時期は、As-B降下以前、2つある住居のピークでも後半、10世紀以降であろう。

7号溝 (第143・144図 PL34-5・6・8)

位置 3区 28E-I-8~17グリッド、4号・5号溝の上であり、その位置を踏襲したと思われる。

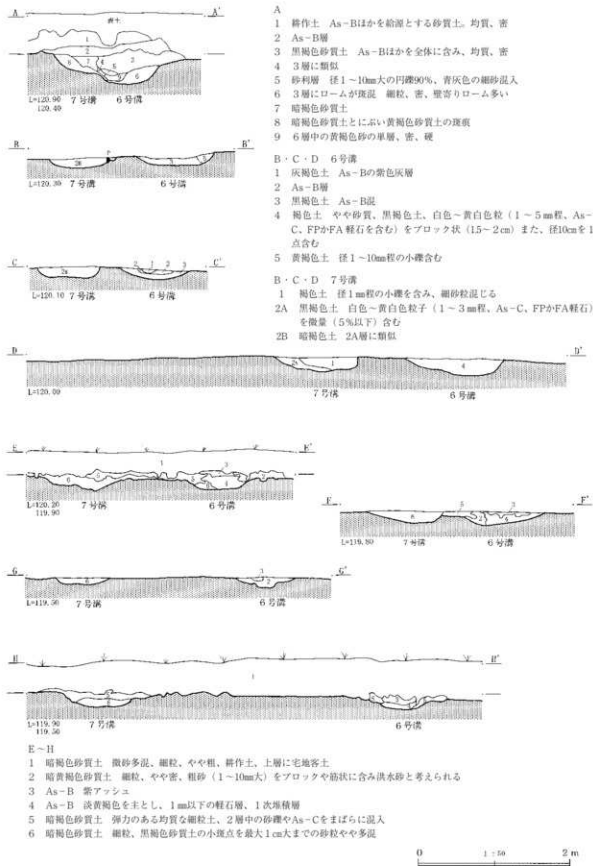
重複関係 断面Aによると、7号溝が先行し、その後6号溝に付け替えられている。

規模 検出長51m、上幅は断面Eで1m、深さ15cmである。全体に幅、深さともに一定している。断面Eでのズレは、夏と冬に分けて調査した際の生じた遺構確認面の違いによるもので、北側が本来の姿である。また、深さは断面Aでは40cm以上もある。



第143图 6号・7号溝平面

第4章 検出された遺構と遺物



第144図 6号・7号溝断面

走向 南北、直線、南への下り勾配である。断面は碗形である。検出した範囲でのレベル差は、北端が120.05m、南端が119.25m、その差70cmである。

覆土 砂利混じりの暗褐色砂質土、黒褐色砂質土で埋没、As-B降下以前には埋没している。

遺物 土師器の杯、甕の細片が少量出土している。磨滅したものが多い。

所見 配水を目的とした溝である。6号溝と規模、走向でよく似ており、機能としては、かつてここを流れていた4号や5号溝の機能を受け継ぐものであろう。時期は、As-B降下以前、2つある住居のピークでも後半、10世紀以降であろう。

8号溝 (第145図 PL35-1・2)

位置 5区 38L~Q-2・3グリッド、40号住居跡の南6m付近を東西に検出された。

重複関係 なし

規模 検出長22m、上幅34~76cm、深さ10cm、西に行くほど細く浅くなり、最後は途切れている。

走向 東西、地形勾配に対して直交している。Nラインを境にして、くの字に折れている。

覆土 Nラインを境にして覆土に違いが見られる。東は、As-Cを混入する黒褐色砂質土であるが、西はにぶい黄褐色砂層で埋まり、最下層には直径1cm大の礫を点々と残す所もある。この黄褐色砂層は、22号住居跡、6号溝、7号溝の上面を埋める砂質土とよく似ている。

遺物 黄褐色砂質土に混入して土師器杯、灰釉陶器碗が出土している。いずれも細片で図示はしていない。

所見 覆土の砂層には、水の流れた形跡があるものの、一時的なもので底面に凹凸や穴をあけるほどではない。排水や区画が目的に掘られたのであろう。時期は、40号住居跡の南を区画する垣根と考えたいが、覆土に灰釉陶器を含むことから10世紀代か、それ以降の可能性の方が高い。また、黄褐色砂質土を手がかりにすると、6号や7号溝とは同一の溝の可能性もある。

9号溝 (第145図 PL35-3・4)

位置 5区 38P~R-4~8グリッド

重複関係 なし

規模 検出長31m、幅は20~30cmと一定している。途中で切れているが、遺構確認の時に削平したことによるもので、本来は連続していたことが確認されている。

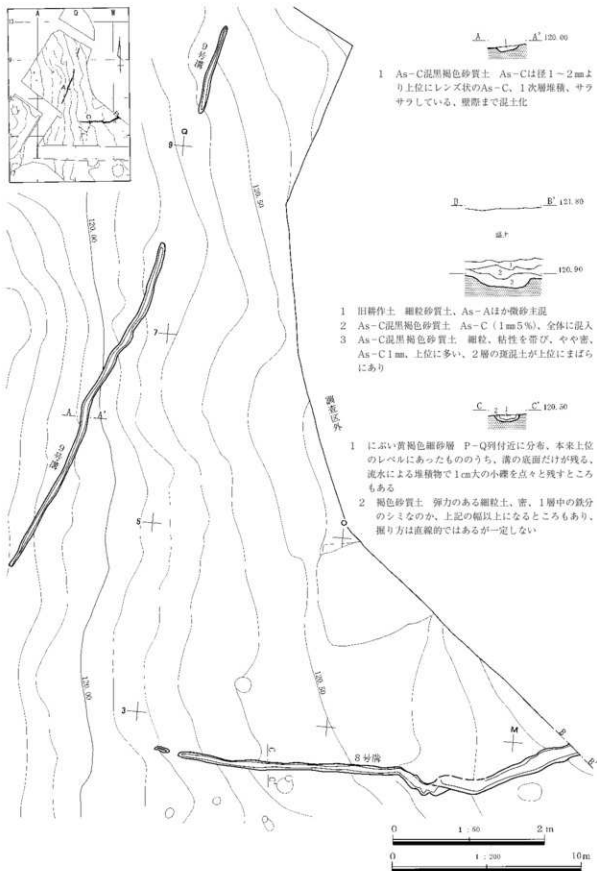
走向 南北、直線、南への下り勾配である。検出した南北両端でのレベル差は80cmである。

覆土 As-Cの1次層で自然埋没している。As-Cの粒径は、1~2mmである。

遺物 出土した遺物はない。

所見 水の流れた形跡はない。区画することが目的の溝である。時期は、As-Cを根拠とすると古墳時代の前期である。周囲に遺構が散漫なことから畠を想定して調査を進めてみたが、検出したのは調査区の断面を含めてもこの1条だけである。検出した中では、古墳時代の前期に遡る唯一の遺構である。

第4章 検出された遺構と遺物



第145図 8号・9号溝平・断面

6 井戸

概要 3区で1基が検出された。ほかに、1区にある1号土坑、2区にある4号土坑が井戸と考えられる。住居の群に対応する分布かと思われるが、隣接する谷地でまかなっていたのか、それとも調査区外にあるのか住居に比較しても数としては少ない。

1号井戸（第110図 PL23-5、35-5・6、55）

位置 3区 27F-17グリッド、台地の最高地点、標高120.30mにある。

重複 39号住居跡の中央部に重複し、1号井戸が新しい。

形状 上部は、長径130cm、短径118cmの円形、中位以下は長径61cm、短径51cmの円筒形である。深さは、39号住居跡の床面から150cmである。底面は平坦で、暗色帯を掘り抜き下位の褐色ロームに達している。壁にウロはなく、底面もあまり荒れていない。また、底面のノロも少なく湧水量が少ないか、短期間の使用だったのではないだろうか。

埋没状況 覆土は、短期間のうちに中位付近までが自然埋没、その後は、やや時差をもって埋没している。遺物は、この埋没時に混入している。覆土の様子からは、住居跡との差はない。

7 道

概要 5区で3条を検出した。1号と2号は、15号掘立柱建物跡への通路跡である。ほぼ直線的な走向である。3号は、幅40cm前後の硬化面が続き、浅い皿状の断面をしている。路面は、鉄分を多量に含んだ砂層で覆われていた。この路面と砂層の特徴は、市道をはさんで西に広がる亀泉坂上遺跡1区で発見されている道と良く似ている。

また、3号溝の覆土中位で硬化面が、同じく4号、5号溝の北寄りを東西に横断する硬化面が確認されている。上記の3条よりも明瞭、いかにも道らしい。3箇所に分断されているが規模や状態の点で共通し、2区から3区を横断する道ではないかと考えられる。また、溝の底面との間に段差があって、それを溝と道との時差とも考えたいが掘削時の作業通路という見方もできる。溝には橋らしきものはなく、それを、完成後も利用したので覆土に時差が見られるのではないだろうか。

1号道（付図1 PL35-7）

位置 5区 28P-S-20、38S-1グリッド

重複 38S-1グリッドで2号道が分岐する。延長線上に15号掘立柱建物跡がある。

規模 検出長 16.5m、路面の幅 80～90cm。

覆土 遺構確認の時点で削平し、残っていない。

遺物 なし

所見 確認したのは、硬化面下の圧痕である。路面は、調査区の西壁、反対の4区西の壁では確認することができない。

第4章 検出された遺構と遺物

2号道 (付図1 PL35-7)

位置 5区 38Q-T-1グリッド、1号道から分岐し併走している。15号掘立柱建物跡の桁延長上にある。

重複 なし

規模 検出長 12m、路面の幅 45~55cm

覆土 遺構確認の時点で削平し、残っていない。

遺物 なし

所見 確認したのは、硬化面下の圧痕である。

3号道 (付図1 PL35-8)

位置 5区 38Q-8グリッド、西へ20m、市道のあたりに中心がある谷頭への標高120m前後の傾斜面にある。基本土層4層As-C混黒褐色砂質土で遺構確認中、南北に続く硬化面を検出した。なお南北に続くことは確認しているが、攪乱されていた上に霜で消失してしまい、図示できたのが現状の範囲である。

重複 なし

規模 路面は、As-C混黒褐色砂質土を直接踏みしめて硬化させたもので、特に土を混ぜるなどして路面を作っている様子はない。硬化面は厚い箇所でも1cm、露出して水に触れることが多いためか鉄分の凝集で一層固くなっていた。検出長は、2.4mである。

覆土 黄褐色の細砂層で埋没していた。

遺物 なし

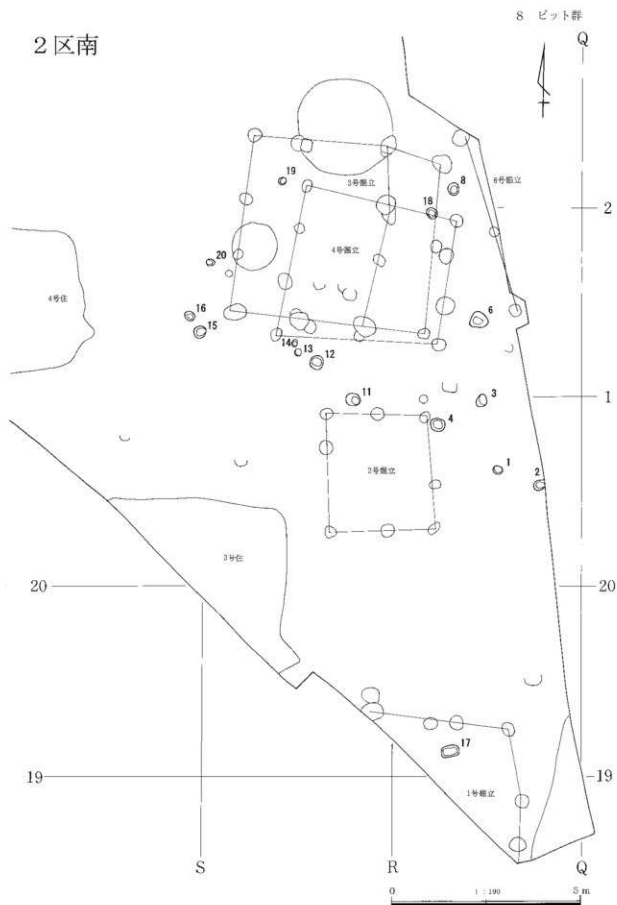
所見 時期は、古代である。路面の様子は、亀泉坂上遺跡1区で検出された9条の道と同じものである。

8 ビット群

概要 (付図1、第146~162図 PL36-1~6、53)

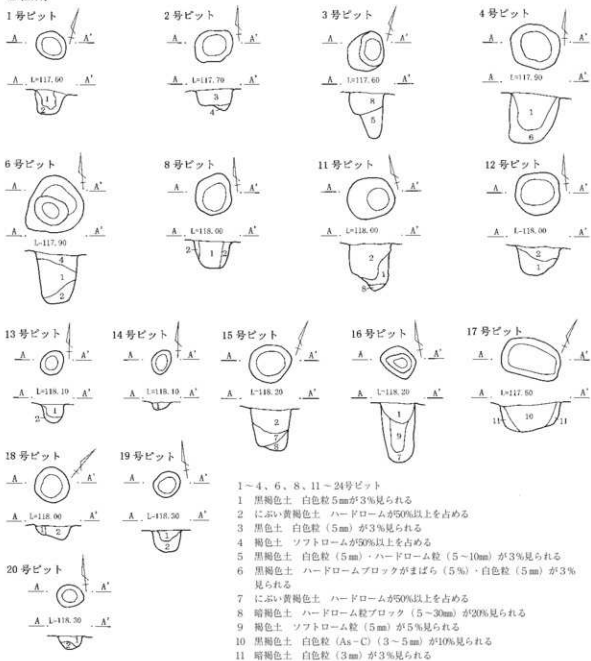
ビットは、調査区全体で164基を検出した。このほかに、漏れもあると思われるが住居跡の数に比例するように、調査区の東に多く、西になるに従い少なくなる。基準は設けなかったが、大型のものを土坑とし、小型のものをビットとした。1区では、10基を台地の縁辺部で検出することができた。適度な間隔を持ち1号溝に沿うようでもあり、集落の東を開く簡単な柵のようにも見られる。10基のうち4基は地震による地滑りで、壁の中段が左右にずれていた。2区は、調査中にA群、B群、C群と仮称したビットの集中していた箇所がある。掘立柱建物跡が何度か建て替えられた跡と見られ、半数は掘立柱建物跡の柱穴に変更となった。この状況は、3区でも同じである。住居跡の周囲にあつて掘立柱建物跡の柱穴に変更となったものや可能性を持つものと、4号・5号溝の両側に帯状になって集中するものがある。4区東では、調査区の南東隅だけに19基が集中していた。直径こそ40cm足らずと小さいが、いずれも30~50cmの深さを持っている。しっかりと掘り方で、25号や26号の住居跡に伴う簡易な建物跡や屋敷まわりの柵をイメージして調査をしたが、プランにまとめることはできなかった。4区西と5区は、遺構の数そのものが少なく、ビットも数える程度であった。

2区南

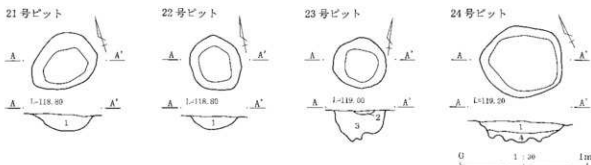


第146図 2区南ビット分布

2区南



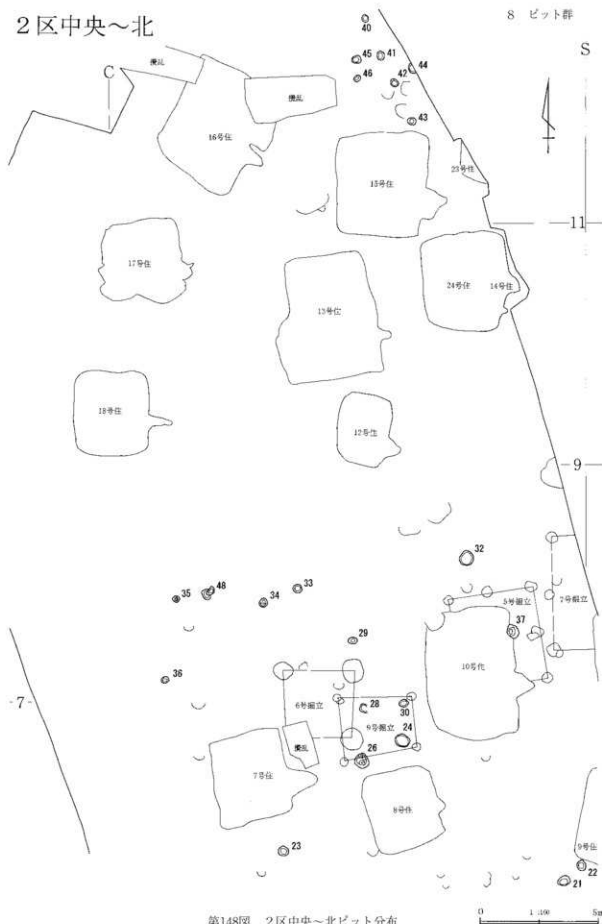
2区中央～北



第147図 2区南ビット及び2区中央～北ビット(1)平・断面

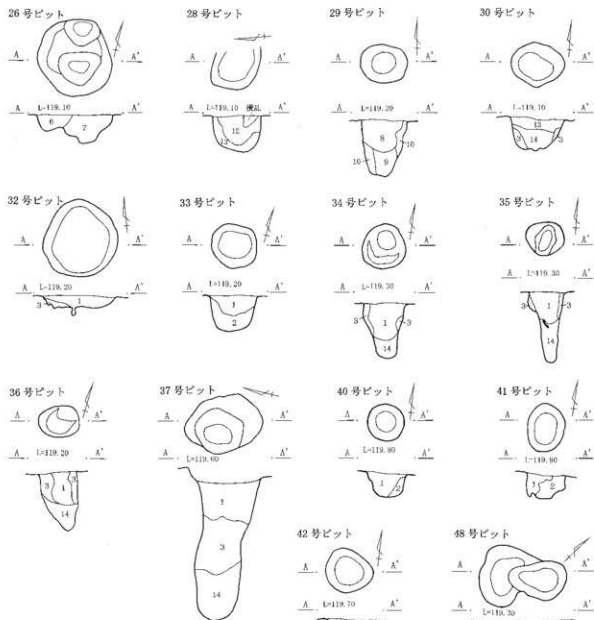
2区中央～北

8 ビット群



第148図 2区中央～北ビット分布

第4章 検出された遺構と遺物



26、28-30、32-37、40-42、48号ビット

- 1 黒褐色土 白色粒、焼土粒 (3-5mm) が5%見られる
- 2 暗褐色土 白色粒・炭化物粒 (3mm) が3%見られる
- 3 褐色土 ソフトロームが50%以上を占める
- 4 暗褐色土 白色粒 (3mm) が3%見られる
- 5 黒褐色土 白色粒 (3mm) が3%見られる
- 6 にぶい黄褐色土 白色粒 (3mm) が3%、焼土粒 (3mm) が1%見られる
- 7 暗褐色土 白色粒 (3-5mm) が3%、焼土 (5mm) が1%見られる
- 8 暗褐色土 ローム粒 (3-10mm) が10%見られる
- 9 黒褐色土 ローム粒 (3-5mm) が10%見られる
- 10 褐色土 ハードローム粒 (5-10mm) が10%見られる
- 11 褐色土 ハードローム粒 (3-5mm) が5%見られる
- 12 にぶい黄褐色土 白色粒・焼土粒、ローム粒 (3-5mm) が5%見られる
- 13 褐色土 白色粒・焼土粒 (3mm) が5%見られる
- 14 暗褐色土 ソフトローム粒 (5-10mm) が10%見られる



第149図 2区中央～北ビット平・断面(2)

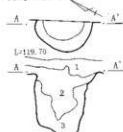
2区中央～北

43号ビット



- 1 褐色砂質土
2 ロームと黒褐色砂質土の混土、やや密

44号ビット



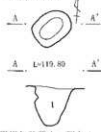
- 1 表土
2 褐色砂質土とローム(1~10mm)微粒の混土、均質、やや密
3 黒褐色砂質土 ローム粒やや多

45号ビット

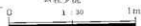


- 1 ロームと褐色砂質土の混土
ローム80%以上、一部1cm大
2 にぶい黄褐色砂質土 ローム漸移層の2次堆積

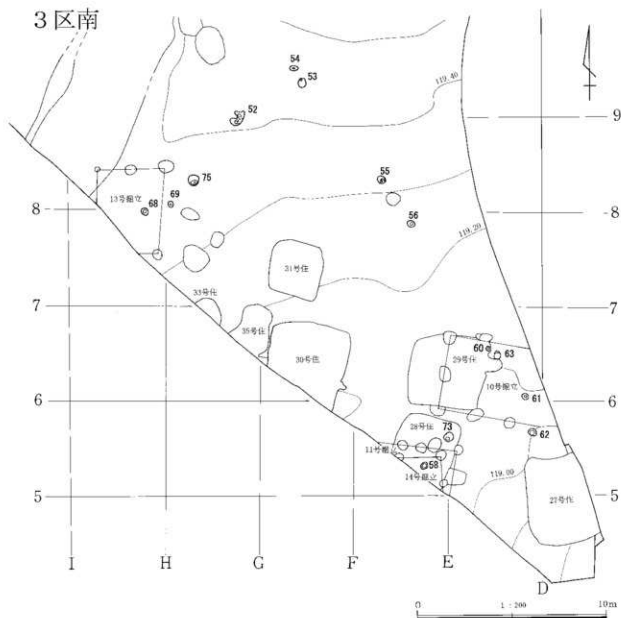
46号ビット



- 1 黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、密、ローム粒少混

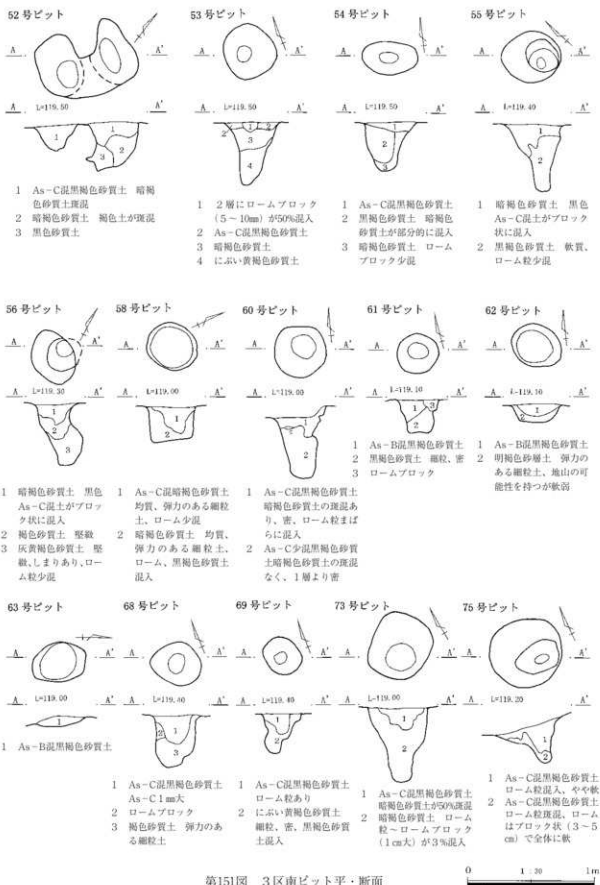


3区南



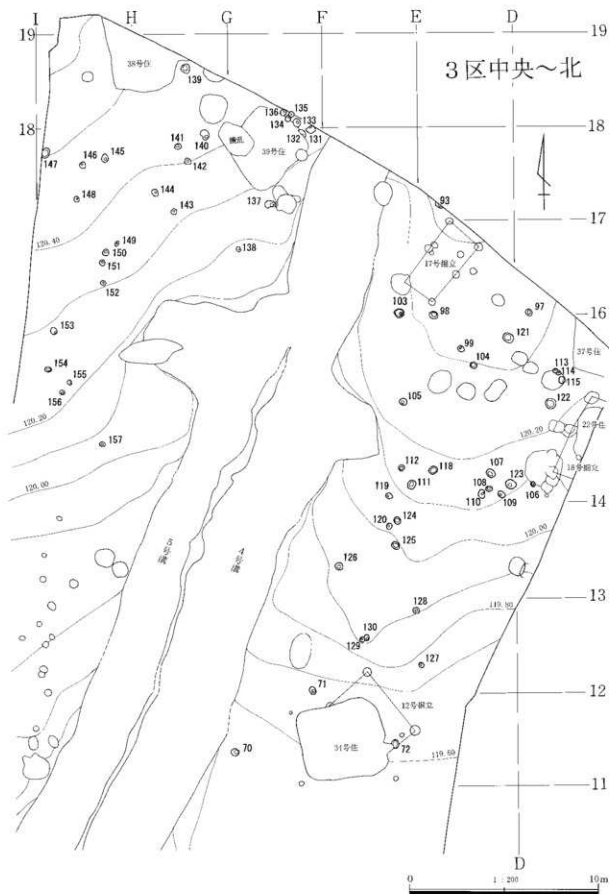
第150図 2区中央～北ビット平・断面(3)及び3区南ビット分布

第4章 検出された遺構と遺物



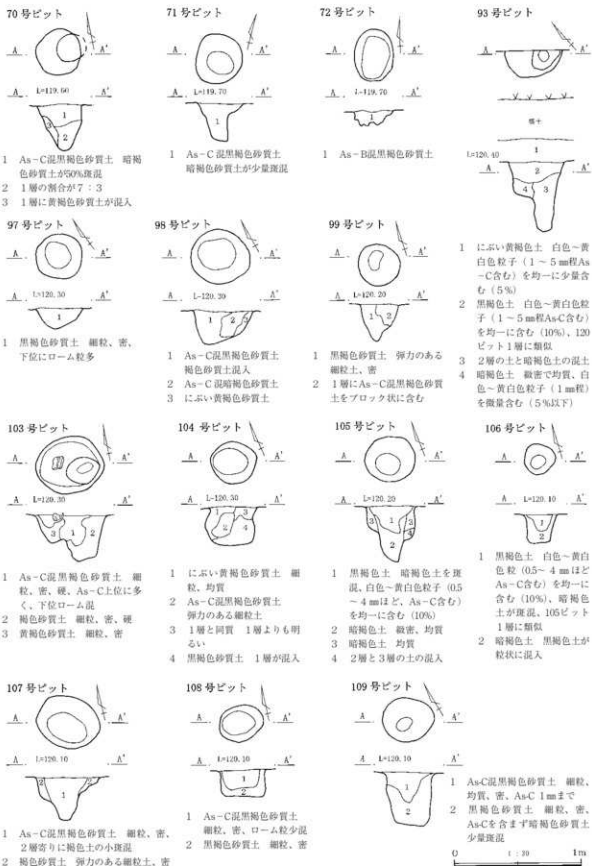
第151図 3区南ピット平・断面





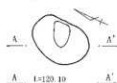
第152図 3区中央～北ビット分布

第4章 検出された遺構と遺物



第153図 3区中央~北ピット平・断面(1)

110号ビット



- 1 As-C混黒褐色砂質土 細粒、均質、密、As-C1mmまで全体に混入
- 2 におい黄褐色砂質土とソフトロームの混土、細粒、密

111号ビット



- 1 におい黄褐色砂質土 As-C少混、細粒、密
- 2 As-C少混黒褐色砂質土 1層が硬混、密
- 3 As-C少混黒褐色砂質土 細粒、やや密、Sは棒状

112号ビット

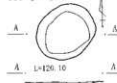


- 1 As-C混黒褐色砂質土
- 2 黒褐色砂質土

113~115号ビット



118号ビット



- 1 暗褐色土 均質
- 2 褐色土 均質
- 3 褐色土 しまりやや弱

119号ビット



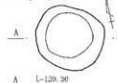
- 1 暗褐色土 白色~黄白色粒子(1mm程)を少量含む(5%)
- 2 暗褐色土 1層に類似するがやや暗色味あり

120号ビット



- 1 黒褐色土 白色~黄白色粒子(1~10mm程As-C含む)を均一に含む(10%)
- 2 119ビットの1層に類似

121号ビット



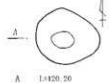
- 1 黒褐色土 暗褐色土が硬混
- 2 暗褐色土

122号ビット



- 1 黒褐色土 暗褐色土が硬混
- 2 暗褐色土

123号ビット



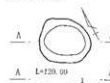
- 1 黒褐色土 暗褐色土が硬混、黄白色粒子(1mmほど、As-C含む)を微混(5%以下)
- 2 暗褐色土の明暗が硬混 121ビット2層に類似
- 3 褐色土 特に東側に2層の土の混入

124号ビット



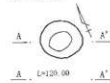
- 1 黒褐色土 暗褐色土を硬混、121ビット1層に類似
- 2 暗褐色土の明暗を硬混 121ビット2層に類似

125号ビット



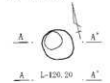
- 1 黒褐色土 黄白色粒子(3mm程、As-Cを含む)を少量(5%)含む
- 2 121ビットの2層に類似
- 3 褐色土(ローム主体土) 2層の土混入

126号ビット



- 1 黒褐色土 暗褐色土が硬混、黄白色粒子(~5mm程、As-Cを含む)を特に上位に含む(10%)、123ビット1層に類似
- 2 暗褐色土の明暗が硬混

127号ビット



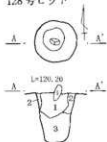
- 1 123ビットの1層に類似
- 2 褐色土 ロームブロック
- 3 褐色土主体 1層の土の混入、しまりやや弱

第154図 3区中央~北ビット平・断面(2)



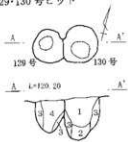
第4章 検出された遺構と遺物

128号ピット



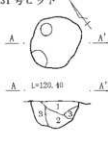
- 1 123ピットの1層に類似 黄白色粒子 (~1mm程, As-Cを含む)を少量(5%)含む
- 2 暗褐色土 均質
- 3 褐色土主体 1層の土の混入, 黄白色粒子(As-Cを含む)を微混(5%以下)

129・130号ピット



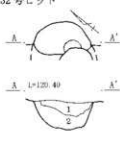
- 1 123ピットの1層に類似 黄白色粒子 (~5mm程, As-Cを含む)を含む(10%)
- 2 褐色土の明暗差あるローム土混土, またブロック状(10mm程)にも含む(10%)
- 3 暗褐色土 均質
- 4 1層に類似 1層より暗褐色土を多く混混, 全体的に黄色みを帯びており, 黄白色粒子の含み方も少ない(5%)

131号ピット



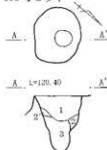
- 1 黒褐色土 暗褐色土が多く 黄埃混, 白色粒子(1mm程, As-Cを含む)を微混(5%以下), 123ピット1層に類似, 但し暗褐色土多混, 黄色味あり
- 2 黒褐色土 暗褐色土が斑混, 121ピット1層に類似
- 3 褐色土 黒褐色土混土

132号ピット



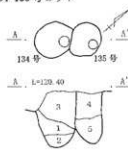
- 1 暗褐色土主体 褐色土混入, 白色~黄白色粒子(1mm程, As-Cを含む)を微混(5%以下)
- 2 1層より褐色土多く混じる, 黄色味あり

133号ピット



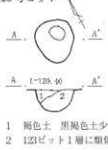
- 1 123ピット1層に類似 黄白色粒子は少混(5%)
- 2 褐色土 黒褐色土混入, 壁崩落土
- 3 121ピット1層に類似

134・135号ピット



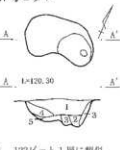
- 1 暗褐色土の明暗を斑混 白色から黄白色粒子(1mm程)を微混(5%以下), また褐色土を粒状(1~10mm)に含む(10%)
- 2 暗褐色土 褐色土を粒状(1~10mm)に含む(10%), 1層より黄色味あり
- 3 1層に類似 但し褐色土粒含まない
- 4 123ピット1層に類似
- 5 褐色土 4層の土混入

136号ピット



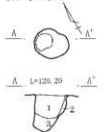
- 1 褐色土 黒褐色土少混
- 2 123ピット1層に類似

137号ピット



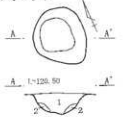
- 1 123ピット1層に類似
- 2 暗褐色土 褐色土混入, ややしまり跡
- 3 2層に類似 褐色土やや多混, 黄色味帯びる
- 4 褐色土と1層の混土
- 5 褐色土 黒褐色土少混

138号ピット



- 1 123ピット1層に類似
- 2 褐色土 1層の土少混, しまりやや弱
- 3 2層に類似

139号ピット



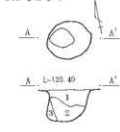
- 1 123ピット1層に類似
- 2 138ピット2層に類似

140号ピット



- 1 123ピット1層に類似
- 2 138ピット2層に類似

141号ピット

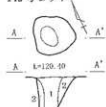


- 1 暗褐色土 褐色土を斑混
- 2 褐色土主体 暗褐色土混入
- 3 褐色土



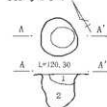
第155図 3区中央~北ピット平・断面(3)

142号ビット



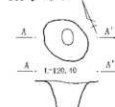
- 1 黒褐色土 暗褐色土が斑混、黄白色粒子（1mm程、As-Cを含む）を微混（5%）、123ビット1層に類似
- 2 褐色土 1層の土少混

143号ビット



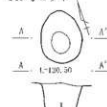
- 1 黒褐色土 暗褐色土が斑混、黄白色粒子（～1mm程、As-Cを含む）を微混（5%以下）、123ビット1層に類似
- 2 黒褐色土 暗褐色土を斑混、1層より黄色味あり

144号ビット



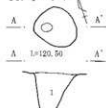
- 1 黒褐色土 暗褐色土が斑混、黄白色粒子（～1mm程、As-Cを含む）を微混（5%以下）、特に上位に含む

145号ビット



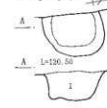
- 1 123ビット1層に類似 但し黄白色粒子は少混（5%）

146号ビット



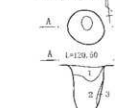
- 1 123ビット1層に類似 但し白色粒子は（～5mm）で少混（5%）

147号ビット



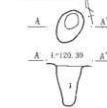
- 1 暗褐色土 均質で堅緻、As-C等含まない

148号ビット



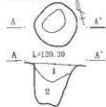
- 1 123ビット1層に類似、但し黄白色粒子は（～3mm）で少混（5%）
- 2 黒褐色土 暗褐色土が斑混、121ビット1層に類似、但し暗褐色土多混、黄色味帯びる
- 3 褐色土主体 2層の土混入

149号ビット



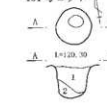
- 1 黒褐色土 暗褐色土が斑混、黄白色粒子（～1mm程、As-Cを含む）を微混（5%以下）、特に上位に含む

150号ビット



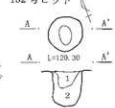
- 1 123ビット1層に類似 但し黄白色粒子は径～3mm程で少混（5～10%）
- 2 143ビット2層に類似

151号ビット



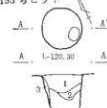
- 1 123ビット1層に類似 但し黄白色粒子は径～3mm程で少混（5～10%）
- 2 143ビット2層に類似

152号ビット



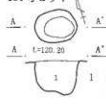
- 1 黄褐色土と黒褐色土の混土
- 2 黄褐色土主体 黒褐色土少混、しまりやや弱

153号ビット



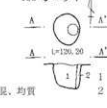
- 1 黒褐色土 暗褐色土が斑混、黄白色粒子（～1mm程）を微混（5%以下）、123ビット1層に類似
- 2 暗褐色土 褐色土をブロック状（10～40mm程）に含む（10%）
- 3 褐色土 均質
- 4 黒褐色土 暗褐色土が斑混、121ビット1層に類似

154号ビット



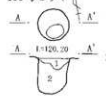
- 1 暗褐色土 褐色土が斑混、均質

155号ビット



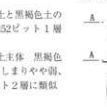
- 1 121ビット1層に類似
- 2 黄褐色土

156号ビット



- 1 黄褐色土と黒褐色土の混土 152ビット1層に類似
- 2 黄褐色土主体 黒褐色土少混、しまりやや弱、152ビット2層に類似

157号ビット

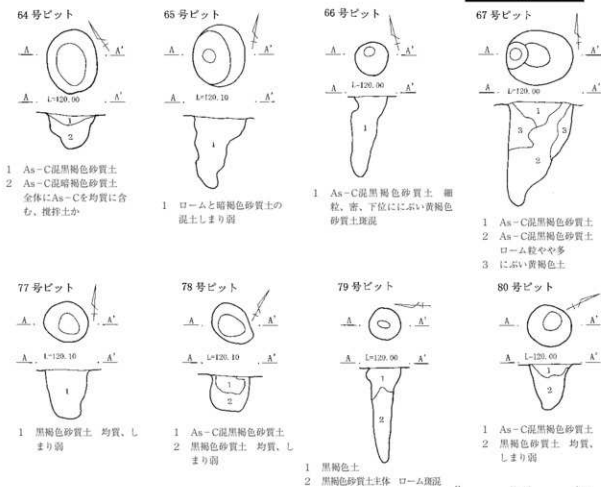
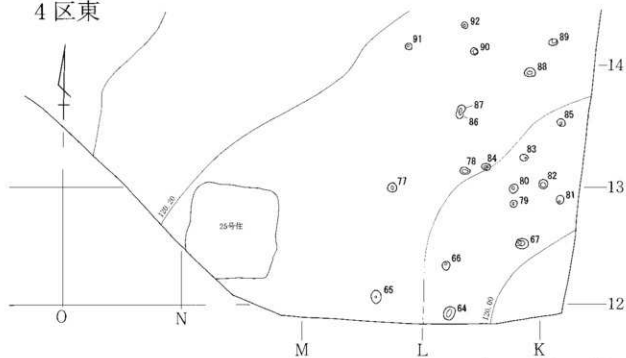


- 1 121ビット1層に類似
- 2 黒褐色土と褐色土の混土 しまり弱
- 3 褐色土主体 黒褐色土少混

0 1:20 1m

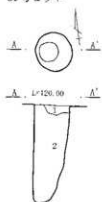
第156図 3区中央～北ビット平・断面（4）

4区東



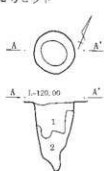
第157図 4区東ピット分布及び平・断面(1)

81号ビット



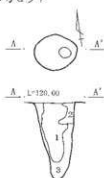
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色砂質土主体
ローム混泥

82号ビット



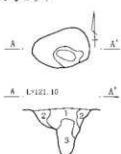
- 1 にぶい黄褐色砂質土
細粒、密
- 2 にぶい黄褐色砂質土と
ローム粒混土

83号ビット



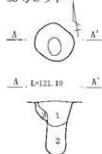
- 1 黒褐色砂質土 As-C、にぶい
黄褐色砂質土混泥、密
- 2 にぶい黄褐色砂質土
- 3 2層とロームブロックの混土

84号ビット



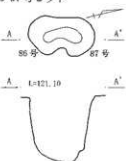
- 1 黒褐色土
- 2 1層の攪拌土
- 3 黒褐色砂質土 均
質、しまり弱

85号ビット

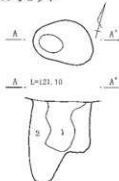


- 1 黒褐色砂質土 As-C、にぶい
黄褐色砂質土混泥、密
- 2 3層よりしまり弱
- 3 にぶい黄褐色砂質土 細粒、密、
2層より密

86・87号ビット

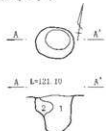


88号ビット



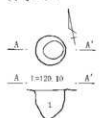
- 1 黒褐色砂質土 As-C、に
ぶい黄褐色砂質土混泥、密
- 2 にぶい黄褐色砂質土 細
粒、密

89号ビット



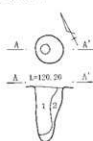
- 1 黒褐色砂質土 As-C、
にぶい黄褐色砂質土混
泥、密
- 2 にぶい黄褐色砂質土

90号ビット



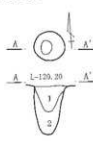
- 1 黒褐色砂質土 As-C、にぶい
黄褐色砂質土混泥、密

91号ビット



- 1 As-C混黒褐色砂質土
ロームブロック、にぶい
黄褐色砂質土混泥
- 2 にぶい黄褐色砂質土
細粒、密

92号ビット

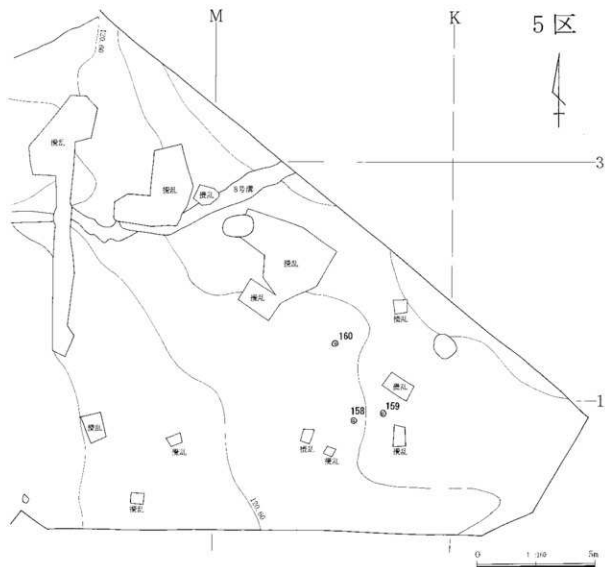


- 1 As-C混黒褐色砂質土
ロームブロック、にぶい
黄褐色砂質土混泥
- 2 にぶい黄褐色砂質土

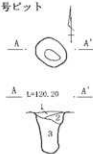


第158図 4区東ビット平・断面(2)

第4章 検出された遺構と遺物



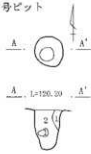
158号ピット



- 1 褐色土 黄褐色土混入
- 2 黄褐色土主体 褐色土少混、1・3層より黄色味有り、ややしまり弱
- 3 黄褐色土と褐色土の混土
1層より黄色味有り

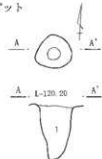
※1～3とも白色粒子（～0.5mm程）を微混（5%以下）

159号ピット



- 1 黄褐色土（ロームブロック）
- 2 褐色土主体 黄褐色土を微混、白色粒子（～0.5mm程）を微混（5%以下）

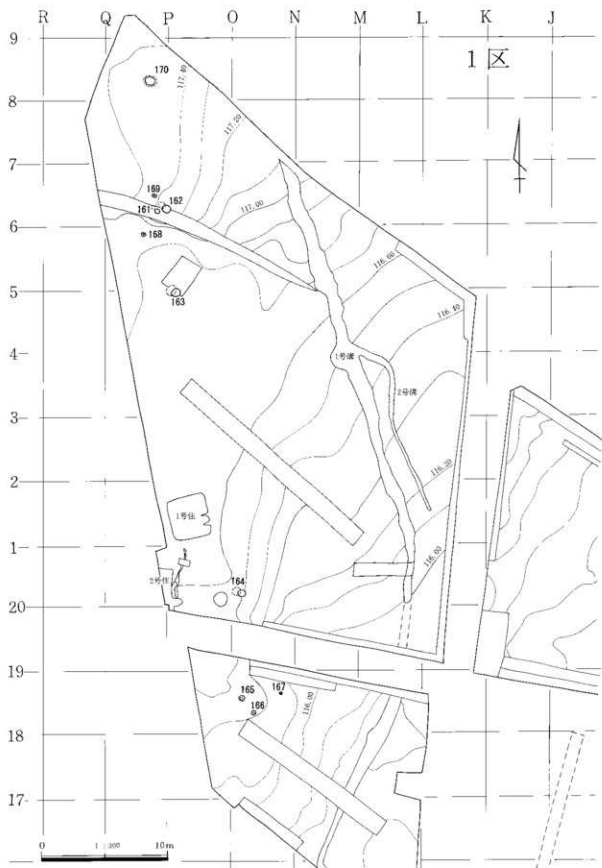
160号ピット



- 1 黄褐色土と褐色土の混土
158号ピット1層より黄色味有り

0 1 : 30 1m

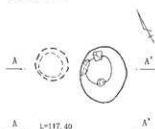
第159図 5区ピット分布及び平・断面



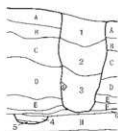
第160図 1区ビット分布

第4章 検出された遺構と遺物

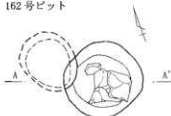
161号ピット



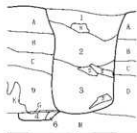
l=117.40



162号ピット



l=117.40



161・162号ピット

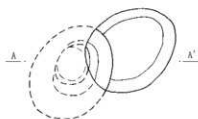
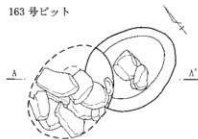
1 暗灰黄色土 As-C混ロームブロック含む
2 黒褐色土 As-C含む、ローム粒含む、粘質土

3 黒褐色土 粘質土、砂粒少
4 明黄褐色土 ローム粒多
5 黒色砂質土 川砂多
6 黒色粘質土 ロームブロック少

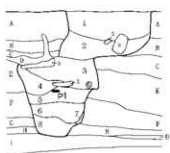
161・162号ピット地山

A 暗灰黄色土 As-YP含む
B 黄褐色土 As-YP多
C 黄褐色土 As-OK混
D 黄褐色土 As-OK少
E 明黄褐色土 砂質土
F 明黄褐色土 粘質土、白色粘質土ブロック含む(地滑り)
G 黒褐色土 ローム粒混入
H 明黄褐色土 As-BP、白色砂粒混入

163号ピット



l=116.80



1 (163号ピット)



2 (164号ピット)

0 1:30 10cm

163号ピット

1 黒褐色土 As-C少混、ローム粒、ロームブロック混
2 黒褐色土 As-C無、粘質土
3 黒色土 ロームブロック少混、粘質土
4 黄褐色土 ロームブロック、ローム粒多
5 黒色土 黄色、黒褐色土とローム粒を互層に混入
6 黒褐色土 砂質土、黒褐色土、ローム粒、川砂混入
7 黄褐色土 ロームブロック
8 黒色土 砂質土、黒褐色土、ローム粒少、川砂多

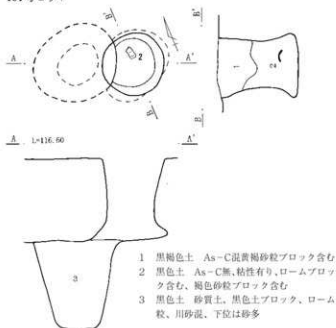
163号ピット地山

A 黄褐色土 As-OK混
B 黄褐色土 As-OK少、砂質
C 明黄褐色土 粘質土、白色粘質ブロック含む、地滑り層
D 黒褐色土 ロームブロック混
E にふい黄色土 As-BP、白色砂粒多
F 黄褐色土 As-BP粘質
G 黄褐色土 As-MP含
H にふい黄色土 粘質土、AT
I オリーブ褐色土 粘質土、暗色帯

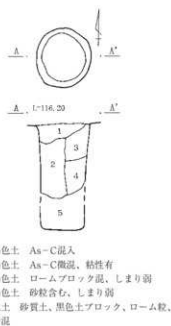
0 1:30 1m

第161図 1区ピット平・断面(1)及び出土遺物

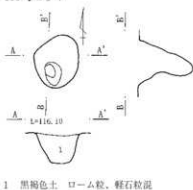
164号ビット



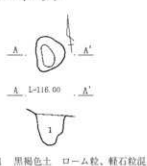
165号ビット



166号ビット



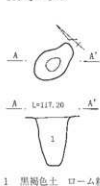
167号ビット



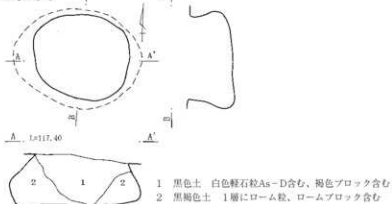
168号ビット



169号ビット



170号ビット



第162図 1区ビット平・断面(2)

9 掲載遺物と遺構外遺物

掲載した遺物は、総数で408点である。遺構別では、住居跡315点、掘立柱建物跡1点、土坑7点、溝46点、井戸1点、ピット2点、遺構外36点である。

器種別に見た内訳は、土師器152点、須恵器124点、灰釉陶器2点、石製品61点、金属製品33点、石器28点、縄文土器8点である。遺構の時期を示す遺物を選んだ。詳細は、次のとおりである。

土師器 杯87点、甕45点、小型甕6点、台付甕3点、皿3点、鉢1点、黒色土器4点、土錘1点、高杯1点、おもり1点

須恵器 杯49点、甕25点、蓋15点、高杯4点、椀15点、瓶2点、コップ形1点、甕1点、長頸壺7点、短頸壺3点、甕1点、紡錘車1点

灰釉陶器 椀2点

石製品 磨石9点、砥石8点、敲石24点、こも編み石12点、台石5点、滑石製模造品有孔方板1点、錘（おもり）1点、紡錘車1点

鉄製品 鎌2点、釘1点、鍬6点、斧1点、刀子6点、鉄滓9点、金具3点、鉛砲1点、鈎1点、鉄塊1点

銅製品 沓方1点、銭（文久永寶）1点

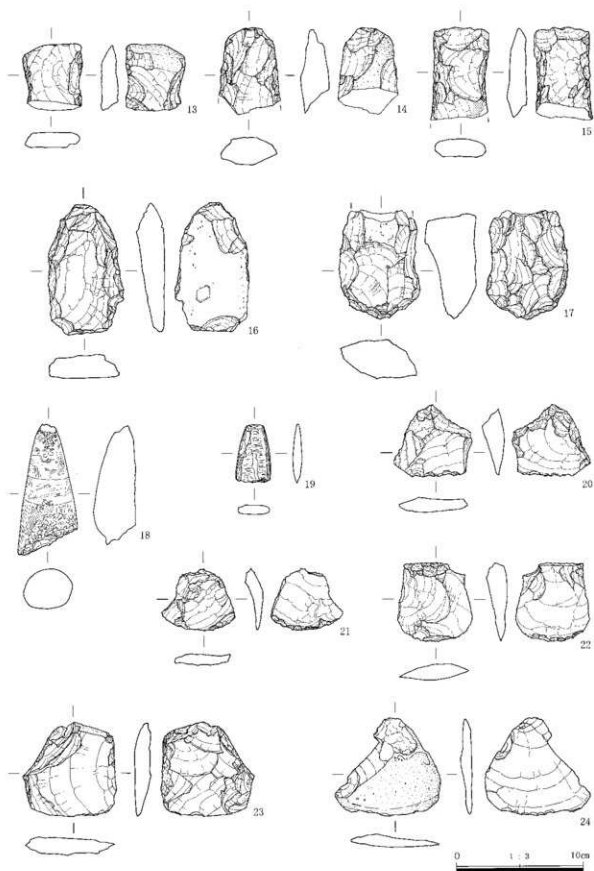
石器 打製石斧7点、磨製石斧2点、多孔石1点、凹石4点、石鍬7点、石匙1点、スクレイパー6点

縄文土器 深鉢8点

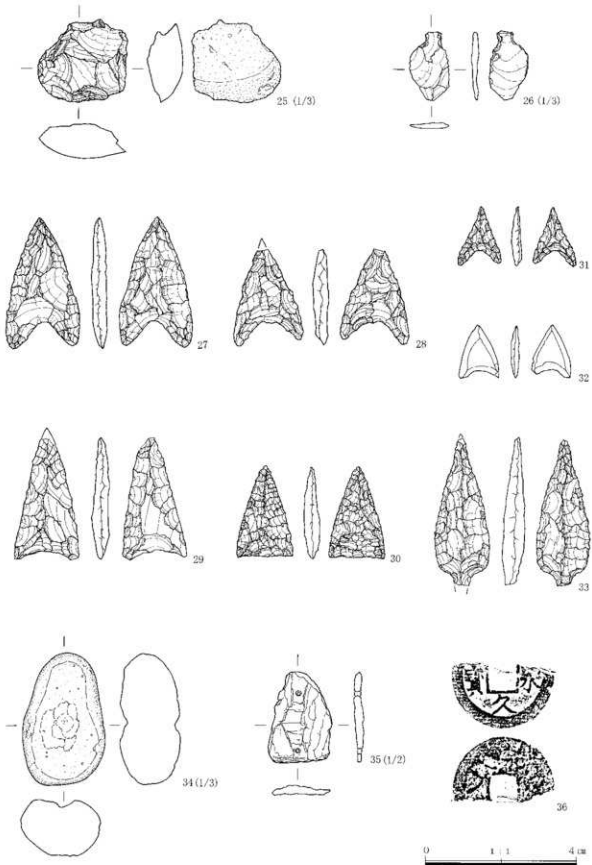
遺物は、収納箱にして38箱が出土した。敲石やこも編み石、カマドの袖石などの石が6箱、残りの32箱が土器類である。東の2区、3区に多くて西になると少なくなり、遺構の分布傾向をそのまま反映している。しかし、住居跡からの出土はどこでも一様に少なく、平均すれば1箱の半分以下である。中にはポリ袋が1、2という所もある。25号や32号のように、床面までが深く遺存状態が良好な住居跡であっても、良好さと遺物量は比例することなく数える程度しかない。検出できた範囲にもよるのだろうが、重複が激しいからとか大きく攪乱されているというわけではなく、残されていた遺物自身が本来少ないのであろう。遺物の少なさは、この遺跡でまずあげられる、遺物の出土傾向から見た特徴である。

そんな中、8号や10号、18号などわずかに数軒の住居跡では1箱以上になり、遺物が多いという印象を受けた。ただし、これも埋没する途中に、近くの住居跡から廃棄したものや流れ込んだと思われるものを加えた上での量で、床面での使用時の状態となると軒数はさらに限られている。また、器種別に見ると杯はやや多く見られるものの、甕が少ない。土師器の甕は、数の上では杯に次いでいるものの、全体に小さな破片状態で接合したものが少ない。この甕類が少ないのも出土傾向に付け加えられる特徴で、カマドの遺存状態が良かっただけに目を引いている。住居を廃棄するに当たって、意図的に持ち去ったものであろうか。一方、須恵器の甕は、破片状態ながら個体数が多い。15号住居跡の覆土にあったものは、破損した後も胴部を大きな鉢のようにして再利用している。重宝したか珍重されていたかを示すものであろう。

最後に、遺構外遺物は36点である。グリッドから出土したものの、4号・5号溝など各遺構の覆土に混入していたものから選別をした。縄文時代のものが大半となっているが、時期差をだすために意図的に選んだもので遺物量全体に占める率は低い。弥生時代の土器は1点もなく、古墳時代も遺構が検出されている6世紀以降で前期や中期は皆無に等しい。わずかに、3号溝、4号溝の覆土からS字口縁台付甕の破片が出土した。また、中世や近世の陶磁器類も数える程度であった。



第164図 遺構外出土遺物(2)



第165図 遺構外出土遺物 (3)

第4章 検出された遺構と遺物

住居跡計測表

工堀、※は数値以上と推定されるもの

No.	区	グリッド	時代	平面形	縦・横・壁高 (cm)	面積 (㎡)	方 向	柱穴	足溝	カマド	貯蔵穴
1	1	27O-1	8C	方形	300-340-14	10.54	N76°E	-	-	東	-
2	1	17OP-19-20	8C	方形か	115-320-12	1.84 ※	N96°E	-	有	東	-
3	2	17RS-19-20	7-8C	方形か	460-350-60	8.28 ※	N96°E	-	有	東	-
4	2	27ST-1	8C	方形	405-352-58	14.25	N98°E	-	有	東	南東
5	2	27T-2	9C	方形	290-360-40	10.44	N91°E	3	有	東	南東
6	2	27-28TA-3~5	6~7C	方形	740-720-20	53.28	N82°E	4	有	東	南東
7	2	28AB-5-6	8C	方形か	330-365-54	12.05	N81°E	-	有	東	南東
8	2	27T-5-6	8-9C	方形	312-330-62	10.29	N72°E	-	有	東	南東
9	2	27RS-5-6	8C	方形か	350-430-52	15.05	N100°E	-	有	東	南東
10	2	27ST-6-7	8C	方形	320-440-82	14.08	N86°E	-	有	東	南東
11	2	27R-7	9C	方形か	110-220-45	1.48 ※	N93°E	-	有	-	-
12	2	27-28TA-8-9	9C	方形	225-290-18	6.52	N100°E	-	-	東	南東
13	2	27-28TA-9-10	8C	方形	370-515-34	19.05	N83°E	-	有	東	南東
14	2	27ST-10	10C	方形	370-410-32	15.17	N99°E	-	-	東	南東
15	2	27-28TA-10-11	9C	方形	410-440-45	18.04	N93°E	-	有	東	南東
16	2	28AB-11-12	9C	方形か	370-490-24	18.13	N118°E	-	有	東	南東
17	2	28BC-10-11	9C	方形	330-320-8	10.56	N84°E	-	-	東	南東
18	2	28BC-9	8C	方形	320-360-50	11.52	N89°E	-	有	東	南東
19	2	27-28TA-13	9C	方形か	250-320-16	6.38 ※	N107°E	-	-	東	南東
20	2	27R-5-6	8C	方形か	120-360-52	3.7 ※	N88°E	-	有	-	-
21	2	17PQ-18-19	8C	-	180-320-96	2.88 ※	N104°E	-	-	-	-
22	2	28BC-14-15	9C	方形	330-260-57	8.58 ※	N95°E	-	-	東	-
23	2	27ST-11	9-10C	方形か	116-168-94	0.97 ※	N96°E	-	-	-	-
24	2	27ST-10	10C	方形か	330-420-32	13.86	N93°E	-	-	東	南東
25	4	28M-12-13	8C	方形	360-390-70	14.04	N96°E	-	-	東	南東
26	4	28K-M-16-18	6C	方形	530-520-80	27.56	N85°E	4	-	東	南東
27	3	28CD-4-5	6C	方形か	280-400-75	11.2	N82°E	-	有	東	-
28	3	28DE-5	-	方形か	320-360-12	11.52 ※	N104°E	-	-	-	-
29	3	28DE-5-6	8C	方形	385-390-10	15.01	N96°E	-	-	東	-
30	3	28F-5-6	9-10C	方形	380-400-50	15.2 ※	N98°E	-	有	東	南東
31	3	28F-7	8C	方形か	270-280-50	7.56	N101°E	-	-	東	-
32	4	28BC-17-18	6C	方形か	430-410-100	17.63 ※	N92°E	3	-	東	-
33	3	28G-6-7	9-10C	方形か	80-160-82	1.18 ※	-	-	-	-	-
34	3	28EF-11	9C	方形	440-420-60	18.48	N78°E	5	-	東	南東
35	3	28FG-6	9-10C	方形か	220-280-70	6.16 ※	N96°E	-	有	東	-
36	4	39C-3-4	10-11C	方形	280-380-20	10.64	N63°E	-	有	東	南西
37	3	28BC-15	9-10C	方形か	205-270-40	3.99 ※	N96°E	-	-	-	-
38	3	28GH-18-19	8-9C	方形か	320-390-54	10.72 ※	N86°E	-	有	東	南東
39	3	28F-17-18	9C	方形か	370-330-20	12.21	N45°E	-	-	-	-
40	5	38M-O-3-4	7C	方形か	550-520-52	20.28 ※	N66°E	3	-	-	南東

遺物観察表 (住居土器)

3号住居 (第11回) PL.39

() は推定値 [] は現存値

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	1 床上2	口縁～底部 3/4	13.0 -	3.6	微砂を含む	酸化焰 7.5YR6/6にぶい濁	口縁部横撫で。体部外面横方向彫削り。
2	須恵器 杯	8 床上4	略定	14.5 9.5	3.9	細砂を多く 含む	還元焰 10YR5/4にぶい黄濁	ロクロ成形。回転方向右回り。底部立 上がり彫撫で。底部回転糸切り。
3	須恵器 コップ	2 床上1	完形	6.3 5.5	7.3	白色粒を含 む	還元焰 7.5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り後彫撫で調整。
4	土師器 羹	1 床上7	口縁～胴部	25.5 -	[21.6]	白色微砂粒 を含む	酸化焰 7.5YR5/8明濁	口縁部横撫で。胴部外面縦方向彫削り。 内面斜め方向の撫で後上半部に横方向 の彫撫で。
5	土師器 羹	1 床上2	口縁部 胴～底部	(25.1) (5.0)	(35.0)	白色粒を含 む	酸化焰 5YR5/6明赤濁	口縁部横撫で。胴部外面縦方向彫削り。 内面横方向彫撫で。底部外面縦方向彫 削り。内面横撫で。
6	土師器 羹	5 床上9	口縁～胴部	(21.8) -	[17.0]	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤濁	口縁部横撫で。胴部外面上位横方向、 中位以下斜方向彫削り。内面横撫で。
7	須恵器 長頸壺	2 床上6	胴～胴部下 位1/4以下	(胴) (13.0)	(8.0)	白色粒、小 石を含む	還元焰 2.5Y7/1灰白	胴部ロクロ成形。回転方向右回りか。

4号住居 (第14回) PL.39

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	貯蔵穴 底面上4	口縁～底部 2/3	14.5 -	3.3	微砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	口縁部横撫で。底部外面彫削り。内面 撫で。
2	土師器 杯	10 床上14	口縁～底部 破片	(16.1) -	6.7	微砂を含む	酸化焰 2.5YR6/8明黄濁	深みがあり大ふりな器形。口縁部横撫 で。体部から底部の外撫で整形後彫 撫で。内面撫で。
3	土師器 杯	貯蔵穴 底面上10	口縁～底部 破片	(13.0) -	(3.0)	微砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部横撫で。体部から底部外面彫削 り。内面撫で。

5号住居 (第17回) PL.39

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 壺	2 床上25	天井部～体 部下位1/3	- -	[28]	白色、黒色の 微砂を含む	還元焰 2.5Y6/1黄灰	ロクロ成形。回転方向右回り。周縁を 故意に打ち欠いている。
2	土師器 杯	コマダツク土	口縁～底部 1/4	(12.0) (7.6)	3.2	微砂を含む	酸化焰 5YR5/6にぶい赤濁	型作り。口縁部、器内面横撫で。体部 外面は型滑を拭き甘い撫で。底部外面 彫削り。
3	須恵器 杯	8 床上3	口縁～底部 1/3	(13.2) 8.0	3.7	微砂を含む	還元焰 7.5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り。
4	須恵器 杯	5・7 床上24	口縁～底部 2/5	(14.5) (6.2)	2.5	石英、片岩の 細粒を含む	還元焰 7.5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向左か。底部左回 転糸切り。
5	黒色土師 杯	6 床上9	体部～底部 破片	- 6.0	[18]	微砂を含む	酸化焰 2.5YR7/3浅黄	内面黒色地埋。ロクロ成形。回転方向 右回り。底辺回転糸切り。内面彫削き。 底部外面に「米」の書がある。
6	土師器 小型羹	2・5・6 床上6	口縁～ 胴下位2/5	(19.1) -	[18.5]	微砂を含む	酸化焰 5YR4/8赤濁	口縁から胴部は横撫で。胴部外面は上 位が横方向、下位が斜方向の彫削り。 内面胴部は彫撫で。
7	土師器 小型羹	1・4 床上5	口縁～胴部 1/3	13.8 -	[8.9]	微砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	口縁部横撫で。胴部外面横方向彫削り。 内面横撫で。

第4章 検出された遺構と遺物

6号住居 (第22図) PL.40

No.	種別	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土器 杯	1 床上8	口縁～底部 1/3	(11.4) 5.6	4.8	粗粒安山岩 の岩片、白 色粒を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	型作り。口縁部横撫で。体部外面は型 痕を残す甘い整形。底部外面横撫で。 内面撫で。
2	土器 杯	4 床上16	口縁～底部 1/3	(13.2) -	4.3	白色細砂、 黒色鉱物細 砂を含む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	口縁部横撫で。体部から底部外面横削り。 内面撫で。
3	土器 杯	4・7 床上1	口縁～底部 1/2	(10.6) -	5.5	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	口縁部横撫で。底部外面横削り。内面 撫で。
4	土器 杯	7・8 床上7	底部	(13.2) -	[20]	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	底部外面横削り。内面撫による撫で。
5	須恵器 高杯	9 床直	(坏部) 口縁 ～体部下位	(16.0) -	[3.7]	微砂を含む	還元焰 25Y7/1灰白	ロクロ成形。
6	須恵器 高杯	1 床上6	脚部破片	-	[3.6]	白色粒を含 む	還元焰 10YR5/1褐灰	ロクロ成形。透し孔は工具で切り取ら れている。
7	土器 羹	3・4 床上3	口縁～胴部 下位1/2	15.0 -	[18.1]	細砂、白色粒 を多く含む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	口縁部横撫で。胴部外面縦方向横削り。 内面横方向の撫で。
8	土器 小型羹	4 床上1	略完	11.0 6.5	13.9	細砂を含む	酸化焰 25YR5/8明赤褐	口縁部横撫で。胴部外面斜方向横削り。 底部横削り。内面撫で後横磨き。
9	土器 小型羹	7 床上15	胴部～底部	- (8.6)	[9.0]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	胴部外面中位以上横方向、中位以下主 に縦方向横撫で。内面撫で。底部外面 横撫で。

7号住居 (第26図) PL.40

No.	種別	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 羹	6 床上23	天井部～体 部下位破片	-	[2.5]	細砂を含む	還元焰 N5/灰	ロクロ成形。回転方向右回り。つまみ 部の近くに横記号がある。天井部の編 組は故意に打ち欠かれている。
2	土器 杯	7・10 床上10	口縁～底部 1/3	(12.2) -	4.0	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	口縁部横撫で。体部外面横方向の横削り。 内面撫で。
3	土器 杯	フク土	口縁～底部 1/5	(12.0) -	[3.1]	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	口縁部横撫で。体部外面横方向横削り。
4	土器 杯	7 床上13	口縁～底部 2/5	(16.4) -	3.3	細砂を含む	酸化焰 5YR5/8明赤褐	口縁部横撫で。底部外面横削り。内面 撫で。
5	土器 杯	フク土	口縁～底部 1/6	(15.0) -	[2.9]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	口縁部横撫で。底部外面横削り。内面 撫で。
6	土器 杯	3 床上1	口縁～底部 1/5	(16.0) -	[3.0]	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	口縁部横撫で。底部外面横削り。内面 撫で。
7	土器 杯	4 床直	口縁～底部 1/6	(15.0) -	[3.5]	微砂を含む	酸化焰 7.5YR5/3にぶい褐	口縁部横撫で。底部外面横削り。内面 撫で。
8	土器 杯	3・6 床上5	口縁～底部 1/6	(16.6) -	[4.8]	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	口縁部横撫で。体部から底部の外面横 削り。内面撫で。
9	土器 杯	フク土	口縁～体部 下位破片	(16.6) -	[3.6]	微砂を含む	酸化焰 5YR6/8橙	口縁部横撫で。体部外面横削り。内面 撫で。

8号住居 (第30・31図) PL.41・42

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直(cm)	残存状況	(cm) 口径 底径	(cm) 器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 蓋	4 床上23	完形	135 (9.4) 4.2	26	細砂を含む	還元焰 25Y6/1黄灰	ロクロ成形。回転方向左回り。環状つ まみ。天井部回転施り。かえりは引 き出し。
2	土師器 杯	フク土	口縁～体部 下位破片	(14.0) -	[28]	微砂を含む	酸化焰 5YR5.6明赤褐	口縁部横撫で。体部外面横方向施り。 内面撫で。
3	須恵器 杯	4 床上20	完形	124 9.4	37	細砂を含む	還元焰 5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転施り後、周縁部施り。
4	須恵器 杯	9 床上63	体部上位～ 底部1/5	- (7.0)	(23)	細砂を含む	還元焰 25YR7.2灰黄	ロクロ成形。回転方向右回りか。底部 回転施り。
5	黒色土師 杯	9 床上22	口縁～底部 破片1/6	(12.0) (9.0)	3.1	細砂を含む	酸化焰25Y6/3 にふい黄(断面)	内外面黒色処理。口縁から底部内外面、 横方向の施り。
6	土師器 羹	9 床上10	略完	24.0 (4.8)	31.6	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6.6橙	口縁部横撫で。胴部外面上位横方向の 施り。中位から下位は縦方向の施り。 内面撫で。
7	土師器 盃	7 床上17	口縁～胴部 中位1/6	(14.8) -	[122]	細砂を含む	酸化焰 10YR5.3にふい黄褐	口縁部横撫で。胴部外面斜方向の施り。 内面撫で。口唇部施で調整され平滑。
8	土師器 台付羹	4 床上7	略完	128 脚 (12.0)	186	細砂を多く 含む	酸化焰 5YR4.6赤褐	口縁部横撫で。胴部外面上位から中位 斜方向、中位以下縦方向の施り。内 面横方向の施り。脚部外面撫で。 内面撫で後、裾部のみ横撫で。
9	土師器 羹	6・7 床上21	口縁～胴部 下位1/3	24.3 -	[276]	細砂を含む	酸化焰 10YR6.4にふい黄橙	口縁部横撫で。胴部外面縦方向の施り。 内面横方向撫で。
10	土師器 羹	3・5・6・7・ 9 床上56	口縁～胴部 上位1/3	(24.0) -	[190]	細砂を含む	酸化焰 25YR6.6橙	口縁部横撫で。胴部外面上位横方向、 中位以下斜方向の施り。内面上位横 方向、中位以下縦方向の施り。
11	土師器 羹	2・3・4・6 床上26	口縁～胴部 上位1/5	(20.5) -	[132]	細砂を多く 含む	酸化焰 25YR6.8橙	口縁部横撫で。胴部外面縦方向の施り。 内面横方向撫で。
12	土師器 羹	3 床上27	口縁～胴部 上位破片	(22.0) -	[7.7]	細砂をやや 多く含む	酸化焰 7.5YR6.4にふい橙	口縁部横撫で。胴部外面縦方向施り。 内面撫で。
13	土師器 羹	6・7 床上16	口縁～胴部 下位1/2	(23.0) -	[18.3]	細砂を多く 含む	酸化焰 7.5YR6.6橙	口縁部横撫で。胴部外面縦方向の施り で施り。内面横方向撫で。
14	須恵器 羹	3・6・8・ 9・10 床上35	破片	- -	-	小石、白色 灰物粒を含 む	還元焰 5Y4/1灰	胴部外面平行敲き。内面同心円状あて 具痕。
15	須恵器 羹	4 床上28	破片	- -	-	細砂を含む	還元焰 7.5YR5.1濁灰	胴部外面上位撫で。中位から下位格 子敲き。自然軸付着。内面上位から下 位同心円状のあて具痕。

9号住居 (第35図) PL.42

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直(cm)	残存状況	(cm) 口径 底径	(cm) 器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	6・7 床上10	略完	13.2 -	3.7	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5.4にふい褐	口縁部横撫で。体部から底部の外面施 り。内面撫で。
2	土師器 杯	7・9 床上10	口縁～底部 4/5	12.3 -	3.7	細砂を含む	酸化焰 25YR5.6明赤褐	口縁部横撫で。体部から底部施り。 内面撫で。
3	土師器 杯	3・6 床上15	口縁～底部 2/3	13.0 -	3.5	細砂を含む	酸化焰 5YR6.6橙	口縁部横撫で。底部外面施り。内面 撫で。
4	土師器 杯	9・10 床上14	口縁～底部 2/5	(16.6) -	[4.1]	微砂を含む	酸化焰 5YR5.4にふい赤褐	口縁部横撫で。底部外面施り。内面 撫で。

第4章 検出された遺構と遺物

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	口径 (cm) 底径	(cm) 器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
5	土師器 杯	10 床上36	口縁～底部 1/2	14.2 -	3.0	細砂を含む	酸化焰 5YR4/4にぶい赤褐	口縁部横撫で。底部外面磨削り。内面撫で。
6	須恵器 杯	6・9 床上8	体部～底部 破片	- (8.0)	(1.7)	細砂を含む	還元焰 7.5Y5/1灰	ロクロ成形。回転方向不明。底部回転 余切り後、周縁部磨削り。

10号住居 (第40図) PL.42・43

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	口径 (cm) 底径	(cm) 器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	10 床直	口縁～底部 4/5	13.0 -	3.5	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部横撫で。体部から底部外面磨削り。 内面撫で。
2	土師器 杯	3・4 床上3	口縁～底部 3/5	(13.4) -	3.2	細砂を含む	酸化焰 5YR6/4にぶい橙	口縁部横撫で。底部外面磨削り。内面 撫で。
3	土師器 杯	7 床上63	口縁～体部 下位1/4	(13.0) -	[3.1]	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	口縁部横撫で。底部外面磨削り。内面 撫で。
4	土師器 杯	7 床上9	口縁～底部 1/3	(16.0) -	3.1	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	口縁部横撫で。底部外面磨削りをして いるが、内面とともに剥落。
5	須恵器 杯	1 床上44	口縁～底部 1/4	(13.3) (8.0)	3.3	細砂を含む	還元焰 2.5YR6/1黄灰	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転余切り。
6	土師器 類	5 床上47	底部破片	- 6.5	(5.7)	微砂を含む	酸化焰 2.5YR5/6明赤褐	胴部外面斜方向の磨削り。内面横方向 撫で。底部外面撫で後周縁部のみ磨削り。 内面撫で。
7	土師器 類	1・6 床直	略完	23.1 5.0	31.9	細砂を含む	酸化焰 2.5YR5/6明赤褐	口縁部横撫で。胴部外面上位斜方向、 中位以下縦方向の磨削り。内面横方向 撫で。底部外面撫で。内面撫で。
8	土師器 類	1・3 床上8	底部欠損	22.4 -	31.8	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部横撫で。胴部外面上位斜方向、 中位以下縦方向磨削り。内面横方向磨 削り。
9	土師器 台付盃	7 床直	胴部下位～ 脚部	(脚部) 10.2	[5.3]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	胴部外面縦方向の磨削り。内面撫で。 脚部外面磨削り後、裾回り横撫で。内 面撫で。

11号住居 (第41図) PL.43

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	口径 (cm) 底径	(cm) 器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	フク土	口縁～底部 1/4	(15.3) -	4.8	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/6明褐	口縁部横撫で。体部から底部外面磨削り。 内面撫で。中央に「×」の刻書が ある。
2	土師器 杯	フク土	口縁～体部 下位破片	(11.8) -	[3.1]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	口縁部横撫で。体部外面磨削り。内面 撫で。
3	須恵器 杯	9 床上64	底部	- 11.0	(1.0)	細砂を含む	還元焰 2.5Y6/2灰黄	底部回転余切り。内面撫で。

12号住居 (第42図) PL.43

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 碗	1 ホマド床土10	体部～高台 部1/4	- 7.6	[34]	粗砂、石英 粒を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	ロクロ成形。底部回転糸切り。高台は 貼付。
2	土師器 甕	1・7 床直	口縁～胴部 中位1/8以下	(13.1) -	[8.2]	細砂を含む	酸化焰 25YR5/6明赤褐	口縁部横撫で。胴部に1条沈線を描す。 胴部外面横方向の匳削り。内面横方向 の撫で。

13号住居 (第46図) PL.43・44

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	2 床土4	完形	12.6 -	3.9	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/6橙	型作り。口縁部横撫で。底部外面匳削り。 内面撫で。
2	土師器 杯	6 床土2	完形	10.0 -	3.3	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	型作り。口縁部横撫で。底部外面中央 匳削り。内面撫で。
3	土師器 杯	4 床土1	完形	10.4 -	3.3	細砂を含む	5YR6/6橙	型作り。口縁部横撫で。底部外面匳削り。 内面撫で。
4	土師器 杯	2 床土2	略定	10.5 -	3.2	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	型作り。口縁部横撫で。底部外面匳削り。 内面撫で。中央に「×」の刻書がある。
5	須恵器 杯	フク土	底部破片	- -	(0.9)	細砂を含む	還元焰 25Y6/3にぶい黄	ロクロ成形。底部回転糸切り。底部内 面に判読不明の墨書がある。
6	土師器 甕	3・4・6 床土67	口縁～底部 2/3	23.9 5.0	37.3	粗砂を多く 含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部横撫で。胴部外面縦方向匳削り。 底部外面匳削り。周縁部のみ横方向匳 削り。内面横方向匳撫で。
7	土師器 甕	3・4・6 床土4	胴部上位～ 底部3/5	- 5.6	[28.0]	粗砂を多く 含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	胴部外面縦方向匳削り。内面横方向匳 撫で。底部外面匳削り。

15号住居 (第56・57図) PL.44-45

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 蓋	4・7 床土4	つまみ欠損	17.5	[3.2]	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	ロクロ成形。回転方向左回り。天井部 匳削り。端部折り曲げ。つまみ欠損。
2	土師器 杯	4 床土6	完形	11.8 8.6	3.0	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	型作り。口縁部横撫で。底部外面匳削り。 内面撫で。底部外面に「真」の墨 書がある。
3	須恵器 杯	フク土	略定	12.2 5.8	3.7	細砂を含む	還元焰 7.5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り。
4	須恵器 杯	8 床土18	口縁～底部 略定	12.8 6.4	3.4	細砂を含む	還元焰 7.5Y5/1灰	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り。
5	須恵器 杯	5・6 床土2	口縁～底部 3/4	13.0 6.2	3.8	細砂を含む	還元焰 2.5Y6/2灰黄	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り。
6	須恵器 杯	フク土	口縁～底部 1/3	(14.1) 7.0	4.2	細砂を含む	還元焰 5Y5/2灰オリーブ	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り。内面磨減。
7	須恵器 杯	3 床土14	口縁～底部 1/3	(14.0) (7.6)	3.3	細砂を含む	還元焰 5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り。自然軸付着。
8	須恵器 長頸壺	8 床土15	胴～底部 破片	- (7.2)	[7.3]	細砂を含む	還元焰 5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り。

第4章 検出された遺構と遺物

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	口径 底径	(cm) 器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
9	須恵器 甕	3・6 床上3	破片1/3	— —	— —	粗砂を多く 含む	還元焰 75Y/1-3/1 灰〜ナリブ黒	外面平行叩き。内面同心円状のあて具痕の上に底部だけ平行叩き痕が残る。破損後下部だけで再利用。上端の割れ口が部分的に磨耗してある。
10	須恵器 紡錘車	5 床上35	2/5	長(6.1) 幅(3.2)	—	厚さ0.7	還元焰 75Y7/1灰白	柄の底部を利用。周縁を打削後、丸く研磨。中央部を穿孔。

16号住居 (第60区) PL.45・46

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	口径 底径	(cm) 器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	貯蔵穴 底面上5	口縁〜底部 3/4	13.8 7.5	4.4	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部横撫で。体部外面下半部横方向 磨削り。底部外面磨削り。内面に放射 状暗文と「十」の刺書がある。
2	須恵器 杯	貯蔵穴 底面上10	完形	12.8 6.0	4.0	細砂を含む	還元焰 25Y6/1黄灰	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り。
3	須恵器 碗	4 床上13	口縁〜高台 部4/5	14.1 7.3	5.7	細砂を含む	還元焰 10YR7/4にぶい黄橙	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り。高台は貼付。
4	須恵器 碗	貯蔵穴 フタ土	口縁〜体部 破片	(16.0) —	(5.5)	碧片を含む	還元焰 5YR/1灰白	ロクロ成形。回転方向右回り。
5	須恵器 碗	9 床下13	底部破片	— 6.6	(2.2)	細砂を含む	還元焰 25Y6/2灰黄	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り。高台は貼付。周縁は打削。
6	須恵器 碗	フタ土	口縁破片	— —	— —	細砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	ロクロ成形。回転方向不明。内外両面 に判読不明の刺書がある。
7	土師器 甕	3 床上5	口縁〜胴部 中位1/3	(19.4) —	(14.7)	細砂を含む	酸化焰 25YR5/6明赤褐	口縁部横撫で。胴部に2条の沈線を通 らす。胴部外面上位は横から斜方向、 中位以下は縦方向の磨削り。内面横方 向磨削り。
8	土師器 甕	2・3 床上9	口縁〜胴部 下位1/3	(19.6) —	(22.9)	細砂を含む	酸化焰 25YR6/6橙	口縁部横撫で。胴部の外面上位横方向、 中位以下縦方向の磨削り。内面横撫で。
9	土師器 甕	2・3・5 床上8	口縁〜胴部 中位1/3	18.0 —	(14.8)	細砂を少量 含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	口縁部横撫で。胴部外面上位横方向、 中位以下縦方向の磨削り。内面横撫で。
10	土師器 甕	1・2・3 床上10	口縁〜胴部 上位破片	(19.7) —	(7.2)	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	口縁部横撫で。胴部外面に2条の沈線 をめぐらす。胴部上位横方向磨削り。 内面横撫で。
11	土師器 甕	3 床下9	口縁〜胴部 上位破片	(20.1) —	(7.5)	細砂を含む	酸化焰 75YR7/6橙	口縁部横撫で。胴部外面に2条の沈線 をめぐらす。胴部外面横方向磨削り。 内面横撫で。
12	土師器 台付甕	5 床下12	口縁〜胴部 1/10以下	(12.2) —	(4.8)	微砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	口縁部横撫で。胴部外面横方向磨削り。 内面横撫で。
13	土師器 甕	2 床上7	口縁〜胴部 上位破片	(21.4) —	(5.5)	細砂を含む	酸化焰 25Y5/6明赤褐	口縁部横撫で。胴部外面横方向磨削り。 内面横撫で。

17号住居 (第63区) PL.46

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	口径 底径	(cm) 器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 杯	6 床下2	略定	14.5 8.0	4.5	細砂を含む	還元焰 10YR6/2灰黄褐	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り後、周縁磨削り調整。
2	須恵器 杯	10 床下3	口縁〜底部 2/3	(12.6) (7.2)	3.9	細砂を含む	還元焰 75Y5/1灰	ロクロ成形。回転方向左回り。底部回 転糸切り。

遺物観察表

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口径 底径	(cm) 器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
3	土師器 釜	9・10 床下6	口縁～胴部 上位破片	(22.2) -	(9.1)	細砂を含む	酸化焰 75YR5/3にぶい褐	口縁部横撫で。胴部外面横方向彫削り。 内面横撫で。
4	土師器 釜	3 床土3	口縁～底部 1/4	(19.0) (4.5)	[31.0]	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	口縁部横撫で。胴部外面上位横から斜 方向、中位以下縦方向彫削り。
5	土師器 釜	9 床下8	胴下位～底 部1/5	- (7.6)	[12.6]	細砂を含む	酸化焰 75YR4/2灰褐	胴部外面縦方向彫削り。底部外面彫削 り。内面横撫で。
6	須恵器 釜	7 床土2	胴部破片	-	-	細砂を含む	還元焰 5Y6/1灰	外面撫で。内面同心円状のあて具痕。
7	土製品 土練	5 床土2	一部欠損	長53 幅19	厚17	微砂を少し 含む	酸化焰 75YR5/4にぶい褐	丁寧な撫で仕上げ。使用した形跡は少 ない。

18号住居 (第67・68図) PL.46・47

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口径 底径	(cm) 器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	5 床土3	完形	15.2 -	4.1	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	型作り。口縁部横撫で。底部外面彫削 り。内面撫で。
2	土師器 杯	5 床土2	完形	13.2 -	3.5	細砂を含む	酸化焰 75YR6/6橙	型作り。口縁部横撫で。底部外面彫削 り。内面撫で。
3	土師器 杯	5 床下3	完形	12.0 -	3.7	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	型作り。口縁部横撫で。底部外面彫削 り。内面撫で。
4	土師器 杯	5 床下2	完形	12.8 -	3.6	粗砂を含む	酸化焰 10YR8/4浅黄	型作り。口縁部横撫で。底部外面彫削 り。内面撫で。
5	土師器 杯	5 床土	略完	15.2 -	2.4	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	型作り。口縁部横撫で。底部外面彫削 り。内面撫で。
6	土師器 杯	5 床下2	完形	12.7 -	3.6	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄褐	型作り。口縁部横撫で。底部外面彫削 り。内面撫で。
7	土師器 杯	6 床土9	口縁～底部 3/4	12.8 -	3.1	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	型作り。口縁部横撫で。底部外面彫削 り。内面撫で。
8	土師器 杯	5 床土2	完形	12.4 -	3.5	粗砂を含む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	型作り。口縁部横撫で。底部外面彫削 り。内面撫で。
9	須恵器 杯	6 床土4	口縁～底部 1/3	(14.6) (8.7)	4.3	細砂を含む	還元焰 2.5Y6/2灰黄	ロクロ成形。回転方向左回り。底部回 転彫削り。
10	須恵器 杯	2 床土34	口縁～底部 1/3	(13.4) (7.8)	3.6	細砂を含む	還元焰 2.5Y7/2灰黄	ロクロ成形。回転方向左回り。底部回 転彫削り。
11	須恵器 杯	6 床土42	底部片	- 8.9	[1.2]	細砂を含む	還元焰 5Y7/1灰白	ロクロ成形。回転方向左回り。底部回 転彫削り。
12	須恵器 杯	6 床土9	体部～底部 破片	- (7.2)	[1.8]	細砂を含む	還元焰 5Y7/1灰白	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転彫削り後、肩縁部彫削り。内面撫で。
13	土師器 鉢	4・5 床土4	口縁～底部 3/4	20.5 -	9.9	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	口縁部横撫で。体部から底部の外面彫 削り。内面横撫で。

第4章 検出された遺構と遺物

19号住居 (第69図) PL.47

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	4 床下 10	口縁～底部 1/4	(120) (8.4)	2.6	細砂を含む	酸化焰 5YR6/8橙	口縁部横撫で。底部外面磨削り。内面撫で。

20号住居 (第35図) PL.47

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 蓋	4 床上 47	天井～端部 1/5	(19.0) -	(2.0)	細砂を含む	還元焰 2.5Y5/1黄灰	ロクロ成形。回転方向左回り。天井部 回転磨削り。かえりは引き出し。
2	土師器 杯	9 床上 11	略完	12.6 -	4.2	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	型作り。口縁部横撫で。底部外面磨削り。 内面撫で。
3	土師器 杯	9 床上 5	口縁～底部 破片	(10.8) -	(3.3)	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	型作り。口縁部横撫で。底部外面磨削り。 内面撫で。
4	土師器 杯	10 床上 70	口縁～体部 破片	(15.6) -	(3.8)	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	口縁部横撫で。外面磨削。内面撫で。

22号住居 (第72図) PL.47

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 杯	8 床上 38	口縁～底部 1/3	(12.0) (8.0)	3.5	細砂を含む	還元焰 7.5Y7/1灰白	ロクロ成形。回転方向不明。底部回転 磨削り。

23号住居 (第73図) PL.47

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 杯	10 床上 40	口縁～体部 破片	(14.8) -	(4.0)	細砂を含む	還元焰 2.5YR6/2灰黄	ロクロ成形。回転方向不明。
2	土師器 甕	10 床上 12	口縁～胴部 上位破片	(19.0) -	(4.8)	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/3にぶい褐	口縁部横撫で。胴部外面横方向磨削り。 内面撫で。
3	土師器 甕	10 床上 55	胴部～底部 破片	- (6.0)	(2.3)	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/2灰黄褐	胴部外面縦方向磨削り。内面撫で。底 部外面磨削り。内面撫で。底部内面に 判読不明の墨書がある。

24号住居 (第51・52図) PL.44・47

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 杯	4 床上 7	口縁～底部 3/4	13.5 6.1	3.8	細砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り。
2	須恵器 杯	4 床上 7	口縁～体部 破片	(14.0) -	(4.0)	細砂を含む	還元焰 5Y6/2灰オリープ	ロクロ成形。回転方向不明。
3	須恵器 杯	フク土	口縁～底部 1/6	(13.0) (6.0)	3.8	細砂を含む	還元焰 5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り。体部外面に判読不明の墨書 がある。
4	須恵器 杯	フク土	口縁～底部 1/4	(12.0) (9.0)	3.2	細砂を含む	還元焰 5Y5/1/灰	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り後周縁部磨削整。
5	土師器 皿	フク土	口縁～体部 破片	13.1 -	2.1	細砂を含む	酸化焰 10YR5/2灰黄褐	内外面撫で。

遺物観察表

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎 土	焼 成 色 調	成・整形の特徴
6	灰輪陶器 碗	6 床上 14	口縁～体部 破片	(17.8) -	[5.3]	細砂を含む	還元焰 7.5Y6/2灰オリーブ	ロクロ成形。回転方向不明。施釉方法は漬け掛け。大塚2号窯式期。
7	須恵器 瓶	8 床上 24	口縁部破片	(8.3) -	[3.7]	微砂を含む	還元焰 5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向右回りか。内外面に自然釉付着。
8	土師器 壺	1 床下 5	口縁～胴部 1/10以下	(18.8) -	[18.0]	細粒を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	口縁部横撫で。胴部外面上位斜方向、中位以下縦方向の寛削り。内面横方向施撫で。

25号住居 (第75区) PL.47

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎 土	焼 成 色 調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	10 床上 4	口縁～底部 1/4	(13.6) -	[4.0]	微砂を含む	酸化焰 2.5YR6/8橙	口縁部横撫で。底部外面寛削り。内面撫で。
2	土師器 杯	貯藏穴 底面上 15	口縁～底部 1/3	(13.4) -	[4.2]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/6明褐	口縁部横撫で。底部外面寛削り。内面撫で。
3	土師器 杯	7 床上 10	口縁～底部 1/2	(13.8) -	2.8	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	口縁部横撫で。底部外面寛削り。内面撫で。
4	土師器 杯	4 床上 11	口縁～底部 1/3	(20.0) -	6.0	細砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	口縁部横撫で。底部外面寛削り。内面撫で。剥落している。
5	土師器 壺	フク土	口縁～胴部 破片	(20.0) -	[7.2]	細砂を含む	酸化焰 10YR5/4にぶい黄褐	口縁部横撫で。胴部外面縦方向寛削り。内面撫で。
6	灰輪陶器 瓶	2 床上 21	口縁部破片	(9.6) -	[5.7]	-	還元焰 5Y3/4オリーブ	ロクロ成形。施釉は刷毛塗りか。

26号住居 (第80・81区) PL.48

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎 土	焼 成 色 調	成・整形の特徴
1	須恵器 壺	5 床上 76	天井～端部 1/4	- -	[2.7]	細砂を含む	還元焰 7.5YR6/4にぶい橙	ロクロ成形。回転方向右回り。天井部回転削り。「×」印の施書き。
2	須恵器 杯	3 床上 13	底部破片	- -	[1.3]	細砂を含む	還元焰 N5/灰	ロクロ成形。回転方向左回り。「藤原産」
3	土師器 杯	7 床上 6	完形	13.5 -	4.5	微砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部横撫で。底部外面寛削り。内面撫で。
4	土師器 杯	3・7 床上 5	略完	13.8 -	5.0	細砂をやや多く含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	口縁部横撫で。底部外面寛削り。内面撫で。
5	土師器 杯	フク土	完形	11.0 -	3.5	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	型作り。口縁部横撫で。底部外面寛削り。内面撫で。
6	土師器 壺	貯藏穴 底面上 60	口縁部	20.2 -	[5.6]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	長条口縁部を利用した台座。割れ口は調整してある。
7	須恵器 壺	5・8 床上 66	胴部破片 -	- -	-	砂粒を含む	還元焰 5Y6/1灰	外面平行厳ぎ。内面同心円状のあて具痕。
8	須恵器 瓶	3 床上 58	胴部破片	- -	[6.3]	細砂を含む	還元焰 5Y6/1灰	外面平行厳ぎ。内面横撫で。
9	須恵器 高杯	フク土	口縁～体部 破片	- -	[3.4]	細砂を含む	還元焰 N4/灰	ロクロ成形。回転方向不明。体部内外面撫で。

第4章 検出された遺構と遺物

27号住居 (第84図) PL-48・49

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色 調	成・整形の特徴
1	土器器 杯	7 床上6	口縁～底部 1/4	(120) -	3.1	細砂を含む	酸化焰 5YR5/8明赤褐	口縁部横撫で。底部外面磨削。内面 撫で。
2	土器器 杯	6 床上76	口縁～体部 破片	(130) -	[3.9]	細砂を少量 含む	酸化焰 7.5YR5/6赤褐	口縁部横撫で。底部外面磨削。内面 撫で。
3	土器器 壺	6 床上27	口縁～胴部 破片	(220) -	(7.5)	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/6明褐	口縁部横撫で。胴部に比線1条をめぐ らす。体部外面斜方向磨削。内面横 撫で。
4	土器器 壺	3 床上1	完形	16.0 5.3	20.3	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	口縁部横撫で。胴部外面縦方向磨削。 内面撫で。底部外面磨削。
5	土器器 小型壺	6・7 床上52	口縁～胴部 下位2/5	(9.7) -	[8.0]	微砂を含む	酸化焰 2.5YR5/6明赤褐	口縁部横撫で。胴部外面横方向磨削。 内面撫で。
6	土器器 壺	6 床上70	口縁～胴部 破片	- -	[10.0]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	口縁部横撫で。胴部上位横方向、中位 以下縦方向の磨削。内面撫で。

28号住居 (第85図) PL-49

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色 調	成・整形の特徴
1	土器器 杯	フク土	口縁～体部 破片	(10.4) -	(2.2)	微砂を少量 含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部横撫で。体部外面磨削。内面 撫で。
2	土器器 杯	フク土	口縁～体部 下位破片	(10.4) -	[3.8]	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	口縁部横撫で。体部外面磨削。内面 撫で。
3	須恵器 短頸壺	フク土	胴部破片	- -	(9.2)	細砂粒を含 む	還元焰 2.5Y6/1黄灰	ロクロ成形。回転方向右回り。内外面 横撫で。

29号住居 (第86図) PL-49

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色 調	成・整形の特徴
1	土器器 杯	8 床上3	口縁～体部 破片	(9.2) -	[3.0]	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部横撫で。体部外面横方向磨削。 内面撫で。

30号住居 (第90図) PL-49

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色 調	成・整形の特徴
1	土器器 杯	キマドフク土	口縁～体部 破片	(14.0) -	(4.5)	岩片、細砂 を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部横撫で。体部外面横方向磨削。 内面撫で。
2	須恵器 杯	貯蔵穴 底面上5	完形	13.0 6.8	3.9	細砂を含む	還元焰 2.5Y8/3淡黄	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り。体部内外面に「丸、千」の 墨書がある。
3	須恵器 碗	4 床上1	口縁～高台 部3/4	14.9 7.0	5.8	細砂を含む	還元焰 10YR7/2にぶい黄橙	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り後、高台を貼付。
4	須恵器 碗	5 床上2	口縁～高台 部3/5	(13.2) 5.7	5.4	細砂を含む	還元焰 2.5Y7/3淡黄	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り後高台を貼付。体部内外面に 判読不明の墨書がある。
5	須恵器 壺	6 床上5	胴部破片	- -	[6.7]	細砂を含む	還元焰 N4/灰	ロクロ成形。外面は平行縦き後撫でと 一部磨削りで調整されている。内面の あて具痕は撫でのため消されている。

遺物観察表

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎 土	焼 成 色 調	成・整形の特徴
6	須恵器 壺	フク土	胴部破片	-	-	細砂を含む	還元焰 25Y6/1黄灰	外面平行敲き。内面のあて具痕は撫でのため消されている。
7	須恵器 壺	3 床上28	胴部破片	-	-	細砂を含む	還元焰 25Y7/1灰白	ロクロ成形。外面平行敲き。内面同心円状のあて具痕。

31号住居 (第93図) PL.49・50

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎 土	焼 成 色 調	成・整形の特徴
1	須恵器 蓋	6 床上18	天井一端部 1/6以下 つまみ欠損	(17.0) -	(20)	細砂を含む	還元焰 5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向右回り。天井部外面回転磨削り。内面のかえりは引き出し。
2	土師器 杯	7 床上6	口縁~底部 2/5	(14.0) -	(4.5)	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい濁	型作り。口縁部横撫で。各部型溝を残す。底部外面磨削り。内面撫で。
3	土師器 杯	フク土	口縁~底部 1/5	(13.7) -	(2.6)	細砂を含む	酸化焰 10YR5/3にぶい濁	口縁部横撫で。底部外面磨削り。内面撫で。
4	須恵器 杯	6 床上21	略完	13.6 8.0	3.9	岩片、細砂を含む	還元焰 5Y7/1 灰白	ロクロ成形。回転方向右回り。底部外面回転糸切り後、周縁のみ回転磨削りで調整。
5	須恵器 短頸壺	8 床上9	胴部破片	-	(3.8)	細砂を含む	還元焰 25Y7/1灰白	ロクロ成形。回転方向不明。

32号住居 (第95図) PL.50

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎 土	焼 成 色 調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	10 床上77	略完	10.6 -	3.4	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	型作り。口縁部横撫で。底部外面磨削り。内面撫で。

34号住居 (第100・101図) PL.50

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎 土	焼 成 色 調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	5 床上52	口縁~底部 1/4	(14.9) -	(4.9)	細砂を含む	酸化焰 5YR6/4にぶい橙	口縁部横撫で。体部未調整。底部外面磨削り。判読不明の墨書がある。内面撫で。
2	土師器 杯	3 床上27	口縁~底部 1/3	(12.0) 7.5	4.0	細砂を含む	酸化焰 5YR4/4にぶい赤濁	口縁部横撫で。体部外面磨削り。底部外面磨削り。「米」の墨書がある。内面撫で。
3	須恵器 碗	6 床上15	体部~高台 部	- (7.4)	(2.2)	細砂を含む	還元焰 25Y6/2灰黄	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。体部外面に判読不明の墨書がある。
4	須恵器 碗	9 床上34	体部下位~ 高台部	- 7.4	(2.4)	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。底部外面に「米」の墨書がある。
5	土師器 小型壺	5 床上59	口縁~胴部 破片	(12.0) -	(4.6)	細砂を含む	酸化焰 7.5YR7/6橙	口縁部横撫で。胴部横方向磨削り。内面横方向撫で。
6	須恵器 壺	3・6 床上23	胴部破片	-	-	細砂を含む	還元焰 25Y6/1黄灰	外面平行叩き。内面のあて具痕は撫でのため消されている。
7	須恵器 壺	9 床上53	胴部破片	-	-	細砂を含む	還元焰 7.5YR6/1濁灰	外面平行叩き。内面のあて具痕は撫でのため消されている。

第4章 検出された遺構と遺物

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
8	須恵器 甕	3 床上 33	胴部破片	-	-	細砂を含む	還元焰 5Y5/1灰	外面平行叩き後、カキ目。内面同心円状のあて具痕。
9	須恵器 甕	3 床上 19	胴部破片	-	-	細砂を含む	還元焰 5Y6/2灰オリーブ	外面平行叩き。自然軸付着。内面のあて具痕は撫でにより消されている。
10	須恵器 長頸壺	4 床上 40	口縁下位～ 胴部破片	-	[6.7]	細砂を含む	還元焰 7.5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向不明。

35号住居 (第91図) PL.51

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 杯	フク土	体部下位～ 底部破片	-	[18]	細砂を含む	還元焰 7.5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回転糸切り。
2	土師器 甕	1 床上 22	口縁～胴部 破片 1/4	[21.0]	[23.5]	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部横撫で。胴部外面上位横方向、中位以下縦方向造削り。中位に扉付着。内面撫で。
3	土師器 甕	1 床上 26	口縁～胴部 破片	[21.3]	[16.3]	細砂を含む	酸化焰 2.5Y6/6明赤褐	口縁部横撫で。頸部に比喩を1条めくらし器頸痕を残す。胴部外面上位横方向、中位以下縦方向造削り。
4	土師器 甕	床下土坑 底面上 13	口縁～胴部 破片	[19.1]	[8.1]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	口縁部横撫で。胴部外面横方向造削り。内面撫で。
5	須恵器 甕	3 床上 28	胴部破片	-	[12.1]	岩片、細砂を含む	還元焰 N5/灰	外面平行叩き。内面のあて具痕は撫でにより消されている。
6	須恵器 長頸壺	3 床上 1	口縁～頸部	[10.7]	[10.0]	細砂を含む	還元焰 2.5Y6/1黄灰	ロクロ成形。回転方向不明。内外面自然軸付着。
7	須恵器 長頸壺	3 床上 55	胴部破片	-	[6.7]	細砂を含む	還元焰 2.5Y6/1黄灰	ロクロ成形。回転方向不明。

36号住居 (第103～105図) PL.51・52

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴	
1	須恵器 杯	1 床直	口縁～底部 1/2	[10.0]	2.6	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	ロクロ成形。回転方向左回り。底部回転糸切り。	
2	須恵器 杯	8 床上 7	口縁～底部 一部欠損	10.6	5.1	2.8	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	ロクロ成形。回転方向左回り。底部回転糸切り。
3	須恵器 杯	5 床上 11	口縁～底部 3/4	10.4	6.3	2.7	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	ロクロ成形。回転方向左回り。底部回転糸切り。
4	須恵器 杯	9 床上 7	口縁～底部 1/3	[10.4]	(6.0)	2.7	細砂を含む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	ロクロ成形。回転方向左回りか。底部回転糸切り。
5	須恵器 杯	6 床直	体部～底部 破片	-	6.2	[1.3]	細砂を含む	酸化焰 2.5Y6/1黄灰	ロクロ成形。回転方向左回り。底部回転糸切り。
6	須恵器 杯	フク土	口縁～底部 1/4	[11.2]	(6.5)	2.7	細砂を含む	酸化焰 10YR5/2灰黄褐	ロクロ成形。回転方向左回りか。底部回転糸切り。
7	須恵器 碗	2 床上 5	底～高台部	-	9.7	[2.8]	細砂を含む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	ロクロ成形。回転方向右回りか。底部回転糸切り後高台を貼付。
8	須恵器 碗	貯蔵穴 底面上 25	体部下位～ 高台部	-	(7.7)	[2.3]	細砂を含む	還元焰 10YR6/2灰黄褐	ロクロ成形。回転方向左回りか。底部高台を貼付後撫で調整されている。

遺物観察表

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎 土	焼 成 色 調	成・整形の特徴
9	土師器 甕	10 床上6	胴部下位～ 底部	- 8.8	(8.0)	細砂を含む	酸化焰 10YR8/3黄褐色	胴部外面斜方向彫削り。内面横方向の 撫で後に底部から斜方向に撫で上げる。 底部彫削り。
10	須恵器 甕	2 床上18	胴部破片	- -	[14.0]	細砂を含む	還元焰 5Y5/1灰	外面平行叩き。内面同心円状のあて具 痕が撫でにより消されている。

37号住居 (第106図) PL.52

() は推定値、[] は現存値

No.	種別 器種	出土状態 平 面 垂 直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎 土	焼 成 色 調	成・整形の特徴
1	須恵器 椀	7・9・10 床上7	口縁～底部 2/3	(15.0) (6.4)	(4.7)	細砂を含む	還元焰 10YR6/3にぶい黄褐色	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り後高台を貼付。体部外面に「勢 多」の墨書がある。
2	須恵器 杯	6 床上7	体部～底部 1/4以下	- (5.1)	(2.1)	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り。

38号住居 (第109図) PL.52

No.	種別 器種	出土状態 平 面 垂 直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎 土	焼 成 色 調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	4・7 床上13	口縁～底部 3/4	(11.6) -	(3.6)	細砂を含む	酸化焰 5YR6/4にぶい橙	型作り。口縁部横撫で。体部無調整。 底部彫削り。内面撫で。
2	土師器 杯	7 床上13	口縁～底部 1/3	(12.2) -	(3.5)	細砂を含む	酸化焰 5YR6/4にぶい橙	型作り。口縁部横撫で。体部無調整。 底部彫削り。内面撫で。
3	土師器 杯	7 床上13	口縁～底部 1/4	(12.6) -	(3.5)	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	型作り。口縁部横撫で。体部外面無調 整。底部彫削り。内面撫で。
4	須恵器 杯	9 床上56	底部破片	- (8.6)	(0.9)	細砂を含む	還元焰 2.5Y7/2灰黄	外面回転糸切り後、周縁部のみ彫削り 調整。内面撫で。
5	須恵器 杯	9 床上7	口縁～体部 破片	(13.0) -	[4.0]	微砂を含む	還元焰 5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向不明。
6	土師器 甕	カマド 掘方面上16	口縁～底部 破片	(22.4) (4.4)	(31.6)	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	口縁部横撫で。胴部外面上位横方向、 中位以下縦方向彫削り。内面横方向撫 で。
7	須恵器 甕	7 床上14	口縁部	(23.4) -	[8.6]	細砂を含む	還元焰 2.5Y6/1黄灰	ロクロ成形。回転方向右回り。胴部近 くに彫削り。
8	須恵器 甕	6 床上10	胴部破片	- -	[11.2]	白色、黒色の 細砂を含む	還元焰 2.5Y7/1灰白	外面平行叩き。内面同心円状のあて具 痕を残す。
9	土師器 鉢(オモリ)	8 床上4	底部破片	長85 幅75	厚さ10	細砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄褐色	杯の底部を利用。周縁を打ち欠いた上 に2方向に紐かけ用の調整をしている。 重量60g

39号住居 (第110図) PL.52

No.	種別 器種	出土状態 平 面 垂 直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎 土	焼 成 色 調	成・整形の特徴
1	須恵器 杯	6・9 床上23	口縁～体部 破片	(13.0) -	(2.8)	細砂を含む	還元焰 2.5Y7/2灰白	ロクロ成形。回転方向右回り。

第4章 検出された遺構と遺物

40号住居（第113・114図）PL53

No.	種別	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	4 床上2	略完	13.6 -	4.5	微砂を含む	酸化焰 7.5YR7/6橙	口縁部横撫で。底部外面丸削り。内面撫で。
2	須恵器 杯	9 床上52	略完	10.6 6.9	3.2	岩片・細砂・ 黒色粒含む	還元焰 2.5YR6/1黄灰	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回転系切り。
3	須恵器 杯	4 床上17	口縁～底部 4/5	(12.2) -	4.8	細砂を含む	還元焰 7.5Y5/1灰	ロクロ成形。回転方向右回り。底部外面回転丸削り。「十」の刻書がある。
4	土師器 壺	3・4・6 床上19	口縁～胴部 破片	(18.4) -	[20.4]	細砂を多く 含む	酸化焰 7.5YR6/6橙	口縁部横撫で。胴部外面中位まで縦方向、中位以下斜方向丸削り。内面横撫で。
5	土師器 壺	3・4・7 床上9	口縁～胴部 1/3以下	19.9 -	[17.0]	粗砂、細砂 を多く含む	酸化焰 10YR6/6明黄褐	口縁部横撫で。胴部外面縦方向丸削り。内面横方向撫で。
6	土師器 小型壺	7・10 床上17	口縁～胴部 破片	(13.4) -	[8.5]	細砂をやや 多く含む	酸化焰 10YR6/2灰黄褐	口縁部横撫で。胴部外面横・斜方向丸削り。内面横撫で。
7	土師器 壺	4 床直	完形	18.7 8.0	31.2	細砂を含む	酸化焰 7.5YR7/4にふい橙	口縁部横撫で。胴部外面上位横、中位以下斜方向丸削り。内面縦方向丸撫で。

金属製品観察表

番号	種別	出土位置	残存	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	特徴
4住-5	鎌	10 43cm	1/2	(67)	26	0.2	16.20	耳の折り曲げは小さく不明瞭。切先にむけて細くなり、研ぎ減りしている。 14図PL.39
6	鎌	7 50cm	1/2	(57)	22	0.15	8.67	錆化が進む。全体に丸味を帯びる。耳は一定の幅ではなく、背に向かって広くなる。 14図PL.39
7	釘	不明	先端欠損	(65)	0.6	0.4	6.68	頭部は片側にせり出す。軸部は直線的で下半は弧状となり折れ曲がり欠損。 14図PL.39
8	鉄塊	4 21cm	完形	49	3.1	1.1	38.38	板状。一定した厚さである。 14図PL.39
9	金具	カマド フタ土	破片	(24)	1.9	0.1	2.93	中に円孔のある薄い板の一部。円孔の周りは締めつけによる歪みがあり反対の端部もめくれるように波打つ。 14図PL.39
10住-13	刀子	3 46cm	破片	(43)	0.8	0.3	3.71	細身、板状。刃の上方で開らしく幅が広くなり、反対側が薄い。 40図PL.43
15住-12	鉄鎌	フタ土	破片	(24)	0.7	0.4	1.27	長頭鎌の頭部と茎の一部。角間頭部は幅、厚さ0.6cm、茎は幅0.3cm、厚さ0.25cmである。 57図PL.45
13	鉄鎌	フタ土	1/2	(7.0)	0.7	0.45	5.87	長頭三角形鎌、端刃造。片鎌刃部は幅0.7cm、厚さ0.1cm、軸部は幅4.0cm、厚さ0.45cm、下部欠損。 57図PL.45
14	鏡形鏡治部	1 35cm	1/2	10.8	(7.6)	3.2	4.98	上面はくぼみ、流動状の跡がもろがある。一部が2段となり、右側に大きな破面がある。 57図PL.45
16住-14	刀子	3 -3cm	1/2	(9.9)	(1.6)	0.65	7.40	調査時に刀身部の半分、切先側を欠損、研ぎ減りしている。茎は長さ6.7cm、最大幅0.7cm、最大厚0.3cmである。背が少し弧を描く。 60図PL.46
15	鉤	3 18cm	完形	9.7	1.1	0.7	17.29	頭部は片側にせり出し、一方にくの字に折れ曲がる。軸部は直線状、先端がわずかに弧を描く。 60図PL.46
16	鉄鎌	3 18cm	破片	(4.8)	0.5	0.6	4.50	長頭鎌。頭部の一部で上下両端を欠損。 60図PL.46
17住-10	刀子	フタ土	破片	(5.4)	1.7	0.4	11.86	刀身部の茎寄り破片。刃の左側が茎に近く、右側よりも幅広く1mm割厚い。 63図PL.46
24住-11	鉄斧	7 17cm	刃先欠損	(5.0)	3.6	0.15	53.15	袋状。左右両側から鉛形に折り曲げている。幅は一定しているが、厚さは上端が1.5に対して下端は0.5となる。 52図PL.44
12	逆方	9 26cm	完形	2.5	2.8	0.5	5.88	銅製。細長孔 縦0.25cm 横2.0cm 黒漆を表面全体に塗布。このうち左右両側面のみが残存。漆の下地は錆で複数方向から研ぎ出されている。 52図PL.44
13	金具	2 7cm	1/2	(5.6)	(6.0)	0.1	14.12	円板、薄手。厚さは1mmと均一。下半分は欠損。紡錘車の軸受部分か。 52図PL.44
27住-9	鉄鎌	8 92cm	一部欠損	4cm以上	(1.1)	(0.3)	16.43	雁股の長頭鎌。刃部の一部と茎の先端を欠損。刃部は二段に分かれる。頭部は0.3cm角、茎は0.2cm角と下方に向けて細くなる。 84図PL.49
10	鉄鎌	8 91cm	一部残存	(7.3)	0.6	0.6	8.79	長頭鎌。刃部と茎の一部を欠損。角間頭部は幅0.5cm、最大厚0.4cm、茎部は幅0.4cm、最大厚0.3cm。 84図PL.49
28住-4	刀子	6 2cm	破片	(3.0)	1.2	0.6	8.85	刃を挟んで茎と刀身部の破片。刀身部は幅1.2cm、最大厚0.6cm、茎は幅0.5cm、最大厚0.4cm。 85図PL.49
30住-8	刀子	6 1cm	茎欠損	(9.7)	(1.2)	0.4	7.44	長頭片刃鎌、端刃造。刃部先端と基部を欠損。頭部には丸味を残した木質が付着。刃部は幅0.8cm、茎幅1.2cm。 90図PL.49

第4章 検出された遺構と遺物

番号	種別	出土位置	残存	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	特徴
31住-9	鏡形鏡治滓	フク土	1/2	(57)	(46)	1.9	54.6	上面は波打つ。下面は丸味を持つ。左側と下方の2方向に破面を持つ。 95図PL.50
32住-4	鏡形鏡治滓	3床直	一部欠損	(28)	(22)	(1.8)	12.12	上面は平坦で左断面に鏡形を残す。右側は2方向からの破面を持つ。 95図PL.50
36住-18	鏡形鏡治滓	7床直	破片	(36)	(22)	(1.9)	13.64	分割した中の残片。図示は表裏逆で、右側に破面を見せている。 105図PL.52
19	刀子	3 2cm	破片	(42)	17	0.3	6.81	茎と刀身部の一部を残して欠損。刀身部の一方が薄くなるが全体が継身で薄造りである。 105図PL.52
20	金具	10 2cm	破片	(18)	13	0.1	1.32	三角形の冠状。図の上端に沈線が2条めぐる。軸物の端部に付く金具か。 105図PL.52
21	鏡形鏡治滓	フク土	破片	(45)	(28)	(1.4)	24.01	分割した残片の1つ。上面は波打つ状態で打っている。下方に破面を持つ。 105図PL.52
22	鏡形鏡治滓	3 3cm	破片	(44)	(37)	(2.0)	42.75	分割した中の1つ。上面は波打つ。左側と下側の2方向に破面を持つ。 105図PL.52
23	鏡形鏡治滓	7 3cm	1/4	(49)	(5.1)	(2.9)	77.37	4分割したうちの1つ。上面は波打つ。下面は緩やかな鏡形。右側と下方の2方向に破面を持つ。 105図PL.52
24	鏡形鏡治滓	7 9cm	破片	(22)	(34)	(2.0)	17.45	分割した中の残片。上面は平坦。断面に鏡形を残す。下方全体が破面である。 105図PL.52
25	鏡形鏡治滓	7 4cm	1/4	(61)	(5.5)	(2.5)	134.40	4分割したうちの1つ。上面は平坦。右側と下方の2方向に破面を持つ。 105図PL.52
40住-13	鍔歯	7 5cm	茎欠損	(118)	1.0	0.3	9.51	長頭三角形鍔。端刃造。刃部は幅1.0cm、最大厚0.2cm。軸部は幅最大0.75cm、厚さ0.25cmである。 113図PL.53

出土石器・石製品観察表(住居)

() は現存値

番号	種別	出土位置	石材	残存	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	特徴
3住-8	磨石	3 5cm	粗粒輝石安山岩	完存	8.3	6.5	3.3	300	磨耗した転石を使用。敲打により半分 割っている。上端に敲打痕。下端の割れ口 に半割時のものか使用によるのか周縁全体 に敲打痕がある。 11図PL.39
4住-4	砥石	9 44cm	砥沢石	完存	8.1	4.0	2.5	100	有孔。手持ち砥。左側面を除く3面に使用 痕。表が凸面、右側と裏が凹面。左側面は 砥石成形時のまま。 14図PL.39
6住-10	砥石	4 床直	粗粒輝石安山岩	完存	27.3	18.6	12.0	5250	大ぶりの転石を割って成形。側面に楕状の ハフリ痕。表裏と右側面の3面を砥面とし て使用。表裏は凹面、右側面は凸面。幅1 mm強の刃物痕がある。 22図PL.40
11	敲石	10 4cm	ひん岩	一部欠	20.3	7.6	(4.8)	1050	磨耗した棒状の転石を使用。表面は彼熱か 敲打により滑く潤滑。上下両端に敲打跡を 持つ。表面には高い擦痕もあり、磨石の用 途としても併用。 22図PL.40
12	敲石	8 3cm	ひん岩	完存	16.0	5.7	4.8	710	磨耗した転石を使用。断面三角形。目立つ 使用痕はないが、上下両端に敲打の跡と最 も平坦な、図示した面に擦痕があり、磨石 としても併用。 22図PL.40
7住-10	敲石	10 4cm	粗粒輝石安山岩	完存	13.3	7.8	4.5	600	磨耗した転石を使用。左側後に最大幅1cm 長さ5cmの光沢を帯びた磨り面。右側面の くみみは緊縛用のものか。 26図PL.40
8住-16	磨石	6・7 7cm	粗粒輝石安山岩	完存	12.6	8.2	3.1	550	磨耗した転石を使用。表裏両面に光沢を帯 びた幅の広い磨り面。 31図PL.42
17	敲石	7 60cm	粗粒輝石安山岩	一部欠	12.9	7.9	7.3	950	磨耗した転石を使用。側面の稜や上下両端 面に敲打による潤滑がみられ、右側面には 刃物によると思われる3条の筋と擦痕。 31図PL.42
18	敲石	9 11cm	黒色頁岩	完存	11.9	6.3	4.7	500	磨耗した転石を使用。一方の端部は割って いる。下端部に敲打痕。上端部は敲打だけ でなく調整用と思われる磨り跡もある。 32図PL.42
19	敲石	6 2cm	粗粒輝石安山岩	1/2	(8.8)	6.1	3.5	250	磨耗した転石を使用。破損で半分程に割れ ている。図の上端部に敲打痕、左右の両側 面の稜に緊縛用の敲打による調整痕。 32図PL.42
20	敲石	7 24cm	粗粒輝石安山岩	完存	8.7	6.9	2.6	250	磨耗した転石を半分に割って使用。目立つ 使用痕はないが、側面の稜には敲打の跡、 表面には磨り跡。 32図PL.42
21	敲石	3 49cm	粗粒輝石安山岩	完存	14.6	4.7	4.3	430	磨耗した転石を使用。上端部に敲打痕。側 後の2箇所は緊縛用の打ち欠きがある。 32図PL.42
10住-10	磨石	7 21cm	変質安山岩	完存	11.6	6.2	4.1	450	磨耗した転石を使用。 40図PL.43
11	磨石	10 -3cm	砂岩	完存	13.1	4.8	4.1	460	磨耗した棒状の転石を使用。上下両端部に 敲打痕。側縁には緊縛用の打ち欠きがある。 40図PL.43
12	磨石	貯穴 40cm	粗粒輝石安山岩	完存	12.4	5.1	3.7	260	磨耗した棒状の転石を使用。上下両端部に 敲打痕。 40図PL.43

第4章 検出された遺構と遺物

番号	種別	出土位置	石材	残存	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	特徴
13住-8	敲石	7 -1cm	粗粒輝石安山岩	完存	13.6	5.4	2.8	450	磨耗した転石を使用。下端部に敲打痕。 46図PL.44
9	敲石	10 2cm	石英閃緑岩	完存	16.0	7.0	5.9	1100	磨耗した棒状の転石を使用。下端部に直径 2cm大の敲打痕。 46図PL.44
15住-11	砥石	7 -2cm	未固結凝灰岩	完存	21.7	15.1	9.0	2800	4面に面取りしている。砥石をカマド袖石 に転用。 57図PL.45
17住-8	敲石	6 -1cm	粗粒輝石安山岩	完存	10.5	5.4	3.5	220	磨耗した転石を使用。上下両端に敲打痕。 表裏と両側面には築碁用の打欠きがある。 63図PL.46
9	麻(オモリ)	4 -1cm	二ッ岳軽石	完存	7.2	5.3	3.4	95	傘大の割石を使用。 63図PL.46
18住-14	台石	9 1cm	粗粒輝石安山岩	完存	30.4	23.1	6.6	7500	磨耗した転石を使用。表は凹面、裏は凸面 として使用。表面には敲打痕と磨り痕。側 面には2箇所固定用の打欠きがある。 68図PL.47
15	台石	5 7cm	粗粒輝石安山岩	完存	16.0	16.5	6.7	2450	磨耗した転石を使用。側面の3箇所に固定 用の打欠きがある。表面にあるのは割落痕。 68図PL.47
16	敲石	6 3cm	粗粒輝石安山岩	完存	19.3	9.1	7.1	1550	磨耗した転石を使用。上端部に直径2cm弱 の敲打痕。側壁には敲打痕はあるが、まば らで不規則。カマドの袖か支脚の可能性。 68図PL.47
17	凹石	5 22cm	粗粒輝石安山岩	完存	9.8	9.7	4.4	550	磨耗した転石を使用。表裏両面に2つの凹 穴。側面の左右にも2箇所の打欠きがある。 68図PL.47
18	磨石	2 22cm	消結凝灰岩	完存	9.4	5.3	2.8	250	磨耗した転石を使用。特に使用痕はない。 68図PL.47
24住-9	砥石	5 4cm	未固結凝灰岩	破片	[11.1]	[12.0] 以上	5.5	670	カマド用の切石。 52図PL.44
10	台石	6 7cm	粗粒輝石安山岩	一部欠	[18.5]	[11.6]	3.8	1220	手の平大。扁平な転石を使用。左側面は破 損している。上下の側面に固定用と思われ る打欠き。表面にはほぼ全体に磨り跡があり 石皿や砥石としても使われている。 52図PL.44
26住-10	砥石	フタ土	二ッ岳軽石	完存	8.3	5.0	4.1	120	傘大の割石を使用。平坦な表面が砥面と思 われるが明瞭な痕跡はない。 80図PL.48
11	磨石	7 19cm	変質玄武岩	完存	17.3	6.3	4.8	780	磨耗した棒状の転石を使用。表面の中央に 条痕。 81図PL.48
12	磨石	4 59cm	消結凝灰岩	完存	15.2	6.0	5.6	660	磨耗した転石を使用。 81図PL.48
13	磨石	7・9 16cm	変質玄武岩	完存	17.3	5.7	4.5	800	磨耗した棒状の転石を使用。上端部全体に 磨耗痕。棒のような用途が考えられる。 81図PL.48
14	磨石	7 20cm	粗粒輝石安山岩	完存	16.0	5.8	5.6	900	磨耗した棒状の転石を使用。下端面に直径 1cm大の敲打痕。棒のような用途が考えら れる。 81図PL.48
15	磨石	7 8cm	粗粒輝石安山岩	完存	14.6	5.6	4.1	420	磨耗した棒状の転石を使用。 81図PL.48

遺物観察表

番号	種別	出土位置	石材	残存	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	特徴
16	磨石	7 30cm	変質安山岩	完存	14.9	6.4	4.4	710	磨耗した棒状の転石を使用。 81図PL.48
17	磨石	6 50cm	粗粒輝石安山岩	完存	12.0	6.5	2.8	400	磨耗した転石を使用。左側面に敲打痕。 81図PL.48
18	磨石	3 3cm	石英閃緑岩	完存	15.6	7.6	4.5	810	磨耗した棒状の転石を使用。表面全体が薄く剥落。 81図PL.48
19	磨石	6 9cm	ひん岩	完存	15.6	5.3	3.5	450	磨耗した転石を使用。 81図PL.48
27住-7	磨石	6 27cm	ひん岩	完存	20.1	8.7	6.1	1600	磨耗した棒状の転石を使用。表面を使用。 84図PL.49
8	打製石斧	10 25cm	黒色頁岩	完存	9.9	5.2	2.9	155	短冊形。厚手の剥片を素材として使用。加工は表面のみで、裏面は自然面を残す。 84図PL.49
29住-2	砥石	2 7cm	ニッ岳軽石	完存	5.5	4.1	2.8	50	傘大の削石を使用。上端寄りが最も厚く、中央部がくびれる。裏に平坦面を持つが、くびれを持つことから浮子かオモリの用途が考えられる。 86図PL.49
31住-6	磨石	6 2cm	石英閃緑岩	完存	11.9	10.2	3.7	650	磨耗した転石を使用。 93図PL.50
7	敲石	6 13cm	粗粒輝石安山岩	完存	10.6	5.8	4.1	260	磨耗した転石を使用。上下両端部に敲打痕。左右の側面にも敲打の痕跡、緊縛痕か。 93図PL.50
8	敲石	6 18cm	粗粒輝石安山岩	1/2	[11.5]	8.6	4.5	420	磨耗した転石を使用。周縁部は磨耗しているが調整用に剥離されている。右側には緊縛用の打欠きがある。 93図PL.50
32住-2	砥石	10 42cm	ニッ岳軽石	完存	10.8	8.5	5.7	180	傘大の削石を使用。亀甲状に成形、裏に平坦面を作る。 93図PL.50
3	砥石	フタ土	ニッ岳軽石	完存	7.5	5.8	2.9	50	傘大の削石を使用。裏に平坦面。 93図PL.50
34住-11	敲石	6 7cm	石英閃緑岩	完存	14.3	6.0	4.3	550	磨耗した棒状の転石を使用。一方の端部に剥離を加えて刃部を作る。 101図PL.50
12	敲石	6 11cm	細粒輝石安山岩	完存	12.9	7.8	5.6	700	磨耗した棒状の転石を使用。上端は削って平坦面を作る。上下両端部に敲打痕。 101図PL.50
13	敲石	2 32cm	粗粒輝石安山岩	1部欠	[8.7]	7.2	3.3	250	傘大の削石を使用。左右両側面に緊縛用の打欠きがある。 101図PL.50
14	敲石	6 18cm	細粒輝石安山岩	1/2	[12.6]	6.2	4.5	600	磨耗した棒状の転石を使用。 101図PL.50
36住-11	磨石	4 1cm	石英閃緑岩	完存	5.3	2.8	2.7	95	磨耗した転石を使用。上下両端部に敲打痕。 103図PL.52
12	磨石	7 2cm	アプライト	完存	17.1	13.2	10.3	2840	磨耗した円碟。特に使用痕らしいものはない。わずかに下層に敲打らしい形跡がある。 103図PL.51
13	磨石	3 床直	粗粒輝石安山岩	完存	10.2	9.6	2.2	370	磨耗した扁平な転石を使用。左側面に(長さ3.5最大幅0.8cm)の敲打痕。 103図PL.52
14	敲石	7 5cm	粗粒輝石安山岩	完存	21.2	11.6	10.6	3750	磨耗した転石を使用。表面はわずかにくぼむ。金属器による深い条痕がある。 104図PL.51

第4章 検出された遺構と遺物

番号	種別	出土位置	石材	残存	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	特徴
15	台石	6 -4cm	粗粒輝石安山岩	完存	31.1	25.5	11.6	12300	厚みのある転石を使用。表面には敲打、磨り跡、工具による筋が複数ある。 104図PL.52
16	多孔石	2 12cm	二ッ岳軽石	完存	19.0	15.3	11.6	2640	転石を使用。粗割後ケズリを施して成形。 104図PL.52
17	台石	4 3cm	粗粒輝石安山岩	完存	20.3	26.2	7.1	3250	人頭大の転石を使用。表裏両面を使用。ともに凹面。表面にだけ固定用の打欠き箇所がある。 104図PL.51
37住-3	紡錘草	7 4cm	蛇紋岩	完存	5.1	5.1	1.8	100	上面と側面に磨削がある。 106図PL.52
4	敲石	9 7cm	粗粒輝石安山岩	完存	12.0	9.0	3.8	450	拳大の割石を使用。下端部と左側面の稜を刃部として使用。40住12の類例。 106図PL.52
40住-8	敲石	10 22cm	石英閃緑岩	完存	14.0	6.7	4.0	550	稜皮は埋設時風化により剥落。 114図PL.53
9	敲石	野穴底 4cm	変質安山岩	完存	14.4	5.7	4.7	510	棒状の転石を使用。下端部に敲打痕。 114図PL.53
10	敲石	9 38cm	石英閃緑岩	完存	8.8	12.0	4.2	630	扁平な転石を使用。周縁が敲打部か。 113図PL.53
11	磨石	6 3cm	細粒輝石安山岩	完存	13.2	6.2	3.7	450	磨耗した転石を使用。下端部に敲打痕と表面に縦方向の擦痕がある。 113図PL.53
12	凹石	7 17cm	粗粒輝石安山岩	完存	12.5	8.1	2.5	260	拳大の割石を使用。下端部と左側面の稜を刃部として使用。37住4の類例。 113図PL.53

遺物観察表 (掘立・土坑・溝・ピット・井戸)

13号掘立 (土器) (第121図) PL.55

() は推定値, [] は現存値

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 椀	ピット4 フク土	口縁～高台 部1/3	(14.2) 5.3	7.6	細砂を含む	還元焰 25Y6/2灰黄	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。

土坑 (土器) (第133図) PL.53

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	4土坑 底面上127	口縁～底部 1/4	(12.0) -	3.5	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部横撫で。底部外面磨削。内面撫で。
2	土師器 杯	40土坑 底面上8	口縁～底部 3/4	12.6 -	3.5	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	口縁部横撫で。体部から底部外面磨削。内面撫で。
3	土師器 杯	40土坑 底面上8	口縁～底部 破片	(12.6) -	[2.6]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	口縁部横撫で。体部外面無調整。底部外面磨削。内面撫で。
4	土師器 杯	40-41土坑 底面上8	口縁～底部 破片	(13.7) -	[3.0]	細砂を含む	酸化焰 5YR6/4にぶい橙	口縁部横撫で。体部外面無調整。底部外面磨削。内面撫で。
5	土師器 杯	47土坑 底面上14	略完	13.0 -	5.4	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	口縁部横撫で。底部外面中央部磨削。内面撫で。
6	土師器 甕	47土坑 底面上直上	口縁～胴部 上位破片	(17.4) -	[13.4]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	口縁部横撫で。胴部外面上位横方向、以下縦方向磨削。内面撫で。

土坑 (石器・石製品) (第133図) PL.53

No.	種別	出土 位置	石材	残存	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	特 徴
7	敲石	41坑 床直	粗粒輝石安山岩	完存	10.7	7.4	3.6	440	磨耗した棒状の敲石を割って使用。上面、両側縁に敲打痕がある。表面は磨り面としても使用。右側面には紐かけ用の調整痕。

ピット (土器) (第161図) PL.53

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	ピット163 底面上34	口縁～底部 1/5	(18.0) -	[5.4]	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部横撫で。底部外面磨削。内面撫で。
2	土師器 杯	ピット164 底面上30	口縁～底部 1/4	(11.2) -	[3.6]	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	型作り。口縁部横撫で。体部外面無調整。底部外面磨削。内面撫で。

1号溝 (土器) (第135図) PL.54

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 蓋	溝北部 底面上3	天井部～口 縁端部3/4	19.2 つまみ 5.3	3.7	細砂を含む	還元焰 5Y5/1灰	ロクロ成形。回転方向左回り。天井部外面回転磨削。つまみは環状、かえしは引き出し。
2	土師器 杯	フク土	略完	12.8 -	4.3	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	型作り。口縁部横撫で。体部外面無調整。底部外面磨削。内面撫で。

第4章 検出された遺構と遺物

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色 調	成・整形の特徴
3	土師器 杯	1号溝 底面下2	略完	11.6 -	3.6	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	型作り。口縁部横撫で。体部外面未調整。 底部外面磨削。内面撫で。
4	土師器 杯	溝フク土	口縁～底部 1/2	(14.0) -	4.2	細砂を含む	酸化焰 5YR6/4にぶい橙	口縁部横撫で。体部から底部外面磨削。 内面撫で。
5	土師器 杯	溝フク土	口縁～底部 1/4	(14.4) -	(3.5)	細砂を含む	酸化焰 5YR6/8橙	型作り。口縁部横撫で。底部外面磨削。 内面撫で。
6	土師器 杯	溝フク土	口縁～体部 下位1/4	(18.0) -	(4.8)	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部横撫で。体部から底部外面磨削。 内面撫で。
7	土師器 杯	溝フク土	口縁～体部 下位破片	(11.8) -	(2.7)	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	型作り。口縁部横撫で。底部外面中央 磨削。内面撫で。
8	土師器 杯	溝北部 底面上10	体上位～最 大径1/3以上	最大径 (15.0)	(4.2)	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい橙	体部から底部外面磨削。内面撫で。
9	土師器 皿	溝フク土	口縁～底部 1/3	(20.0) -	4.1	微砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部横撫で。底部外面磨削。内面 撫で。
10	土師器 皿	溝フク土	口縁～底部 破片	(16.0) -	(2.8)	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	口縁部横撫で。底部外面磨削。内面 撫で。
11	須恵器 円面硯	溝北部 底面上9	後面のみ 1/4	(22.0) -	(2.3)	細砂を含む	還元焰 2.5Y6/1黄灰	跡はわずかに波打つ。磨り跡ははつき りしない。堤は一重。高さ2mm前後。 台脚には長方形の通しを持つ。破損後 台脚を打ち欠いている。

2号溝 (土器) (第135区) PL.54

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色 調	成・整形の特徴
1	須恵器 蓋	溝フク土	つまみ～口 縁端部1/4	(14.4) つまみ 4.8	2.5	微砂を少量 含む	還元焰 5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向は左回りか。天 井部外面回転磨削。つまみは扁平で 低い環状。内面撫で。かえしは引き出し。

3号溝 (土器) (第137区) PL.54

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口 径 底 径	(cm) 器 高	胎土	焼成 色 調	成・整形の特徴	
1	須恵器 蓋	2区 大溝周辺	天井部下位 ～端部破片	-	(1.9)	細砂を含む	還元焰 5PB5/1青灰	ロクロ成形。回転方向不明。かえしは 引き出し。	
2	須恵器 杯	溝フク土	体部～底部 破片	(8.0) -	(1.8)	細砂を含む	還元焰 5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向不明。底部回転 糸切り後因縁部磨削調整。	
3	須恵器 椀	溝フク土	体部～高台 部1/3	-	8.0	(3.1)	白色砂を多 く含む	還元焰 5Y3/1灰	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回 転糸切り後高台貼付。破れ口を研磨、 おもむきとして使用か。
4	須恵器 壺	溝フク土	口縁部 破片	-	(3.6)	黒色粒を含 む	還元焰 5Y5/1灰	継作り後ロクロ成形。回転方向不明。	
5	須恵器 壺	溝フク土	胴部 破片	-	(5.0)	黒色粒を含 む	還元焰 7.5Y3/1灰	外面平行叩き。内面同心円状のあて具 痕を残す。	
6	須恵器 壺	溝フク土	胴部 破片	-	(5.0)	黒色粒を含 む	還元焰 2.5Y6/2灰黄	外面平行叩き。内面同心円状のあて具 痕を残す。	

3号溝 (石器・石製品) (第137図) PL.54

No	種別	出土位置	石材	残存	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	特徴
7	凹石	フク土	粗粒輝石安山岩	完存	17.0	5.5	4.9	580	磨耗した棒状の転石を使用。上端部は割って平坦面を作る。棒状の転石の用途のほかには凹石や磨石としても併用。

4号溝 (土器) (第141図) PL.54-55

No	種別	出土状態 平面 垂直(cm)	残存状況	(cm) 口径 底径	(cm) 器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 蓋	溝 フク土	つまみ～天 井部1/3	最大径 (12.0)	(2.5)	細砂を含む	還元焰 10YR7/1灰白	ロクロ成形。回転方向左回り。天井部 回転彫削り。つまみは扁平で環状。
2	須恵器 蓋	溝北部 フク土	天井部 破片	最大径 (18.0)	(2.2)	黒色粒を含 む	還元焰 2.5Y7/2灰黄	ロクロ成形。回転方向左回り。天井部 外面回転彫削り。肩部との境に割離痕 がある。
3	須恵器 蓋	溝 フク土	天井部 破片	最大径 (13.0)	(1.8)	細砂を含む	還元焰 10YR5/1褐灰	ロクロ成形。回転方向右回り。天井部 外面回転彫削り。線割がある。
4	黒色土器	溝 底面直上	口縁～底部 1/6	(14.0) -	(5.5)	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	内斜口縁。内面黒色処理。口縁部横撫で。 体部から底部外面横方向彫削り。
5	黒色土器	溝 底面直上	口縁～底部 1/5	(13.0) -	(4.1)	細砂を含む	酸化焰 5YR6/8橙	内斜口縁。内面黒色処理。口縁部横撫で。 体部から底部横方向彫削り。内面磨き。
6	土師器 杯	溝北部 フク土	口縁～底部 1/3	(9.8) -	2.8	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	型作り。口縁部横撫で。底部外面彫削り。 内面撫で。
7	須恵器 杯	溝北部 フク土	口縁～底部 1/3	(13.0) 7.2	4.1	細砂を含む	還元焰 2.5Y6/2灰黄	ロクロ成形。回転方向左回り。底部外 面回転彫削り。内面撫で。
8	須恵器 杯	溝フク土	体部～底部 1/3以下	(9.8) -	(1.8)	細砂を含む	還元焰 7.5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向左回りか。底部 外面彫削り後削り出し高台。
9	須恵器 碗	溝フク土	口縁～高台 部1/4	(11.8) 7.1)	5.1	細砂を含む	還元焰 10YR5/1褐灰	ロクロ成形。回転方向左回りか。底部 回転彫削り後高台を貼付。
10	須恵器 長頸壺	溝フク土	口縁～頸部 破片	- -	(6.8)	黒色粒を含 む	還元焰 N4/0灰	ロクロ成形。回転方向不明。外面中位 に2本の沈線をめぐる。内面自然釉 付着。
11	須恵器 長頸壺	4・5溝北部 フク土	頸部 1/3以下	- -	(11.2)	岩片、細砂 を含む	還元焰 7.5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向左回り。頸部に 2本の沈線をめぐる。
12	土師器 羹	4・5溝北部 フク土	頸～底部 1/4	頸部 (16.2)	(15.0)	細砂を多く 含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	口縁部横撫で。頸部上位横方向、中位 以下縦方向彫削り。内面撫で。
13	須恵器 羹	溝フク土	胴部 破片	- -	(4.0)	細砂を含む	還元焰 2.5Y5/1黄灰	外面波状文。内面撫で。
14	須恵器 羹	4・5溝北部 フク土	胴部 破片	- -	(8.8)	白色粒を含 む	還元焰 10Y5/1灰	外面平行叩き。内面同心円状のあて具 痕が撫で消されている。
15	須恵器 羹	溝 フク土	頸～胴部 破片	- -	(6.5)	白色粒、細 砂を含む	還元焰 7.5Y5/1灰	紐作り。頸部外面横撫で。胴部外面平 行叩き。内面同心円状のあて具痕を残 す。

5号溝 (土器) (第142図) PL.55

No	種別	出土状態 平面 垂直(cm)	残存状況	(cm) 口径 底径	(cm) 器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 蓋	フク土	天井～口縁 端部1/3	(16.0) -	(2.7)	細砂を含む	還元焰 N5/0灰	ロクロ成形。回転方向右回り。天井部 外面回転彫削り。かえり4引き出し。

第4章 検出された遺構と遺物

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口径 底径	(cm) 器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
2	土師器 杯	5溝中央北 フク土	口縁～体部 下位1/5	(13.0) -	[4.4]	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部横撫で。体部外面磨削り。内面撫で。
3	土師器 杯	フク土	口縁～体部 下位1/4	(10.2) -	[3.1]	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	型作り。口縁部横撫で。体部外面磨削り。内面撫で。
4	須恵器 杯	4・5溝 フク土	口縁～底部 3/4	12.6 6.8	4.0	微砂を含む	還元焰 5Y6/1灰	ロクロ成形。回転方向右回り。底部回転軸切り。
5	須恵器 杯	フク土	口縁～底部 1/5	(7.7) -	[4.0]	微砂を含む	還元焰 25Y4/1黄灰	ロクロ成形。底部外面回転磨削り。
6	土師器 高杯	5溝中央北 フク土	脚部 端部欠損	- -	[10.3]	微砂を含む	酸化焰 25YR6/6橙	外面縦方向磨削り。内面中位以上輪轆痕を残す。以下横方向磨削り。
7	須恵器 壺	フク土	口頸部～肩 部1/8以下	- -	[8.1]	細粒を含む	還元焰 7.5Y5/1灰	口縁部外面凸帯をはさんで波状文を2段に施す。内面撫で。肩部外面撫で。内面撫で後磨削り。
8	須恵器 壺	フク土	口縁部破片	- -	[4.7]	白色粒と細砂を含む	還元焰 N4/灰	外面凸帯をはさんで上下2段に磨き波状文。内面撫で。
9	須恵器 短頸壺	フク土	肩部～胴部 破片	- -	[4.8]	微砂、黒色粒を含む	還元焰 25Y6/2灰黄	外面カキ目。内面撫で。
10	須恵器 瓶	フク土	肩部 破片	- -	[6.5]	細砂を含む	還元焰 5Y3/1オリーブ黒	外面平行叩き。中位以上磨削り。内面撫で。

5号溝 (石器・石製品) (第142図) PL.55

No.	種別	出土位置	石材	残存	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	特徴
11	打製石斧	フク土	粗粒輝石安山岩	完存	18.3	7.5	4.8	830	短冊形。扁平な円錐を使用。表裏両面に自然面を残す。

5号溝 (金属製品) (第142図) PL.55

No.	種別	出土位置	残存	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	特徴
12	鉄鎌	フク土	完存	9.8	1.5	0.8	12.08	長頭三角形鎌。鎌身部は方幅1.3cm、厚さ計測不能。頸部は上幅3mm、下6mm角と下が太い。

1号井戸 (土器) (第110図) PL.55

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	(cm) 口径 底径	(cm) 器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 壺	底面上 135	体～底部 破片	- (11.0)	[4.7]	岩片、細砂を含む	還元焰 5Y5/2灰オリーブ	紐作り後ロクロ成形。回転方向不明。外面平行叩き。底部と口縁部磨削り。内面撫で。自然釉付着。

遺構外出土土器観察表 (第163~165図) PL.55-56

() は推定値 [] は現存値

No.	種別 器種	出土状態 平面 垂直 (cm)	残存状況	口径 口径 口径	(cm) 器 高	胎土	焼色 成 調	成・整形の特徴	
1	縄文 深鉢	5区 フク土	口縁部 破片	- -	(45)	白色・灰白 の細砂を含む	酸化塩 10YR5/4にふい・黄橙	黒浜式。平縁、単筋し、横位施文。	
2	縄文 深鉢	5区 フク土	口縁部-胴 部破片	- -	[108]	白色・灰白 の細砂を含む	酸化塩 10YR7/3にふい・黄橙	諸磯b式。縄文地に浮線文を貼付。	
3	縄文 深鉢	4区西 29D20	胴部 破片	- -	(74)	白色・灰白 の細砂を含む	酸化塩 10YR6/4にふい・黄橙	諸磯b式。縄文地の上に浮線文を貼付。	
4 ①~⑨	縄文 深鉢	5区 38Q6 38Q7	口縁-胴部 破片	- -	-	33	細砂を含む	酸化塩 5YR5-8明赤褐	諸磯c式。波状口縁、半載竹管工具 により横位、斜位、ハの字状に沈線 文を施す。
5	縄文 深鉢	4区西 39A2 39E2	口縁部 破片	- -	(120)	白色・石英 の粗・細砂 を含む	酸化塩 5YR5/4にふい赤褐	阿玉台式。断面三角の隆帯を貼付。 横位に区画した中に幅広い刻み列を 施す。	
6	縄文 深鉢	5区 38S6	胴部 破片	- -	(63)	細砂を含む	酸化塩 10YR6/3にふい・黄橙	諸磯b式。無文地に半載竹管工具 により平行瓦形文を施す。	
7	縄文 深鉢	5区 38Q7	口縁部 破片	- -	(82)	白色・灰色 の細砂を含む	酸化塩 7.5YR5/4にふい・褐	加賀利EⅡ式。縄文地に沈線による 渦巻状の縦位区画、中に横位の楕円 区画を施す。口唇部欠損。	
8 ①~④	縄文 深鉢	5区 フク土	胴部・底部 破片	- -	-	-	酸化塩 10YR6/4にふい・黄橙	後期環之内式。無文地に棒状工具 により斜格子の沈線を施す。底部割代 痕。	
9	須恵器 蓋	5区 38N4	天井-端部 1/3	- -	(22)	細砂を含む	還元塩 2.5Y6/3にふい・黄	クロコ成形。回転方向左回り。天井 部外面回転赤切り。端部折り曲り。	
10	土師器 杯	1区 17M17	口縁-底部 破片	(140) -	(35)	細砂を含む	還元塩 5YR6/6橙	口縁部横撫で、底部外面削削り。内 面撫で。	
11	須恵器 杯	5区 38S4	底部破片 1/3以下	- -	(13)	細砂を含む	還元塩 N5/灰	クロコ成形。回転方向右回り。底部 外面回転削削り。内面撫で。底部外 面に刻書がある。「藤岡産」	
12	須恵器 甕(ハソウ)	5区 フク土	胴部-体部 破片	- -	(38)	細砂を含む	還元塩 7.5Y5/1灰	クロコ成形。回転方向不明。胴部に 列点文、凹線と沈線で区画した中に 7条単位の聯指波状文を施す。	

遺構外 (石器・石製品・他) (第163~165図) PL.56

No.	種別	出土 位置	石 材	残存	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	特 徴
13	打製石斧	38Q7	細粒輝石安山岩	1/2	[52]	4.6	1.3	46	短冊形。横割ぎ剥片を使用。一部に自然面を残す。 下半部を欠損。
14	打製石斧	27M4	黒色頁岩	1/2	[68]	4.9	2.2	71	短冊形。厚手の剥片を素材とする。表面に自然 面を残す。下半部を欠損。
15	打製石斧	27L4	黒色頁岩	1/2	[73]	4.6	1.6	70	短冊形。横割ぎ剥片を素材とする。下半部を欠損。 擦溝による摩滅がある。
16	打製石斧	フク土	細粒輝石安山岩	完存	10.1	5.8	2.2	161	短冊形。横割ぎ剥片を素材とする。表面は自然 面を残す。基部が厚く尖頭状。
17	打製石斧	フク土	黒色頁岩	1/2	[85]	6.3	3.9	234	短冊形。厚い剥片を使用。一部に自然面を残す。 基部を欠損。
18	磨製石斧	29C19	変玄武岩	完存	10.3	4.5	3.3	200	乳棒状。刃部破損後破損面を敲打して調整を加 え、斧として再利用している。
19	磨製石斧	38R6	蛇紋岩	完存	4.6	2.8	0.7	1518	極小。定角状。断面始刃。

第4章 検出された遺構と遺物

No	種別	出土位置	石材	残存	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	特徴	
20	スレイバー	27M3	黒色頁岩	完存	57	5.7	1.7	50	不定形割片を使用。一部に自然面を残す。2個縁に調整を施して刃部とする。	
21	スレイバー	29D17	黒色頁岩	完存	57	5.8	0.9	29	不定形割片を使用。1辺を調整して刃部とする。	
22	スレイバー	27M3	黒色頁岩	完存	62	5.9	1.7	57	縦長の割片を使用。左右2個縁はそのまま利用し、下端のみ調整をして刃部とする。	
23	スレイバー	38S9	黒色頁岩	完存	73	7.3	1.3	86	縦割ぎ割片を使用。3個縁を調整して刃部とする。	
24	スレイバー	1溝 フク土	黒色頁岩	完存	7.7	8.2	1.0	45	不定形割片を使用。2個縁に使用痕がある。	
25	スレイバー	38K1	黒色頁岩	完存	6.5	7.0	2.7	135	厚手の割片を使用している。2個縁に調整をして刃部とする。	
26	石匙	28H7	黒色頁岩	完存	5.4	3.1	0.5	8	縦型。薄手の不定形割片を使用。一方の端部に調整によりつまみを作る。周縁に使用痕がある。	
27	石鏃	1溝	チャート	完存	3.45	1.95	0.40	236	凹基式無茎鏃。扱りはU字形で深い。	
28	石鏃	39M17	黒色安山岩	略完	[250]	1.80	0.40	1.48	凹基式無茎鏃。扱りはU字形で深い。先端部欠損。	
29	石鏃	38F6	チャート	略完	[320]	1.70	0.50	204	凹基式無茎鏃。扱りはU字形で浅い。先端部欠損。	
30	石鏃	38Q7	チャート	完存	2.45	1.50	0.40	122	平基式無茎鏃。	
31	石鏃	フク土	黒色頁岩	完存	1.50	1.10	0.25	0.27	凹基式無茎鏃。扱りはU字形で深い。	
32	石鏃	フク土	細粒輝石安山岩	略完	1.40	0.60	0.25	0.23	凹基式無茎鏃。磨製。扱りはU字形で浅い。脚部の一部を欠損。	
33	石鏃	38R9	黒色頁岩	略完	3.80	1.40	0.50	262	凸基式有茎鏃。茎の一部を欠損。	
34	凹石	38Q5	粗粒輝石安山岩	完存	10.4	6.5	4.8	360	準大の転石を使用。	
35	有孔方板	5区24 土坑	滑石	完存	4.70	3.30	0.50	1077	滑石製模造品。薄い割片を利用。表裏はわずかにケズリとミガキで成形。周縁は主にミガキで成形。双孔。片面穿孔。	
36	鉄	5区 表採	-	1/2	5mm 外径 タテ - ヨコ 26.95	内径 - - 21.00	部外径 - - 9.00	内幅 - - 7.20	厚さ 0.89	文久水質 重量 1.39g

第5章 自然科学分析

1 堤沼上遺跡におけるテフラ分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代や層位が不明な土層が検出された堤沼上遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、火山ガラス比分析や屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、17-O-17グリッド、1号土坑、163号ピットの3地点である。

2. 土層層序

(1) 17-O-17グリッド

17-O-17グリッドでは、本遺跡の台地斜面部の基本的な土層断面を観察することができた。ここでは、下位より灰色粘質土（層厚8cm以上）、灰褐色土（層厚10cm）、灰色粘質土（層厚1cm）、白色細粒軽石層（層厚10cm）、黄白色砂質土（層厚16cm）、砂混じり黄灰色土（層厚16cm）、灰色粘質土（層厚1cm）、砂混じり黄灰色土（層厚5cm）、黄色軽石を少量含む褐色土（層厚8cm、軽石の最大径3mm）、黄色や白色の軽石を含む褐色土（層厚22cm、軽石の最大径12mm）、黄色軽石に富む褐色土（層厚6cm、軽石の最大径14mm）、黄色軽石に富む灰褐色土（層厚9cm、軽石の最大径5mm）、暗灰褐色土（層厚14cm）が認められる（図1）。

これらのうち、白色細粒軽石層については、層相から約19～24万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group, 新井, 1962, 早田, 1996, 未公表資料）の中・上部に同定される。また、この断面で認められた2層の粘質土は、いわゆる地下水の水道となって形成されたようである。そのうち上位の土層は、後述する低角の地すべりに伴って形成されたすべり面に沿って形成された可能性が考えられる。

(2) 1号土坑

7世紀末から8世紀初頭と推定されている1号土坑は、低角の地すべりにより切られている。土坑の基盤の土層は、下位より白色細粒軽石層（層厚3cm以上）、黄白色砂質土（層厚11cm）、砂混じり黄灰色土（層厚21cm）、灰色粘質土（層厚3cm）、黄灰色土（層厚7cm）、黄色や白色の軽石を含む褐色土（層厚34cm、軽石の最大径8mm）、黄色軽石に富む褐色土（層厚8cm、軽石の最大径13mm）、黄色軽石混じり灰褐色土（層厚14cm、軽石の最大径6mm）、暗灰褐色土（層厚17cm）からなる（図2）。最下位の白色細粒軽石層は、層相から、As-BP Groupの中・上部に同定される。また、これらの土層のうち、灰色粘質土が、すべり面に沿って形成された粘質土である。1号土坑は、この地すべりによりほぼ水平に切られている。土坑の覆土は、下

位より暗灰色土（層厚8cm）、黒灰色土（層厚22cm）などからなる。

(3) 163号ピット

やはり7世紀末から8世紀初頭と推定されている163号ピットも、低角の地すべりにより切られている。ピットの基盤の土層は、下位より灰褐色粘質土（層厚15cm以上）、灰褐色粘質土（層厚6cm）、灰色粘質土（層厚5cm）、黄褐色軽石混じり灰褐色粘質土（層厚10cm、軽石の最大径4mm）、褐色粘質土（層厚12cm）、黄白色砂質土（層厚13cm）、砂混じり黄灰色土（層厚12cm）、灰色粘質土（層厚2cm）、砂混じり黄灰色土（層厚3cm）、褐色土（層厚10cm）、黄色や白色の軽石を含む褐色土（層厚21cm、軽石の最大径8mm）からなる（図3）。

これらのうち、黄白色砂質土中には、層相からAs-BP Groupの中・上部に由来するテフラ粒子がとくに濃集していると考えられる。また灰色粘質土が、すべり面に沿って形成された粘質土である。163号ピットも、この地すべりによりほぼ水平に切られている。土坑の覆土は、下位より暗灰砂層（層厚5cm）、白色軽石混じり暗灰色砂質土（層厚10cm、軽石の最大径36mm）、ラミナが発達した暗灰色砂層（層厚11cm）、黒灰色土と黄灰色シルトの互層（層厚5cm）、黄灰色土（層厚10cm）、黒灰色土（層厚11cm）からなる（図4）。

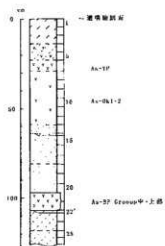


図1 17-0-17 グリッド土層柱状図

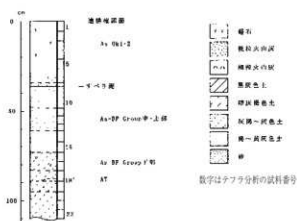


図3 163号ピット土層柱状図

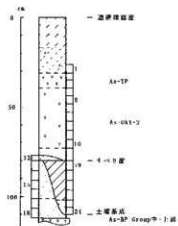


図2 1号土坑の土層柱状図

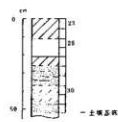


図4 163号ピット覆土の土層柱状図

3. 火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

テフラの特徴とその降灰層準を把握するために、17-O-17グリッドにおいて、基本的に厚さ5cmごとに設定採取された試料のうち、14点を対象に火山ガラス比分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態色調別比率を求める。

(2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果を、ダイアグラムにして図5に、その内訳を表1に示す。分析対象となった試料の中では、試料26にくに多くの無色透明のバブル型ガラスが含まれている(36.0%)。それより上位では、試料12と試料10に比較的多くの火山ガラスが認められる。試料12に含まれる火山ガラスは、量が多い順に、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス(20%)、分厚い中間型ガラス(1.6%)、繊維束状に発泡した軽石型ガラス(1.2%)である。また試料10に含まれる火山ガラスは、量が多い順に、中間型ガラス、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス(1.2%)、繊維束状に発泡した軽石型ガラス(0.4%)である。

また試料4および試料2に、多くの火山ガラスが含まれている(19.6~20.0%)。いずれの試料でも、量が多い順に、中間型、繊維束状に発泡した軽石型ガラス、スポンジ状に発泡した軽石型ガラスが含まれている。これらは同一テフラに由来すると考えられる。

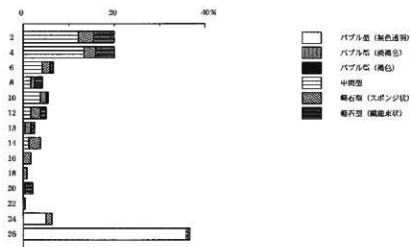


図5 17-O-17グリッドの火山ガラス比ダイアグラム

表1

火山ガラス比分析結果

グリッド	試料	bw (cl)	bw (pb)	bw (br)	md	pm (sp)	pm (fb)	その他	合計
17-O-17	2	0	0	0	31	8	11	200	250
	4	0	0	0	33	6	10	201	250
	6	0	0	0	10	4	2	234	250
	8	0	0	0	4	2	4	240	250
	10	0	0	0	9	3	1	237	250
	12	0	0	0	4	5	3	238	250
	13	0	0	0	1	3	2	244	250
	14	0	0	0	3	6	0	241	250
	16	0	0	0	0	4	0	246	250
	18	0	0	0	0	2	0	248	250
	20	0	0	0	0	1	4	245	250
	22	0	0	0	0	1	0	249	250
	24	12	0	0	0	3	0	235	250
	26	90	0	0	1	1	0	158	250

数字は粒子数。bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，cl：透明，pb：淡褐色，br：褐色，sp：スポンジ状，fb：繊維束状。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

指標テフラとの同定精度を向上させるために、17-O-17グリッドの試料12について、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）により、テフラ粒子の屈折率測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。試料12に含まれる火山ガラス（ n ）の屈折率は、1.500-1.502である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率（ γ ）は、1.704-1.709である。

表2

17-O-17グリッドにおける屈折率測定結果

試料	火山ガラス（ n ）	重鉱物	斜方輝石（ γ ）	角閃石（ n_2 ）
12	1.500-1.502	opx>cpx	1.704-1.709	-

屈折率の測定は、温度一定型測定法（新井，1972，1993）による。opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石。

5. 考察

屈折率測定の対象となった17-O-17グリッドの試料12については、層位や火山ガラスの形態などから、約1.8万年前に浅間火山から噴出した浅間白糸軽石 (As-Sr, 町田ほか, 1984) に由来するテフラの混在する可能性が考えられた。この試料に含まれる火山ガラスについては、その上位の試料10にも多く含まれていると考えられる浅間大窪沢第1軽石 (As-Ok1, 約1.7万年前^{*1}, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996)、あるいは浅間大窪沢第2軽石 (As-Ok2, 約1.6万年前^{*1}, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996, 以上合わせて浅間大窪沢テフラ群: As-Ok Group と呼ぶ) に由来するようである。斜方輝石については、その屈折率からAs-Srに由来する可能性もあるが、As-Ok Group のそれと大きな違いがないために、高精度の同定は難しい。またAs-Srに少量ながら含まれているとされる角閃石 (町田・新井, 1992) も認められなかった。これらのことから、本試料中にAs-Sr起源のテフラ粒子が混在しているとは明言できない。

試料26に多く含まれる無色透明のバブル型ガラスは、層位、形態、色調などから、約24~25万年前^{*1}に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰 (AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 村山ほか, 1993, 池田ほか, 1995) に由来すると考えられる。試料10付近に小規模ながら出現ピークをもつテフラについては、層位や火山ガラスの形態などから、As-Ok1やAs-Ok2に由来すると考えられる。試料4や試料2に多く含まれる火山ガラスについては、その特徴から、約1.3~1.4万年前^{*1}に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992) の上部の火山灰層に由来すると考えられる。したがって、試料6の褐色土中に多く含まれる黄色軽石が、As-YP下部の軽石層に由来すると考えられる。

これらのことから、1号土坑の基盤の土層のうち、褐色土中に含まれる黄色や白色の軽石についてはAs-Ok Group、その上位の褐色中に多く含まれる黄色軽石についてはAs-YPに由来すると考えられる。またピット3の基盤の土層のうち、層相から試料19付近にATが多く含まれていると思われる。また、その上位の灰褐色粘質土中に含まれる軽石については、層位や岩相などからAs-BP Group下部の室田軽石 (MP, 森山, 1972, 早田, 1990) に由来すると考えられる。そして、最上部の褐色土中に含まれる黄色や白色の軽石については、As-Ok Group に由来するものであろう。これらのテフラの層位や同定精度を高めるために、さらに火山ガラス比分析や屈折率測定が行われると良い。

いずれにしても、本遺跡で認められた1号土坑や163号ピットを切った低角の地すべりのすべり面は、As-BP Group 中・上部の上位で、As-Ok Group の間の土層中に形成されている。なお、17-O-17グリッドでは、As-BP Group 中・上部の直下にも、すべり面と似たような粘質土の薄層が認められる。このことは、本遺跡において何らかの原因により低角の複数の地割れが複数 (層準) に形成され、そのうち特定の地割れに沿って地すべりが発生したことを示唆しているのかも知れない。地すべりの発生年代、切られた土坑やピット遺構の推定年代から、7世紀末以降と考えられる。地すべりが非常に低角なことを考慮すると、その形成要因の一つとして、818年 (弘仁9)年に発生し、本遺跡の周辺にも地割れや噴砂などの痕跡を数多く残している地震 (能登ほか, 1991) が候補としてあげられよう。

6. 小結

堤沼上遺跡において、地質調査、火山ガラス比分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より始良Tn火山灰 (AT, 約24~25万年前^{*1})、浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 約1.9~2.4万年前^{*1}) の中・上部、浅間大窪沢第1軽石 (As-Ok1, 約1.7万年前^{*1}) あるいは浅間大窪沢第2軽石 (As-Ok2, 約1.6万年前^{*1})、

浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 約1.3~1.4万年前^{*1}) を認めることができた。本遺跡で検出された7世紀末から8世紀初頭の土坑やピットを低角で切った地すべりのすべり面は、調査分析地点においては、As-BP Group と As-Ok Group の間に認められる。

*1 放射性炭素 (¹⁴C) 年代。

文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定-テフロクロロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
- 新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法-研究対象別分析法」, p.138-148.
- 荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質。地団研専報, no.45, 65p.
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・小林哲夫 (1995) 南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器¹⁴C年代。第四紀研究, 34, p.377-379.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義-。科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学-考古学研究に関するテフラのカタログ-。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良Tn火山灰 (AT) の¹⁴C年代。第四紀研究, 26, p.79-83.
- 森山昭雄 (1972) 権名火山東・南麓の地形-とくに軽石流の地形について-。愛知教育大学地理学報告, 36-37, p.107-116.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 (1993) 四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討-タンデロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の¹⁴C年代。地質雑, 99, p.787-798.
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山, 黒班-前掛期のテフラ層序。日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.
- 能登 健・内田憲治・早田 勉 (1990) 赤城山南麓の歴史地震-弘仁九年の地震に伴う地形変化の調査と分析-。信濃, 42, p.755-772.
- 早田 勉 (1996) 関東地方~東北地方南部の示標テフラの諸特徴-とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて-。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.

2 堤沼上遺跡における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。

2. 試料

分析試料は、17-O-17グリッドから採取された計5点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5} g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属 (ヨシ) の換算係数は6.31、ネザサ節は0.48、クマザサ属 (チシマザサ節・チマキザサ節) は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族A (チガヤ属など)、Bタイプ

[イネ科-タケ亜科]

ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型 (チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ

節型 (おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

〔イネ科-その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、未分類等

表1 群馬県、堤上遺跡における植物珪酸体分析結果
検出密度 (単位: × 100個/g)

分類群	学名	地点・試料				
		17-0-17グリッド				
		1	2	3	4	5
イネ科	Gramineae (Grasses)					
キビ族型	Panicaceae type					7
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)					30
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	7				
Bタイプ	B type				15	82
タケ亜科	Bambusoideae (Bambo)					
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	14	15			7
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	56	52	8	45	7
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	441	30		15	37
未分類等	Others	35	22	8	8	7
その他のイネ科	Others					
表皮毛起源	Husk hair origin	14	22		8	22
棒状珪酸体	Rod-shaped	63	15	23	30	37
未分類等	Others	427	192	45	106	90
植物珪酸体総数	Total	1057	348	84	227	326

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)					1.89
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.07	0.07			0.04
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	0.42	0.39	0.06	0.34	0.06
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	1.32	0.09		0.05	0.11

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>					
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	4	13			18
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	23	71	100	88	27
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	73	16		12	55

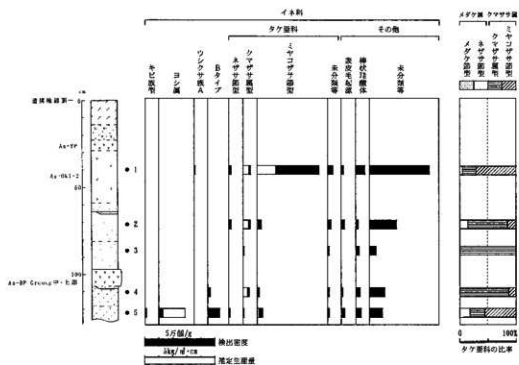


図1 群馬県、堤沼上遺跡17-0-17グリッドにおける植物珪酸体分析結果

(2) 植物珪酸体の検出状況

17-0-17グリッドでは、As-YPの下層（試料1）からAs-BP Group（中・上部）の下層（試料5）までの層準について分析を行った。その結果、As-BP Group（中・上部）の下層（試料5）ではイネ科Bタイプ（スマガヤ属類似）が比較的多く検出され、キビ族型、ヨシ属、ネザサ節型、クマザサ節型、ミヤコザサ節型なども検出された。As-BP Group（中・上部）直下層（試料4）では、ヨシ属が見られなくなり、イネ科Bタイプも減少している。As-BP Group（中・上部）の上層（試料3）では、クマザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。As-OK1-2の下層（試料2）では、クマザサ節型がやや増加し、ネザサ節型やミヤコザサ節型も出現している。As-YPの下層（試料1）では、ミヤコザサ節型が大幅に増加している。おもな分類群の推定生産量によると、As-BP Group（中・上部）の下層（試料5）ではヨシ属、As-YPの下層（試料1）ではミヤコザサ節型が優勢となっていることが分かる。

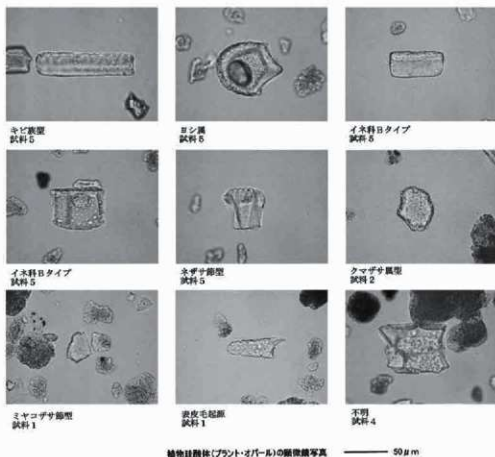
5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group, 約1.9~2.4万年前）中・上部の下層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはキビ族、およびネザサ節やクマザサ属（ミヤコザサ節を含む）などのタケザサ類も分布していたと推定される。As-BP Group（中・上部）直下層ではヨシ属が見られなくなっていることから、この時期には何らかの原因で堆積環境が乾燥化した可能性が考えられる。

浅間大窪沢第1軽石（As-Ok1, 約1.7万年前）あるいは浅間大窪沢第2軽石（As-Ok2, 約1.6万年前）の下層から浅間板鼻黄色軽石（As-YP, 約1.3~1.4万年前）の下層にかけては、クマザサ属などのササ類を主体としたイネ科植生であったと考えられ、とくにAs-YPの下層ではミヤコザサ節が繁茂するような状況であったと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、メダケ率（両者の推定生産量の比率）の変遷は、地球規模の永期-間永期サイクルの変動と一致することが知られている（杉山, 2001）。また、クマザサ属のうちミヤコザサ節は太平洋側の積雪の少ない比較的乾燥したところに分布している（室井, 1960, 鈴木, 1978）。これらのことから、当時は積雪の少ない比較的寒冷で乾燥した環境であったと推定される。

クマザサ属は氷点下5℃程度でも光合成活動をしており、雪の中でも緑を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている（高槻, 1992）。遺跡周辺にこれらのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。



植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真 50 μm

文献

- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.
- 杉山真二 (1999) 過去約3万年間におけるササ類の植生変遷と積雪量の変動-植物珪酸体分析からみた過去のミヤコザサ線-。日本植生史学会大会発表要旨集, p.29-30.
- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学, 同成社, p.189-213.
- 鈴木貞雄 (1978) タケ科植物の概説。日本タケ科植物総目録, 学習研究社, 25-45.
- 高槻成紀 (1992) 北に生きるシカたち-シカ、ササそして雪をめぐる生態学-。どうぶつ社.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 室井緯 (1960) 竹笹の生態を中心とした分布。富士竹類植物園報告, 5, p.103-121.

第6章 調査の成果と問題点

1 堤沼上遺跡出土の墨書・刻書土器について

1. 全般的傾向

堤沼上遺跡からは、12棟の竪穴住居跡から18点の墨書・刻書土器が出土している。墨書土器が13点、刻書土器が5点である。刻書土器5点は、いずれも8世紀第3四半期の土師器杯の底部内面に、土器焼成前に記された「×」もしくは「十」であり、一種の窺記号と考えられる。それら以外の墨書土器は、小片で判読不能なものをふくめて、いずれも文字が記されたものであり、また、土器の年代からみても9～10世紀頃のものであるため、刻書土器5点とは分別して考えるべきであろう。

本遺跡出土の墨書土器は、特に9世紀第3～第4四半期頃のものが多いが、全国の集落遺跡出土の墨書・刻書土器でも、9世紀代のものが最も多いので、この点は、そうした全般的な傾向に合致するところである。

出土状況 墨書・刻書土器は、いずれも竪穴住居跡が密集する調査区中央の2・3区からの出土で、いずれも竪穴住居跡から出土している。

2・3区の北東及び南西に隣接する調査区からも若干の竪穴住居跡は検出されているが、2・3区で検出されているように集中しているわけではなく、むしろまばらである。墨書・刻書土器が出土した竪穴住居跡が2・3区に集中していることは、単にその一帯に住居が多く作られる集落内の好適地であるという要因に過ぎないのだろう。この2・3区における奈良・平安時代の竪穴住居跡数に比してみれば、出土した墨書・刻書土器の数量は非常に僅少と言わざるを得ない。

また、墨書・刻書土器が出土した竪穴住居跡群の周辺には溝や土坑も多数検出されているが、墨書・刻書土器は4号溝と包含層から刻書土器が各々1点と少なく、いざざか特異である。

13号住居跡から刻書土器(13住-4)と墨書土器(13住-5)が各1点、16号住居跡から刻書土器(16住-1)と墨書土器(16住-6)が各1点、30号住居跡から墨書土器2点(30住-2・4)、34号住居跡から墨書土器4点(34住-1～4)が出土している他は、すべて1住居跡から1点の出土である。同じ遺構から複数の墨書・刻書土器が出土している場合でも、34号住居跡から出土した墨書土器4点の中に、「来」と記されたものが2点含まれる以外は、いずれもそれぞれ異なる文字が記されており、特定の文字が特定の住居跡周辺に分布するというような傾向は全く見出すことはできない。また、各住居内における墨書・刻書土器の出土状況についても、特徴的な様相はない。

記載文字と部位 土器に文字が記されている部位や方向についてみると、「来」と記されたもの3点(5住-5、34住-2・4)は、いずれも文字が底部外面に記されている。この「来」という文字を使用する集団にとっては、「来」と言う文字を共有するのみならず、それが記される場所についても規定するような強固な認識が存在したということになる。

「来」以外の、本遺跡出土の文字は、概して体部外面に記されている例が多い。一般的に、関東地方の集落遺跡出土の墨書・刻書土器では、体部に文字が記されているケースが多いので(高島英之『古代出土文字資料の研究』東京堂出版2000、藤田憲宏「墨書・刻書土器の出土傾向とその背景」吉村武彦編『古代文字資料のデータベースの構築と地域社会の研究-平成11～13年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書』2002)、その点から見れば、関東地方の集落遺跡出土の墨書土器の一般的な傾向に沿ったものと

第6章 調査の成果と問題点

言えるだろう。

文字の記載内容で、明確に意味が判明するものは、37住-1の「勢多」のみである。「勢多」は上野国内の郡名の一つであり、出土地も古代の勢多郡の範囲内に当たっている。以下、この墨書土器について若干考察したい。

遺物番号	出土遺構	器種	墨書部位・方向	釈文	種別	備考(遺構年代観等)
5住-5	5号住居跡・埋土	黒色土器・杯	底部外面	来	墨書	9C第4四半期
11住-1	11号住居跡・埋土	土師器・杯	底部内面	×	刻書	9C第4四半期
13住-4	13号住居跡・埋土	土師器・杯	底部内面	×	刻書	8C第3四半期
13住-5	13号住居跡・埋土	須恵器・杯	底部内面	□	墨書	8C第3四半期
15住-2	15号住居跡・埋土	土師器・杯	底部外面	真	墨書	9C第4四半期
16住-1	16号住居跡・貯蔵穴	土師器・杯	底部内面	+	刻書	9C第4四半期
16住-6	16号住居跡・埋土	須恵器・碗	体部内面・正位 体部外面・正位	内 ^o □	墨書	2箇所 9C第3四半期
23住-3	23号住居跡・埋土	土師器・甕	底部内面	□	墨書	9C
24住-3	24号住居跡・埋土	須恵器・杯	体部外面・正位	井	墨書	「井」か「華」の省簡か。 9C第4四半期
26住-1	26号住居跡・埋土	須恵器・蓋	天井部外面	×	刻書	6C後半
30住-2	30号住居跡・貯蔵穴	須恵器・杯	体部内外面・正位	丸千ノ九千	墨書	2箇所 10C前半
30住-4	30号住居跡・床直	須恵器・高台付碗	体部内面・逆位 体部外面・正位	□ 人 ^o	墨書	2箇所 10C前半
34住-1	34号住居跡・床直	土師器・杯	底部外面	□	墨書	9C第4四半期
34住-2	34号住居跡・床直	土師器・杯	底部外面	来	墨書	9C第4四半期
34住-3	34号住居跡・床直	須恵器・高台付碗	体部外面	□	墨書	9C第4四半期
34住-4	34号住居跡・床直	須恵器・高台付碗	底部外面	来	墨書	9C第4四半期
37住-1	37号住居跡・埋土	須恵器・高台付碗	体部外面・横位	勢多	墨書	組み合わせ文字。9C第4四半期
40住-3	40号住居跡・埋土	須恵器・杯	底部外面	+	刻書	6C後半

表1 堤沼上遺跡出土墨書・刻書土器一覧

2. 「勢多」墨書土器について

出土状況 「勢多」の文字が体部外面に横位で記された37住-1であるが、本資料が出土した37号住居跡は、3区の北壁にかかって検出されたが、住居跡の南西隅部を検出しただけで、その大部分は調査区外に出てしまっているため、全容は明らかではない。

37住-1は、この住居埋土の中心に、破片状態で散在していた。住居跡の埋没時に投棄されたもので、この住居跡の機能時のものとは考えにくい。伴出遺物等は、杯1個体、滑石製紡錘車1点と少ない。「勢多」の文字が墨書されたこの土器は、9世紀第4四半期の年代観が与えられている。

記載の特徴 一見すると「勢」という文字を一文字、須恵器高台付碗の体部外面に、横向きで縦長に記したように見えなくもないが、「勢」の文字の「力」の部分が右脇に非常に小振りに記され、それに続けて斜め

に流れるかのような筆致で「多」の文字が草書体風に記されているものと解釈できるので、「勢多」の二文字を組み合わせて、あたかも一文字のように記したものと理解すべきであろう。そのような字形が記された類例が、他からも出土している。

二文字を合体させて一文字のように記す例は、墨書土器に限らず、文書等を含め、古代には一般的な表記法であり、類例も多い（平川南「墨書土器とその字形—古代村落における文字の実相—」『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』国立歴史民俗博物館1991、後、同氏著『墨書土器の研究』吉川弘文館2000に収録）。

筆致は違筆である。文字を日常使いこなしていた階層が記したものと考えられる。

本資料の意義 本資料は、県内では数少ない郡名が記された墨書土器の類例である。勢多郡の郡名が記された古代の出土品辞意資料には、瓦の焼成前に勢多郡の「勢」の文字一文字をスタンプで押し、勢多郡からの貢進されたことを示した瓦が、高崎市の国分寺跡や前橋市の上西原遺跡などで多数出土しているが（群馬県教育委員会「史跡上野国分寺跡発掘調査報告書」1989、同「上西原遺跡」2000、前沢和之「史跡上野国分寺跡出土の文字瓦について」『日本歴史』1986、松田猛「群馬県における文字瓦と墨書土器—前橋市上西原遺跡の文字資料—」『信濃』38-11 1986、高井佳弘「上野国分寺跡出土の郡部押印文字瓦について」『古代』107 早稲田大学考古学会 1999 など）、それらはいずれも「勢」の一文字のみである。本資料のように「勢多」の郡名二文字を記した例として、また、その文字を土器に墨で記した例として初めて発見された資料である。これまで出土しているような、寺院の造営や修理に際して瓦の貢進元を示すために押捺されたスタンプの文字とは、根本的に意味や背景は異なる。

本資料は、上野国勢多郡に関わる古代の史料として、『続日本紀』天平勝宝元年（749）閏5月癸丑（20日）条の、「（前略）上野国勢多郡小領外従七位下上毛野朝臣足人、各献_レ当国々分寺知識物_一、並授_レ外従五位下_一」という記事や、宮城県多賀城市多賀城跡出土の8世紀の木簡にみえる「桂草郷」（勢多郡桂草郷の意）の文字（宮城県多賀城跡調査研究所「宮城県多賀城跡調査研究所年報 1974 多賀城跡—昭和49年度発掘調査概報—」1974）、さらに、前橋市二之宮町二之宮洗橋遺跡出土の8世紀の土器に墨書された「芳郷」（勢多郡芳賀郷の意）の文字（群馬県埋蔵文化財調査事業団「二之宮洗橋遺跡」1994）、などに次ぐ、古代の上野国勢多郡に関わる文字資料と位置づけることが出来る。

郡名が記された墨書土器は、全国における出土事例からみると郡家周辺から出土しているケースが多い。本県でも古代新田郡の郡家と考えられている太田市天良町の天良七堂遺跡及びその周辺では、郡名である「入田」（にゅうた=にふた=にった）及びその一文字である「入」「新」などの文字が記された墨書土器が多数出土している（新田町教育委員会「天良七堂遺跡第6次調査」1997、同「天良七堂遺跡・笠松遺跡」1999、小宮俊久「上（毛）野国の古代交通網と官衙」埼玉考古学会「埼玉考古学会シンポジウム 坂東の古代官衙と人々の交流」2002、ほか）。郡名が記された墨書土器が出土した本遺跡についても、比較的近隣に勢多郡家もしくはその出先機関などの郡官衙が存在した可能性が考えられる。

ただ、官衙遺跡から出土する国郡名等記載の墨書土器では、底部外面に記されたものが圧倒的に多いので、その点において、本資料は通例とは異なっている。先述したように、本資料のように体部外面に文字が記されるのは、集落出土の墨書土器に多く見られる記載方法である。

古代勢多郡 古代の上野国勢多郡は、もともと赤城山麓の全域にわたる地域であったが、近代に至り赤城山北麓は利根郡に編入されている（角川日本地名大辞典編纂委員会編『角川日本地名大辞典10 群馬県』角川書店1988、平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系10 群馬県の地名』平凡社1987ほか）。『和名類聚抄』（承平年間（931～938）成立、源順撰）には、深田（ふかた）・田邑（たむら）・芳賀（はが）・桂堂

第6章 調査の成果と問題点

(かいがや)・真壁(まかべ)・深渠(ふかみぞ)・深澤(ふかさわ)・時澤(ときざわ)・藤澤(ふじさわ)の9郷からなる中郡とある。

昭和60(1985)年度に県教育委員会が調査した前橋市下大屋町の上西原遺跡から検出された、横列で長方形に区画された大型の建物跡群を勢多郡家と想定する考え方が(群馬県教育委員会「上西原遺跡」2000、松田猛「群馬県における文字瓦と墨書土器-前橋市上西原遺跡の文字資料-」『信濃』38-11 1986)、方形の基壇建物跡を中心とした一角は、寺院伽藍中枢部とそれに附属する管理施設とみる説が現在では有力である。

上西原遺跡は、本遺跡の西約4kmほどに位置し、本遺跡からもさほど離れた場所ではない。ただし、検出された遺構の状況からみれば郡家そのものとは考えにくく、基壇建物とそれを長方形に取り囲む回廊状の遺構の状況からみて寺院と考えるのが妥当であろう。しかしながら先述したように、「勢」の文字が刻印された国分寺造営期の瓦が多数出土しており、郡内の有力豪族が造寺に関与したであろうことは疑いない。郡内の中心の一つが上西原遺跡周辺に存在していた可能性は否定できないだろうが、結局のところ勢多郡家の所在は、現在のところ不明である。

郷名	比定地ほか
深田郷	前橋市上・下増田町、駒形町、荒口町、荒子町、箱田町等に比定説があるが不明
田邑郷	前橋市粕川町西田面、上・下東田面に比定説があるが不明
芳賀郷	前橋市瑞気町、鳥取町付近
桂堂郷	前橋市東・西片貝町、上泉町、三俣町付近
真壁郷	渋川市北橋町真壁、箱田、上・下箱田、上・下南室、富士見村米野、山口付近
深渠郷	前橋市粕川町深津、女淵～前橋市東・西大室町、下大屋町付近
深澤郷	みどり市大間々町上・下神梅、塩沢、桐生市黒保根町宿廻付近
時澤郷	富士見村時沢を中心とした、原之郷～前橋市川端町、日輪寺町付近
藤澤郷	前橋市大胡町～前橋市富田町付近、前橋市泉沢町付近

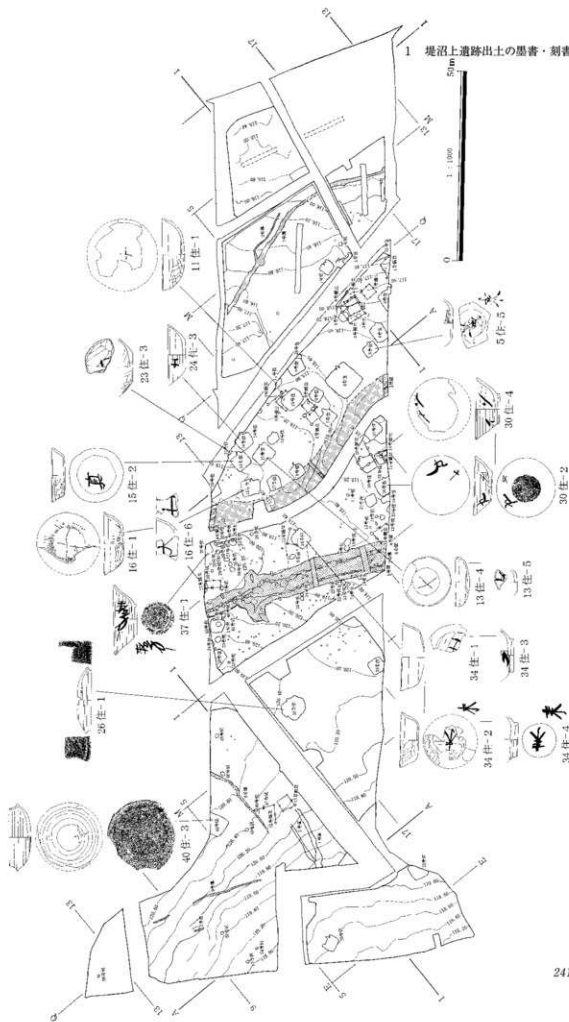
表2 古代上野国勢多郡所管の各郷とその比定地

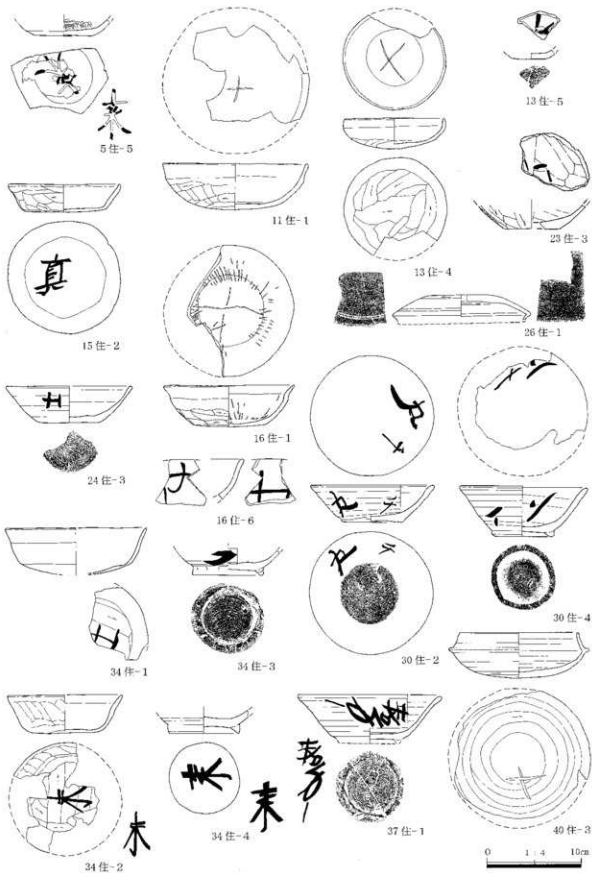
3. その他

その他の資料に関しては、37住-1に「勢多」の文字が記され、それが勢多郡の郡名を記しているところからみれば、15住-2に記された「真」の文字は、勢多郡管下の真壁郷を意味していると考えられなくはない。ただ、1文字のみの記載であり、他に勢多郡内の郷名に関連するような墨書土器が出土しているわけではないので、あくまでも可能性の一つにとどまる。

23住-3は、土師器甕の底部内面に記されているが、この時期の土師器甕は、基本的に長胴のスタイルのものが多く、底部内面に文字を記すことは物理的に困難であり、類例もほとんど聞かない。本例は、胴の部分が割れたか、あるいは故意に割るかしたものを、たとえば祭祀に用いるというような、甕としての本来の用途である煮沸・貯蔵等以外の目的で使用するに際して記された文字と考えなければ、整合的に説明することができないように思われる。

1 堤沼上遺跡出土の墨書・刻書土器





2 堤沼上遺跡の変遷と特徴

1. はじめに

本遺跡は、赤城山南麓の末端、寺沢川左岸台地上にある。台地は、南面して勾配も少ない。一方の端は寺沢川に面していて、その先の下流には広瀬川低地帯が広がる。住環境としては、恵まれた条件を備えている。その中でも、川に近いことが何といても強みであろう。水が確保出来るのはもちろんのこと、川をたどれば山に入るのも容易である。古代にあっては、どうであったのだろうか。

県文化財保護課（現文化課）による試掘では、古代を中心とした集落があると推定されていた。そして谷地ではAs-Bが確認され、水田である可能性が高いというものであった。結果は、住居跡40軒のほか、掘立柱建物跡18棟、土坑56基、溝9条、井戸1基、道3条、ピット164基を検出した。およそ6世紀から10世紀のもので、谷地田を基盤とする新聞集落の様子を明らかにすることができた。周辺遺跡には多い縄文時代の遺構こそなかったが、居住のはじまりは2万数千年前、旧石器時代にまでさかのぼる。

上武道路の路線内では、遺跡が途切れることなく続いている。同じ台地上にある亀泉坂上遺跡とは行政区分により分けただけで、台地の西と東、本来は一つの遺跡かもしれない。最終的なまとめは、亀泉坂上遺跡の報告をまつことにして、ここでは周辺遺跡の調査成果を参照しながら集落の変遷を、次いでその中での特徴をのべて、調査のまとめとしたい。

2. 集落の変遷

住居跡は、40軒を検出した。内訳は、6世紀後半が5軒、8世紀代が16軒、9世紀代が6軒、10世紀代が3軒、時期不明が10軒となっている（住居跡集計表参照）。6世紀代のは、それぞれが屋敷を構えたかのようにゆったりと点在しているのに、8世紀以降は縁辺部に近い台地の東側にだけ集中し、しかも重複の少ないことが分布の特徴である。整然と並ぶというわけではないが、そこには何か重要なルールがあったのだろう。範囲が決めてあって計画的に作られた集落のようである。

遺跡付近の谷地は、中腹まで続く本谷と枝葉の支谷に分けられる。1区の谷地は、その後で遺跡から北へ300mで谷頭となり、両側にある本谷にくらべて幅も深さも半分以下である。台地との段差は少なく、利用しやすいように見えるが、実際のところ縄文時代の次は、6世紀まで利用されていた形跡に乏しい。堂野Ⅱ遺跡の報告では小川が流れる程度と言っていたが、乏しさの原因は水である。作付けには何度も挑戦したことであろうが、谷頭からの湧水だけではそもそも絶対量が足らなかったのだろう。利用する価値は、遺跡よりも南、谷地がぐんと幅を広げる下流にありそうだ。その後も、7世紀代は遺構が見当たらない。9世紀初頭も前後の中で落ち込んでいる。

7世紀の空白は、遺跡の範囲を西に広げてみれば、寺沢川沿いに作られた古墳が原因であるらしい。上毛古墳総覧には、亀泉町分として左岸で7基、右岸にも亀泉薬師塚など数基が点在して記載されている（第2図参照）。しかし、古墳が原因とはいいつつも、一帯が無人の地と化したわけではなく、墓域の確保に迫られて居住域をそう遠くない所に移動したことが実態であろう。古墳は、荒砥地域に比べれば絶対的に少ないが、堂野Ⅱ遺跡で発見された終末期古墳が象徴するように、地域は発展していると評価すべきである。ここで検出した集落は、次の8世紀を通じて継続している。それが、発展を裏付ける何よりの証明である。一方の9世紀初頭は一時的なことで、弘仁九年（818）の地震との関係であろうか。大きく落ち込むほどで

はない。その後は、10世紀前半まで順当に推移しているようにみえる。周辺の遺跡も同じように推移し、充実した様子を見せている。この間には、3条の大溝が相次いで掘削されていて、積極的な耕地の拡大策が取られている。大溝は、谷地を潤すだけではなく、通過させた台地を畠に改良していく狙いもあったろう。現在のところ、灌漑用の大型水路という評価をしておくが、これが地震後の復旧策や地域を浮揚させるのが目的ならば、話は飛躍しておもしろい。

類似した遺構は、後述するが周辺の遺跡でもいくつか検出されている。寺沢川以外は、目立つ河川のない地域である。大溝は、各地に連携して掘られ、水の乏しい谷地開発の切り札として登場したと理解したい。そう考えると、水田の跡もはっきりとしない谷地に面して、台地ごとに集落があるのも理解できる。掘削、その後の維持には、集落同士の協力は不可欠である。例えば寺沢川水系といった、水系単位の地域としての取り組みが、後の女堀につながっていったのだろう。また、溜池を用水でつなぐ、現代の灌漑方法の前身のようで興味深い。取水口と供給先など、今後課題を残した遺構である。

集落が終わりを迎えるのはAs-B降下の頃で、7号溝、8号溝そして水田が調査した中でわかる遺構である。2条の溝は、細いが、かつて大溝のあった場所を依然として流れている。現代のU字溝のように、これでも用は足りたというべきで多大な負担を必要とする大溝に頼らなくても、むしろ、水を自在に扱える水路網が出来上がっていたと見るべきではないだろうか。埋没土に残る幾筋もの流れの跡は、水との格闘の跡でもあり技術習得のための時間でもあった。ここに居住していた形跡はないが、どこかに地点をずらすことで命脈を保っているのだろう。

As-Bは、埋没した住居跡の上だけでなく調査区の中にも純層状態で点々と残されていた。これを見ると、降下後は荒れるにまかせたような状態で、再度開墾のために人の手が入るのは大分時間が経ってから、女堀が開削される頃であろうか。

3. 遺物の特徴について

遺物は、収納箱で38箱が出土した。そのほとんどは住居跡と溝からで、遺物に対する印象はまず量が少ないということである。遺構の多くは残り具合が良かっただけに、その印象は特別である。陶磁器類もほとんどなく、縄文時代のものも遺構外遺物として掲載した程度にすぎない。検出した6世紀から10世紀までの遺構内容を、遺物もそのまま現している。住居跡でもほぼ完掘できた25軒中、1箱以上あるのは稀で、8号住居跡のように2箱あったとしても半数は投棄による埋没土に混入したものが占めている。

器種をみると、甕などの大型個体が少ない。カマドからは、甕を抜き取ったような形跡すらある。杯・椀類も完形のものが稀で、接合率も低い。5点の杯がまとまっていた10号住居跡のケースもあるが、これなどは例外で櫃か穴を掘って納めたものだろう。特異なケースである。

住居跡間で土器が接合する例を、次の9例確認できた。5号住居跡と8号住居跡で須恵器甕が1例、10号住居跡と11号住居跡で土師器杯が1例、24号住居跡と15号住居跡で須恵器甕が2例、14号住居跡と15号住居跡で須恵器杯が2例、須恵器長頸壺が1例、27号住居跡と28号住居跡で土師器甕と杯の各1例である。南北に離れた5号と8号を除いて、ほかは東西の隣り合う住居跡同士である。

ここでは、冒頭のべたように居住範囲の狭さという事情があった。その中を、さらに小間割りされ、決められたスペースがあったのだろう。住居跡の人為的な埋め戻しと土器の接合は、近場にごみを捨てたのではなく、限られていたがゆえのスペース確保策があったことを示している。

周辺の遺跡からは、皇朝十二銭、奈良三彩、焼印などが点々と出土している。皇朝十二銭だけを見ても、

半径2km以内にある富田宮下遺跡で神功開寶、江木下大日Ⅲ遺跡で富壽神寶、芳賀北部団地遺跡で神功開寶、五代木福Ⅱ遺跡で和銅開珎、五代竹花Ⅱ遺跡で和銅開珎と神功開寶が出土している。どれも集落内の一時的な住居跡からの出土で、いずれ郡衙のような施設が発見されてはじめて合点が行くのだろうが、高い出土率である。

これと同様に評価しておきたいのが、円面硯と巡方である。円面硯は、8世紀代のもので面径が24cmと大型で、立派な作りである。しかし、脚はすべて故意にうち欠かされている。使用した痕跡も少ない。溝に捨てられるまでの間、破損したのを惜しんで、手を加えて再利用したかのようである。巡方は、銅製、寸法は縦25cm、横28cmである。黒漆をかけた痕跡がわずかに残されている。これも埋没中の24号住居跡に棄てられていた。土器の出土状態といい、何か前代までを一掃しようというような動きである。

37号住居跡から出土した「勢多」の墨書は、今後が楽しみであるが周辺の遺跡でも注目すべき墨書土器が出土している。萱野Ⅱ遺跡では、「寺」、「大」、「新殿」などが出土している。「大」は、焼印も出土している。「大」は、この地域では山ノ上陣にある大児臣を連想させるが、東2kmにある茂木山神Ⅱ遺跡からは「大児万財□」という墨書が出土している。「大」は、この頭文字の1字を取ったものであろうか。

4. 台地を縦断する大溝

最大の調査成果、谷地開発の切り札と評価したのが3条の大溝である。詳細は本文に譲るとして、大溝は規模、存続期間の点で、灌漑用の幹線水路と見ることができる。全貌を知るには程遠いが、4号・5号溝は直線的、市立桂堂東小学校がある南西方向に向かい、延長すれば寺沢川が流れている西側の低地にたどりつきそうである。一方、前身とみられる3号は、緩く弧を描いて南東、堤沼がある谷地に向かっていく。

それでは、水はどこから引き込んだのであろうか。1区がある谷地は、調査地点から北に300mで谷頭である。しかし、想定する水量は多く、勢も強い。寺沢川から取水したとみるのが自然である。ただし、川と台地との段差は10m以上もあって、遺跡の近くで取水するのはむずかしい。そこでヒントにしたいのが、上泉唐ノ堀遺跡で検出した台地を縦断する大溝である。地名の由来でもあるカラノホリ、トウノホリと呼んでいるもので、伝承のとおりならば大胡町滝窪で取水し、途中沼を経由し、樋で沢を越していたという。終末は滝窪から南に4km離れた前橋市上泉町赤坂の谷地である。検出したのはともに一部であるが、規模、走行ともに酷似している。本遺跡の大溝も、カラノホリのように取水口は遠隔地といえそうだ。

また、隣接する亀泉坂上遺跡では、堤堀と呼ばれる大溝が検出されている。近世のものらしく、詳細は本報告を待つが、寺沢川からは見上げるような所を流れているながら泳ぐことが出来たという。本遺跡とは台地の西と東の位置関係にあり、泳げるほどの水が流れていた事実は貴重である。類例は、大胡町茂木山神Ⅱ遺跡にもある。古墳時代ではあるが、ここでも両面する台地を緩やかな弧を描いて縦走している。

一方の供給先は、谷地の下流域、ここを水田に変えるためと見るのが自然である。下流500mにある堤沼下遺跡は、台地の東縁辺部から谷地を調査しているが、3条の溝とよく似た溝が検出されている。W11、12、13の3条で、長さは飛び飛びではあるが350m以上になる。上面には、As-Bの純層が堆積している。この溝が仮に3号溝と同じものとする、長さは優に1kmを越すことはまちがいない、大溝が集落同士の協力で維持されていたと考えるひとつの例である。

5. 谷地田の変遷

1区の谷地は、植物珪酸体分析の結果、As-Bの下位で3100個/gという数値が出て、水田であった可能

性が高いと判断された(第5章「堤沼上遺跡の植物珪酸体分析」参照)。その1区の下流にある堤沼下遺跡では、As-B下と弘仁九年(818)の地震による泥流下の2面の水田が検出されている。しかし、水田の範囲は、谷地の一面にすぎず、所々に点々としていただけの様子である。ただし、ここには、大溝であるW11・12・13が流れ込んでいて、水田は南に広がりそうな勢いではある(前橋市文化財調査団「堤沼下遺跡」(1999))。江木下大日遺跡の谷地でも、灌漑用と思われる溝が台地の縁辺をめぐり、台地縁辺部にだけ小規模な水田が推定されている。As-C下を年代の上限に、中間にFA下、そしてAs-B下の3面があり、台地上の集落変遷と対応関係にある。分析の数値は、800個/gから3000個/gと幅がある。量的には、ヨシ属のプラント・オバールが圧倒的に多いことから、食糧生産の主力となりうるような良質の水田ではなかったと推定している(群馬県埋蔵文化財調査事業団「江木下大日遺跡」(2006))。

本遺跡では、勾配を利用し段差で区画する水田を推定しておくが、上武道路の路線内の遺跡で見ると水田区画はアゼによるものとアゼと段の組み合わせによるものとが混在している。アゼの代表例は富田細田遺跡で、As-B下だけではなく、Hr-FAの下層など複数の水田面が報告されている(群馬県埋蔵文化財調査事業団「富田宮下遺跡・富田細田遺跡」(2006))。富田漆田遺跡では、谷地の縁では10~5cm前後の段で区画、それを除いた一帯はアゼである。水路と思われるものは台地に寄った縁辺をめぐり、傾斜を活かした懸け流しである。アゼの例は、河川がある所に見られる傾向で、水が十分に確保できるかが分かれ目である。

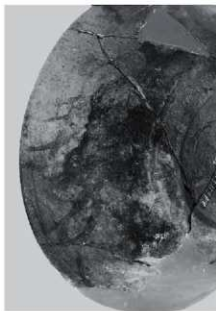
ただし、水田の範囲は、谷地の中でも限定されていたというのが実態であるらしい。言い換えれば、現在判明している状況は、どの谷地の水田も貧相だということである。これには休耕の問題もあるので、分析の数値が低いからといって結論とするわけにはいかない。谷地の中でも谷頭と中間、そして下流のどこに位置するかで様子が違うのだろう。これは別の見方をすれば、水田よりは台地での畠作が主体であったとか、別な事情があったのだろう。

最後に、作物の候補にあげられる資料が、隣の堂野Ⅱ遺跡から報告されている。10世紀前半の104号土坑からは、覆土中位の焼土内からコムギ、下位からオオムギ、アワ、ヒエ、ホタルイの炭化した種実が出土した。同じく10世紀前半の105号土坑からはイネ、コムギ、タデの炭化種実が出土し、106号土坑からも炭化物が出土した(群馬県埋蔵文化財調査事業団「堂野Ⅱ遺跡」(2006))。食糧用に輸入されたことも考えられるが、栽培用も否定できない。現在この付近では、オオムギは姿を消したが、コムギは広く作付けされており、地味にもあった作物である。

参考文献

- 能登 健「新里村の遺跡」新里村教育委員会 1984
- 能登 健「集落変遷からみた農耕地拡大のプロセス-遺跡分布調査による新しい集落分析の展開」『地方史研究』191 34巻5号 1984
- 前橋市教育委員会、亀倉町土地改良区「亀倉町薬師塚古墳」1973
- 田中広明「東国の地方官衙・集落と陶瓦」茨城県考古学協会シンポジウム「古代官衙周辺における集落の様相-常陸国河内郡を中心として-」2005
- 小林 修「赤城山南西麓の後期首長墓の展開-横穴式石室を中心として-」『群馬考古学手帳』12 2002
- 群馬土器観の会
- 大胡町誌編纂委員会「大胡町誌」1976

写真図版



37号住居跡出土「勢多」黒書土器



1. 東上空から堤沼上遺跡を望む。手前が堤沼と萱野II遺跡



2. 寺沢川上流から南を望む。道路の西が亀泉板上遺跡、東が堤沼上遺跡



1. 赤城山南麓を寺沢川上空から望む。中央を上武道路が横断する。



2. 寺沢川上空から広瀬川低地帯を望む。



1. 3区全景 西上空から



2. 4区西全景 北から



3. 4区東全景 北西から



4. 5区全景 南上空から



5. 1号住居跡全景 西から



6. 1号住居跡カマド全景 西から



7. 1号住居跡掘り方全景 西から



8. 2号住居跡掘り方全景 西から



1. 2号住居跡カマド全景 西から



2. 3号住居跡遺物出土状態 北から



3. 3号住居跡全景 北から



4. 3号住居跡カマド遺物出土状態 南から



5. 4号住居跡全景 西から



6. 4号住居跡セクションB 南から



7. 4号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 北から



8. 4号住居跡カマドセクションF 西から



1. 4号住居跡カマド掘り方全景 西から



2. 4号住居跡カマド掘り方全景 西から



3. 5号住居跡遺物出土状態 西から



4. 5号住居跡全景 西から



5. 5号住居跡掘り方全景 西から



6. 5号住居跡カマド掘り方全景 西から



7. 5号住居跡カマド掘り方セクションH 西から



8. 6号住居跡遺物出土状態 西から



1. 6号住居跡全景 西上空から



2. 6号住居跡炭化材出土状態 西から



3. 6号住居跡カマド全景 西から



4. 6号住居跡貯蔵穴セクションH 西から



5. 6号住居跡掘り方全景 西から



6. 6号住居跡掘り方全景 北から



7. 6号住居跡カマド掘り方全景 西から



8. 6号住居跡カマド掘り方セクション 西から



1. 7号住居跡遺物出土状態 西から



2. 7号住居跡全景 西から



3. 7号住居跡セクションA 東から



4. 7号住居跡カマド全景 西から



5. 7号住居跡貯蔵穴セクションD 西から



6. 7号住居跡掘り方全景 北から



7. 7号住居跡カマド掘り方全景 西から



8. 8号住居跡遺物出土状態 西から



1. 8号住居跡全景 西から



2. 8号住居跡遺物出土状態 西から



3. 8号住居跡遺物出土状態 北東から



4. 8号住居跡掘り方全景 西から



5. 8号住居跡カマド掘り方全景 西から



6. 9号・20号住居跡遺物出土状態 西から



7. 9号住居跡全景 西から



8. 9号・20号住居跡掘り方全景 西から



1. 9号住居跡カマド掘り方セクションG 西から



2. 9号住居跡カマドセクションF 西から



3. 10号住居跡遺物出土状態 西から



4. 10号住居跡全景 西から



5. 10号住居跡掘り方全景 西から



6. 10号住居跡カマド全景 西から



7. 10号住居跡カマド遺物出土状態 西から



8. 10号住居跡カマド掘り方全景 西から



1. 11号住居跡全景 西から



2. 12号住居跡全景 西から



3. 12号住居跡カマド全景 南から



4. 12号住居跡カマドセクションL 西から



5. 12号住居跡貯蔵穴全景 西から



6. 12号住居跡カマド掘り方全景 西から



7. 13号住居跡遺物出土状態 西から



8. 13号住居跡全景 西から



1. 13号住居跡貯蔵穴全景 西から



2. 13号住居跡カマド全景 西から



3. 13号住居跡掘り方全景 西から



4. 13号住居跡カマド掘り方セクションG 西から



5. 13号住居跡カマド掘り方全景 西から



6. 14号・24号住居跡遺物出土状態 西から



7. 14号・24号住居跡全景 西から



8. 24号住居跡遠方出土状態 西から



1. 14号住居跡カマド全景 西から



2. 14号・24号住居跡掘り方全景 西から



3. 14号住居跡カマド掘り方セクションK 西から



4. 14号住居跡カマド掘り方全景 西から



5. 15号住居跡遺物出土状態 西から



6. 15号住居跡遺物出土状態 西から



7. 15号住居跡全景 西から



8. 15号住居跡カマド全景 西から



1. 15号住居跡掘り方全景 西から



2. 15号住居跡カマド掘り方セクションG 西から



3. 15号住居跡カマド掘り方全景 西から



4. 16号住居跡全景 西から



5. 16号住居跡貯蔵穴全景 北から



6. 16号住居跡カマド遺物出土状態 西から



7. 16号住居跡カマド全景 西から



8. 16号住居跡掘り方全景 西から



1. 16号住居跡カマド掘り方セクションG 西から



2. 16号住居跡カマド掘り方全景 西から



3. 17号住居跡全景 西から



4. 17号住居跡カマド全景 西から



5. 17号住居跡貯蔵穴セクションE 西から



6. 17号住居跡掘り方全景 西から



7. 18号住居跡遺物出土状態 西から



8. 18号住居跡遺物出土状態 南から



1. 18号住居跡カマドセクションG 西から



2. 18号住居跡カマド全景 西から



3. 18号住居跡カマド掘り方全景 西から



4. 18号住居跡掘り方全景 西から



5. 19号住居跡全景 南から



6. 20号住居跡全景 西から



7. 21号住居跡全景 北西から



8. 22号住居跡カマドセクション 東から



1. 22号住居跡遺物出土状態 西から



2. 23号住居跡全景 南から



3. 24号住居跡カマド全景 西から



4. 24号住居跡カマド掘り方セクションM 西から



5. 24号住居跡カマド掘り方全景 西から



6. 25号住居跡セクションA 東から



7. 25号住居跡遺物出土状態 西から



8. 25号住居跡全景 西から



1. 25号住居跡貯藏穴セクションE 北から



2. 25号住居跡カマド全景 西から



3. 25号住居跡掘り方全景 西から



4. 26号住居跡遺物出土状態 南から



5. 26号住居跡全景 西から



6. 26号住居跡貯藏穴遺物出土状態 西から



7. 26号住居跡カマド全景 西から



8. 26号住居跡掘り方全景 西から



1. 26号住居跡カマド掘り方全景 西から



2. 26号住居跡カマド掘り方セクションN 西から



3. 27号住居跡遺物出土状態 西から



4. 27号住居跡全景 西から



5. 27号住居跡カマド全景 西から



6. 27号住居跡掘り方全景 北西から



7. 28号住居跡全景 西から



8. 29号住居跡全景 西から



1. 29号住居跡カマド全景 西から



2. 30号住居跡遺物出土状態 北西から



3. 30号住居跡全景 北から



4. 30号住居跡貯蔵穴黒書土器出土状態 北から



5. 30号住居跡カマド全景 西から



6. 30号住居跡掘り方全景 北から



7. 31号住居跡遺物出土状態 西から



8. 31号住居跡掘り方全景 西から



1. 32号住居跡全景 西から



2. 32号住居跡掘り方全景 西から



3. 32号住居跡ピット1セクションG 西から



4. 32号住居跡ピット2セクションH 西から



5. 32号住居跡ピット3セクションI 西から



6. 32号住居跡ピット4セクションJ 西から



7. 33号住居跡全景 北東から



8. 34号住居跡遺物出土状態 西から



1. 34号住居跡全景 西から



2. 34号住居跡カマドセクションS 西から



3. 34号住居跡カマド掘り方全景 西から



4. 34号住居跡掘り方全景 西から



5. 34号住居跡カマド掘り方セクション 西から



6. 34号住居跡掘り方全景 西から



7. 35号住居跡全景 北西から



8. 36号住居跡遺物出土状態 南西から



1. 36号住居跡全景 南西から



2. 36号住居跡カマド全景 南西から



3. 36号住居跡掘り方全景 南西から



4. 36号住居跡貯蔵穴セクションC 北西から



5. 37号住居跡遺物出土状態 西から



6. 37号住居跡全景 西から



7. 37号住居跡紡錘車出土状態 南から



8. 38号住居跡遺物出土状態 南から



1. 38号住居跡全景 西から



2. 38号住居跡カマド遺物出土状態 西から



3. 38号住居跡掘り方全景 南から



4. 38号住居跡カマド全景 西から



5. 39号住居跡・1号井戸全景 南西から



6. 40号住居跡全景 南東から



7. 40号住居跡南東隔遺物出土状態 南西から



8. 40号住居跡貯蔵穴全景 東から



1. 40号住居跡ピット1セクションG 西から



2. 40号住居跡ピット2セクションH 南から



3. 40号住居跡ピット3セクションI 南から



4. 40号住居跡ピット4セクションO 西から



5. 40号住居跡掘り方全景 南東から



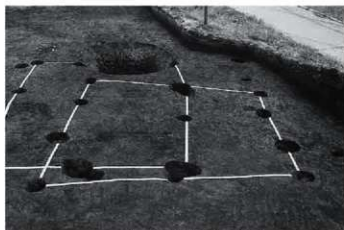
6. 1号掘立柱建物跡全景 北から



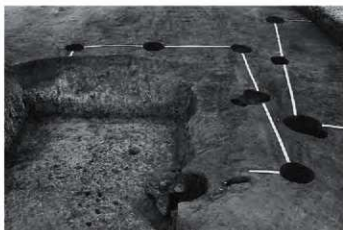
7. 2号掘立柱建物跡全景 南から



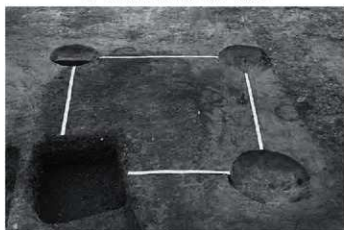
8. 3号掘立柱建物跡全景 南から



1. 4号掘立柱建物跡全景 南から



2. 5号掘立柱建物跡全景 南から



3. 6号掘立柱建物跡全景 南から



4. 7号掘立柱建物跡全景 南から



5. 8号掘立柱建物跡全景 西から



6. 9号掘立柱建物跡全景 南から



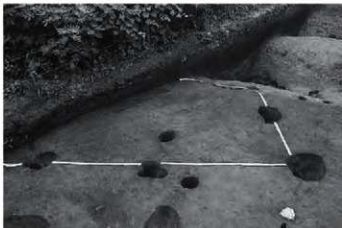
7. 10号掘立柱建物跡全景 北から



8. 11号掘立柱建物跡全景 東から



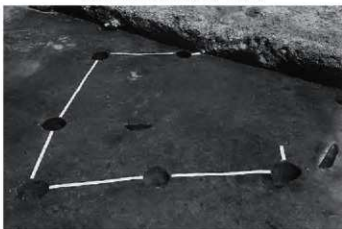
1. 12号掘立柱建物跡全景 南西から



2. 13号掘立柱建物跡全景 東から



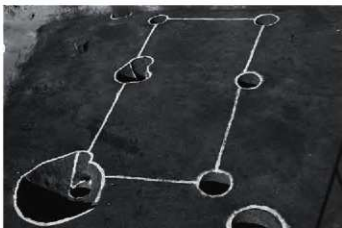
3. 14号掘立柱建物跡全景 東から



4. 15号掘立柱建物跡全景 南から



5. 16号掘立柱建物跡全景 西から



6. 17号掘立柱建物跡全景 南から



7. 18号掘立柱建物跡全景 南西から



8. 1号土坑全景 南から



1. 1号土坑セクション 南から



2. 2号土坑 (10号掘立柱建物跡P1) 全景 南から



3. 3号土坑全景 南から



4. 4号土坑全景 南から



5. 4号土坑セクション 南から



6. 5号土坑全景 西から



7. 11号土坑全景 南から



8. 12号土坑全景 南から



1. 13号土坑全景 南から



2. 14号土坑全景 南から



3. 15号土坑全景 西から



4. 18号土坑全景 南から



5. 19号土坑全景 南から



6. 20号土坑全景 西から



7. 21号土坑全景 北から



8. 22号土坑全景 西から



1. 23号土坑全景 西から



2. 24号土坑全景 北から



3. 25号土坑全景 北から



4. 26号土坑全景 東から



5. 27号土坑全景 南から



6. 28号・32号・44号土坑全景 南から



7. 29号土坑全景 南から



8. 29号・30号土坑全景 南から



1. 33号土坑全景 東から



2. 34号土坑セクション 南から



3. 35号土坑全景 南から



4. 36号土坑全景 西から



5. 37号土坑全景 西から



6. 38号土坑全景 西から



7. 40号・41号土坑全景 北から



8. 42号・43号土坑 (18号掘立柱建物跡P2) 全景 北から



1. 45号土坑全景 西から



2. 46号土坑全景 東から



3. 47号土坑全景 西から



4. 48号土坑セクション 南から



5. 49号土坑全景 東から



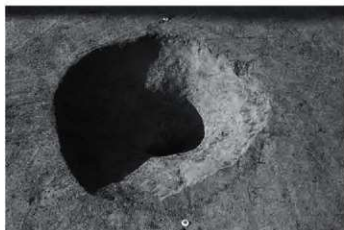
6. 50号土坑全景 南から



7. 51号土坑全景 北から



8. 52号土坑全景 南から



1. 53号土坑全景 東から



2. 54号土坑全景 西から



3. 55号土坑全景 東から



4. 56号土坑全景 南から



5. 1号溝遺物出土状態 南から



6. 1号溝硯、蓋出土状態 南から



7. 3号溝セクションC 北から



8. 3号溝セクションB 北から



1. 3号溝セクションA 南から



2. 4号溝セクションG 南から



3. 4号溝セクションI 北から



4. 4号溝中央部全景 南から



5. 4号溝内土坑全景 東から



6. 4号溝内土坑上面炭化物出土状態 東から



7. 5号溝セクションG 南から



8. 5号溝セクションI 北から



1. 5号溝中央部全景 北から



2. 4号・5号溝北半部全景 南から



3. 4号・5号溝分岐点 東から



4. 4号溝作業風景 北から



5. 6号・7号溝南半部全景 北から



6. 6号・7号溝セクションE 南から



7. 6号溝セクションE 南から



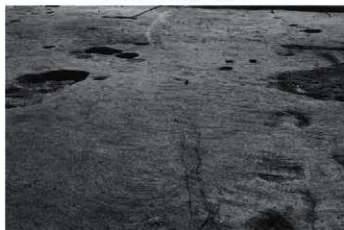
8. 7号溝セクションE 南から



1. 8号溝確認状況 西から



2. 8号溝確認状況 東から



3. 9号溝確認状況 北から



4. 9号溝セクションA 南から



5. 1号井戸全景 南から



6. 1号井戸セクション 南から



7. 1号道・2号道全景 東から



8. 3号道全景 北から



1. 162号ピット石の出土状態 南から



2. 162号ピットセクション 南から



3. 161号ピット全景 南から



4. 163号ピット石の出土状態 南から



5. 163号ピットセクション 北から



6. 164号ピット石の出土状態 南から



7. 1区1面全景 北東上空から



8. 1区1面全景 北西上空から



1. 4号溝内土坑の調査 南から



2. 5号溝の調査 南から



3. 10号住居跡のカマド調査 南西から



4. 7号住居跡の作業風景 南西から



5. 4区西の遺構確認作業 南から



6. 30号・35号住居跡の作業風景 東から



7. 6号住居跡の作業風景 北から



8. 4区旧石器確認作業 東から



1. 3区北半部での作業風景 北西から



2. 2区作業風景 北上空から



3. 堤沼の南上空から1区がある谷地を望む



4. 萱野Ⅱ遺跡南東上空から堤沼上遺跡を望む



5. 2区全景 住居跡の掘り方調査が終了時点 南西から



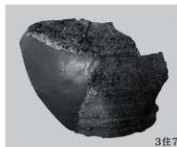
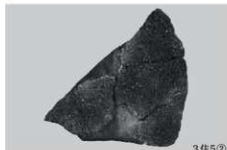
6. 2区全景 住居跡の掘り方調査が終了時点 北東から



7. 3区南半部全景 4号・5号溝完掘時点 北から



8. 3区北半部全景 東から





6住1



6住4



6住2



6住5



6住3



6住6



6住7



6住8



6住10



6住11



6住12



6住9



7住1



7住4



7住8



7住7



7住2



7住5



7住9



7住10



7住3



7住6



8住1



8住2



8住3



8住6



8住10



8住4



8住5



8住7



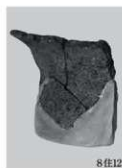
8住9



8住13①



8住11



8住12



8住8



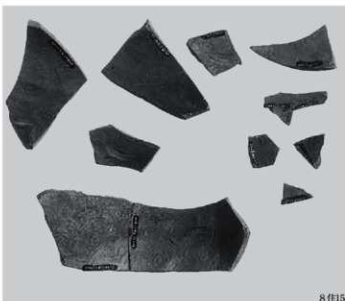
8住14



8住13②



8住15



8住15



8住16



8住17



8住18



8住19



8住20



8住21



9住1



9住2



9住3



9住4



9住5



9住6



10住1



10住2



10住3



10住4



10住5



10住6



10E7



10E8



10E10



10E11



10E12



10E9



10E13



11E1



11E2



11E3



12E1



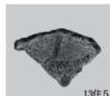
13E1



13E7



12E2



13E5



13E5



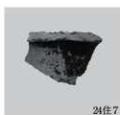
13E2



13E3



13E4





15E3



15E6



15E12



15E13



15E4



15E7



15E5



15E8



15E10



15E14



15E14



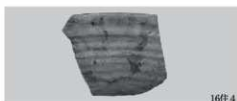
15E9



15E11



16E1



16E4



16E2



16E5



16E3



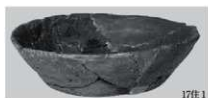
16E6



16E6



16E8





18住10



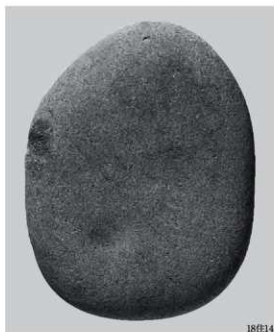
18住11



18住13



18住15



18住14



18住16



18住17



18住18



19住1



22住1



20住1



20住2



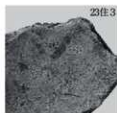
20住3



20住4



23住1



23住3



24住1



24住2



23住2



23住3



25住1



25住2



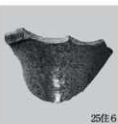
25住3



25住4



25住5



25住6



26住1



26住2



26住3



26住4



26住5



26住6



26住7



26住7



26住8



26住9



26住10



26住11



26住12



26住13



26住14



26住15



26住16



26住17



26住18



26住19



27住1



27住2



27住3



27住5



27住7



27住9



27住8



27住4



27住6



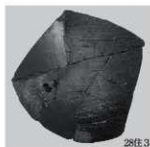
27住10



28住1



28住2



28住3



28住4



29住1



29住2



30住2



30住3



30住1



30住2



30住4



30住5



30住2



30住6



30住7



30住8



31住1



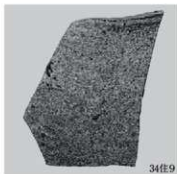
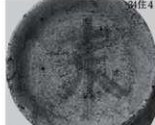
31住2



31住3



31住4





35住2



35住1



35住4



35住6



35住3



35住5



35住7



36住1



36住2



36住3



36住4



36住5



36住6



36住7



36住8



36住9



36住10



36住10



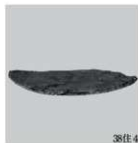
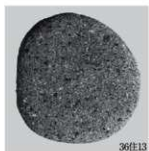
36住12

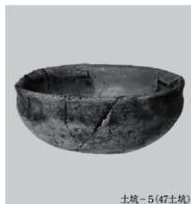
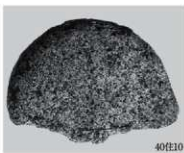
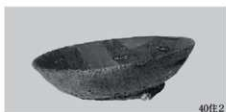


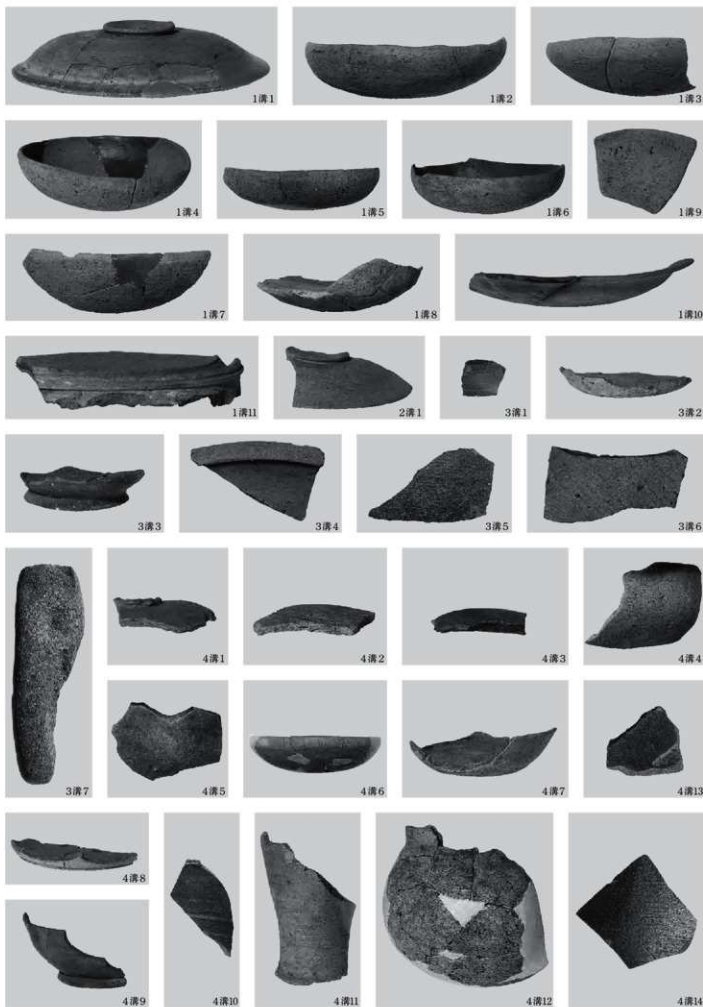
36住14

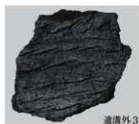
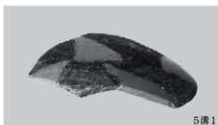


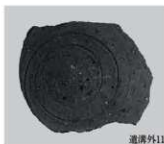
36住17











報告書抄録

書名ふりがな	つつみぬまうえいせき
書名	堤沼上遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
シリーズ番号	第423集
編著者名	女屋和志雄、高島英之
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20080131
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡ふりがな	つつみぬまうえいせき
遺跡名	堤沼上遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししつつつみまち・かめいずみまち
遺跡所在地	群馬県前橋市堤町・亀泉町
市町村コード	10201
遺跡番号	21005-921
北緯(日本測地系)	362349
東経(日本測地系)	1390801
北緯(世界測地系)	362400
東経(世界測地系)	1390749
調査期間	20021201-20030331/20030501-20030831/20040107-20040331 20040401-20040430/20040614-20040621
調査面積	11,154㎡
調査原因	道路工事建設
種別	集落/田畑
主な時代	古墳/奈良平安
遺跡概要	集落-古墳-竪穴住居6-土師器+須恵器/奈良平安-竪穴住居34+掘立柱建物18+土抗56+溝9+井戸1+道3+ピット164-土師器+須恵器+鉄器+石器/田畑-水田/その他-縄文+古墳-縄文土器+石器
特記事項	平安時代の大溝を検出、円面硯、巡方出土
要約	遺跡は、赤城山南麓のほぼ中央部、寺沢川左岸にある台地上に位置する。標高130m、旧利根川の流路である広瀬川低地帯にも近く、縄文時代はもちろん、古墳時代以降の遺跡が数多い一画である。寺沢川との合流点には、そのひとつ、6世紀初頭の前方後円墳正円寺古墳がある。調査では、谷地の水田との関連なのか、台地の東縁辺部に住居跡40軒をはじめとした遺構が集中している。6世紀後半の一時期と、その後8世紀前半から10世紀前半までの、2つの時期にピークがある。集落の形成が中断するのは、谷地に水の乏しいことが原因らしく、2条の大溝は恒久的な灌漑水路として作られた。時期は9～10世紀、谷地開発の切札ともいえる存在で、これにより開発が遺跡の枠を超えていたことがわかる。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書第423集

堤沼上遺跡

一般国道17号(上武国道)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その2)報告書

平成20年(2008)1月20日 印刷

平成20年(2008)1月31日 発行

発行/編集 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 渋川市北碓町下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷 松本印刷工業株式会社

